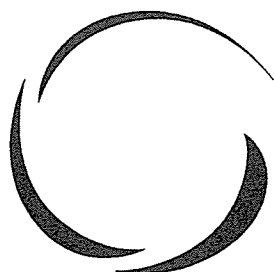

C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト

天 城 勲

〔元文部事務次官〕

オーラルヒストリー

〈上巻〉



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト 天城 勲 オーラルヒストリー 上巻 〈目次〉

《第一回》

・天城に生まれる……………	7
・サッカーと日曜大工と……………	9
・中国への関心が芽生える……………	12
・七転八倒の高校受験……………	16
・文内で一高に合格——中国大陆へ……………	20
・戦時下の学生時代……………	24
《第二回》	
・特設高等科の友人たち……………	31
・朝鮮総督府の官吏として……………	33
・「弱兵整理」で除隊……………	36
・敗戦の混乱の中で——警務課長として……………	40
・「教育」を志す——文部省調査局「嘱託」……………	44
・「三十而立」の文部事務官……………	48
《第三回》	
・朝鮮時代の思い出……………	55
・CIEと教育刷新委員会……………	57
・教育行政システムを巡る「攻防」……………	60
・ミッション・レポートと教育基本法……………	63
・苦労を重ねた教育委員会法……………	68
・国会とCIEと民事部と……………	73

・結婚秘話——出会いと再会……………

・アメリカの教育行政を視察……………

《第四回》

・総理の私的諮問機関……………	89
・ミッション・レポート vs. 「学区庁案」……………	91
・現職教員の被選挙権——教育委員……………	95
・国立大学の地方委譲問題……………	100
・日教組に乗っ取られた「教育」……………	103
・IFELの教育講習会……………	107
・非常勤講師として教育行政を講義……………	111
《第五回》	
・僅か二カ月の著作権課長……………	119
・複雑化する著作権問題……………	123
・義務教育費国庫負担法を巡って……………	126
・僻地教育と特殊教育——財務課長時代……………	133
・「研修会」で教育行政を講義……………	137
《第六回》	
・政策を予算化する会計課長……………	143
・南極観測と宇宙観測……………	149
・ベビーブームで理工系の増募……………	155
・インターハイ・「国体」・アジア大会……………	160

・全国行脚で大学の実態把握	163
・報償費の必要性について	166

《第七回》

・「学力調査」で分かった教員の能力	171
・型破りの「白書」——『日本の成長と教育』	176
・国語政策の問題点	181
・宗教行政の問題点	188
・調査局の変遷——文部省から文部科学省へ	194

《第八回》

・「国際」事始め——国際公教育会議に出席	201
・インドネシアの賠償留学生	204
・CULCON、「文部大臣会議」	211
・フランス「事始め」	217
・OECDのポリシー・レビュー	221
・国連大学の問題点	225

《第九回》

・予算の獲得と配分——管理局長時代	233
・憲法八十九条と私学助成問題	237
・学術会議の影響力を排除する	241
・科研費か講座研究費か	245
・変貌する大学と学生運動	248
・自己増殖する研究所	252

《第十回》

・学習指導要領の全面改訂	261
・「進適」と「能研」	265
・文化庁の設立	271
・事務次官の職責について	275
・筑波大学と新構想大学	281

C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

天城 勲 オーラルヒストリー 下巻 へ目次へ

《第十一回》

・次官と人事	7
・「中教審」の「三八答申」	11
・大学設置基準の多様化	17
・角さんと大学運営臨時措置法	21
・設置者の責任VS大学	27

《第十二回》

・「先導的試行」とは何か——「四六答申」	35
・大学の設置形態の改革	39
・高等教育のグランド・デザイン	43
・「生涯教育」へ向けて	48
・予算編成における次官の役割	52

・戦後の沖縄の教育問題	58
《第十三回》	
・予算成立までのプロセス	65
・私学振興財団法と私学振興助成法	69
・教員の超過勤務手当	74
・頓挫した高等教育の長期計画	77
・大学紛争の嵐の中で——「中教審」委員の交替	81
・保利茂にレクチャー	84
《第十四回》	
・ユネスコとの出会い——教育大臣会議	89
・ユネスコ・アジア文化センター	94
・シルクロード・プロジェクト	99
・ジヨムティエン会議	103
・二一世紀教育国際委員会	106
・米英のユネスコ脱退	110
《第十五回》	
・OECDの二つの委員会	117
・ジャパン・セミナーへの期待	121
・JAPANかAMAGIか	126
・リカレント・エデュケーション	131
・人材の流動化の可能性	135
《第十六回》	
・日米文化教育交流会議	141
・緊密な日米交流	146
・「学振」の形を整える	150

・日本に研究者を招いて	154
・独立行政法人化の問題点	158
《第十七回》	
・IDEの調査研究活動	165
・IDEの成果と出版物	170
・メディアと教育	174
《第十八回》	
・大学の設置基準と評価の研究	179
・「アスプロ計画」とは？	184
・中曽根・レーガン会談を受けて	188
・国際理解教育と国際関係論	192
・IT革命による放送の危機	196
・自らアイデアを出して	200
《第十九回》	
・頭がしっかりしている人	207
・「ゆとり教育」の問題点	209
・設置認可と「第三者評価」	213
・教養と専門	218
・公務員型か非公務員型か	223
・「二十四時間開店」の文科省	226
・あとがき	233
・天城 勲「略歴及び主な活動」「著作目録」	235
〈速記〉ペンハウス・岡部恵子	

天 城 勲
オーラルヒストリー
第1回

[2000年8月25日 14:15～16:20]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

小池聖一(広島大学助教授)

(於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター)

天城に生まれる

伊藤 今日是最初ですので、これからお話を伺っていく上での、バックグラウンドとして、お若い頃から文部省にお入りになる前後の頃までのお話をさせていただこうと思っております。こちらから質問させていただきますが、よろしいでしょうか。

天城 それでいいですが、若い頃の話と言うと、うろちよる迷っていた時分のことですからね。私が文部省に入った年（昭和二十一年五月）には、三十歳になっていたんです。だから、孔子の「三十而立」をもじった川柳で、「孔子様三十までは這い廻り」というのがありますが、そのように這い廻っていましたから、あまりパツとした話ではないですよ。

伊藤 お生まれになったのは大正四年で、履歴書では五月十二日となっていますが、これでよろしゅうございますね。

天城 はい。

伊藤 それで、出身地が静岡県となっておりますが、本籍地とお生まれになったところは同じでございますか。

天城 出生地は東京になります。だけど、私の本籍はずっと伊豆の三島なんです。

伊藤 三島ですか。

天城 私の家は出身が伊豆の天城ですから、本来はもう少し伊豆の奥なんです。今では修善寺に合併されてしまいましたが、まさに天城の

山の中だったんです。それで、祖父の頃に三島に出て来たんです。

伊藤 それで、「天城」という姓なんですか。

天城 そうですね。

伊藤 その地（じ）の方ですか。

天城 ほかに、そんなに多くはないんですが、そこにずっといたんです。

伊藤 お生まれは東京ということですが、それはお父様の関係ですか。

天城 そうです。私が生まれたのは、父が東京に出てから一、二年経ってからでしょうね。私には二つ違いの姉がいるんですが、姉は伊豆で生まれているんです。その二年間ぐらいの間に移り変わって、東京に來ちやったんですね。

伊藤 お父様は、お仕事は何をなさっていたんですか。

天城 私は知りませんが、あとで聞くと、何か一族の間でいろんなトラブルがあつたらしくて、親父はそれを解決するために、家の財産を売り払って、東京に出て來ちやったようです。

伊藤 お役人というわけではないんですね。

天城 役人ではありません。三島の谷田というところに、家があつたんです。それは広い大きな屋敷で、今も絵図が残っています。

伊藤 と言うと、地主ですか。

天城 地主ですね。そこを売り払おうとしたんですが、物凄く広い土地で、誰も買い手がないんです。余計な話になりますが、沼津に造船所があつて、その経営者が買い取って、しばらく持っていたんです。しかし、彼が没落したので、今度は三島の農協が持っていたんです。

それで、農協も最後にそれを売り払って、いま平地にされて、住宅地になっています。その跡地の一部に、文部省の国立遺伝学研究所の所

長の官舎があるんですよ。

伊藤 お父様は東京に出て来て、何をなさっていたんですか。

天城 親父は、いろんなことをやっていました。とにかく月給取りは嫌で、自分で仕事をしたくて、やつては失敗し、やつては失敗していました。東京へ出て来た頃だと思うんですが、最初はどこの銀行に勤めていたらしいです。それから、秋田の鉾山に行っていたらしいんですけどね。

伊藤 小坂とか……。

天城 尾去沢だったかな。そのあとは……。そのあとが銀行かな。私は、よく分からないんですよ。とにかく、勤め人が嫌い、サラリーマンが嫌いで、「自分で何か仕事がしたい」と考えてばかりいたようです。
伊藤 では、お若い頃は比較的、裕福な家庭で育たれたということですか。

天城 まあ、そうですね。

伊藤 その頃のお住まいは、どこですか。

天城 今で言うなら、五反田から目蒲線で行くと、谷山というところがあるんです。立正大学のすぐそばの、坂の角地で、二百坪ぐらいの土地があったでしょうね。石垣が積んでありまして、関東大震災も、そこで私は遭っているんですよ。でも、石垣は崩れませんでしたね。

私の家は、日蓮宗と大變縁が深くて、あの時分は立正大学を「日蓮宗大学」と言っていたんです。それで、これは子供のときのこと覚えていたんですが、その大学で火事が起きまして、「日蓮宗大学」の講堂にあったご本尊を、みんなで担いでうちへ持って来て、うちの座敷の床の間に置いておりました。昔から、日蓮宗と大變縁が深くてね。

今でも原籍をそのままにしてある一つの理由は、三島の玉沢という

ところに妙法華寺という古いお寺があって、その檀家なんですよ。

一時は、「檀家総代をやってくれ」と言われて、困っちゃったことがあるんだけど、その関係があるし、今もそこに墓がありますからね。その三島の妙法華寺というのは格の高い寺で、田畑山林を持っていた寺なんです。戦後、農地改革で土地がなくなつて、貧乏寺になつていますが、構えだけは立派です。檀家総代は辞めさせてもらいました。

伊藤 その辺は、やはり日蓮宗の影響が強いんでしょうか。

天城 日蓮宗は身延山でしょう。あの南ですから、伊豆は相当、日蓮宗の影響があるんですよ。

伊藤 石橋湛山の選挙区でしょう？

天城 そうです。それで、その寺の、今の住職の前の住職——その親父さんは、湛山が追放になったときに、地盤を守るということで、代わりに代議士に出たんです。それで、代議士を一期やって、湛山が追放解除になったので辞めて、また湛山が戻つて来たんです。あそこは、湛山のゆかりの選挙区なんですよ。

伊藤 確か、立正大学にも湛山は関係がありますよね。

天城 そうです。何か知らないけれども、日蓮宗との関係が非常に深くてね。

それで、妙法華寺という寺は妙な寺で、「学問寺」ということで、田畑山林の財産を持っていて、戦後までほとんど檀家がなかったんです。戦前は檀家と言うと、三軒ぐらいしかなくて、由緒のある家だけが檀家なんです。太田道灌——太田男爵と、うちと、あともう一つ、この三軒しかなかったんですね。今、あの辺は開発されて、住宅も増えました。お墓のない家があるからと言うので、今は檀家が増えてきているんです。それまで、山林や土地を持っていて、「学問寺だ」と威張っ

ていたんです。

それで、今の住職（小池政臣）も政治好きでね。今は、三島の市長をやっているんですよ。代議士にも、一遍出たんですが、落ちちゃいましてね。栗原祐幸さんの派だったんですが、あそこに木部（佳昭）さんという古い代議士がいて、八十歳近いと思うんですが、まだ頑張っている。この前も（住職は）次点で落ちて、今度は市長になったんですね。

伊藤 子供の頃から、先生には日蓮宗の影響があつたんですか。

天城 僕は、ほとんど何も分かりませんね。

サッカーと日曜大工と

伊藤 小学校に入るまでというのは、何かご記憶はありますか。

天城 小学校は東京で、これはどういうことだったのかは知りませんが、多分、親父が「行け」と言ったので、小学校は池袋にあった豊島師範附属小学校なんです。私の家は五反田でしょう。あの時分、五反田から池袋まで、電車通学をしていたんです。

伊藤 小学校一年からですか。

天城 ええ。そのときはコミュニティーの学校に行っていないから、地元の仲間というのがないんです。これは、ちよつと考えものです。それで、私が六年のときに一家で池袋に移ったので、小学校時代は地域社会との関連がありません。それは、良くないですね。何か知らないけれど、池袋まで電車通っていました。

伊藤 それは、自分としては楽しかったんじゃないですか。

天城 楽しかったですよ。あの頃は、まだループラインになっていないからね。

伊藤 どこが、つながっていませんでしたか。

天城 品川から神田ぐらいいまではつながっていた……。それで、最初の頃は、まだ鉄道院ですから「院線」と言っていましたよ。

伊藤 それで、大崎―池袋は、つながっていたわけですね。

天城 もちろん、つながっていました。品川が起点ですから、東京を回って、神田まで行っていたんじゃないですかね。神田と上野の間がつながっていなかったのかな。それが、やがてつながって、ループラインになったんですね。

面白いんですよ。その頃は、電車通学なんかしている子はいないものですから、もちろん定期を持っていたんだけど、駅で定期を見せたことがないんです（笑）。駅員はみんな顔見知りで。私の姉が既に豊島師範附属小学校に通っていたんです。

小池 「顔パス」になっていたんですね（笑）。

伊藤 その頃、電車は混んでいませんでしたか。

天城 混んでいなかったですね。

伊藤 豊島師範の附属というのは、東京全体から生徒が来るわけですか。

天城 そうですね。豊島師範と青山師範と、附属が二つありまして、なぜ「豊島」に行ったのかはよく分かりませんが、親戚の子供が「豊島」に行っていたんです。そんな関係があつて、親父がそこに入れようと言ったんじゃないですかね。だから、「豊島」ともずいぶん長いご縁で、いま「豊島」の小学校の同窓会の会長をしているんですよ。

伊藤 いろいろと、「長」をおやりですね（笑）。

天城 もう辞めさせてもらわなきゃいかん、と思っっているんだけどね（笑）。

伊藤 小学校時代とか——小学校に入る前でも結構ですが、遊びなんというの、どうでしたか。

天城 遊んでばかりいまして、いろいろありましたが、サッカーが好きでしたね。

小池 ハイカラですね。

天城 不思議かも知れませんが、師範学校というのは、物凄くサッカーが盛んだったんですよ。ですから、附属小学校でもサッカーは盛んだったんです。東京は「青山」も「豊島」も盛んだし、近県では埼玉の師範の附属の小学校とかも……。そういうところは、みんなサッカーが強くて、師範が強かったから附属も当然、サッカーをやっていたんです。小学校一年から卒業まで、サッカーですよ。

伊藤 お好きだったわけですね。

天城 大好きですね。その時分、どういう組織がやっていたのか知りませんが、春と秋に小学校の関東少年蹴球大会というのがあったんです。それで、いつも出てくるのは「青山」だとか「埼玉」だとかで、青山附属小には二回負けたかな。それから、公立の小学校では、目黒の油面なんていう学校がありました、あれも始終出てきては、強かったんですね。

僕は本当にサッカーが大好きで、極端に言うところ、ほかのことは何も考えないで、サッカーばかりやっていました。学校には、サッカーをやるのが楽しみで行っていたようなものですね。

伊藤 大正四年のお生まれですから、小学校は大正十年前後ですよ。

その頃、サッカーが盛んだったなんて、全く知りませんでした。

天城 そうでしょう。関東少年蹴球大会というのがあって、芝の増上寺、いや芝公園かな、あそこにグラウンドがあったんですよ。あれは市がやっていたのかな。あそこに、わざわざ集まって試合をやったんです。朝早く学校に行って、授業が始まる前にサッカーをやって、終わると、また日が暮れるまでやるんです（笑）。

小池 どこを守られていたんですか。

天城 僕はFW、ゴールゲッターが非常に好きでしたね。

伊藤 遊びと言うと、それが一番ですか。

天城 それだけでもないんだけど、とにかく時間的にも関心の面でも、それが一番支配していましたね。あと、遊びと言うと、何だろう？ 何でもやっていたように思うけど……。

伊藤 小学校の頃は、映画なんか観に行きましたか。

天城 映画は、ほとんど行きませんでした。

伊藤 本は好きでしたか。

天城 本は、まあ普通でしたね。あの頃は「小学生全集」だとか、いろいろありまして、あんなものはみんな買って持って持っていましたし、読んでいました。

あと僕は、その後も続くんだけれども、工作するのが好きだったんですよ。

伊藤 何を作るんですか。

天城 何でも、いいんです。何でも作る（笑）。その工作が一生離れない、もう一つのホビーなんですね。

伊藤 今でも、ですか。

小池 帆船とかを、お作りになるんですか。

天城 そうではなくて、要するに工作ですね。もっと分かりやすく言えば、日曜大工をやっているんです。文部省の部屋の中にも、僕がインテリア・デザインした部屋が幾つかありまして、大臣室のシャンデリアも、僕がデザインしたんです。それから、正面玄関に入って行くと、上からシャンデリアが下がっていますが、あれもデザインしました。

局長室に行つてごらんさいよ。あそこにある机、椅子は全部、僕のデザインですよ。部屋の改装もやりましたし、そんなことをずいぶんやりました。それを、みんなが「日曜大工だ、日曜大工だ」と言うから、僕は「インテリア・デザイナーだ」つて言っているんです（笑）。

その芽生えというのは、子供のときから鉋、鑿、鋸を使って、いろんなものを作っていたんですね。

小池 ホビーと言いますから、帆船を作ったりするのかと思つたんですが、ずいぶん本格的ですね。

伊藤 何が、きっかけですか。

天城 何か分らないんですが、「肥後守」というナイフが、昔あつたでしょう。あれが僕の宝物で、あれで、いろんないたずらをしていたんですね。木を削るのが好きで、鉛筆もそれで始終、自分で削っていたし……。それが「切出し」とかに、だんだん発展していきましてね。私のポケットの中には、いつも「肥後守」が入っていました。

伊藤 今は、そんなのを持って歩いていたら危険ですけどね（笑）。

天城 今は「危険だ、危険だ」と言われてね。しかし、刃物で物に加工するという、それが手の仕事の一番の基本でしょう。それをやらせないから、駄目なんですね。

伊藤 鉛筆も、まず削りませんしね。

天城 私は、鉛筆をナイフで削るというのが、子供のときからの癖ですし、鉛筆が削りたくて、姉のものから何からみんな削っていました。その癖がついているものだから、今でも原稿を書くのは鉛筆なんです。鉛筆を削りながらやらないと、書けないんですね。ワープロなんて使えません。

伊藤 大震災は小学校のときですが、どこで遭遇されたわけですか。

天城 大崎の家にいました。九月一日は二期の最初の日で、学校に行つても授業はありませんから、午前中だけ行つて、家に帰つて来ていたんですが、そこにバツと来たんです。関東大震災の頃は小学生ですから、十分意識していますね。あれ以来、幾度か地震に遭つていますが、関東大震災と比べられるほどの地震は、その後一遍もないということは、そのときの経験で分かります。今、伊豆諸島で地震が起きていますが、大変だと思えますね。揺れじゃないんですよ。直下型地震ですから、あのときもドンと来たんです。テーブルの上の物とかが、全部バンと飛び上がるんですよ。

伊藤 ちょうど、ご飯の最中ですか。

天城 お昼に入っていたんでしょうね。食事が終わったときかな、テーブルに着いていたんですね。

伊藤 家そのものには被害は出なかったんですか。

天城 石垣の上にあつた家ですが、別に何ともありませんでした。だから、その晩はすぐ寝ちゃったぐらいです。余震はずいぶんありましたが、子供だから知らずに寝ちゃつて……。ただ、地震が起きて、あちこちで火が出たということは聞いていました。夜になると、私の家は高台の角だったので、（下のほうの家の）トタンが真つ赤に燃えて、吹っ飛んだりしているのが見えましたね。その翌日には、都内にいる

親戚が焼け出されて、避難して来たんです。

伊藤 学校は、どうなったんですか。

天城 学校は、何ともなかったですね。

伊藤 次の日から、また学校に行かれたんですか。

天城 いや、しばらく休みだったと思いますね。交通規制があったからでしょう。

それで、学校は震災では何ともなかったけれども、小学校何年のときに、火事があって焼けてしまったんです。不審火なのか、よく分からないんだけど、学校が焼けてしまつて、これは大変でしたよ。

伊藤 そのときは、仮校舎か何かを、どこかに借りたんですか。

天城 師範の本校がありましたので、その寄宿舎を改造して、しばらくいました。その間に、学校を造り直した。あの時分で、鉄筋コンクリート三階建ての小学校というのは、最初じゃないですかね。それで、卒業はそっちになります。

伊藤 その小学校の友達とは、その後、ずっと付き合うことになるわけですか。

天城 ええ、付き合っていますよ。だけど、この歳になってみると、次々と亡くなつちやつてね。しかし、幾つかグループがあつて、その中の我々がいたグループとは、ずいぶん長い間付き合っていました。年寄りになつても付き合っています、今でもその中の二人とは付き合っています。

伊藤 しかし、先生のお蔵になると、ずいぶんたくさんの方が亡くなられて……。

天城 もう、いないですよ。私の家は、いま下高井戸なんですけど、その近所に一人いるんですね。彼が、去年頃から全く連絡が取れなくな

っていたんだけど、今は湘南の、どこかの老人ホームに入っているらしいんです。

伊藤 ケアの付いているホームですね。

天城 そっちに行つたんですね。それから、もう一人いるんだけど、彼は奥さんが亡くなった。本人は元気なので、時々、町中の通りで会うことがあるんです。あとは、もう付き合っていないせん。こつちも億劫になっているし、向こうも億劫だろうと思つてね。渡部省吾君という人で、日興證券の社長・会長をやつていた男ですが、彼ももう引退して、一時「ちよつと心臓を悪くした」と言つていたんだけど、この間、ばつたり町で会いました。そんな程度で、もういないですよ。中学の同級生でさえも、もうなかなか会えないですからね。

中国への関心が芽生える

伊藤 中学は、どうなさつたんですか。

天城 中学は、昔の東京府立第一中学校に行つたんです。

伊藤 一中は、どこにあつたんですか。

天城 僕が入つたときには、今の……。

伊藤 日比谷高校と同じ場所ですか。

天城 違います。今の日比谷高校の場所に一中が移つたのは、僕が中学の三年のときかな。それまでは、日比谷公園の向こう側に裁判所があるでしょう、あそこに東京府立一中があつたんです。あそこは官庁街ですからね。それで、今の日比谷高校のところに……。日比谷つて

言っているんですが、あそこは日比谷じゃなくて、山王なんです。

伊藤 中学生のとき、先生は池袋にお住まいだったんでしょう？

天城 小学校の五年ぐらいまで、ずっと大崎にいて、それから池袋に移ったんです。

伊藤 そうすると、池袋から中学に通っていたんですか。

天城 そうです。

伊藤 どうやって通っていたんですか。

天城 日比谷というのは非常に不便で、四谷から歩くか……。

伊藤 市電はなかったんですか。

天城 市電はありましたが、四谷まで来て、四谷からお堀の土手を歩いて学校に行くか、あるいは新橋から歩くか、電車か、どっちかですね。歩くことはあまり気になりませんし、四谷からお堀の土手をずっと歩くのは良かったですよ。それで紀尾井町を抜けて、弁慶橋を通過て、あれは楽しかったですね。

小池 二十分ぐらいかかるんじゃないですか。

天城 かかったと思いますよ。たまに電車で行くこともありました。

一人、先生が荻窪に住んでいて、四谷まで電車に来て、そこからタクシーに乗って行くんですね。それを待っていて、先生と一緒に乗って行ったり……（笑）。

伊藤 中学時代もサッカーですか。

天城 もちろん、サッカー部ですね。サッカーを、ずっとやっていました。しかし、一中は妙な学校で、対外試合を認めないんですよ。だから、野球もあったし、テニスもあったし、サッカーもあったし、水泳もあったけれども、対外試合を認めないものだから、みんな非常にフラストレーションを感じていました。僕もサッカーをやっていました。

たが、対外試合がないんですよ。

小池 そうすると、練習だけですか。

天城 試合は学内で、二つに分かれてやるんですよ。それで、サッカー部で、僕はキャプテンでした（笑）。

伊藤 勉強のほうは、どうですか。

天城 勉強は、あまりお話しすることもないな。まあ、いい先生がいましたね。小学校も、いい先生でした。

伊藤 皆さん、そうおっしゃいますね。

天城 小学校もいい先生で、小学校では三人の先生で、この先生方とは亡くなるまでお付き合いしました。一年のときは名倉先生と言うんですが、彼は毎年一年坊主だけ、十年以上担当しているんですよ。二・三年のときは小野先生、四・五・六年が藤原先生で、この三人とも素晴らしい先生だったので、今でも忘れられませんね。

小野先生というのは、優秀な先生だったんですよ。授業も独特なやり方をしていましたし、児童劇を非常に熱心にやっていました。それから、ただ教室に机を並べて授業をするのではなくて、グループ学習をやっていました。通学の近い連中をグループ分けして、「何とか村」「何とか村」と、「村」をつくって、それで集団で発表させるとか、そういうことをやっていました。一学期が終わると、国語なんかは終わったところで、みんなそれを劇にしてやるとか、そんな非常に新しいことをやってくれた先生でした。

伊藤 それは小学校ですか。

天城 小学校です。小野先生はその後、あちこち行かれて、最後は全国小学校長会の会長になったんです。名倉先生もその後、新制中学の校長をされて、東京都の新制中学の校長会の会長をやられたのかな。

藤原先生は僕たちを卒業させると、バタビアの日本人学校の先生として赴任されました。そんなことで、僕は文部省にいたものですから、そういう関係もあつて、この先生方とは最後までお付き合いをしたんです。

伊藤 中学も、そういう先生に恵まれたんですか。

天城 ええ、いい先生でしたね。

伊藤 いい先生というのは、個性的だという意味ですか。

天城 個性的ですね。みんな個性的ですし、一人一人が優秀な人でした。

伊藤 特に、一中がそうだったということですか。

天城 さあ、どうだったんでしょうね。生物の先生は、あとで大学者になっちゃった人です。若い先生で、東大を出たばかりで来ていたんですが、その後、府立高校ができて、府立高校の教授に変わられた。遺伝学者ですよ。その後、文部省の三島の遺伝学研究所の所長になられたり、遺伝学会の会長もされた。森脇大五郎さんという人で、つい最近亡くなったのかな（平成十二年四月逝去）。この先生とも、最後までお付き合いをしていました。森脇先生はサッカー部の部長で、旧制八高時代に、サッカーの選手をやっていたんですね。それから、英語の先生に江南文三という詩人がおられました。もう一人、英語の蒔田先生……。お二人とも個性的で、素晴らしい方でした。

伊藤 当時は、中学では成績を公表していましたか。

天城 もちろん、していましたね。

伊藤 一番から、ずっと？

天城 そうですね。公表していたというか、一年が終わって翌年になると、学級の組替えがあるんですね。組替えは、成績順でやりますか

ら、分かるんですよ。

伊藤 そうすると、一番よくできるクラスと……。

天城 いや、そういうのじゃないんです。五クラスに順番に振り分けていくんですね。一から五番で、次は逆に六から十番というふうに分けて、ここには一番と同時に十番がいて、こっちは五番と六番がいるというような分け方なんです。だから、分かりますよ。

小池 因みに、先生はどうだったんですか。

天城 僕は、そんなに成績は良くない。そうですね、全体の三分の一ぐらいのところですよ。そんなに、勉強もしなかったしね（笑）。

伊藤 やっぱり関心の中心は、サッカーですか。

天城 サッカーとテニスね。

伊藤 今度はテニスもやっただんですか。

天城 どっちを一所懸命やろうかと思っただけ、やっていました。

小池 その頃のテニスというのは軟式ですか。

天城 軟式でした。硬式も、一部でやっている連中もいまして、私の中学でも両方できたんですが、ほとんどが軟式で、硬式をやっているのは少数でした。

伊藤 学校に、テニスコートとかサッカー場とかが、あったわけですか。

天城 ありました。ただ、専有のものはなかったですね。今、日比谷高校はグラウンドを持っているでしょう。

あと、一中は夏になると、夏期学校と言うんですか、水泳訓練をしていたんですね。

伊藤 臨海学校ですか。

天城 ええ。あれは強制じゃないけど、ほとんどみんな行きましたね。

伊藤 どこに行っただんですか。

天城 沼津にありました。その後、私が卒業してから、千葉のほうに変わりましたけどね。

それで、いい加減に泳ぐんじゃないんですよ。流派がありまして、一中は神伝流という日本泳法をやっていたんです。それで、ちゃんとテストをやって、一級、二級、三級とね。

小池 神伝流というのは、兜を被って泳ぐものですか。

天城 いや、神伝流、水府流、みんな武道ですから、それぞれ武術としての想定がありますからね。神伝流というのは、岡山か広島辺りから始まっていて、発祥の地は海じゃなくて、山の中の川なんです。地名はちよつと忘れましたが、今でもそこは海洋少年団の発祥の地と言われているぐらいなんです。川を泳ぐのは、大変なんですよ。

伊藤 流れがありますからね。

天城 ええ。特に、川を横切るなんていうのは大変で、クロールでは泳げないですよ。いわゆる「拔手」というやつで泳ぐわけです。ブレストみたいなやつですけど、足で蹴るんです。それは、みんな武術ですよ。敵の城に捕虜になったとき、そこから逃げてくる想定で、手足を縛られたまま潜って泳ぐとか。あるいは、甲冑を着ていると簡単には泳げませんから、川の下を潜って渡って行こう、と。それから、重い物を着ているときは、どうやったら浮くかとか、飛び込むときも、どうやったらいいかとか、そういう想定がたくさんあるんですよ。ですから、一中は神伝流でしたが、海軍は水府流でした。それに、和船操法なんかも、みんな入るんですよ。

伊藤 当時の中学は五年制ですが、「四修」というのもあったわけでしょう。

天城 どの中学でも、制度としてありましたよ。

伊藤 それで、みんなどういうふう考えていたんですか。できれば、「四修」で上に行こうと思っていたんですか。

天城 それは、人によりますね。そんなに固執していなかったし、僕もあまり固執していませんでした。「四修」でなきゃならないというほど……。まあ、そういう人もいたかも知れないけれど、僕はあまり意識していませんでした。

それから昔、女学校は四年制と五年制があったのかな。実科女学校というのは四年かな。中学校は五年で、実業学校も五年だったかな。それから、商業、農業とありましたでしょう。みんな五年だったかな。中学のほうは、実業中学というのはなかったと思います。五年だったと思います。

伊藤 一中の生徒は、そこから先は、どういうふう考えている人が多かったんでしょう。

天城 進路ですか。一中の同級生も、その後、いろんなところに行っただけども、旧制高校と、それから大学予科みたいなどころもあったんです。例えば、一橋とか。そういうところでした。私立に行くのは少なかったかな。

伊藤 陸・海軍はどうですか。

天城 陸・海軍も少なかったですね。そんなに多くなかったです。僕と同級生の中にも、海軍や陸軍に行った者がいますが、特に海軍は多くなかったと思う。それから、二年ぐらいになって、陸軍幼年学校に行くのもしましたし、中学五年になってから海兵や陸士に行くのがありました。

伊藤 やっぱ高等学校がメインですか。

天城 メインでしたね。それでも、特に日比谷（高校）になってからかな、一高に進学する生徒が多い多いと言われて、東京都の学区制になった理由も、それが一つなんですね。

伊藤 先生の頃は、必ずしもそうではなかったんですか。

天城 でも、やっぱり一高が多かったですね。僕の同級生で他の学校に行ったのは、あまりいないな。東京高校の高等科に行った者と、一橋に三人ぐらい行きましたが、浦和もないし、水戸もないし、静岡もないですね。あと、みんな一高だったのかな。

伊藤 そうすると、中学と高等学校は、かなり顔触れとしてはつながっているわけですか。

天城 そうでもないんでしょうね。僕の小学校の同級生で府立一中に行ったのが、珍しく多くて九人いたんですね。その中から一高に行ったのが四人で、あとは他の高等学校でした。だから、小学校の同級生で中学、高等学校と、大学まで一緒だったのは四人でした。だから、そんなに多くはないです。いろいろ散らばっているようで……。

伊藤 中学の頃というのは、「将来、どうしよう」なんていうことはあまり考えなかったですか。

天城 中学のときに何になるかというのは、ほとんど考えないですね。ただ、関心はいろんなものに持っていました。あとまで影響があったのは、中学で東洋史の先生が非常に良かったということですね。これは、今でも本当にありがたいと思っているんです。あの時分、東洋史というのは、結局、中国の歴史しかやっていないんですね。中国の歴史というのは、四千年から五千年もあって、長くて訳が分からない。部分的に覚えると、どっちが先かとか、分からなくなっちゃう。そういうことを、全部きちんと教えてくれたのが、その先生だったんです。

それで感謝しているのは、「中国の歴代王朝の名前を全部、七言五行にして覚えろ」と言われたことです。今でも同級生が集まると、みんな覚えていますよ。言ってみましょうか。——中国の一番最初は、神話で三皇五帝と来て、夏、殷、周、春秋戦国、秦、漢、晋、五胡十六、南北、隋、大唐、五代、宋、遼、金、夏、元、民、清、現民国まで、今でも無意識に出てきます。そして、前漢・後漢の間が西暦ゼロだということ、これをやるとアナクロニズムにならない。

当時、中国は支那と言っていたものですから、その先生は、「支那って何だ」と訊かれたんです。その時分、「支那には四億の民がいる」という馬賊の歌があったんです。それで、中国というのは非常に広いとか、人口が多いとかって、みんなが言うでしょう。しかし、先生は「チャイナ・イズ・ヒストリー」と教えてくれたんです。今でも、それは頭の中にあります。しかも、そのヒストリーをアナクロニズムのないように教えてくれた。中国に対する、非常に基本的な見方を教えていただいたんですね。ですから、一九四五年に今の中共政府ができて、まだ五十年でしょう。中国の三千年の歴史の中の五十年なんて、どう言うこともない（笑）。「チャイナ・イズ・ヒストリー」というのを、今でも私は肝に命じていますね。

七転八倒の高校受験

伊藤 先生は「四修」で一高に行かれたんですか。

天城 僕は浪人しました。

伊藤 五年のあとですか。

天城 ええ。

伊藤 その当時、受験競争というのは、いろいろあったわけですか。

天城 みんなが言うほどは、ないですね。

伊藤 予備校なんて、もちろんないでしょう。

天城 あったかも知れませんがね。

伊藤 浪人しているときは、どうするんですか。

天城 確かに、小学校から中学に行くときも、受験勉強はありましたよ。「一中に行くんだ」とか、「東京高校の尋常科に行くんだ」とか……。

……。だけど、僕はあまり関係がなかった。友達の中には、家庭教師を雇ったり、塾に行ったりしている者がいるという話は聞きました。中学のときも、何か塾みたいなどろに行っているという話は聞きました。だが、今みたいに大々的な予備校はあったのかな……。

伊藤 そんな大々的なものはないでしょうね。

天城 ああいうふうになったのは、戦後じゃないかな。まあ、それはあったんでしょうね。あとで聞いたんですが、一中の先生の中にも、受験指導を家で行っていた人もいたそうです。

伊藤 それは聞きますね。

天城 先生の家に行くのが当然だと思っていた人もいたようですが、僕は全然そういうことは意識しませんでしたね。

伊藤 そうすると、高等学校に入れたのは昭和の何年ですか。

天城 僕は、その間がちょっと開いているんですよ。その話をする、また全然別の問題になるんですが、昭和八年に中学を卒業して、一高に十一年に入っているんで、三年空（あ）いているんです。

伊藤 十一年に一高ですか。

天城 はい。

伊藤 何か理由があるんですか。

天城 それは、いろんな理由があるんだけど……（笑）。ドロップアウトか、ストップアウトか知らないけれどね。

伊藤 ちょっと迷われたわけですか。

天城 そういうわけでもないんです。本当に横道にそれちゃって、就職していたんですよ。

伊藤 中学を出てからですか。

天城 はい。その話をする、また面倒臭くなるんですが、また全然違う経験なんです。率直に言って、中学五年間ではサッカーのこと以外はあまり考えていなくて、それで五年の卒業間際に、眉間のところに面癪ができたんですよ。それが腫れてきて、痛くてね。

伊藤 あれは真ん中にできると、危ないと言われていますよね。

天城 そうですよ。それで親父が医者に連れて行っただんですが、病院でも、どうしていいか分からなかったんです。それで親父が、「静岡に草薙という、昔から有名なお灸があるから、そこへ行こう」と言った。わざわざ行っただですよ。そこで、「灸つば」を出してもらったんですが、親指と人指し指の間の「つば」にもぐさを乗せまして、火をつけて燃やすんですね。

伊藤 ここは、よく「つば」だと言われますね。

天城 今でも、そう言われますけれども、ここが効くとは知らなかったんです。そこで、「つば」を出してもらえば、あとは自分でお灸を据えるわけです。それで、もぐさをもらって帰って来て、一晩中、手を広げたまま、もぐさで焼いてもらったんです。

小池 それで治ったんですか。

天城 そのときは、目が見えなくなるぐらい腫れ上がっていて、痛いんですね。それで、親父が心配して、一晚徹夜で、お灸を据えてくれて、それでスーッと下がったんです。

伊藤 「つばを出してもらおう」というのは、どういうことなんですか。

天城 知りません？

伊藤 いろいろ診断してみるわけですよ。

天城 ええ。診断して、それで面疔だということが分かって、指の間に墨でちよつと印をつけて、そこにお灸を据える。それが入学試験の直前で、試験も何もあつたものじゃない。生きるか死ぬかだったんですよ（笑）。

小池 それで、試験は受けられなかったわけですか。

天城 いま考えると、二、三日だったかな。一晩でずいぶん痛みは止まりましたが、二、三日のお灸で治まったんです。そしたら、何だかポーツとしちゃいましたね。それが試験直前でしたから、一応、試験には間に合つたんです。行ったことは、覚えてるんですよ。だけど、アウトですよ（笑）。要するに、生き延びたと思つたものですから……。親父は病院で、「どうしていいか分からない」と、先生に言われたらしいんです。親父は「駄目だ」と思つた、と。それで、草薙のお灸なんというのが頭にあつたので、「そこまで行こう」と言つたんでしょうね。まあ、そういう形で、そのときは駄目だったんです。

それで、しょうがない。一中には補習科というのがありまして、要するに、浪人を引き受けて勉強させてくれるわけです。そこで、補習科に籍を置いて、もう一遍勉強しようと思つてね。

伊藤 それは毎日、授業があるんですか。

天城 毎日だったと思いますね。普通と同じように、授業をしていま

した。何もかもやっていたわけではなくて、幾つかの主要科目だけだったかも知れませんか。

伊藤 受験に関係のある科目ですね。

天城 ええ。半日ぐらいたつたのかな。それで、試験も落ちたけれども、面疔のほうのショックが強くて、「本当に助かった」と思いましたよ。それで、一年浪人して補習科にいたんです。

また、こういうことを言うのはエキスキューズみたいで嫌なんだけど、その翌年の、試験の前の晩に、猛烈な胃痙攣を起こしちゃったんです。それも、七転八倒の苦しみでした。そんなことは、前には経験ないですよ。それで一晩中痛んで、眠れない。やつと夜明けに痛みが治まった。しょうがない、試験だから行つただけで、寝ていないしね。それが理由ではないかも知れないけれど、また落ちてしまつたんです。それで、二度とも何か不慮の病気というか、突然の事故に遭つちやつて、もうどうしようかと思つたんです。しかし、ほかはどこも願書を出していなかったものだから、しょうがないから、もう一年やるかということにして、二浪したんです。

それで、二浪して試験を受けたら、また落ちたんです。そしたら、一中の先生が「おかしい」と言うんですよ。その先生が非常にいい先生で、補修科の専任をしていたんですが、以前は水戸高校の教授をしていて、そこを辞めてから嘱託で一中に来て、補習科の主任をしていたんですね。非常に私を可愛がつてくれた先生で、「一高の先生に友達がいるから、こういう事情か訊いてみるよ」ということで、訊いてくださつたんです。そしたら、「これは、あまり公にはできないけれども、お前は受かつているんだよ」と言うんです（笑）。「一高では、これは表向きにできないミスなので、言わない。だけど、お前は受かつてい

た。人間がやることだからしょうがないんだけど、ミスがあった」と言いました。「お前は受かっているんだから、どうするんだ？」という話でね。それで、成績もそんなに悪くない、半分ぐらいのところにある、と。

しかし、僕は三度落ちたので、方向転換しようと思って、親父の大叔父の弁護士に相談して、その方の紹介で、ある弁護士事務所に勤めることにしたんです。それで、弁護士事務所に行くと、書生がゴロゴロいるんですよ。みんな夜学に行つて勉強して、弁護士試験を受ける連中ばかりなんです。中央大学の夜学などに通っている連中の中に、放り込まれました。

伊藤 嫌なことですね。

天城 本当に参つてしまいましたよ（笑）。結局、一高側の事務的なミスで、発表に漏れてしまったんですね。

それで、とにかく弁護士事務所に行つていたんですが、その弁護士がちよつと変わっているんですね。東京外語大のフランス語科を出て、外交官になった人なんです。非常に勉強家で、優秀な人で、フランスに行つて、スイスに勤務していたのかな。それで、フランス人女性と結婚してしまったんですね。今はどうか知らないけれども、あの時分は外国人と結婚すると、外交官は駄目なんですね。

小池 今でも駄目なんですよ。僕も外務省の出身ですが、結婚は認めるんですけども、二重国籍者の場合には一年以内に国籍を変えないといけないとか、外国人と結婚した場合は、三年以内に国籍を変えないといけないんです。ただ、入省するときには一応、「外国人とは結婚しない」という、判子を捺させられるんですよ。僕も、女房が外国人なんです。それで、外務省の中にもそういう人がたくさんいますから、

外務省令では駄目なんですが、外務省執行令で、いま言ったような三年と一年で、特例を設けているんです。戦前は、もちろん東郷（茂徳）さんみたいな例もありますが、あれもすぐ国籍を変えるんですね。

天城 戦後は、かなり弾力的になったんですが、戦前は厳しかったですね。それで、彼は外交官を辞めて弁護士になって、国際的な商事関係をやっていたんですね。大使館には商務官というのがいたんですが、フランスとかスイスとかの商務官事務所と取引がありまして、そっちの仕事をしていたんです。だから、裁判所に行つて訴訟をするんじゃないくて、ネゴシエイトしているんですね。その弁護士さんは、非常に優秀だったんです。その事務所には書生が二人いましたが、二人とも、とうとう弁護士にならなかったな（笑）。

それで、その弁護士がスイスの大使館の嘱託みたいな仕事をしていて、あの時分は商務参事官というものがありませんでした。アタツシエで、ミリタリー・アタツシエとカルチュラル・アタツシエと、それからコマース・アタツシエがあったんです。そっちの仕事をしていまして、外国との商務関係をやっていました。私は、その弁護士から、「国際的に仕事をしているユダヤ人のグループが、朝鮮、満洲で仕事を始めるので人が要る。そっちへ行つて仕事をしてくれないか」と言われたんです。ちやうど、その弁護士の法律事務所が丸ビルにあって、新丸ビルかな、その同じビルにユダヤ人グループの事務所があつて、その顧問弁護士もしていたんです。

その会社の社長がマスネというフランス人で、作曲家のマスネの甥に当たる人なんです。だから、名門なんですよ。その日本人のマネージャーが、パリの日本陸軍の武官府に長く勤めていた人で、フランス語もよくできる人でした。その人は、始終あちこちに旅行している

ものだから、その仕事を「手伝ってくれ」と言われて、行ったんです。社長はフランス人だけれども、国際的に動いているから英語もできる。僕はフランス語はできないけれども、英語ができるならいいと言うので、そこで仕事をしていたんです。

そこでやった仕事というのがまた傑作で、こっちは何をやっているのか分からないんですよ。そのマスネの奥さんがクズネツォフというロシア人で、オペラのプリマドンナなんです。それで日本で、オペラのリサイタルをやるので、そのイベントの手伝いだとかね（笑）。

それからもう一つ、これもよく分からないけれども、昔、リンガホーンというのがあったのを、ご存知ですか。レコードで英語の勉強をする。マスネの会社がリンガホーンの代理店みたいなことをやっていた、「リンガホーンを日本に普及するので、販売の仕事をやれ」と言う。リンガホーンのパンフレットがいろいろあつて、それを基にして日本語の宣伝文を作りましたよ。それから、奥さんのリサイタルの招待状を、あちこちに持って行ったりとか、いろんなことをやっていましたよ。弁護士事務所のほうは、途中で辞めてしまいました。もともと、私は弁護士になるつもりはなかったんです。

そしたら、そのうちね。奥さんがフランスに行くと言うので、「お前はバリまで、奥さんが旅行する間、付いて行け」と言われまして、シベリア鉄道で行くわけですよ。

伊藤 シベリア鉄道ですか。

天城 そうですよ。シベリア鉄道ですと、二週間かかるんです。

文丙で一高に合格——中国大陆へ

小池 それで、シベリア鉄道に乗って行かれたんですか。

天城 いや、そういう話が出てきたりしているところに、さっきの先生の話で、「お前は一高に入れていたんだ。来年はどうする？」と言われて……（笑）。全然違うことをやっていたので、受験勉強なんて何もしていないんです。

マスネの会社は朝鮮と満洲で、マイニングをやるうとしていたんです。特に満洲はできたばかりで、満洲国の鉱業権を取ろうとして、その準備でいろんなことをやるんです。例えば、鉱石の見本を持って来ては——いま新国立劇場（渋谷区本町）になっているところに鉱業試験場がありまして、そこに鉱石の見本を持って行くと、調べてくれるんです。そんな仕事がよく来まして、鉱石の分析を頼みに行っていました。

それから、満洲国でいろんな新しい法令ができるんですね。その法令や、仕事に関係のある文書を翻訳しろと言うんです。

伊藤 それは英語ですか。

天城 英語なんです。それで社長が、「とにかく満洲国に鉱業法ができないと、いろんな仕事ができないから」と言つて、鉱業法ができるまでの準備とか調査をやっていたわけです。そのうちに、鉱業法の素案ができたというので持ってきて来て、「これを翻訳してくれ」と言うわけです。鉱業法なんて分からないですが、「とにかくやれ」と言うから

一所懸命やっただけです。もう文章なんてどうでもいい、意味が分かればいいと思ってやりましたね。

その会社には、女性のタイプリストがいたんです。この人は日本人なんです。混血でした。彼女に、いつもタイプを頼むのも悪いと思って、彼女からタイプを習って、それで翻訳して自分でタイプを打っていたんです。

そんなとき、一中の先生のお話があり、ずいぶん迷いました。しかし、「じゃあ、もう一遍、一高を受け直そうか」と思って、それで九月になってから、また勉強を始めた。仕事をしながら受験準備という、二本立てでやっていました。

そして、二月に試験を受けて……。三月だったかな。そしたら、マズネ社長の奥さんがいよいよパリに行くから、「お前はシベリア鉄道で、パリまで送って行け」と言われて困ってしまい、マズネ社長に言ったんです。「実は、もう一遍学校に戻ろうと思って、試験を受けた。もうじき発表だから、その間に奥さんとパリに行っていたら、発表になっても、また駄目になる。済みませんけれども、辞めさせてください」と。そしたら社長も、「勉強したいのを止めるわけにはいかないけれど、あと何年やるんだ」と言うから、「高等学校三年と大学で六年だ」と言ったら、「まだ、これから六年か。そんなことをやるのか」と（笑）。それで、「もういいよ」と言って辞めさせてくれたんですが、そのときはお蔭で合格したんです。

それで一高に入ってみたら、これも傑作なんだな。昔の試験のやり方はご存知だと思いますが、文科も理科も百五十名ずつ採るんです。文甲、文乙、文丙、理甲、理乙、理丙とあるわけです。理甲というのは主要言語が英語、理乙はドイツ語、文丙がフランス語なんです。そ

れで、百五十人の文科志望者を成績順に採って、第一志望から分けていくわけです。私は中学時代に英語は得意だったものですから、新しい語学をやってやろうと思っていて、それでフランス語を第一志望にした文丙を受けたんです。

その文丙には、もう一つ理由があって、それはさっき言った中学校の東洋史の先生に教わった中国なんです。その時分から、中国に非常に関心を持っていて、将来、何か中国の研究をしたいなと思っていました。フランス語で、チャイニーズ・スタディーズは「シノロジー」と言うんですね。当時、世界で「シノロジー」が一番進んでいるのがフランスで、日本でも中国の研究者はみんなフランス語ができるんです。また、ハノイに極東学院というのがあって、そこがフランスの「シノロジー」の出先の先端でした。ライシャワーなんか、ハーバードからフランスに行って、中国を勉強したんですね。日本でも、そういう人がたくさんいるんですよ。それで、やるならフランス語をやっておけば役立っだろうと思って、「シノロジーをやろうかな」と思っていたんです。

それで発表を見たら、僕は文丙の三十人クラスの五番に入っていて、これは入れたから嬉しいのかも知れないけれども、「ざまを見ろ」という感じでしたね（笑）。「こんちきしょう」と思っていたのですから。今まで二度とも引っぱかちやって、最後には一高の手落ちでね。これの経緯は、本当は誰にも話していません。今まで話していません。同級生は、みんな弟みたいな歳ですからね。

伊藤 そのぐらいの年齢で二、三歳違うというのは、相当違うんですよね。

天城 そうです。亡くなったけれども、僕の弟が生きていたら二歳違

いですから、越されちゃったんですよ、本当に（笑）。まあ、そんなことで文丙に入ったんですね。それで、マスネのいたフランスの会社は辞めて、その前には法律事務所も思い切って辞めて……（笑）。そういうわけで、一時、全く別の横道に行っていたんですよ。

伊藤 それもしかして、長期的に見たら、ずいぶんプラスになったんじゃないですか。

天城 まあ、どうか知りませんがね（笑）。

伊藤 そういう経験を持った人が、あとでお役人になるわけですから、でも、あまりいいんでしょう？

天城 でも、本当に自分でも、毎年、図らざるハプニングばかりでしたよ。一番青春の大事な時分に、そんなことをしちゃった。だから、良かったか悪かったか分からないけれども、他の人の経験しないことを経験しましたからね。本当に訳の分からんことをやりましたね。

クズネツオフアという、白系露人のオペラのプリマドンナは大柄で、美人で、マスネもなかなか品のいい紳士なんです。それから、彼の後ろにルビンシュタインという男がいたんですが、これは顔を見ただけでもユダヤ人じゃないかと思う。そういうグループなんです。それで、弁護士の田中さんの奥さんがフランス人で、彼女の弟がまた日本に来ていたんですが、その弟がルビンシュタインなんかと組んで、何かやっていたんです。これは、僕は直接関係していませんが、あの当時、彼はスパイ嫌疑か何かで日本で捕まったと、あとで聞きました。ユダヤ人のグループは、だいたい危ない橋を渡っていたんじゃないかと思うんです。マスネ自身は、そういう人でもなかったんですね。そんなことで、いろんな経験をしました。

伊藤 ちょっと、普通の人では経験できないようなことですね。それ

で、一高に行ってみたなら、年齢差があるから妙な感じでしょうね。

天城 そうですね。みんな若い連中で、意気軒昂として「万歳、万歳」でやっているでしょう。こっちは、ちよつとひねくれていましたからね。でも、あまりそういう気分でやったらいけないと思って、年上だということは意識しないでやろうと思って、ひたすら忠実に諦念していたんです。

ところが、一高に特設高等科——「特高」という、日本で勉強する中国の留学生を引き受けるコースがあったんです。そこは全員、中国の学生でしたから、一高には中国の留学生がたくさんいたんです。

伊藤 その頃、一高はどこにあったんですか。

天城 駒場に移った翌年に、私は入りました。

ですから、私は中国人の友達がたくさんいるんです。その中には中国人の学生との懇親会というか、クラブ活動みたいなものがありまして、私も入っていました。中には、卒業して中共側に行っちゃったものもいるし、重慶に行ったものもいるし、みんな散らばりましたね。その連中とも、最後まで付き合っていましたよ。その一人に、洪怡平君という人がいるんですが、汪兆銘が南京政府をつくったとき、彼はその汪兆銘の政権に入ったんです。最後は上海の警視總監をやっていたが、戦争で負けたあと、彼は台湾から日本に来て、そのまま帰化したので、今でも僕は彼とは付き合っています。

それから、楊君という人もいて、楊君はその後、東大を出たあとアメリカに行つて、アメリカでまた大学に入り直したんです。楊君から最近連絡がないので、亡くなったのかなと思っているんですが、彼はアメリカの大学の教授をしていました。

それで、高等学校のときに、その会を足場にして二度、私は中国に

行ったんです。最初に行ったのは昭和十一年で、もう満洲国ができていましたから、朝鮮から満洲を通って中国に入ろうと思ったんです。ところが、盧溝橋事件が起きて、山海関から入れなかったのが、満洲だけ回って帰って来ました。しかし、満洲だけではしょうがない。やはり中国に行きたいので、翌年、今度は北京に行きました（笑）。

伊藤 やっぱり同じコースで行ったんですか。

天城 今度は船で天津に入り、そこから北京にね。一高の先生で、文部省の留学生として、北京に行っておられた先生がいたので、その先生を頼りに北京に行きました。先生の家に転がり込んで、そこからいろんなどころに行って、内蒙古の包頭まで一人で行きましたよ。

伊藤 言葉は、どうしたんですか。

天城 インチキなんです。昔、中国の会話本で『救就編』というのがあったので、それで単語を勉強していたんです。簡単な言葉で、飯を食うとか、道を訊くとか、そういうのを覚えたんです。それだけです。

伊藤 通用しましたか。

天城 通用しましたよ。人力車を掴まえて、「真っ直ぐ行け」とか……

（笑）。「イチゾー」（一直走）なんて言ってやっていました。

伊藤 包頭までという、ずいぶん、距離があるでしょう。

天城 相当ありますよ。

伊藤 あそこまで、鉄道が通っていましたか。

天城 ありました。でも、あのときは第一線です。満洲のときは黒龍江の国境まで行きましたよ。

伊藤 それは自費で行ったわけですか。

天城 「棧華会」という会で行きました。

伊藤 「棧華」というのは何ですか。

天城 兄弟仲良くするという意味だそうです。中国の古典にあるんですね。それで、「棧華会」で行くことになった。一高の連中というのは、何かあると、先輩にねだることになっていたんです。それで、外務省の対支文化事業部に行った。その課長が一高の先輩でしたからね（笑）。「こういう会で、数人で行きたいんだけど、お金をください」と言っただけです。そして、くれましたよ。それで四人で行ったのかな。あの時は、そういうことを平気でやるんですね。だから満洲に行っても、満洲国政府だとか、満鉄だとかに一高の先輩がかなりいるので、そんなところを頼って行って、旅行をして来ました。北京では、龍先生という方が北海に中国人の家を借りていましたから、そこに潜り込んでね。

伊藤 そうすると、結構、一高時代は楽しかったんですね。

天城 まあ、その関係で、いろんな中国関係の人にお会いしましたし、外務省の連中も先輩にいたし、学者もいましたし、いろんな方に中国のことを教わってね。

もう一つ、私は三年間の夏休みの間に、一遍は中国に行こう、一遍はアメリカに行こう、一遍は南洋に行こうと計画していたんです。それで、最初の年に満洲に行って、その年は中国には行けなかったから翌年、中国に行っただけです。それで、その次はアメリカに行こうと思ったんですが、アメリカに行くには乗船している期間が長くて、船の中でほとんど時間を取られるでしょう。そうかと言って、学校を長く休むわけにはいけません。

そこで、南方も調べたんです。そして、先輩に台北帝大の教授がいます、「お前は中国、中国と言うけれども、南も大事なんだぞ。台

湾へ来い」と言うんですよ。あの時分は、南方進出のグループがかなりいましたから、それで南洋群島にも行ってみたいと思っっていたんです。しかし、その先生に「南洋群島もいけれど、台湾に来い」と盛んに言われていたんです。もつとも、南洋に行こうと思っただけなら、昭和十二年ぐらいから、もう駄目なんですね。日本は南方進出の準備をしていまして、普通の市民は島に上陸できないんです。大東亜戦争の前線準備を海軍がやっていて、行っても自由に行動できないということが分かって、それで大陸に行っただけです（笑）。

伊藤 それでは全部、中国になったわけですか。

天城 二年ね。

伊藤 三年目は台湾に行かれたんですか。

天城 いや、三年目は、もう行かなかったんです。まあ、中学のときに中国に興味を覚えて、その流れの一つなんでしょうね。

伊藤 特設高等科というのは、日本人の学生と一緒に教えていたんですか。

天城 基本的には、別のクラスです。ただ、同じ授業もあるし、別の授業もあったんです。それで同じ授業のときは、みんな真面目な学生でしたから、試験の間際になって「特高」の学生のノートを借りていたんです（笑）。その後、彼らは東京とか京都とか東北とか、それぞれのコースに従って、みんな帝大に進んで行っただけです。しかし、昭和の日中関係がそういう状況でしたから、敵方というか、共産側に行っただけもいるし、国民党に行っただけもいるし、それから汪兆銘政権に行っただけもいるし、その後、アメリカに行っただけもいるし、みんなバラバラです。

先ほどの洪君は、戦後、台湾から日本に来て、何か貿易みたいな仕

事を始めていたんです。だけど、それも上手くいかなくて、お決まりの中国料理屋を始めたんですね。それで、東京に三軒ぐらい店を持っただけで、東京駅の前の、国際ビルの中でも支那料理屋をやっていたので、クラス会なんかは、いつも彼のところを使っていたんです。彼はその後、引退して、今は何もしていませんけどね。

戦時下の学生時代

伊藤 二・二六事件が起こったのは、ちょうど受験の年ですか。

天城 二・二六事件が起きたのは、浪人している最中ですね。

伊藤 ちょうど、試験を受ける前後ではないですか。

天城 そうです。僕が丸ビルの田中さんの法律事務所について、それからマスネの会社にいた時分に起きたんです。ですから、二・二六事件の朝は、もうビルに入れないんです。反乱軍があつた辺を占拠して、両方で対峙しているから、弾が飛んで来るかも知れないから、入れさせない、と。

伊藤 あまり大きな影響はなかったわけですか。

天城 なかったですね。ただ、二・二六事件で不思議なのは、一中の下に『幸楽』という料理屋があつて、あそこに（反乱軍が）籠ったんです。『幸楽』というのは、一中の建物から見ると、目の下に見えるんです。だから、あのときは一中も休講したんじゃないですかね。

伊藤 それから、先生が一中に入学される、その少し前まで、旧制高校では左翼運動が盛んだったと思いますが、先生が入学された頃は、

どうだったんですか。

天城 僕らの頃は、その前の左翼運動のようなものは、もうなくなっていました。もう戦時下に入っていましたから、左翼運動はありませんでしたが、しかし全体としては、かなりリベラルな……と言えば、リベラルだし、勝手なことを言っていた連中が多かったですね。しかし、特に運動というのは、私の頃はほとんどなかったです。

伊藤 先生は、そういう左翼思想に接点は全然なかったんですか。

天城 僕らのときには、もう、どこにそんな人がいるのかも分からなかったですね。

伊藤 それで、一高から東大法学部というのは、ごく自然に……。

天城 そうですね。この流れは何となく自然ですね。

伊藤 そうすると、東大法学部を出て、やはり役人になると……。

天城 まあ、僕なんかは、あまり特徴がないから法学部に行っちゃったんですが、何になろうということは、まだはつきりしていませんでした。法学部に行って、それで何となく「高文」も受けておこうと思っただけです（笑）。

実際に、何になろうと思っていたかと言うと、やっぱり中国問題が一番頭にあったんです。それで、これはどれも実現しなかったんですが、一つは新聞記者になろうかと思っていました。もう一つは、満鉄の調査部は非常に勉強ができると思うので、そこに行こうかと思っていました。それから、これは最初から無理なんだけれども、大学に残って勉強しようかとも思っていたんです。というのは、国際法の先生が「大学に残らんか」なんて言ったんですよ。僕自身は、学者になる気はなかったけれども、まあ、そんな話もあってね。それで、やっぱり頭の中は、中国なんですね。満鉄の調査部なんていうのも、いろん

な先輩と話をしていた、非常に勉強ができるところだと聞いていたし、新聞記者も、「同盟」に先輩がいて、その人と話をしていた、これも面白そうだなと思っただけ（笑）。

伊藤 ちよつと廻りますが、一高時代は寮生活もされていたんですか。

天城 三年間いましたよ。

伊藤 そのときは、やはり運動はサッカーか何かをやっておられたんですか。

天城 そのときは、中学のときの流れがあるから、サッカー部に「来い、来い」と言われてまして、サッカー部に入っただけです。ところが、一学期の練習試合で、物凄い捻挫をして——あのときは骨を折っていたほうが、治りが早かったと思うんですよ。それで、歩けないで、その夏はずっと松葉杖で、サッカーもできなくなつて、やめてしまったんです。

まあ、一高に入ったときはサッカーをやるか、テニスをやるかって、両方から引張られました。あるとき、サッカー部の部屋に荷物を置いていて、翌日に行ったら、もうないんです。そしたら、庭球部の部屋に持って行っている。丸で人攫いのようなですよ（笑）。それで結局、サッカーをやっていたんですが、捻挫で……。

伊藤 運動ができなくなったわけですか。

天城 サッカーも、できなくなっちゃった。

伊藤 テニスも、できない。

天城 ええ。それで、運動部でない部屋に入っただけですよ。

伊藤 そうですか。話は元に戻りますが、東大でいろいろと進路に迷っておられたということですが……。

天城 そうですね。大学に行ったら、物凄くつまらないんです。もう、

がっかりしましたね。

伊藤 みなさん、そう言いますね。高等学校のときは友達ができたり、何かいろいろやるけれども、大学に行くと、行って帰ってくるだけだと（笑）。

天城 講義はマスプロだし、面白くなくて、勉強に全然身が入らないんです。もう法律なんて、二度とやるもんじゃないと思った。卒業してから、法律関係の本はみんな売り払ってしまったぐらいです。僕には、本当につまらなかったですね。

伊藤 でも、「高文」は受けられたんですよね（笑）。

天城 それは、卒業も「高文」も、ネセサリー・エイブルだと思って……。率直に言うと、そんな感じで、本当につまらなかったですね。

伊藤 卒業される頃は、お父様は何をなさっていましたか。

天城 父のことを話すと、いろんなことがあるんですが、その時分は朝鮮の新義州で仕事をしていました。まだ、国内でもやっていたんですが、岐阜の山の中の鉾山で、モリブデンなどを掘っていました。戦時物資ですから、貴重なものでね。それから、当時、朝鮮の鴨緑江で水力発電のためにダムを造っていたので、その資材——主に油ですが、油を供給するために、「出光」の出店みたいな形で仕事をしていました。それで、終戦直前の七月の末に、父は新義州で亡くなったんです。まあ、医療設備も悪かったんでしょうが、病気で六十一歳で亡くなりました。

伊藤 ご経歴を見ると、先生も朝鮮に行かれていますね。

天城 ええ。まあ、その話は、またあるんですけどね。

伊藤 関係があるんですか。

天城 若干あるんです（笑）。

伊藤 では、ここをお話の切れ目にしましょう。いやあ、今日は全く予測していなかった展開になりました（笑）。

天城 だから、僕は三十歳まで這い回りで、「三十にして初めて立つ」ですよ。だから、三十までは、何をやっていたのか分からないぐらいです。それで、僕はその間に、召集されて軍隊にも行っただけ。

小池 私どもが入手した先生のご経歴なんですが、天城先生は松下視聴覚教育研究財団の理事をされていますね。それで、事務局長の桜林さんをお願いをして、先生の履歴書をお借りしたんです。そしたら、昭和十七年から三十五年までが飛んでいるんですね。それで、今日はいろんなお話が聞けるんじゃないかなと思っていたんですが、全く予想できないものでした。

天城 どういう履歴書を持っているの？

伊藤 十七年に、東京帝国大学法学部卒業ですよ。

小池 それで、十七年から飛んでいるんです。

伊藤 官房長まで行っちゃうんですよ（笑）。

天城 それは、まあ、しょうがないよな。

伊藤 是非、その途中も詳しくお話してください（笑）。

天城 戦争もね、本当に生き延びて帰って来たんですよ。僕は運が良くて、二度死に損なって、軍隊の話も傑作なんだ。

伊藤 その話も、是非伺わせてください。軍隊経験のある人とならない人では、やはりずいぶん違いますからね。それから、高等教育を受ける前に実社会を見られたというのは、これはやはり非常に興味深い経歴ですよ。

天城 その話だけでも、やったら切りがないんだけど、本当に訳の分からん生活でしたよ。オペラシンガーと、あのままパリに行っ

たら、どうなっていたのかなと思いますよ（笑）。

伊藤 それも面白い人生だったかも知れませんか。

天城 パリに行ったらパリに行ったで、そのまま向こうに残るつもりでいたんです。訳の分からんことで、一高に落とされてしまってから、もうしようがない、独学でやろうと思っていたんです。私がいた会社にマネージャーでいた人が、陸軍の武官府の「雇い」みたいな形で、パリにずっといたんですね。これも訳の分からん男で、まさに独学でやってきた男なんです。その後、彼も落ち着かないんだな。戦争が起きると——あとで聞いた話ですが——また軍と一緒に進駐して、ハノイの大使館に行ったとか……。最後はよく知らないんですが、もう亡くなられたんじゃないかと思えます。そういう、いろんな人とのつながりということでは、私は普通の人とはちよつと違いますね（笑）。

伊藤 違いますね。今日は、どうもありがとうございました。

〈以上〉

天 城 勲
オーラルヒストリー
第2回

[2000年9月22日 14:10～16:10]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

小池聖一(広島大学助教授)

所澤 潤(群馬大学助教授)

村上浩昭(政策研究大学院大学リサーチ・アシスタント)

(於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター)

特設高等科の友人たち

伊藤 前回お伺いした一高の特設高等科について、もう少しお訊きたいので、よろしくお願いします。そもそも特設高等科はどこにあったんですか。

天城 同じキャンパスの中です。

伊藤 僕は駒場のときに——正門を入ると、時計台の建物があつて、あの右側の事務棟の建物を「特高館」と言っていたんですが、なぜそう言うのかは全く知りませんでした。

天城 伊藤さんは、戦後ですか。

伊藤 はい。やはり、あそこがそうだったんですか。

天城 あの一棟がそうですね。

所澤 特設高等科があつたことや、制度的なこととか、中国人がいっぱい来ていたことなど、実は多くの人が知っていて、研究でも取り上げられているんですが、その実態が分からないんですね。つまり、そこで実際に、どういう教育が行われていたのか、どういう人たちが来ていたのか、日本人の学生とどのくらい交わっていたのか……。また、彼らが大学に入っていくことに対して、日本人の学生はどのように思っていたのか。あるいは、彼ら自身はどういうふうに通っていたのか。そういう教育の実況に関わることが、あまり発掘されていないものですから、ご存知の方に、いろいろとお話を伺いたいと思っています。

伊藤 要するに、特別に違った教育を受けたのかどうかですね。

天城 まず、入り方が違うんですね。同じ試験ではありません。しかし、入って来たら、あとは全部——原則同じです。一高の寮に入るし、基本的には全部同じなんです。

伊藤 寮にも入るわけですか。

天城 そうです。各部屋に、みんな入っていました。だから、運動部に入った者は、その運動部の部屋にいるし、みんな部屋の中に入っています。「特高」の部屋なんてものは、ないです。授業も原則としては——私は「特高」のカリキュラムを特別に意識したことがないので知りませんが、同じ授業もあつたし、「特高」の生徒だけの授業もありました。だけど、彼らのほうが真面目だから、共通科目の試験になると、彼らのノートを借りたものです。理科生も同じように、実験をやっていましたね。それから、もちろんみんな日本語もできますよ。

伊藤 来たときに、もう日本語ができる状態なんですか。

天城 ええ。だから、どこでどうやって、日本語を学んで来たのかは分かりませんが、みんな日本語ができましたし、言葉の面でのハンデは全然感じませんでした。

もともと、出身地がどこかということになると、一々分かりませんが、要するにみんな中国の出身なんです。中には、親の關係で日本にいた中国人もいて、日本の中学を卒業した人もいます。日本国籍でなければ高等学校に入らなかったのかどうかは、よく知りませんが、私も普通に受けた方がいいのに「特高」に入っていた者もいます。私が大変親しくしていた楊覺勇君は暁星中学でしたかね。それから、満洲国から来た者もいるし、もちろん中国大陸から来ていた者もいました。

ただ、後に中国大陆が戦争になって、蒋介石の国民党と中共と汪兆銘の政權に分かれると、(国を)出て来たときには分からないだけけれども、卒業して帰るときには、それぞれの政權の下に行ってしまったんです。だから、中共に行った者もいるし、国民党に行った者もいるし、汪兆銘のところに行った者もいます。汪兆銘の政權に入って、上海の警視總監をしていた洪君については、前回お話ししましたね。彼が台湾から日本に来たときは、もちろん中国からの亡命者ですから、僕ら昔の連中がみんな集まって、日本に帰化できるようサポートのサインをしたりして、それですぐ帰化できました。その後、日本の女性と結婚しましたが、そういう人もいましたよ。

所澤 僕が一高の寮生名簿を見ていたら、本来、台湾出身の人は入れないはずなんです、台湾出身の人がいるんです。それで、いま台湾で調査をしています、台湾の人から聞いた話では、その人たちは日本が台湾を領有して以降に、中国から台湾に渡って来た人たちで、日本国籍を持っていないんだそうです。その人たちの子弟が台湾の中学校を出て、一高の特設高等科に入っていたというような話を聞きました、今、それについては確認できないんです。

天城 台湾は、朝鮮と違って、ちよつと複雑なんです。台湾は、特にあとになって中国から来た人がいて、国籍の持ち方がバラバラなんです。僕も、台湾から帰化した友達がありますが、彼は台湾の三世で、お祖父さんが福建省から来たのかな。それで台湾にいて、もちろん、日清戦争以後で、日本の領土ですから、彼も日本人なんです。彼のお父さんも一橋大学の卒業生で、お母さんは東京女子大というような、全くの日本人ですよ。

しかし、彼が戦後日本に来たら、「日本国籍がない」と言われたそう

です。要するに、日本の敗戦によって、朝鮮・台湾を離れたときに、その人々も日本国籍を失ったんですね。彼は、台北師範の附属小学校にいたのかな。全くの日本人なんです、高等学校の頃に東京に来て、都立の高校に入ろうとしたけれども、「日本国籍がないから、駄目だ」と言われて、しょうがないから私立に行ったそうです。

伊藤 特設高等科に入ってくるような人たちは、向こうではお金のある人なんですよ。

天城 そうですね。だけど、「特高」の記録って、残っていないですよ。

所澤 駒場に記録が残っているかも知れないんですが、全部見つけ出して調べるのが難しいですね。

伊藤 一高の資料は、なかなか見つからないですよ。

天城 一高については、「歴史」が二つ出ていますよ。

伊藤 『向陵誌』ですね。

天城 寮史ですね。

伊藤 しかし、大学当局の資料がどこに行ったものやら、よく分からないんですよ。

天城 郭博君も一緒だったんですよ。お父さんの郭沫若が日本に亡命したんじゃないですか。郭君は、どういう形で入ったのかな。

伊藤 やはり特設高等科ですか。

天城 ええ。彼はその後、京都大学の建築科に行ったのかな。お父さんは郭沫若ですから、結局、中共側なんですよ。上海で建築関係の仕事をしていて、その後、日本に來まして、東京でも会いましたよ。伊藤 大陸に旅行されたときに、彼らが、いろいろと紹介してくれたりしたんですか。

朝鮮総督府の官吏として

天城 いや、そんなに積極的に、彼らに頼んだことはありません。そんなにしなくても、まあ、これはいいか悪いかは知りませんが、朝鮮や満洲には――満洲には満洲国ができていましたから、一高の先輩がたくさんいるんですよ。満鉄にもいるし、満洲国政府にもいるし、そんな方々に紹介を受けて行きました。北京に行ったときには、ちょうど一高の儒学者の先生が留学していました。

伊藤 先生は一高を卒業するときに、卒業証書ももらいましたよね。

天城 そうでしょうね。

所澤 私が一高の卒業生の方に聞いたところでは、多くの人がもらっていないくて、未だに駒場の事務のところに、ほとんど保存されている。昔、卒業した方が行くと、いただけると聞いたんですが……。

天城 もらってないかも知れないな（笑）。

所澤 卒業式なんか行かなかったとか、そんな話を聞くんですよ。

天城 卒業式なんて、なかったでしょう。

伊藤 なかったということは、ないんじゃないですか（笑）。

天城 一高というのは変なところで、入学式をやったかやらないかは覚えていませんが、入寮式は遙かに盛大なんですよ。一高生は寮生だという前提ですから、入寮式は凄くて、先生もみんな出ているんですよ。だから、入学式があったのかどうか覚えていませんし、卒業式も覚えていませんね。

伊藤 寮を出るときは、何かないんですか。
天城 なかったと思いますね。

伊藤 さて、前回は、昭和十七年に帝大を卒業なさったところで時間になりました。その後、文部省にお入りになるまでに、間があるわけですね。大学を卒業したところで、先生はどのような選択をなさったんですか。

天城 私は、法学部に入って「高文」を取ってしまったんですね。そういう、普通の行き方をしてしまったんです。しかし、卒業間際になつて何になるうかと考えたときに、やはり中国のことが非常に頭にありまして、「シノロジー」が勉強できないか、と思ったわけです。それで前にも言いましたが、満鉄の調査部に入ろうか、新聞記者になろうか、と……。それから、これはあまり強くは思っていないんですけど、が、外交史の安井郁先生の研究室で、神川彦松先生と一緒に雑談しているときに、「そんなに関心があるなら、大学に残らないのか」と言われたんです。それで、「どこに残るんですか？」と訊いたら、「外交史の研究室はどうか」と言われたんです。しかし、大学に残って研究者になるという気持ちはあまりなくて、「考えておきます」ということで、そのままになつちやったんですね。それから、あと一つは、役人になる道があるんです。それで、役人では、どこに行ったら中国のことが勉強できるかと思つてね。

伊藤 やはり、そこでも中国なんですね。

天城 頭にあるんですね。それで二つありまして、ちょうど当時は大

東亜省ができる直前で、先輩に、「外務省の一部や拓務省も吸収されて大東亜省ができるから、やりたかったら、そこが一番いいんじゃないか」と言われたんです。幸い「高文」を取っていたものだから、それも一つかな、と。それで、いろいろと考えた。

ここで、ちよつと、また話が別ですが、その当時、親父が朝鮮で仕事をしていたんですね。

伊藤 鉾山か何かの仕事ですね。

天城 その話をすると長くなるし、横道に逸れてしまいますから……。私の叔父も、ずっと朝鮮で仕事をしていましたし、私は学生時代に朝鮮や満洲に行ったでしょう。そんなこともあって、朝鮮の総督府は縁があつたし、親しくしていた先輩が拓務省の局長だつたんですよ。「それじゃあ、取り敢えず、お前は拓務省に入つたらどうだ。来年になったら、すぐ大東亜省に変わるんだから」と。それなら、拓務省に入ってもらいましょうか、という程度だつたんです。拓務省には、朝鮮とか台湾とか、関東州とか樺太庁とか、外地勤務があるんです。それなら、私は朝鮮に縁があるから、朝鮮に行かせてもらいましょうということ、で、朝鮮に行つたんです。

伊藤 拓務省で採用されて、朝鮮総督府の役人になるわけですか。

天城 そうです。だから、あまりよく知らなかつたので、拓務省で試験を受けたんです。そしたら、配属先が朝鮮総督府だつたんです。

伊藤 朝鮮総督府の役人というのは、みんな、そうやって採つたわけではないですよ。朝鮮総督府のお役人というのは、朝鮮総督府自体でも採っているわけでしょう。

天城 キャリアの連中は、みんな拓務省で別格に採っていたんじゃないですか。

伊藤 朝鮮は一応、ご希望ではあつたわけですね。

天城 基本的には、ね。

伊藤 普通、役人になろうという人は、まず内務省を考えるでしょう。

天城 あの時分は大蔵省、内務省……。まあ、内務省が多いですね。国内官庁の仕事というのは、今は分かれています。今はほとんどが内務省ですからね。建設省だつて、労働省だつて、そうでしたしね。

伊藤 厚生省も、そうですね。

天城 厚生省は、ちよつと前にできていたんです。

伊藤 もう、できていますね。

天城 警察だつてそうだし、みんな内務省ですね。あの時分、別だつたのは大蔵省と商工省と通信省、そんなところでした。

伊藤 役人の花形という、やつぱり大蔵とか……。

天城 それは、圧倒的に内務省ですよ。

伊藤 それを、敢えて拓務省に行かれたというのは、やはり、先ほどおっしゃったようなことなんですね。

天城 そうだつたんです。

伊藤 それで、昭和十七年（九月）に卒業なさつて、すぐ着任するんですか。

天城 朝鮮は終戦までですから、期間は短いんです。朝鮮時代を大きく分けると三つあるんですが、最初にやつた仕事と、召集されて兵隊に行っていたことと、兵隊から帰つて来てからの仕事ですね。

伊藤 兵隊から帰つて来ての仕事もあるんですか。

天城 帰つて来て、また朝鮮総督府に戻つたんです。僕は十九年の十二月に除隊なんですよ。

伊藤 その頃に、除隊になる人もいたわけですね。

天城 これも、また非常に不思議な話で、本当は除隊なんてないんだけどね（笑）。

伊藤 そうですか（笑）。僕も、その頃に除隊があったなんて、あまり聞いたことがありませんからね。

天城 ないですよ、みんな最後までね。

伊藤 最初は、やはり「試補」か何かをやるんですか、それとも最初から事務官になるんですか。

天城 あの時分、官庁はどこでも、最初は高等官でも事務官じゃないんです。「官補」とか「試補」とか「属」とか、官庁によって違うんですね。

伊藤 ある程度、時間が経って事務官になるわけですね。

天城 そうですね。それは官庁によって違いましたが、一年のところもあれば、二年のところもあって、大体は一、二年で高等官になったんです。

伊藤 先生の場合は、高等官になる前に、兵隊に引っぱり張られてしまったんですか。

天城 僕は総督府に入って、ちょっと例外的な扱いを受けました。当時、戦争になっていましたが、北朝鮮に大きな水力発電所があったんです。朝鮮窒素という民間の大きな会社が、揚子江と豆満江でやっていました。

伊藤 日本窒素の子会社ですね。

天城 それで、日本でも電源開発をしたのと同じで、朝鮮電力という国策会社をつくって吸収しようという考えがあったんです。それで二カ月ぐらいいしたら、その立法作業に参加させられたんです。

伊藤 最初に、見習いみたいなことはやらないんですか。

天城 見習いなんだけれども、そういう仕事をさせられちゃったんですよ（笑）。

伊藤 それは立法になるんですか。

天城 そうです。民間会社を買収して、新しく国策会社をつくるために新しい法律が必要だったので……。あの時分、朝鮮は政令と言うんですね、法律じゃないんです。でも、法制局の審査を受けるんですよ。殖産局の電気課で、その人たちと一緒に朝鮮電力管理令を作っていたんです。僕は法律は嫌で、大学を出て「もうやめた」と思っていたら、また法律の仕事でしょう（笑）。

ただ、やっていて非常に面白いと思いました。電力が非常に重視されていたんですね。他の産業では、電力は光熱水料という費用の一部ですが、電気化学という領域になりますと、電力料金は原料費なんです。その電力を使って、チタンとかアルミニウムなどの軽金属をつくる。これは、電力産業の華ですからね。朝鮮は水力があるということで、軽金属工業の基地にしようとしたんです。それで、あそこを国策会社にして、電力を中心にした、そういう原料をつくろうとしたんです。「電気の上に咲く花」なんて、よく言われましたが、次から次へとたくさん、新しい工場開発のプランがありました。その基になる朝鮮電力管理令の制定作業に参加していたんですよ。

それで、法律をまたやらなきゃいけなくなつて、もう嫌で嫌だね。

商法関係なんて、大体やっていなかったしね。それで、不動産を買収し、それを登記するわけで、いろんな担保の問題があるし、社債の問題がある。それを、全部クリアしなきゃいけないんです。会社法なんて、大学で聴いてないですから、独学で始めたんです。もう忘れてしまいましたが、担保付社債信託法なんていう、ややこしい法律があり

ましたよ。そんなものを勉強したりして、それで草案を作っていくんですが、僕のところの電気課の事務官が、そう言っては悪いけれど、あまり頭の良くない男で、勉強もしていないんですよ（笑）。

特に、朝鮮は大陸の兵站基地になるという大きな構想があったものですから、技師なんかもたくさんいました。彼らから電力行政と軍需産業の関わりとか、電力が持っている意味なんかのレクチャーを受けながら、草案を作っていたんです。そして、その案を持って東京へ来ましてね。

伊藤 東京ですか。

天城 ええ。政令は法制局の審査を受けなければならないので、二月か三月頃から東京に来て、毎日、その事務官と一緒に法制局通いですよ。

伊藤 法制局は、大変な難関らしいですね。

天城 そうですよ。そこで、「さよなら」した法律を、またガツツリやらされたんです。法律でも、あまりそういうことをやっている人はいないんですね。社債とか、担保の問題をどうするかとか、それから信託の問題も、ね。栗栖赳夫という人の本を読んだりなんかして……。法学部をインチキに卒業してきたんだけど、独学でまた勉強しました。栗栖さんは戦後、大蔵大臣になられたのかな。興銀におられたんですか。

しかし、それができ上がらないときに召集になりました。最初は「教育召集三カ月」と言うんですが、三カ月経つと、すぐ普通の召集に切り替えられる。だから、みんな初年兵と言っても、予備役の連中を集めて来ているので歳もバラバラだし、あっちからもこっちからも集まって来ているわけです。

「弱兵整理」で除隊

伊藤 それは、どこの連隊に……。

天城 京城の龍山にあった連隊に入っただんです。

伊藤 本籍地ではないんですか。

天城 僕は、そこに入れられました。もちろん、それぞれの本籍地で召集された連中も一緒に来ていまして、岡山や大阪辺りからも、かなりまとまって来ていました。

伊藤 徴兵で入った新兵さんばかりでは、ないわけですね。

天城 全部、新兵です。二等兵ですよ。

伊藤 予備役やなんかの人ではなくて、ですか。

天城 二十歳で徴兵検査を受けて、甲種合格というのは、そのまま入隊ですが、乙種合格以下は全部予備役に入ります。召集というところで、来るんです。だから全部、予備役にいた連中ですから、少なくとも、すぐの現役ではないという意味では、現役ではないんです。

伊藤 甲種合格でないということは、あまり体格がよろしくないということですか。

天城 要するに、元気な連中だけが、最初に取られたんですね。昔、現役兵というのは少なくて、大体、予備になっただけなんです。戦時中の「短縮」でもって取られた人は別ですが、大学を出た連中はほとんど予備だったんですね。そういうので、予備役召集で行ったわけなんです。それで、教育召集というで行って、「訓練を三カ月やる」と言っ

ているんだけれども、終わったら、そのまま居残りなんですよ。兵隊は最初が二等兵で、最も短くても六カ月やって、その中から選抜されて一等兵になるんですね。それでまた六カ月やって、一年経つと、また選抜で上等兵になるんです。一番早く行って、そういうやり方なんです、それでなれない者は、一年経つても二等兵なんです。そういうプロセスを経て、私は六カ月で一等兵になって、一年経つて上等兵になったんです。

僕は機関銃隊に入れられたんですが、機関銃は重いので砲身と台とに分解して、馬の背に乗せて行軍するんです。それで、敵の近くに行くと、それを下ろして組み立てて、馬を後ろに隠して、そこから今度は人間が持つて、前に進んで行くんです。

小池 四人ぐらいで持つんじゃないですか。

天城 最初は四人で、最後は二人で持つんです。三十キロぐらいだったかな。前と後ろで、二人で持つんですよ。それで最後は、敵に近付くんですから、匍匐前進で、這いずりながら引つ張って行くんです。馬なんかで持つて行ったら、大きく見えて危ないですからね。そうやって機関銃を引きずり上げて、稜線に首を出して、撃つんですよ。そうすると、敵のほうも「機関銃が、あそこにあるな」と思うので、一番狙われるんですよ。

そもそも、馬にも触ったことがない人間が、馬部隊に入れられてね（笑）。一分隊に二頭の馬を持っていますから、銃を下ろすと、二個分隊の、四頭ぐらいの馬を一人で引いて、パーツと後ろまで帰ってくるんです。後ろに下がって、敵に見えないところに馬を止める。訓練では、銃器と馬の訓練をやるんですよ。馬の訓練というのは、「毛付け兵」と言つて、馬に当番兵が付いて、責任を持って馬の面倒を見なくちゃ

いけない。馬は、軍隊では兵器と言われている、人間よりも大事なんです。「お前らは一銭五厘で来るけれど、馬はそうはいかないよ」と。

だから、馬の毛付けをやつて、馬を乗り回さなければならぬし、機関銃を撃つことも習わなければならぬ。もう、大変でしたよ（笑）。

伊藤 機関銃は、どのぐらいの口径なんですか。

天城 忘れちゃった。とにかく、四人で一つで、四番手というのが機関銃を撃つんです。それが、一番狙われるんですね。ババパーツと撃つと、そこを、また向こうが狙ってくる。僕は、その四番手をやらされてましてね（笑）。

伊藤 四番手がやられたら、どうするんですか。

天城 また次に、交代するんです。

伊藤 その順番が決まっているわけですか。

天城 ええ。でも、いろいろと銃の撃ち方や狙い方があるものですから、本来、四番手がその訓練を受けているんです。だから、最後のところは、彼がどこに銃を据えて、どう撃つかということをやるわけですから、やられてしまうと駄目なんです。

伊藤 その訓練というのは、どのぐらい続いたんですか。

天城 僕のいた京城の第二師団の本隊は、ニューギニアに行っていました。

伊藤 留守師団なんですね。

天城 そうなんです。それで、その補充隊に入ったんですね。ニューギニアではやられているものですから、補充隊を第何次、第何次と出すわけです。それで、私たちが訓練しているうちに、その補充隊に指名されたんです。第十何次補充隊とか言われて、そのぐらい出ていましたし、それまでに師団長が二人戦死しているんです。

それで、その補充隊が編成されて、みんな野戦に行く準備をして、靖国神社の認識票をもらうんです。どこで死んでも、分かるようにね。そんなものをもらったり、野戦の準備を言うので、兵舎を離れて朝鮮の山の中に入りまして、ジャングルの中を行進する訓練をしていたんです。ニューギニアのジャングルを行かなければなりませんから……。夜になると、夜のジャングル行進の練習をして、隠れて銃を撃つんです。そうすると、馬も驚くでしょう。でも、その訓練をやる、馬も驚かなくなる。馬を傷つけたら、兵器を傷つけたと言われて、どやされるんですね。だけど、暗闇の森の中に行けば、傷ついてしまふんです。それで、馬を傷つけまいとして苦心していると、人間があちこち傷ついちゃう（笑）。

そんな訓練をやって、いよいよ出掛けるといふ間に、私たちの前の補充隊が、鹿兒島を出て、しばらくして轟沈されて、全滅したんです。それで、次の部隊が博多まで行っていたのかな。ところが、この連中の行く船がなくて、その部隊は足止めを食らってしまつて、原隊に帰って来たんです。それで、我々も原隊復帰ということになつて、ニューギニアに行き損なつたんですね。

伊藤 一命を取り留めたということですね。

天城 ええ。行くまでも、沈没してやられているんですからね。行った連中は、みんな全滅ですからね。

それで、とにかく原隊に復帰したわけです。元々は、我々は京城の第二師団で、ニューギニアに本隊が行っていたので、留守隊として訓練をしていたんだけど、僕たちが山の中で戦地の訓練をしている間に、新しい師団が編成されたんです。第四十何師団とか言っていました、戻って来たら新しい師団ができていて、僕らは半端者なん

です。それで、「お前たちは、前の二二師団の補充隊だから、端っこにいろ」と言われて、そうこうしているうちに、その新しくできた師団がビルマに行くことになったんです。僕らは「前の師団の留守部隊として残れ」と言われて、ビルマにも行かないで済んでしまつたんです。伊藤 両方とも危ないところですね。

天城 ええ。ビルマの状態はとても悪くて、これはあとで聞いたことですが、『戦艦大和』で送つたそうですね。それで、仏印のどこかに上陸して、仏印を横断して、「ビルマの進撃に備えよ」ということで、北タイを渡つて、ずつと行つたんです。しかし、この部隊が、その後どうなったかは全然分かりません。同じ兵舎にいたものですから、この部隊に何人か知り合いになつた者もいたんです。最後に、そっちに行く者と残る者との区分けがありまして、親しくしていた者がいるんですが、「俺はビルマに行くんだ」と言つて別れたんです。話を聞くと、あの部隊は確か、タイの国境からビルマに渡るか渡らないかぐらゐのときに、ビルマ側からの反撃に遭つて、何人かが逃げ帰つたのがやつとのことだつた、と。ビルマから北タイを抜けて帰つて来るんですが、ほとんど病氣と飢えとで、亡くなつてしまつたようです。

それから、ビルマ行きの前に、もう一つ話がありまして、留守部隊として帰つたときに、あちこちで日本軍は足りなくなつたものですから、フィリピンに何人か部隊を編成して送っているんです。そのフィリピン派遣にも入らなくて、最後にビルマの総動員にも漏れて残つていたんです。

そして、だんだん戦況が悪くなって、いよいよ沖縄も悪くなって、米軍の本土攻撃という段階になつたんですね。どこに上陸して来るか、幾つか想定があつたようですが、朝鮮半島の南部に上陸するという想

定もあつたんです。それで、京城にいた部隊は、朝鮮半島の南の海岸に拠点を築いて、移動するということになった。これも、戦時出動です。部隊が戦線に出るときには、「弱兵整理」と言つて、体の悪い兵隊を整理するんですが、そのときに僕は除隊になつたんです（笑）。

伊藤 「弱兵」になつたわけですか。

天城 ええ。

伊藤 本当に体の調子が悪かつたんですか。

天城 それが、僕のいた中隊はロートル兵ばかりで、中隊長は召集兵で、特務曹長（准尉）が二人いたんです。特務曹長とか准尉とかいうのは、少尉になれないんですね。

伊藤 叩き上げの連中ですね。

天城 そうです。それが二人いるんです。一人のほうは叩き上げの兵隊なんです。彼は戦傷兵で第一線勤務を免除になつています。足を怪我して、ちよつと引きずっているんですね。もう一人は、神主さんなんです。中隊長も召集されて来た人で、要するに日本の軍隊はそんな制度になつていて、バリバリの現役兵はいないんです。

それで、中隊というのは、生活の単位であり、訓練の単位であり、戦闘単位でもあるんですが、戦場に行つていないときは、訓練と生活の単位なんです。そこでは、普通の組織体の経営みたいな仕事がたくさんあるんですが、神主さんは全然やる気がないし、戦傷兵は、そう言つては悪いけれども、全然頭が悪くて、どうにもしようがないんです。でも、中隊の事務はやらなきゃいけないので、僕に「事務室に来てくれ」と言ふんです。僕は、そのとき上等兵になつていたんですが、「天城上等兵、これをやってくれ」と言われて、二人の准尉のやる仕事を、僕一人でやっていたんです。被服や兵器の管理から、全部や

らなきゃいけなくて、一年目に上等兵になったら、それをやらされちやつたんです。

それで、その准尉というのが面白い男で、もうかなり歳を取つていたんですが、彼は第一線勤務を免除になつていて、やがて除隊になるかも知れないんですね。そうすると、また娑婆に出て働かなければいけない。僕に、「そのときはよろしく、役所の守衛に雇つてくれないか」とか（笑）。そんな話もあつたんです。

そんな状況の中で、「弱兵整理」の話が出て、軍医の審査があつたわけです。そのときに、その准尉が、「お前は、こんなところで仕事をしているよりも、娑婆に出たほうが役に立つから、帰れ」と言うんですよ。「帰れと言われたつて、どうするんですか」と訊いたら、「俺が軍医の前で、ぼろくそに言うから、黙つていろ」と。それで、軍医のところにいったら、「こいつは駄目だ」と、散々言うんですよ。「普段から演習もできない」とか、いろんなことを言っていましたね。それで、軍医が診察して、除隊と……（笑）。

小池 先生はサッカーをやられていたから、本当は体は強かつたんじゃないですか（笑）。

天城 だからね、いい加減なところがあるんですよ（笑）。

伊藤 それで除隊になつたら、すぐにまた朝鮮総督府に戻つたわけですか。

天城 ええ。十九年の十二月二十何日かですね。

敗戦の混乱の中で——警務課長として

伊藤 朝鮮総督府に戻られて、今度は何をされたんですか。

天城 まあ、朝鮮にいた間は、やることをやっていようと思っていました。電力の問題は……。

伊藤 もう解決していたわけですか。

天城 そうです。大変面白かったんですが、もうそれは済んでいました。

それで、総督府に戻ったら、一高の先輩が総督官房勅任参事官をしていまして、私も前から知っていたんですが、その人のところに挨拶に行ったんです。そしたら、「お前、帰って来たって、またすぐ召集を受けるに決まってるよ」と言うんですよ。本当に、あの時はそうなんです。「せっかく帰って来たんだから、召集されないようにしようよ」と言うんです。

伊藤 そんな方法があるんですか（笑）。

天城 それはね、「警察だ」と言うんですよ。警察には警務課長というのがあるんですが、兵事課長というのもあって、その兵事課長を兼ねるんです。警務課長と兵事課長をやっていたら、召集は来ない、と。それから、植民地行政は、権力行政という意味ではないけれども、「警察をやらないと、分らないよ」と言うんです。それで、全羅北道というところに配置されて、全羅北道の警務課長と兵事課長をしていました。

伊藤 それは、どういう仕事なんですか。

天城 警察は刑事と、それに当時は統制経済なので、経済警察というのがあったんです。それから、思想取締りの保安と衛生と警務です。警務は、警察の人事を含めて、官房みたいなものです。

伊藤 総務みたいなものですか。

天城 そうです。

伊藤 それに兵事がくっ付いているというのは、何なんですか。

天城 兵事課長というのは、よく知りませんが、召集だとか、何かいろんなことをやるんですね。

伊藤 軍隊に関することですか。

天城 いや、軍隊内部のことではありません。だから、警察ではあるけれども、軍の委託の仕事をやるんです。だけど、何をやるのか、制度的にはあまりよく知りませんでした。

私は、京城の二二部隊という連隊にいたでしょう。その二二部隊が南に移動して来て、全羅北道に陣地を構築したんです。そしたら、ある日、その連隊長が「お会いしたいから」と言ってきたんです。こっちは警務課長ですが、僕が兵隊でいた頃の連隊長ですよ。連隊にいたときには、連隊長の顔なんか見たことないんですが、その連隊長が挨拶に来たんです（笑）。

伊藤 それは十九年の、いつ頃ですか。

天城 二十年の初めぐらいです。それで、八月には終わりですからね。

伊藤 それまで、ずっとそのポストにおられたんですか。

天城 ええ、全羅北道におりました。

伊藤 そのとき、ご家族はどうされたんですか。

天城 家内がいましたから、一緒に行っていました。それで、そこで

終戦になったんです。

伊藤 まだ、お子さんはいらっしやらなかったんですか。

天城 終戦の年の、五月の末頃に生まれたんです。

伊藤 除隊されてから、ご結婚なさったのではないんですか。

天城 そうではないです。結婚してから、召集されたんですから。

伊藤 朝鮮総督府に入られてから、ご結婚なさったんですか。

天城 そうです。

それで、いよいよ終戦でしょう。それからが面白いんですよ。日本が負けて、もうどうしていいか分からないんですね。朝鮮総督府なんて、あるのかないのか分からないです。というのは、朝鮮総督の阿部信行が声明を出したんです。「皇国にして皇民なり」なんて言っただけで、「朝鮮軍も最後まで残るから、みんな落ち着いている」と言っただけです。ところが、しばらくしたら、米軍が来るでしょう。それで、米軍は接触するのを避けるために、「米軍の上陸前に、朝鮮軍は撤退しろ」と言うんです。それで、朝鮮軍は漢江を渡って、日本人をみんな置いて先に帰ってしまったんです。あのときのやり方というのは、酷いものですよ。「朝鮮の人間は、みんな皇民だ」なんて言っていたのが……。

伊藤 それは米軍の命令なんですか。

天城 そうでしょう。それで、今度は米軍が進駐して来るんですが、私がいた全羅北道の全州にもやはり来ました。みんな沖縄で戦ってきた連中ですから、荒んでいるんですね。「あちこちで、またトラブルが起きる」なんて言われていましたよ。

そのときの全羅北道の知事は朝鮮人で、他の道にも何人か朝鮮人知事がいましたが、彼らは、戦争に負けたとなったら、向こうを向いてしまいましたからね。警察部長と内務部長は、キャリアの日本人でし

たかね。それで、米軍がいよいよ入って来るわけですが、どうやって接触するのか分からないんです。朝鮮総督府も何も言っただけで、どうしていいか分からない。それで、どういう経緯だったかは知りませんが、結局、「アメリカ軍が来たら、折衝は、お前がやれ」ということになったんです。あのとき、キャリアの官僚というのは、二人の部長のほかに、道では僕一人だったと思います。「お前がやれ」ということになったんです。

とにかく、入って来た部隊を迎えて、折衝を始めたんですよ。まあ、浪人時代にフランス人の会社について、フランス語はできないから、英語で仕事をしていて関係もあったので、割と英語がしゃべれたんです。それから、うちの家内がハワイの二世で、ハワイで生まれて、ハワイ大学を卒業するまで、向こうで教育を受けたんです。その結婚の経緯は別として……（笑）。英語ができるのは、彼女と僕しかいなかったもので、僕と二人で米軍との折衝を全部したんです。

伊藤 米軍の要求は、何ですか。

天城 別に、どうということはないですよ。「米軍が進駐するが、お前たちは無事に帰すので、抵抗しないで静かにしている。米軍の軍の規律があるから、その規律を住民も守ってくれ」と。例えば、無闇に酒を飲ませてはいけない、とかあるんです。

伊藤 軍人に対して、ですか。

天城 「米軍の兵隊が酒を欲しがっても、やってはいけないよ」とか、「酒屋なんかは、酒を売ってはいけないよ」とか。それから、「帰国するときの荷物は制限するから、まとめておいて、ちゃんと保管しておけ」とか、「保管する場所を決めるから」とか……。僕は、残っている日本人で町内会みたいなものをつくりまして、そこを拠点に、いろいろ

ろな仕事をしました。

あるとき、酒屋の親父が夜中に泣きながら、うちに来まして、「実はアメリカ兵が来て『酒を出せ』と脅かすので、酒を出してしまった。

それが向こうの憲兵に見つかって、『あれだけ酒を売ってはいけないと言ったのに、酒を売ったのはけしからん』と言って、息子の若主人を連れて行った』と言うんです。それで、『何とか息子を取り返してください』と言うんですよ。そしたら、うちの家内が、『それは、怪しからん。アメリカ人は、そういうことをする人間じゃないから、私が行ってきます』と言って、夜中なのに米軍に交渉に行っただけです。『脅かされて、しょうがなくて売ったのだから、帰してください』と言ったらしいんです。翌朝早く、『お蔭で釈放になりました』と、泣きながら報告に来て、『天城さんの内儀が言うことのほうが、もつともだ。米軍も悪かったから、お前は帰すが、帰ったら、天城さんの内儀のところにお礼に行きなさい』と言われたんだそうです(笑)。

村上 その酒屋さんというのは、朝鮮人ですか。

天城 日本人ですよ。

伊藤 それで、米軍が来て、軍政をやるわけですよ。

天城 軍政を敷くんですね。

伊藤 そうすると、州は朝鮮総督府の出先ですね。

天城 総督府の支配力は、全くないんですよ。

伊藤 それは、アメリカ軍の軍政の下に入ることになるんですね。

天城 そうです。占領軍ですからね。

伊藤 その占領軍が、いろいろな行政を行うために、手伝いをさせられることになるんですか。

天城 そうです。「その手伝いをしろ」と言うわけです。

伊藤 給料は、どうなるんですか。

天城 給料なんて、何もないですよ。面白かったのは、アメリカのケイさんという大尉が代表なんですが、ある日、彼がうちに来まして、『アメリカ軍軍司令官の命令で、あなた方夫婦を米軍の顧問にするから、月給を払う』と言います。僕は、『とんでもない、手伝いは日本人のためにするけれども、『米軍の顧問になれ』と言われて、雇われるのは嫌だ』と断ったんです。

伊藤 そうすると、天城さんだけではなくて、部下の人たちも給料なしですか。

天城 私は、その仕事で、部下なんていませんでしたよ。今の言葉で言えば、完全にボランティアです。

伊藤 どうやって生活するんですか。

天城 いやあ、困ってしまいましたよ。

伊藤 売り食いですか。

天城 まあ、その問題もあるんだけど、日本人は、いつ祖国に帰れるのが大問題です。朝鮮軍は帰ってしまいましたし、軍人だった総督も帰ってしまった、総督府の行政命令が全くないんです。それより、一番心配したのは、警察は強面の仕事をしていましたから、朝鮮人の反感を買っている。全羅北道の全州に道庁があつて、警察署があちこちにあるんですが、その警察署が襲われるのではないかということで、心配になって、私は各警察署の様子を見て回ったんです。「朝鮮人の襲撃を受けるかも知れない。争っても駄目だから、襲われたら、とにかく逃げて帰って来い」と言って回ったんです。

一方、日本人はみんな逃げて日本に帰るんですが、正式なルートも方法もないので、とにかくどんどん南へ逃げて、釜山で朝鮮人の船を

雇って、玄界灘を渡って逃げ始めたんです。それで、「一番最初に、警察官を逃がせ」という話になりました、できるだけ帰そうというので、それを進めたんです。日本人の、他の部長なんかも腰が落ち着かなくて、みんな逃げることはかり考えているので、残って仕事をする者が誰もいない。僕しか、いないんですよ（笑）。それで、だいぶ逃がしたんですが、これはあとで、またとんでもないことになるんですけどね。

それで、米軍といろいろ交渉しているうちに、日本人のために米軍が釜山まで帰還列車を出すことになったんです。そのうちに、全羅北道も順番が来て、長い貨物列車の貨車に日本人を乗せて、釜山まで送ることになったんです。そしたら、いつの間にか風評が飛んで、「天城さん夫婦は帰還列車に乗らないで、アメリカ軍の飛行機で帰るんだよ」と言われたんです。とんでもない噂が飛んだ、と思いましたね。それで、仕舞には米軍が「釜山までジープで送る」と言ってくれたんですが、僕は「みんなと一緒に帰る」と断って、長い貨物列車に乗って釜山まで帰って来たんです。そこからは、船に乗って博多に来たんですが……。

伊藤 その船は、どこの船ですか。

天城 日本の船です。

伊藤 それは、いつ頃ですか。

天城 二十年の十二月ですね。

伊藤 寒い頃ですね。

天城 寒い寒い。それで博多に来たら、「朝鮮から脱出して来た警察官の一行の乗った船が、一隻行方不明になった」と言うんです。先に着いていた連中の一部が残って探していたんですが、どうしても分からない。朝鮮の漁船で「ウタセ」と言っていました、荒い波を乗り

切れる船を雇ってはいっても、暴風雨に遭って行方不明になってしまった。二十人ぐらい乗っていたんですかね。僕も、しばらく博多に滞在して探したんですが、どうしても分かりませんでした。

帰って来るときには持ち物の制限があつて、荷物はリュックサックに背負えるだけで、お金も制限があるんです。それを米軍がチェックするんですが、土地などの財産は置いてこざるを得ないので、みんな隠せる物は隠して持って来るんです。しかし、見つかつて取り上げられるんですよ。それを庇ったり、逃がしたりね。

その荷物については、また非常に妙なこともあったけれども、さっきのケイ大尉が、「一定のところに残しておけば、あとで送ってやるよ」と言っただけです。それで、みんなにそう伝えて、大事な物を残して倉庫に入れたんですが、それが最後まで来ないんですよ。僕らは若くて、大した物は持っていないので、何も気にしなかったんですが、他の人はいろんな物を入れていたんでしょうね。それで、「あれは天城さんたちが嘘を言ったから、出しちゃったんだ」と。そういうことを言われたんです。

これは、あとの話ですが、そのケイ大尉が極東軍事裁判の、日本人のC級戦犯かB級戦犯の弁護人になって、日本に来たんです。それで、彼にその話をしたら、「あれは、本当に申し訳なかった。保管していたら、朝鮮人に襲撃されて、取られてしまったんだ」と。幾つか残った物もあったけれども、大部分は盗られてしまったということでした。

その後、ケイさんは東京にいて、軍事裁判の弁護人をやっていました。彼は非常に面白い人で、ユダヤ人なんです。本当は「ケイスキ」という名前で、あとを切って「ケイ」と言っていました。非常に独特な人間で、私は彼とずっと手紙のやり取りをしていて、アメリカ

に行ったときには、彼のワシントンの家に行ったこともあるんです。彼は、以前はサウスキャロライナにいたんですが、公民権運動に参加していたものだから、白人の評判が良くないんです。それで、サウスキャロライナで弁護士の仕事ができなくなつて、ワシントンに来て、別の仕事をしていました。ある意味では、そういうマイノリティーの弁護をやっていたので、東京の軍事法廷でも、日本人の弁護のために一所懸命やつてくれたんですね。

その後、彼は「イスラエルとパレスチナとの紛争に関する、国連関係の仕事をやりたい」と盛んに言っておりましたが、それはできなかったようです。しかし、アメリカの平和部隊——ピースコーの現地のディレクターをやつて、インドとかネパールに行っていました。最後はワシントンに戻つて、また弁護士をやっていたのかな。ここ二年ぐらい手紙が来ないんですね。僕と同じぐらいの歳ですから、亡くなつたんじゃないかなと思つているんですが……。

というようなことで、朝鮮時代は、最初は電力行政、軍隊、そして最後は終戦のどさくさに巻き込まれましたね。

伊藤 警務課長というのは、警察の服を着るんですか。

天城 警視ですからね。

伊藤 警察の格好をするわけですね。

天城 ええ。伊藤さんという先輩から、「お前は警察に行け」と言われて、警視に命じられたでしょう。警視は制服を着なければならぬので、初めて制服を逃えて着たんですが、肩章をどうやって付けるのか、分からないんですよ。

伊藤 軍隊とは違うんですか。

天城 付けたら、「それは逆さまだよ」なんて言われてね。そのぐら

い、何にも分からなかったですよ。でも、ちゃんと警視の制服を着て刀も下げて……。

小池 サーベルですか。

天城 サーベルです。日本刀を持っていました。警察に行つてからは、馬に乗ることが多いでしょう。軍隊のときに、乗馬を覚えておいて良かったですね。

「教育」を志す——文部省調査局「囑託」

伊藤 それで、日本に帰つて来たときに、拓務省はありましたか。

天城 もう大東亜省ですから、ありません。それで、私には訳がよく分からなかったんですが、「内外地行政一元化」という制度が始まっていました。私も警察にいた以上は、たくさんの方の帰国した警察官の再就職のことを考えなければ、と思つたんです。私の上司の警務部長は郷里に帰つてしまつて、何もそのあとの世話をしない。それで、朝鮮総督府の東京事務所が内幸町にあったんですが、「誰かここに来て、手伝え」という話が来たので、「私は東京にいますよ」と。そして、朝鮮から帰つて来た部下の警察官の再就職先を、あちこちと交渉したんです。みんな、それぞれ「郷里に帰つて、警察官になりたい」と言うので、地元警察にお願いして、それを内務省にも話して、そういう道ができるようにしたんです。

伊藤 そのときは、まだ役人ですよ。

天城 そうですよ。まだ身分は続いていたんですね。

伊藤 それは、内務省の役人になるんですか。

天城 それは、よく分らないです。朝鮮総督府だったかも知れませんが。官制上は、まだ総督府があつたのかも知れませんが、どっちだったのかは分かりません。

伊藤 月給は、もらっていたんですよね。

天城 さあ、よく覚えていません。

伊藤 どうやって暮らしていたんでしょう（笑）。

天城 裸で帰って来たんだからね。

伊藤 住むところから、そもそも問題じゃないですか。

天城 いや、家は東京にあつたんです。それに、家内が偶然な縁で、GHQで働くことになったのです。それで、総督府の東京事務所で残務整理をやっていたんです。実は、その頃、「厚生省に行け」と言われたんですが、それは断ってしまつたんです。

伊藤 厚生省は嫌だということですか。

天城 いや、そういうのではなくて。僕は「教育の仕事をしたい」と思ったのです。また、大転換するわけですよ。

伊藤 それは、どういう心境の変化なんですか。今までのお話からは、つながるものはないですよ。

天城 私は、朝鮮の最後の様子を見て、思ったんです。朝鮮総督府は、あんなふう崩れちゃうし、朝鮮軍は逃げてしまふし、日本人は全部バラバラで、砂みたいなのですよ。少なくとも朝鮮にいた日本人といふのは、後ろ楯というか、日本という国の力で生活し、仕事をしてきたものだから、それが崩れたら、もう砂みたいなので、全然駄目なんです。それで、これから日本を再建するには、結局、一人一人がしっかりすることしかないじゃないか、と思った。非常に素朴な考

えですし、飛躍があるんですが、教育から始めなければ駄目なんじゃないか、と思ったんです。だけど、僕は教育というのは何も分からないから、残務整理をやりながら、昔の恩師で一高の生徒主事をしていた佐藤得二先生に相談したんです。「何も分からないから、大学の教育学部に入つて、勉強し直したい」と言つたんです。そしたら、その先生が「教育学をやつて、教育が分かるか」と。

佐藤先生は非常に面白いというか、偉い先生だから、そう言われてしまうと……。とにかく、「僕は教育の仕事をした」と言いましたら、「教師になれ」と言うんですね。「教師をやらなきゃ、教育は分からない」と言われる。「何の資格もないんですが」と言いました。すると、「一高の生徒主事になれ」と。天野貞祐先生が校長でしたから、「天野先生のところに行つて、相談しろ」と言うんです。教頭が日高第四郎先生で、この方は後に文部次官になりましたが、その天野先生と日高先生のところに行つて相談しましたら、天野先生は「大変いい考えです」と言うんです。「だけど、生徒主事制度というのはいろいろ問題があつて、今は、やめようと思つていゝんです」と。「せっかくだけど、今後は一高には、その制度はないから」と、大変気持ちよく断わられたんです。それで、佐藤先生に報告したら、「そうか、天野さんがそういうふう言うならしょうがない。でも、生徒主事は、まだやっているところがたくさんあるから、しばらく待つていゝ」と。それで、しばらくしたら、大阪高校の生徒主事の話が来たんですが、僕は朝鮮から帰つて来たばかりだし、東京に、ささやかながら住むところもある。それに、実は母と姉妹が、まだ朝鮮の新義州に残っていたんですよ。

伊藤 本当に、北の外れですね。

天城 母たちは、藤原ていさんの『流れる星は生きている』（中公文庫）という、あのルートをずっと歩いて帰って来たんです。それは、一年後の話ですが……。とにかく、まだみんな帰って来ないし、「ちよっと大阪には行かれませんか」と、お断わりしました。

そしたら、佐藤さんからまた連絡があつて、「国民精神文化研究所が改められて、国立教育研究所になる」と。佐藤先生は一高の生徒主事をしていて、文部省の督学官から社会教育局長になった方なんです。研究所の前の所長がパージか何かで辞めてしまったあと、臨時代理をやっていた。「いま改組している最中だから、あそこで勉強したらいいじゃないか」と言うんです。「あそこは大体、教育学者ばかりいるから駄目なんだ。社会科学をやっている連中も必要なんだから、あそこに行つて、やれ」と。「勉強をさせてくれるところがあれば、とにかくどこでも行きます」と。それで、「行けるんだ」と思つて待つていたら、佐藤さんから連絡があつて、「あそこはやめろ、俺も所長代理を辞めたよ」って（笑）。あつさりしているんだ。「城戸幡（きどばん、城戸幡太郎）に譲つたから、あとはもう城戸幡のいいようにやるんだよ」と。もう、しょうがないんだな。

それで、「国研」に行くという話も駄目になつて、教師になるのも駄目……。だけど、どこかで勉強しなきゃいけないと思つていたんです。それから、またややこしい話があるんですが、文部省に昔から調査局というのがあつて、ここは非常にいい調査をしていたんですね。そこには資料がたくさんあるし、「そこがいいよ」という話が、別のところからあつたんです。それで、僕は役人になるつもりはなかったんですが、教育の勉強をさせてもらえればいい、と思つて調査部に入つた。本当に昔の資料で、いいものがたくさんあるんですよ。こっちは何を

していいかわからないけれども、勉強だと思つて、その中から資料を引っ張り出して、独りで勉強しました。

そしたら、米国の教育使節団が日本に来て、ミッション・レポートを出した。日本も教育改革をやらなければいけない、と。そこで、日本側の体制を整えるということで、総理の直轄下に教育刷新委員会というのを設ける、と。そして、その事務局を担当するために、文部省の官房に審議室をつくつたんです。それで、あるとき、当時の官房文書課長に呼び出されて、「こういうわけで、審議室をつくる。省内の若手の連中の履歴書を調べていたら、君は本来、行政官ではないか。調査部で、調査なんかするのはもったいないから、出て来て、やれ」と。それで、引っ張り出されて審議室に勤務して、教育刷新委員会の事務局に入つたんです。

伊藤 調査局に入られた段階で、文部省の役人になつたわけですか。

天城 それが、「厚生省に行け」と言われたときに、「僕は役人をやるつもりはありません。実は、今、こういう考え方で、何か教育の勉強をしようと思つています。別に、厚生省が不満というわけではありませんが、お断わりします。ついては、辞表を出します」と言つて、辞表を出してしまつたんです。

伊藤 朝鮮総督府に……。

天城 はい。

伊藤 そこで、役人の経歴がいったん切れるんですね。

天城 ええ。それで文部省の調査部に入れたのは、「嘱託なら、いつでも入れるよ」と言うので、入つたんです。そしたら、文書課長が履歴書を調べて、僕が適しているから、と。それで、審議室に移つたんです。

村上 教育刷新委員会の議事録に先生の名前が出ていて、肩書が嘱託となっているんです。「教刷委」が始まったのは、昭和二十一年の九月ですよ。それで、いま事務官になったというお話なんです、その事務官になるまでに、期間があったということですか。

天城 そうですね。嘱託のまま、新しくできた審議室で仕事をしていたんですが、途中から官制の変更が何かで……。

村上 それは、しばらくあとということですか。

天城 ちょっと、あとですね。

伊藤 その辺は、全く履歴書では不明のところですからね（笑）。

天城 文部省の調査局というのは、嘱託職員が多かったです。文部省は元来、嘱託が多かったんですよ。というのは、専門学校の教官の身分で仕事をしている人が、ずいぶんいたんです。例えば、一橋商大の専門部の教授だけれども、文部省の仕事をしているとか。外語大の身分だけれども、文部省で仕事をしているとか。体育専門学校だけれども、とか。要するに、「高文」を通っていないと、高等官の待遇にできないから、専門学校の教官の資格で身分を整えて、そしてこっちは嘱託でやっているというわけです。

伊藤 これは俗な話ですが、そこで辞表を出されて、官僚としての履歴がいったん切れるわけですね。そのときに、退職金をもらうわけですか。

天城 また、そこがね（笑）。僕は、そんなことを知らずに、二月の末頃、辞表を出したあと、文部省の調査局で仕事をしていたんです。そして、三月三十一日付かな、総督府から帰って来た連中は自動的に、みなそれぞれの役所に移して、身分をつなげるという特別な措置が出たんです。それで、恩給もつながることになったんです、僕は一

週間か二週間切れていたんですが、文部省の人事課が、「あなたは、こんなことをしなくて良かったんですよ。当然つながっているんだから、嘱託の辞令が出ていたけれども、恩給はつながったことに直しておきますからね」って……。

伊藤 それは、ラッキーでしたね（笑）。その代わり退職金は、もちろんもらっていないわけですね。

天城 もらっていないです。「退職金を上げる」と言われたけれど、「退職金はいらないから、身分をつなげておいてください」って。そんな訳の分からんことがありましてね（笑）。

伊藤 混乱期ですね。

天城 混乱期ですよ。だから、僕も何だか分からないけれども、三十までは、本当に這い廻っていたようなものですね。

伊藤 文部省の調査局というのは、どこにあったんですか。今の虎ノ門の建物ですか。

天城 あの中に、ありました。それで、いい資料がずいぶんありましたね。

伊藤 その資料というのは、どういった類のものですか。

天城 たくさんあったので、全部は覚えていませんが、僕が非常に関心を持ったのは、外国に関する調査をいろいろやっていたんです。例えば、「ヨーロッパ統一学校運動」というのが、第一次大戦後に起きるんですね。ヨーロッパは階級社会ですから、小学校から別の制度でした。その代表的な国が、イギリスです。それを何とか小学校だけではなく学校制度にしようというのが、統一学校運動です。日本は、もう明治の初めから、小学校は全部一本でしょう。戦後になって、中等教育の統一運動になったんですね。昔の中学校や女学校とか実業学校と

かを、府制の中高に直す。日本は、非常に進んでいるんです。ヨーロッパは、第一次大戦後でも、ずっと小学校統一なんです。第二次大戦が終わっても、まだ中等教育の統一ができていませんでしたからね。そういうことが大変面白くて、調べていたんです。

それから、フランス革命後に、フランスが国民教育権という考え方を確立するんです。それまで、教育の権限というのはカトリックが握っていたんですが、それをライシズム——「俗権力が握る」と言って、政府が握っちゃったんです。それで、フランスは非常に中央集権的な教育制度になった。そんなことを、みんな調べたんですよ。そういう貴重な資料がありました。佐藤先生は、「教育学をやったって駄目だよ」と言うんだけれども、佐藤先生は元来、哲学出身です。私が興味を持ったのは、教育制度でした（笑）。

伊藤 その期間というのは、そんなに長くはないんですか。

天城 二、三カ月じゃないですかね。

伊藤 そのうちに、教育刷新委員会のほうに行ってしまうんですね。

天城 ええ。すぐできましたから、そっちに引っ張り込まれちゃったんです。

「三十而立」の文部事務官

伊藤 その話は次回にお聞きするということで、「三十にして立つ」というのは、そこからですか。

天城 そうですね。ただ、僕はそのときから文部省に入っただけでも、

まだ文部省の役人になると決めていたわけではないんです。

伊藤 だから、当初は囑託なわけですね。

天城 いや、事務官になってからも、ですよ。その刷新委員会の仕事、教育改革の仕事をやっていても、ね。これは、また余談ですが、その頃から、あちこちの大学に教育学部ができたんです。教育行政という新しい科目ができたんですが、従来の教育学部の連中には、やる人がいないんですよ。それで、新しい教育制度が始まって、僕もあちこちで講演を頼まれて、やっていたものですから、「大学に來い」と言うんですよ。

伊藤 先生が講演をしていたんですか。

天城 文部省として、新しい教育についての、説明と普及のための講演をしなきゃいけないでしょう。各地方に行って、新教育制度の話をしていたんです。そうしているうちに、東大の教育学部の連中とずいぶん親しくなって、その中には宗像誠也さんもいましたね。東大の教育学部は、あのとき、大変に氣勢が上がっていました。宗像誠也氏を中心に、みんな大体、左翼系統なんですよ。

所澤 勝田守一ですか。

天城 勝田氏は、教育内容が専門だった。勝田守一氏は、文部省で調査官をしていたんです。あと、宮原誠一氏とかがいたでしょう。教育行政が宗像誠也氏ですね。

それで、宗像誠也さんは僕の小学校の先輩で、本当に偶然なんだけれども、前から知っていたんです。宗像誠也は城戸幡（きどまん）なんかと同じで、教育科学運動というのをやっていたんです。彼が教育行政の主任教授になっていて、僕に「東大に来て講義しないか」と言うんです。実は、そのときに一番熱心に勧誘されたのが九大と東北大

なんです。九大は平塚益徳さんという方でした。それで、宗像さんに、こういう話があると言ったら、「君は大学に行くな。文部省にいてくれ」と言うんです（笑）。彼は、反文部省なんですからね。しかし、コミュニストじゃないんですよ。彼は、文学青年みたいなところがあって、要するに反権力なんです。『君は文部省にいてくれ』と、盛んに言うんですよ。それで、「東大に講義に来い」と言うんですから、面白いですね（笑）。

彼は、その後、「こんな時代、下手な学問をしているよりも、運動が大事だ」と言い出したんです。それで、日教組と一緒に教育改革運動に行っちゃったんですね。だから、確な研究成果がない。そんなことがあって、僕もどうしたらいいかな、と思ってる。大学に行ったほうがいいのか、文部省で役人になったほうがいいのか、その当時はまだ迷っていたんです。

伊藤 まだ、「立つ」ところまで行っていないんですね（笑）。

天城 東大で、僕は非常勤講師を十年やっていましたからね。

伊藤 それは、文部省が認めていたわけですね。

天城 もちろん、正式に。それから、東北大学も六、七年やりましたかね。

伊藤 これは集中講義ですか。

天城 ええ。履歴書を見ると、役人ばかりやっているように思うかも知れないけれども、そうじゃないんですよ。いろんなことが間にありましてね。だから、最初の出だしがそんな形で、まだ自分で役人になるという気持ちはなくて……。

伊藤 最終的に役人になろうと思われたのは、いつ頃になるんですか。
天城 役人になるというか、それはまたあとで、少しお話ししなければ

はいけれども、教育委員会法ができて、実施されて、そして一九五〇年でしたかね。

伊藤 また、ずいぶん時間がありますね。

天城 ええ。五〇年でしょう、だから、五年近く経っていますね。そのときに、これもちよつと不思議なんです、が、「アメリカに視察に行かないか」と言われたんです。

伊藤 文部省からですか。

天城 そう。そのときに人事課長が、「実は、お前を課長に、という話があるんだけど、課長になるか、それともアメリカに行くほうがいいか」と言うから……。

伊藤 難しい選択ですね（笑）。

天城 いやあ、難しくないですよ。それは、もちろんアメリカです。これだけ占領下で苛められたんだから、アメリカの実態を学んで来なきゃならない、と。それで、アメリカに行っただけです。それもね、留学じゃないんですよ。視察なんです。三カ月でした。ところが、僕は向こうで病気になるまして、五カ月に延びてしまった。それで、帰って来たときに、「行政官で行こう」と思っただけです。

伊藤 文部省に入って、ちゃんとやろう、と。それが大体、三十歳ぐらいのときですか。

天城 いやいや、終戦のときが三十ですから、三十五ぐらいですね。

伊藤 ずいぶん、回り道がいったわけですね。

天城 そうなんです。だから、履歴書はブランクが多いって言われるけれども、書き様がないんです。僕は、いつも面倒臭いから何も書かないの……。

伊藤 それで、教育刷新委員会のために文部事務官になるわけですね。

天城 途中でね。

伊藤 委員会は、最初から最後まで、ずっと付き合われるわけですか。
天城 いえ。その話は、また刷新委員会の話が出たときにしなければいけません。委員会は幾つかの部会に分かれていまして、問題ごとに、局のあるところは局がアテンドしてサポートしていったんです。大学なら大学局とか、社会教育なら社会教育局の連中がやっていたんです。刷新委員会の会議の運営全体と、それから特にアテンドする局がはつきりしていない問題、例えば教育基本法とか教育委員会法とか、そういう問題は審議室でやっていたんです。

僕は、教育委員会法に終始したんです。とにかく、教育委員会制度というのは全く下敷きがないですから、更地にやったわけですね。特例法というのは人事ですから、国家公務員法があつて、その特例ですから、人事課が引き受けてやったわけです。教育基本法も、どこの課が所管するということがないものですからね。あれは、一種の「アンブレラ法」ですからね。あとは、それぞれの局が問題ごとに担当してやっただけです。

伊藤 その刷新委員会のことは、また次回にまとめて伺いますが、今日のところで、何かほかに質問はございますか。

村上 先生は、文部省の調査局にお入りになったのが二十一年の五月ということでしたが、教育使節団を迎え入れるときの話とか、日本側教育者の委員会とかにも、かなり関与なさったんですか。

天城 それは、関与していません。使節団の報告は五月でしょう。

村上 三月の末に出されて、国内に公表されたのが四月ですね。

天城 僕は、それには関係していません。あれが出されたあとですか。それまで、どこが対応していたのかよく分かりませんが、官房

でしょうね。

村上 山崎匡輔氏が中心になっていた、というようなことを聞いたんですが……。

天城 あの時分の記録を見ても、局の名前や課の名前は時々出て来るけれども、ほとんどみんな次官ですね(笑)。当時の次官は山崎匡輔さんです(昭和二十一年一月〜二十二年二月)。刷新委員会の記録では、関口隆克さんの名前がよく出て来ますね。日本側教育者の委員会は、誰がどうやって組織したのか、私は知りません。アメリカが日本人を集めて、直接つくったものも、確かにあるんです。私学法を作るときなんかも、誰が作ったのか分からない。私学の人たちが、グループをつくったとかね。

村上 例の審議室ができますのが、確か八月と聞いておりますが、その八月の段階でも、最初から先生は審議室のほうに行かれたんですね。
天城 そうです。「審議室をつくるから来い」と言われて、官房の文書課に行ってみたら誰もいなくて、隅の方に机が一つあっただけですね。
村上 とすると、ほぼ先生が一人で……。

天城 寄せ集めでつくったんです。結局、三人なんです、あとの二人は兼務で、専任は最初は私一人です。

伊藤 あとで大きくなるわけですか。

天城 専任の室長も、あとで決まりました。そして、審議室のときには、あと三人いたんだけど、三人とも他の局の人で、一人は内藤馨三郎さんで、後に次官になったでしょう。彼が、学校教育局の庶務課長と兼務でした。それからもう一人、久保田藤麿さんがいたんです。この人も、どこかの課長だったんだけど、専任になったんです。だけど、彼は来ないんです。彼は、あとで代議士になったんですね。

久保田さんは審議室の勤務だったんですが、彼は一遍も来ない。内藤
譽三郎も、ほとんど来ない。その後、審議室がだんだん整ってきて、
宮地茂さんとか、安達健二さんとか、専任が来たんです。

伊藤 役所というのは普通、一緒に入った人たちを「同期」とか言う
でしょう。先生の場合は、どういうふうな感じですか。

天城 僕は、途中、飛び乗り乗車みたいなもので、同期なんて分から
ないんです。あの時分は混乱期で、戦時中から終戦にかけては、大学
の卒業もばらばらだしね。学徒出陣して、帰って来て、しばらく田舎
で晴耕雨読をやっていたけれども、「学生の身分は、まだあるよ」と言
われて、また大学に戻ったとか。何年卒業なんて関係ない者が、あの
時分、たくさんいるんです。そういう時代が若干続いていますから、
僕みたいな者は、誰が同期だか分かりませんね。ただ、役所という
のは「年次」を言いますね。僕の前後には、そういう人が五、六人い
ましたね。

伊藤 十七年組ということですか。

天城 ええ。十七年とか十六年とか十五年とか……。

伊藤 やはり、卒業の年次で、大体、人を見ていくという方式なん
ですかね。

天城 ポストと年次の関係ですか。確か、人数があまりでこぼこにな
らないように、内閣で、ある程度調整するのかな。給与などの関係が
あるからじゃないですかね。一種の慣行だと思いますよ。

伊藤 十七年組と言われても、特にその仲間がいるわけではないん
ですね。

天城 そうなのは、ないですね。僕は「拾いっ子」だか「もらいっ
子」だか分からない（笑）。最初から、妙な入り方しましたからね。

伊藤 それでは、次回は刷新委員会の話を詳しく伺いたいと思います。
本日は、どうもありがとうございました。

〈以上〉

天 城 勲
オーラルヒストリー
第3回

[2000年10月17日 13:55～17:00]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

小池聖一(広島大学助教授)

所澤 潤(群馬大学助教授)

村上浩昭(政策研究大学院大学リサーチ・アシスタント)

(於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター)

朝鮮時代の思い出

伊藤 本日は最初に、前回の補足として、幹部候補生の問題についてお話しただけではないでしょうか。

天城 私は予備役からの召集ですから、まず二等兵になるわけですが、入ると、「幹部候補生の資格のある連中は、受けろ」と盛んに言われるんです。しかし、戦争がいつ終わるのか、その辺のところがよく分からなかったし、この時分に幹部候補生になって、将校になってしまうと、大体、永久服務になるんです。そんな意思は全くありませんでしたからね。それから、基本的には軍隊が好きではなかったということでしょうね(笑)。私は、みんな上手く外れてしまったので、戦争の第一線には行っていませんが、とにかく軍隊の生活は性に合わないし、気に食わないんです。これは軍隊だからしょうがないんでしょうが、何事も理屈なしでやるものですからね。これは、全体にそういう傾向があったと思いますが、普通に話せばいいのに、すぐぶん殴るとか、そういうことばかりでしょう。特に兵隊だったから、余計にそういう経験をしたりしましたね。

伊藤 試験を受けないことで、特に何か言われるようなことはありませんでしたか。

天城 ないですね。

伊藤 「どうして、お前は希望しないんだ?」とか、そういうことは言われませんでしたか。

天城 それは訊かれましたが、そのときに何と答えたかは覚えていません。とにかく、「やらない」と。私のいた部隊には、大学出の召集兵が私のほかに、あと三人いたんです。もっと、いたかな……。二人は受けなくて、もう一人は受けて、幹部候補生になったんです。

伊藤 分かりました。それから、この間のお話に関して、先生のほうから何か補足されることはございますか。

天城 終戦になってからの朝鮮のことで、二つのことを申し上げたい。一つは、終戦の放送があった翌日、全州の刑務所が破獄されたんですよ。囚人が獄を破って、脱獄しようとしたのを看守が取り押さえて、刑務所の中で対峙したんですね。私は警察にいたものですから、刑務所が破獄されたというのを、その翌日の夜に連絡を受けて知ったんです。

伊藤 破獄されてしまったんですか。

天城 獄舎から出て来たんですが、まだ囲いがありますから、中で対峙していたわけです。それで、そんなところで撃ち合いを始めては大変だし、と言って押さえることもできない。とにかく、警察に「出動してくれ」と言われたんです。正直なところ、出動すると言っても、どうしていいか分からなかった。そのとき、刑務所が破獄されたときに、どのように対応したかという、前例があったことをフツと思いい出してね。武器は、照明と水なんです。それで、消防車を動員して刑務所に駆け付けて、投光機をバツと当てて、放水で封じ込める態勢を取ったわけです。

それから、警察にも機関銃があったんです。いざという場合に、用意してあったのですね。その機関銃を前に置いて、光をバツと当てて、放水する準備をして対峙しました。そしたら、機関銃を持っていた巡

査が、「この機関銃は撃てません」と言うんですよ（笑）。使っていないから錆び付いていて、撃てないんです。「構わないから、格好だけでもやっていろ」と指示したんですけどね。それで一晚、対峙したんです。

そのときは、朝鮮総督府がまだ機能していたんでしょうか、連絡しましたら、「政治犯を釈放することになった」と言うんです。ところが、誰が政治犯で、誰が刑事犯かなんて、ゴチャゴチャになってしまっていて分からないんですよ。「とにかく、政治犯は釈放すると決めたんだから、釈放しろ」と言われて、結局、矛を納めて全員釈放しちゃったんです。一々点検できませんからね。それで驚いたのは、そうなったときに、もう外に出迎いの者が来ているんですよ。その連中は出て行って、こっちもしようがないから引き揚げたんですが、そういう一幕もありました。

そのとき思っただんですが、官側にいますと、何とかやっているつもりなんだけれども、やっぱり裏では、いろんな情報が流れているんですね。それと、これはちよつと、あとの話も加わるんですが、私たちは金日成の名前を聞いていたんです。金日成は満洲の南部にいて、パルチザンだとか匪賊だとか、いろんな言葉で言われていましたが、金日成と朝鮮人グループがいたのです。金日成は一つの亡命政権で、ソ連の庇護の下に満洲にいたんですが、あと二つ亡命政権があったんです。一つが李承晩ですね。

伊藤 上海ですね。

天城 上海じゃないですよ。李承晩は、アメリカにいたんです。上海にいたのは金九と言うんです。その三つの亡命政権があったんです。それで日本の敗戦が決まって、それぞれが帰って来たんです。李承晩

はアメリカから、金九は上海から帰って来た。それで、陣取り合戦をやったんです。これは、私もあとで聞いたので、時期もはっきり分かりませんし、誰にやられたかも分からないんですが、金九が暗殺されたんです。それで南は李承晩、北は金日成になったんですね。

とにかく、李承晩が亡命していたアメリカから帰って来たんですが、南鮮のほうも、いろんな勢力が揉め合っていましたから、それをまとめるために、彼は「対日報復」を唯一のスローガンにしました。政治的には、「ジンゴイズム」を徹底的にやったんです。それで、国民の目を日本に向けて、統一していったわけです。だから、李承晩政権下では対日強硬路線でいたんですね。これらは、直接、私が関係したことはありませんが、破獄にしても、裏で情報が伝わっていたり、金日成の話も前から耳に入っていたり、どちらも情報の早さや力といったものを感じましたね。

伊藤 李承晩が戻って来たとか、そういう情報は、その時点であるわけですか。

天城 李承晩が来るという話は聞いたんですが、いつ、どうやって来たのかは知りません。私は京城ではなくて、全羅北道にいたものからです。

伊藤 全羅北道辺りでも、そういう動きがいろいろあったわけですか。

天城 全羅北道では、直接には分からなかったですね。

伊藤 お帰りになるまでは、お分かりにならなかった、と。

天城 詳しいことは分かりませんでした。金九が暗殺されたことも、帰ってから、京城から帰って来た人に聞いたんです。その人はあとで、「金九が殺されなければ、少なくとも南鮮の事情は違ったものになっていただろう」と言っていました。その方は朝鮮生まれで、京城帝大

で朝鮮史を専攻され、もちろん朝鮮語は上手で、貴重な人材でした。ただ、「全北」にいらしても、初めの頃は京城から警察の情報が断片的で、不確実なものでしたが、入っていましたから、それぞれの亡命政権が帰って来るとか、李承晩が来ることは聞いていました。そういう裏の動きというのは、大変だったと思いますよ。それが、二つ目のことです。

CIEと教育刷新委員会

伊藤 さて、今日は村上君のほうから、教育刷新委員会を中心にお伺いしますので、よろしくお願いします。

天城 刷新委員会の話は何回ぐらいやるつもりですか。一回ですか。

伊藤 いやいや、そんなことはありません。話の成り行き次第です。

天城 これは、話したら切りがないですよ。

村上 まず、教育刷新委員会自体が（存続期間が）非常に長くて、その後、教育刷新審議会になります。先生は、どの程度の期間、関与なさったのでしょうか。それから、審議室でのお仕事は、どのようなものであったのかということについて、お伺いしたいと思います。

天城 刷新委員会というのは、途中で刷新審議会に変わりましたが、あれは確か昭和二十二年からですね。

村上 設置は二十一年ですね。

天城 刷新審議会になってから、二十七年まで続いたんですね。

伊藤 最後のところまで、いらっしゃったんですか。

天城 最後まででは、いません。というのは、最後までいたかないかというよりも、審議室がその後、審議課に変わり、地方連絡課というふうに、だんだん文部省側の組織も変わっていった、私はそれにつれて移っていったものですからね。

それから、刷新委員会と刷新審議会とを通じて、二十七年まで——岩波書店から出た膨大な速記録を見ても分かるように——とにかく存続するんですよ。それで、岩波版のお仕舞の項を見ると分かりますが、教育改革というか、占領政策というか、何か文部省がいろんなことを考える度に、それを報告して、そちら（CIE＝民間情報教育局）から意見をもらう。また、刷新審議会のほうからも、いろんなことについて言ってくる。例えば、大学が新しく何校できたとか、そんな報告をしたりね。ですから、いわゆる占領政策としての、戦後の教育改革の部分というのは、その冊子では何冊ぐらいまでなのかな……。例えば、テーマごとに、特別委員会ができるんですね。

伊藤 著作権課長になるまでは、一応、おやりになったわけですか。

天城 いやいや、その前に、私は調査局の地方連絡課というのができて、そっちに行って……。

伊藤 それでは、地方連絡課の課長補佐のときは？

天城 僕は、アメリカに行ったのです。

伊藤 履歴書には、出張のことが書いてありませんからね。

天城 これは変ですね。履歴書に載っていないなんて、僕が勝手に行ったんじゃないんだから（笑）。

岩波版をご覧になって分かりますように、戦後改革で主なものと言うのは第一、第二、第三、それから第四の私学と、それから第六の身分関係で特例法に關係するものと、第八の教員養成で、こういうところ

るまでですね。それで、お仕舞のほうは直接占領政策とは関係なく、文部省と審議会が、いろいろ考へては意見を述べています。特別委員会は二十一設けられましたね。

伊藤 でも内実は、こういうことを審議してもらいたいということもあるわけですね。

天城 それは、第二回か第三回の総会で、田中耕太郎さんが、「今後の教育改革では、こういうことを考えています」と、ご自分で正式に話しているんです。例えば、教育基本法の問題については、これは教育勅語の関係があるんですが、「私は法律を作ろうと思っています」と言っている。「ご審議いただきます」と話しているんです。だから、正式に諮問ということはなかったかも知れませんが……。それから、ステアリング・コミッティーというのがあって、そこでCIE、審議会、文部省の三者の間で、何を議論しようかと話し合っていたわけです。これは私たちではなくて、トップでやっていたんですが、それをまた日本側の委員が審議会の総会で、「ステアリング・コミッティーで、こういう話をしました」と報告をしているんです。そこで、アメリカ側の意向も出ているんです。

伊藤 その三者で協議するときに、文部省というのは誰なんですか。

天城 建前は文部省の大臣、次官なんです。実際には、担当者が行っていましたね。

伊藤 その担当者という場合、先生は入らないんですか。

天城 いやいや、入らないですよ。みんな、大体、トップですから。刷新委員会のほうから、「誰にするかということ、ちゃんと会議で決めてください」とか、「誰さんに、なってもらってください」と。それから、アメリカのほうからは、オアとかニューゼントとかが、テーマ

によって出て来るんです。文部省は一応、次官が責任者ですが、問題によっては関係の局長が出て行くし、課長も付いて行ったようですよ。でも、建前はトップの三人が会うということですね。

それから、あの時分のアメリカ側のやっていることが、よく分らないんだけれども、刷新委員会と文部省とステアリング・コミッティーで、正式に三者協議をする。それで、「刷新委員会は自主性を保つ」と言って、文部省も特に諮問しないのですが、アメリカ側は必要に応じて、いろんな日本人を呼んでは意見を聞いているんです。それから、文部省自身が司令部と折衝しなければいけませんから、担当の課長はCIEの担当者と交渉しているんです。それから、CIE側は個々についていろいろ行動して、日本の学校を訪ねたりしていたんです。千葉県の学校に、CIEの誰が来たとかね。まあ、彼らも、自分で実証的に、具体的に調べたいという気持ちがあったんでしょう。そういうやり方をしていましたから、いかにもステアリング・コミッティーというのが、全てをやっているように見えるけれども、実際には、いろいろな面での折衝があったと思います。

岸本英夫さんという東大の宗教学の教授がしまして、岸本先生は司令部にとつては、宗教問題の最大のアドバイザーだったんじゃないでしょうか。日本の宗教をどうするか、という話ですね。神道指令とか、いろいろ出たでしょう。ああいう問題には、岸本先生が深く関わっていたようです。戦前の日本の学者は、ほとんどみんな欧州に留学していて、アメリカに留学した方は非常に少ないんですが、岸本さんは若くしてハーバードに留学した。それで、ハーバードではライシャワーに日本文化を講義したと言われる先生なんです。本職は宗教学です。その先生が、司令部から意見を聞かれていたようです。岸本先

生は英語も上手だったし、非常に立派な先生でしたよ。

ですから、私が審議室にいつまでいたか、何をしていたかというところで、今の話でも分かるように、お仕舞のほうは、もうそれぞれの局の問題で、文教施設なんて建物の問題でしょう。それから、文化問題とか宗教教育でしょう。職業教育をどうするかとか、短大を二年制にするか、三年制にするかとか……。これらは、それぞれの担当課がやっていたから、僕はほとんど知りません。最初の頃だけですよ。

この間も、ちょっと申し上げたと思いますが、教育基本法のようなものは、文部省に担当の局、課がないんです。それから、教育行政も、従来は内務行政の一つとしてやっていたからね。教職員の問題は、身分関係は人事課が当たったんですが、戦後は国家公務員法と地方公務員法が新たに作られることになって、審議室はその法律の教員への適用の特例を考えることを担当しました。基本法と教育行政と教育公務員の特例法を除くと、あとは、みんなそれぞれの課がやっていましたね。

伊藤 この履歴書を見ますと、「調査局勤務を命ず、準嘱託を解く」となっていますが、一体どこに属しておられたわけですか。

天城 それは、官房審議室ですよ。それが調査局というのができて、そこに地方連絡課というのができて、そこで……。

伊藤 調査局ですか。

天城 はい。そこに地方連絡課というのができて、そこで教育委員会制度の問題を担当したんです。

伊藤 この段階では、審議室ではないわけですね。

天城 はい。「岩波版議事録」をご覧になると分かりますが、いろん

な場面で、いろんな課題が出ています。あるときに、一つの課題だけ集中的に論議したわけではないんです。基本法なんかは、初めのほうだから、まとまった議論がされていますがね。

話は別ですが、この議事録を整理・刊行したのは、大変な仕事だったんです。よくやったと思いますよ。速記録なんか、分散していたんです。基礎資料が途中で欠けているとか、二つあったとか……。それで、国立教育研究所の佐藤秀夫さんが、本当によくやったんです。

伊藤 速記録は、印刷はされなかったんですか。

天城 いや、もちろん印刷されたでしょう。印刷って、どういう意味かな。

伊藤 活字で、ガリ版刷で……。

天城 ガリ版刷のものも、ずいぶんあるんですよ。それに、根拠がみんな書いてあります。これはガリ版刷があつて、先が分からなくなっちゃったとか。彼は、政治学者の佐藤誠三郎の兄さんですよ。よくやっただと思います。

村上 ……ということは、第一特別委員会、第三特別委員会、第六特別委員会に、先生が関与なさったということですね。今のお話では、教育基本法と教育行政と、それから教育公務員の特例法ということですから……。

天城 ……ということになっているんですが、もつと具体的に言いますと、私は第三の教育行政で、第一のほうは安達健二さんです。それから、教員の特例法のほうは、宮地茂さんです。

伊藤 そうすると、先生は大体、第三特別委員会が主だった、と。

天城 僕は、ほとんど第三ですね。でも、総会に出ると、第一委員会の報告があつたりして、そこでまた議論があつたりするものですから、

いろいろとお話を聞くこともありましたが、基本は第三でした。

村上 議事録を見ますと、先生が第三特別委員会に出席なさっているということは分かるんですが、総会のほうに出席されたり、あるいは他の特別委員会に参加なさることもあったんでしょうか。

天城 総会には、第三特別委員会の報告が出る時には出席していましたが。それから、第一のほうの報告も聞きました。とにかく、僕は下っ端ですから、別に責任のある発言をしているわけではないんです。話の流れを聞いていなければいけませんから、出ていましたけどね。

伊藤 そんなに、下っ端ですか。

天城 下っ端ですよ。だって、みんな課長がいるんだから。

教育行政システムを巡る「攻防」

伊藤 先生の「教育委員会法制定過程覚え書①〜⑨」（『ジュリスト』一九九一年二月一日号〜六月十五日号、九回連載）を読ませていただいていますと……。

天城 教育委員会法の話に入るんですか？

伊藤 教育委員会法の問題というよりも、田中文字部大臣がフランスの学区制を模範として、九ブロック制の構想を出された。そして、先生がその素案作りを命ぜられたということで、法案まではいかなかったけれども、要綱の段階までいったということが書いてあります。これは、何との関連で、こういうことをおやりになったわけですか。

天城 田中先生は、戦後の改革について、かなりご自分の意見を持つ

ていた方なんです。さつき申し上げたように、教育基本法は米軍の指令ではないんです。憲法改正の問題に関連して、国会での議論のときに、教育勅語の話が出ています。そのときから、田中さんの頭の中では基本法の構想があつたようです。それで、「省内で教育基本法を作ろう」と田中先生が言われて、文部省でみんなで議論をして案を作っていたんです。それが、刷新委員会で審議されたのです。

教育行政の問題は、ミッシン・レポートに、かなり具体的に出ています。田中さんも、基本的には賛成でした。しかし、先生の頭の中には、むしろフランスの学区制の方法を探ろう、と。それは、アメリカのミッシン・レポートのようなものではないのですが……。

伊藤 仕事としては、刷新委員会とは全く関係なしに、ですか。

天城 教育行政に関することは第三委員会の仕事だから、その一つの「田中案」として「学区庁案」を作ることになって、審議室が担当したんです。それで「学区庁案」を作ったわけですよ。

伊藤 これは、刷新委員会には全然関係なく……。

天城 出しましたよ。

伊藤 出したんですか。

天城 「こういう案です」と。

村上 第三特別委員会の中でも「田中構想」というのが出されて、そのときに、田中二郎さんが渡辺鉄蔵さんか誰かの質問に答える形で、構想を説明されていたと思うんです。田中二郎さんも、かなりそれについては関与なさっていたんでしょうか。

天城 大学の先生って面白いですね。田中耕太郎先生は、「私は私法専門で、行政法は分かりません。ここでやるのは行政法だから、公法の専門家の田中二郎君を手伝わせます」と。「手伝わせます」と言っ

も、どうしていいかわからない。あの時分、そんな制度があったかどうかは知りませんが、田中二郎先生は参与になっているんですよ。それで、あのときは、まだ助教教授かな、教授になっていたのかな……。始終、文部省に來られましたよ。我々の部屋に來られた。私たちは、田中二郎先生とずいぶんいろんな議論をしていたので、当時、「田中二郎先生の大学院のゼミだ」なんて言っていたんです。

田中耕太郎先生は、はつきりしているんだな。「私は私法専門で、公法のことはよく分かりませんから」って。それで、田中二郎先生が來られたんです。田中二郎先生には、非常にお世話になりました。

伊藤 そうすると、この「要綱」というのは、要するに第三特別委員会に出すための……。

天城 出すためのと言うよりも、教育行政に関することは第三委員会の仕事ですからね。

伊藤 だけど、教育刷新委員会は、文部省が原案を出すわけじゃないでしょう。

天城 全部がそういうのじゃないんだけど、その岩波版を見ると分かりますが、田中耕太郎先生が「自分はこうやります」と、刷新委員会で話しているんですよ。諮問事項なんて書いたものは何もないのに、どんどん、「こう思っています」と言っている……。

伊藤 「こう思っています」の、一つなんですか。

天城 「学区庁案」は、もつとまとめて作ったんですね。これを叩き台にしてもらったんです。

この「学区庁案」は教育委員会制度と似ているようで、実はかなり違うのです。田中先生はかねがね、教育行政権に、ある程度の独立性を与えようと思ったんです。ミッシヨン・レポートも、そのことを言

っているんです。その独立性を何で担保するか。田中先生は、大学の自治に基礎を置こうとしたんです。だから、「学区庁案」というのは、大学を中心にした教育行政システムなのです。これがフランス式なんです。フランスの学区というのは、大学が中心なんです。学区庁長官というのは、大学だけでなく、その地域の小中学校までの行政責任者なんです。

伊藤 あれはしかし、明治の初めに日本で「大中小学制」というのを作ったのは田中不二磨さんですか、それとよく似た感じだなと思ったんですが……。

天城 学区には、幾つかの種類があります。言葉では同じだけでも……。アメリカの教育委員会制度の基礎になっている学区は、ローカルの学区で、教育に関する公共団体が学区なんです。だから、明治の初めには、学区が置かれているんですが、アメリカの学区ではないんです。でも、「学区取締」という、ある点では今日の教育長みたいなものを置きまして、住民の意向を代表させている。それで、校長よりも偉い「学区取締」もいたのです。逆に大校長がいると、「学区取締」はあまり権力を振るえない。大校長の下には「大学区取締」はいないし、「大学区取締」がいると、大校長はいないという話も伝えられています。

それに対して、田中先生が言ったのは、フランスの district-academique なのです。大学が中心だから「学区」ですね。田中さんの考え方は、教育の中立性と独立性とを大学の自治として担保しようとした。それで、大学の学長にやらせようと考えた。

伊藤 九学区ですね。

天城 あれは、昔の七つの旧制帝大と、あと二つばかり広島とか金沢

に帝国大学を設置する。それで、東京ならば東大の総長を学区庁長官にしようという案でした。

伊藤 文部省は、どうなんですか。

天城 最初、司令部は文部省廃止、内務省廃止という前提だったようです。内務省は廃止しちゃったんですが、文部省を廃止しちゃうと、末端までの教育改革ができないんじゃないか、と。だから、間接行政でもって、文部省はしばらく生かそうということにしたんだ、と聞いていました。だけど、教育刷新委員会のほうでは、文部省の在り方についていろんな議論があり、例えば中央教育委員会にしようという案や、あるいは教育は分権にしちゃって、文部省は文化省にしようとか、いろんな案が出ています。中央集権を廃止することと、文部省の権限を少なくしようという考えはあったんです。それに伴い、学区庁のほうに権限を委譲しよう、と。

その問題が、あとの話と関連するのです。閣議で、国政の重要問題としての教育問題に関して、発言する責任者がいなくなるのではないかと、という議論があったんです。そのあとのことですが、天野貞祐先生が文部大臣のときに、池田勇人大蔵大臣が「学校給食の補助金は切る」と強く主張したんです。しかし、天野先生が、「みんな食うや食わずでも、同じものを一日一遍一緒に食べるという学校給食は、非常に大事なんだから」と頑張ったんですね。あれは、ドッジ・ラインとの関連があったんですが、そのとき、つくづく、「やっぱり閣議で、教育者や子供のことを代弁する人がいなかったら駄目です。大変なことになりますよ」と言っていたんです。

だから、文部省を廃止するという議論は、アメリカ側の意向には、そういうものがあつたにしても、それから刷新委員会でも、文部省の

権限を制限しようということですから、**「なくしてしまおう」という議論はなかったんです。それで、米軍も何かと言つては、文部省を使っている。非常にデリケートなことでした。**

教育の独立性とか中立性を、どこまで、どうやって保つかということと、内閣の一体性をどのように保つかということは、これは地方でも同じなんです。知事の総合性と、教育行政との関係をどうするかという問題です。警察も、同じような立場ですね。教育と警察というのは、両方とも戦後、合議制行政機関——公安委員会と教育委員会になったのです。政治、政党からの独立という狙いからです。

教育委員会は公選制でした。我々は、それは最初から駄目だと言ったんです。というのも、アメリカは、市町村という包括的な地方公共団体が形成される以前から、子供たちの教育をやらなければならなかったもので、教育公共団体とも言える学区をつくったんです。その管理機関が教育委員会です。日本では、全国的に市町村という地方公共団体が既にできているんだから、そこに教育行政機関を置くにしても、公選でなきゃならない理由はない。アメリカでは、「政党色を除く」という意味なんです。アメリカは二大政党ですから、公選で、どちらか一方に傾いてはいけません。そこで、住民の教育に対する意思を問うための直接選挙なんです。日本では知事、市町村長が最後にまとめるんだから、教育行政の専門的なことに関しては、合議制機関を置いてもいいかも知れないけれども、二つの地方公共団体を同じ地域につくるのは意味がないということを、散々言ったんです。しかし、それは最後まで聞き入れられなかった。これが、基本的に食い違った点です。

それで、田中耕太郎先生は、アカデミック・フリーダムを維持して

いた大学に、教育行政の権限を委譲しようと考えていたんですが、CIEは「学区庁案」に反対なんです。なぜかと言うと、民主主義というのはアカデミズムではなくて、民意に基づかなければいけない。だから、住民に基礎を置く、住民の意思の反映は公選制の委員でなければならぬ。ここで、方法が全然違うんです。CIEは「絶対に、公選だ。公選だ」と言っていたんです。

それから、CIEの言い分では、市町村という単位があっても、それは何も教育のベーシックなユニットに向いているかどうか分からない、小さ過ぎるものがある、と言うんです。アメリカは当時、非常に小さな学区が、全国的にたくさんあったんです。それを統合しようという動きが起きていたのです。その案では大体、人口一万人ぐらいにまとめようとしていたのです。当時、日本には数多くの小規模町村があったものですから、「一万人単位で、ベーシックな学区を置け」と言うんです。

そのとき、ちょうど、地方自治法が作られつつあったんです。そこで、文部省から、「新しい地方行政では、新しい教育行政のことを理解してくれないか」と正式に連絡したんですけれども、地方自治法の作成過程では、全く無視されていました。

伊藤 それは、GHQの中で調整されていないということですか。

天城 そうです。向こうはGSですね。こっちは、CIEでしょう。CIEとGSとの関係が、全く取れていない。自治省はGSとの話だけですから、新しい自治法では市町村制が原則でしょう。それで、自治省との関係では、最後まで困りましたね。当時、カウンタートパートになった人は個人的には親しい人々でした。鈴木（俊一）さんもそうですし、奥野誠亮さんとか、岡山の知事になった長野士郎さん、柴田

譲さんたちです。皆さん、あとで次官になりました。

伊藤 まだ、当時は内務省ですか。

天城 もう内務省は廃止されていたと思います。

伊藤 自治省には、まだなっていないでしょう。

小池 自治庁に……。

伊藤 いや、自治庁にもなっていないんじゃないかな。地方行政委員会か何かですよ。

天城 ええ、地方行政委員会とか、地方財政委員会とか、みんなその事務局ですよ。まあ、その人たちと交渉したんですが、最初は喧嘩ばかりですよ。喧嘩と言ったって、無理ないんだけど……。

伊藤 上が、それぞれ違うわけですからね。

天城 背後にいるGHQの担当部局が、全然違うんだからね。GHQの内部で、全然話してくれないんですから。まあ、そういう中でやっていた。

ミッション・レポートと教育基本法

村上 「学区庁」構想については、あとで教育委員会法のお話を伺うときにまた出ると思うんですが、せっかくですから、先ほどの「諮問はなかった」という話につなげてお伺いしたいんです。教育刷新委員会の第一回の総会において、「諮問はしない」と言いながら、文部省の側で解決すべき緊急な事項というものが九項目——どういうふうに並べられていたかはよく分かりませんが——にわたって、山崎次官から

報告されているんですね。その案文と云うんでしょうか、元のものはどのような形で作られていったのか、あるいは先生は、どのように関与なさっていたんでしょうか。

天城 これは、私もよく分からないんですが、全てが刷新委員会の事務局の仕事じゃなかったと思います。戦後の改革の基本に関することは、お話しすると、ややこしくて、こんがらがると思うんだけど……。アメリカの教育使節団の報告書というのは、あくまでも戦後改革の原本なんです。アメリカの教育使節団が日本に来るときに、「日本側の教育者の委員会をつくってくれ」という、アメリカ側の要望が出てきたんです。それで、日本側教育者の委員会というのができました。その人たちの八割が、あとの刷新委員会の委員になるんですね。

ところが、不思議なことに、この委員会のまとまった記録というのがないんです。報告書も、ないんです。ところが、佐藤秀夫さんがいろいろ苦心して、日本側教育者の委員会を取り上げられた項目を調べて、ミッション・レポートの項目と比較した。ここが似ていて、ここが違うというのを、彼がいろんな資料から整理したんです。教育者の委員会は、アメリカ使節団と密接に関連してやっていた。その委員の大部分が教育刷新委員会の委員になっている。その過程で、いろんな問題が日本側からも出ていたのです。

それと、もう一つ、「新教育指針」というのを文部省が出しているんです。「新教育指針」というのは、今後の教育者はどうあるべきかを示すために、教員研修用に作られたものです。前田多聞さんが文部大臣のときに、表向きはミッション・レポートと関係なしに、日本側で作った「新教育指針」ということになっていて、戦後の教育改革に非常に大きな力を発揮しました。これも、佐藤さんなんかいろいろ調べ

たところ、アメリカ側と何遍も交渉しているんですね。全部が向こうの言いなりではないんだけど、いろんな点で相談していたのは事実なんです。だけど、これは日本独特の方針なのです。

だから、ミッション・レポートと「新教育指針」が基になっている。つまり、刷新委員会で、山崎次官が「当面、改革すべき大きな問題」云々について話したのは、ここに基があるんです。こういうところで議論していた問題なんです。それが、一つの流れなんですね。

伊藤 教育使節団の報告と「新教育指針」との間には、あまり食い違いはなかったわけですか。

天城 食い違いは、そんなにないですね。ただ、日本側の委員会は、教育の基本についても議論しているんですが、その中で「新しい教育勅語を奏請しよう」という意見が出ているんです。ですから、ミッションと日本側の委員会と「新教育指針」と、その三つが基本にあるんですが——どれが中心でもないんですが、でも大体はミッション・レポートが中心かな。日本側の委員会は、これにかなり密着していた。

「新教育指針」も文部省が作ったんだけど、司令部と事実上の接触があった。この三つは部分的には違うけれども、基本的には戦後の教育改革の基本になっているんです。これが、教育基本法に流れているんですよ。

伊藤 勅語の問題というのは、どこから出てくるんですか。

天城 勅語の問題というのは、日本側教育者委員会の中で、新しい教育勅語を奏請しようという議論が出ているんですが、これは実現しません。でも、そういう意見が出ていたんです。勅語の問題は、憲法改正を議論する国会で……。まだ、あのときは帝国議会ですね。帝国議会で議論されたときに、田中先生が、「教育勅語の中身は全面的に否定

する必要はない。しかし勅語だし、新しい時代では国民の意思によって考えを決めるのが本（もと）だから、これからは全部法律でやらなければいけないと思います」と。というのは、初めて憲法二十六条に教育のことが載ったものですからね。それまで、旧憲法には何も載っていなかったわけです。つまり、教育の基本権が憲法に規定されているから、これからは教育問題も法律でやらなければならないと思います、と。田中先生は、帝国議会でそう答弁しているんです。そのときから、先生は教育基本法を作ろうと考えておられた。これは、ミッシェン・レポートが言っているわけでもないし、日本側の委員会が言っているわけでもないの、田中さん自身の考え方ですね。

それで、勅語の取扱いをどうするかという、大きな別の問題があるんです。勅語ですから、改廃するわけにはいかない。普通の手続きではね。そんな手続きはないですから、それで言わば「空振りにしておこう」ということで、この基本法を作った。だけど、まだいろんな議論があつて、「教育勅語失効に関する決議」というのを国会でやっているんです。衆参両院で、教育勅語はもう失効する、と。要するに、廃止とか何とかと言わないで、そういう手続きを最後に採ったんです。

小池 二十三年ぐらいでしたね（昭和二十三年六月十九日）。

天城 ずっと、あとだったと思いますが……。

伊藤 それに代わるべきものとして、教育基本法なんですか。

天城 そうですよ。だから、教育の理念を、どこで、どう明らかにするか。勅語に代わるものを作ろうとしたら、法律以外にはないだろう、と。それは、これから制定される教育法規の基になるものです。そういう考えで、基本法を作ろうとしたんです。これは、完全に田中耕太郎先生のアイデアです。

それで、これは間接的に聞いたのですが、文部省内で、田中耕太郎先生が「教育基本法を作る」と言われたので、こういう項目を盛るのか、みんな議論したけれども、よく分からなかった、と。それで、田中先生が、「こういうことと、こういうことがあるんじゃないですか」と言っていたと言います。学校制度をどうするかとか、教育の機会均等はどうするか、公立学校は無償にするとか、それから宗教と教育の関係はどうするかとか……。それぞれに、いろんな議論があつて、それがあのような条文になつていったんですね。あの時分は、意外に男女共学の問題が大きかった。

ですから、「こういう案で、山崎さんがいろいろ考えていますよ」と言うので、第一委員会で教育基本法を考えましたわけです。最初から成文で出したのかどうかは知りませんが、途中からは口頭ではなくて案を示すということで、文部省が基本法の要綱を示しました。関口隆克審議室長が刷新委員会で、ね。

村上 教育刷新委員会には委員が五十人近くいらつしますが、特別委員会の割り振りは、事前に審議室のほうで用意なさったんですか。

天城 いいえ。あれは大体、議長が指名しているんですよ。「あなた、どうですか」って……。

小池 中の委員ですか。

天城 委員にですよ。特別委員会は、委員で構成するんですから。「希望のある人は、希望のところへ手を挙げてください」と。「私は、教職員の身分の関係をやりたいです」とか、「私は、教育基本法の委員会に行きます」とかと言ってもらつて、適当な数を割り当てる。「ここが足りないから、誰か来ませんか」とか、そういう形でした。

伊藤 事務方は、いないわけですか。

天城 事務方は、いませんね。委員会で話していつて……。ただ、そのときに、森戸（辰男）さんが、「この委員会の委員を見てみると、どうも教育者ばかりなので、教育者ではない教育の『消費者』をもっと入れてはどうですか」と提案された。そして、あのときは安倍（能成）さんが委員長で、「それは、大変結構です」と。それで、確か山崎さんだったかな、「全ての委員を全部埋めているのではなくて、まだ定員もありますから、必要な観点から、それぞれの方を入れましょう」と。そして、「私学の人を入れる」とか、「小中学校の現場の先生をもっと入れる」とか、「小学校の先生はいるけれども、高等学校の先生がいらないじゃないか」とか、あるいは『『消費者』って誰なんだ』とか、そんな話が出ていたんです。

伊藤 この任命権者は、誰なんですか。

天城 「誰が任命するんですか」と言ったら、「やっぱり、それは文部省でしょう」と言われて、文部省が委嘱しているんです。ですから、形は全部、文部省委嘱です。

臨時委員というのも、同じような議論で、そのときに出てきたんです。「ここが足りないから」と言ってる。

伊藤 そうすると、任命権者が文部省だったら、文部省にはやっぱり事務方があるわけでしょう。

天城 そうですよ。それを審議室でやっていたかどうかについては、僕は覚えていません。

伊藤 議事録は、どこが作ったんですか。

天城 それは審議室です。担当したところが、全部やっています。だけど、社会教育なんていうことになると、やっぱり社会教育局がやっていたんですよ。

伊藤 全部を統括した組織はないわけですか。

天城 総会になってくると、これは審議室です。審議室は、総会の記録を全部取っていました。

伊藤 それは、速記者を入れるんですね。

天城 取っていますよ。その記録が、今の文部省の官房政策課にあるんです。ですから、刷新委員会の記録というのは、その後、文部省の中でいろいろ組織の変更がありました。まあ、よく無くならなかったと思いますね。今の官房政策課になったときに、それを基にして一九九五年だったか、「岩波版議事録」ができ上がった。もっとも、これは「国研」の近代教育政策編集委員会かな、その大きな委員会の中で戦前からやってきた仕事の一つで、確か第三番目の仕事でした。

村上 いま臨時委員の話が出ましたが、臨時委員の選定については、文部省のほうで人選なさっていたということでしょうか。

天城 そのところは、僕はよく分からないんだけど、両方で相談したんじゃないですか。「青年学校の問題については、どうしようか」とか、「幼稚園の問題は、どうしようか」とか、委員の定数もありますから、その問題についてだけ参加するということで、臨時委員というのを入れているんですね。

伊藤 委員には、ちゃんと手当が出るわけですよ。

天城 もちろん出ますよ。任命する以上は、全部出ます。

村上 教育刷新委員会の委員の方には、臨時委員の方も含めてですが、安倍能成さんであるとか、南原繁さんであるとか、非常に有名な方がたくさんいらっしやいます。もちろん、そうじゃない方もたくさん参加していらっしやるわけですね。それで、特に先生が印象に残っていないらっしゃる委員、あるいは、そのエピソードみたいなものはござい

すでしょうか。

天城 安倍さんや南原さんが有名だと言うけれども、その当時の刷新委員会の先生というのは、みんな錚々たる人ですよ。

村上 失礼いたしました（笑）。

天城 安倍能成、南原繁、天野貞祐、芦田均……。森戸辰男さんだっていますし、務台（理作）さんだとか、大内兵衛もいたし、戸田貞三もいたし、ずいぶんいましたよ。それから、津田塾の星野あいさんだとか、恵泉女子農専の河井ミチさん、あるいは京都から落合太郎さんだとか、たくさんいますよ。その他にも大島正徳、田島道治、渡辺鍊蔵、矢野貫城、及川規、羽溪了諦、佐野利器、稗方弘毅……。あなたは知らないかも知れないけどね（笑）。

その先生方がどうだったかと言うと、一々、何をどう言われたかということは別として、安倍さんは大臣になると辞めてしまったので、実際は南原さんがずっとやっていました。南原さんという方は、なかなかはっきりしている人ですから、きちっと発言されていたし、田島さんも何を言われたか知らないけれども、この人も偉い人ですよ。この方は、あとで日本育英会の会長、いや宮内庁長官をやったのかな。立派な方ですね。それから、渡辺鍊蔵さんは東宝の社長をしていましたね。東宝争議で、有名になっちゃったんだけどね。

伊藤 元は商工会議所の会頭ですね。

天城 あの方は大変音楽の好きな人で、バイオリンの名手ですよ。それから、矢野貫城さんというのは、明治学院の院長さんです。この方も、いかにもクリスチャンらしい人でしたね。

伊藤 そういう中で、ご自分からどんな提案なさるタイプの方と、批評なさる方と、いろいろおありだと思いますが……。

天城 みんな一言居士で、ご自分の主張は言っていましたから、誰がどうということは覚えていません。ただ、森戸さんが、基本法にも出ているし、あとでも出てくるけれども、「勤労」ということを非常に主張されました。先生は文部大臣になってから、勤労青年のための定時制高校を進められました。勤労者教育ということを主張されていた。先ほどの「教育のユーザーのほうも考えろ」と言ったのも、森戸さんです。それは覚えています。

あとは、務台さんも、よく発言していました。ただ、先生方の発言は速記録を見ても分かるように、非常に長い演説をする方がたくさんいるんです。「簡単に」と言うんだけれども、駄目なんだな。講義みたいなものが、ずいぶんあるんですよ。だから、一言で、パツと寸鉄人を刺すような言葉で記憶に残っているものは少ないんです。森戸さんのような発言は、記憶に残っていますけどね。あとは、いろんなことをおっしゃるし、務台先生なんかも、ずいぶんと貴重なことを言っておられたはずなんですけどね。

伊藤 場所は、どこでやっていたんですか。

天城 文部省ですよ。

伊藤 文部省の中の会議室ですか。

天城 ええ。最初だけは総理官邸ですけどね。

伊藤 各特別委員会なども、そうですね。

天城 そうです。

伊藤 総会も？

天城 ええ。

伊藤 総会をやるような大きな会議室があるわけですか。

天城 ありましたね。ただ、総会を総理官邸でやったこともありました。

た。でも、大部分は文部省です。

伊藤 出席状況は、非常に良かったわけですか。

天城 良かったですね。ただ、誰かが「どうも委員の顔ぶれが東京に固まっているんじゃないですか。もつと地方から呼んだらどうですか」なんて言っていました。

伊藤 あの時では、地方から出て来るのは大変でしょうけど。

天城 ええ。

村上 確か、最初のうちは二週間に一回、金曜日に開かれているようですが……。

天城 実に、よくやっていましたね。

村上 それで、総会と特別委員会を、また頻繁にやっていたりして、たわけですが、体調を崩された方とかは、いらつしやなかったんですか。

天城 辞める人ですか？

村上 ええ。

天城 いないですよ。

伊藤 病気になる方とかは？

天城 駄目なときは欠席だけでも、途中で辞めた方はいなかったと思います。

伊藤 自薦は、どうですか。

天城 あったかも知れませんが、私は知りませんね。まあ、少しはあったんでしょうね。政府の委員会というのは、いつでも自薦が多いですからね。他薦という名前の自薦がずいぶんあるから……。プレッシャー・グループの代表を入れようとしてね。

村上 それに関しては、少しあとになりますけれども、日教組のほう

から委員がお二人入りますね。その前に、かなり「入れる、入れる」という、自薦だか他薦だかのお話があったというふうに、議事録の中に記録されています。

苦労を重ねた教育委員会法

小池 ちょっと前に話が戻るような形なんですが、教育刷新委員会ができるときのお話では、教育使節団と日本側の教育家委員会と「新教育方針」の三本立てということでした。例えば最初の段階で、森戸さんなんかは教育刷新委員会には入っていませんよね。それで、途中から入る形になる。要するに、日本側教育家委員会が一つの母体になって、それにあとから、どんどん付け加わっていくという感じですよ。例えば、森戸さんのように、一方で憲法の策定に関わっている人が入ってこられた場合、憲法改正との兼ね合いで、最初の頃から議論があったということはなかったんですか。

天城 刷新委員会が始まったときは、憲法はまだ公布されていない。

小池 ですから、ちょうど両方が進んでいるときに、そこで何らかのやり取りが……。

天城 憲法調査会の話は、ちょっと別じゃないんですか。

小池 それは、もう完全に教育基本法の問題とは切り離しておられた？

天城 関係ないですね。

小池 例えば、両方の委員を務めていた森戸さんのような人が、両方

の中継ぎみたいな形で入ったということでもないわけですか。

天城 森戸さんと憲法調査会の関係は、私は記憶がない。教育基本法の基本には、憲法があります。特に、憲法の二十六条で教育が基本権として認められた。憲法の精神を受けて教育基本法を作るという考えなんですからね。

今、教育基本法の改正問題が出ています。「あれが足りない。これが足りない」とか、いろいろ議論がありますね。基本法には憲法の考え方が基本にあると言いましたが、その憲法には日本人だとか、日本の伝統だとかといったものは謳っていないんです。いい意味でも悪い意味でも、ナシヨナリズムというものは払拭されています。今になってみると、「基本法には文化とか伝統とか、そういう考えが入っていないじゃないか」とか言われるんですが、それは言われれば、その通りなんです。

伊藤 しかし、憲法だってアメリカの指導でできたわけですからね。

天城 そうです。占領下ですからね。

伊藤 それで、例えば特別委員会が開かれると、その配布資料がありますよね。いろんな委員の意見とか、そういうものの作成は、どこが担当していたんでしょうか。

天城 それは、文部省の事務局で作りましたね。

伊藤 それぞれの委員会に対応する組織で作ったわけですか。

天城 関口さんなんかは、はつきり言っていましたよ。「じゃあ、次の会までに、そのところをまとめて作っておきますから」って……。

だから、それは資料として出すわけですね。

伊藤 じゃあ、文部省の役人が事務局ですね。

天城 そうですね。

伊藤 例えば、建議を最終的にやりますよね。その素案というのは……。

天城 それは、最後は事務局が作りますよ。それまで、散々議論して、「それをまとめて案にしましょう」と。それで、「まとめたものを作れ」と言うので、書いて出します。

伊藤 委員の中で起草委員会を作って、ということではないんですね。

天城 起草委員会を作っても、そこで鉛筆を舐め舐め書くことなどしませんよ。そんな委員会なんて、ないですよ。原案を作って、それを叩き台として練って、そこで十分に議論しますよ。「ここは、おかしい」とか「直せ」とか、そういうことはやりますが、その一番の基の素案というのは、やっぱり政府の機関なら役人がやりますよ。

小池 そうすると、いろんな議論が出まして、先生のほうでおまとめになられて、「これでよろしいですか」という形で何回かやり取りして、という形ですか。

天城 そうですね。それで、またそこで意見が出れば、戻して直す。

伊藤 そういう意味で、先生が直接タッチなされたのが、第三特別委員会ですね。

天城 そうです。

村上 今のお話は、大体、議事録という形の配布資料のことだったと思うんです。それ以外に、特に第三特別委員会のような、日本にとつては全く経験のない、地方教育行政に関係する議論については、どうしてもしろいろなことを調べないといけないわけですね。議事録を見ても、先生がいろいろな文献を調べた上で、ご説明なさっていると思うんですが、そういった資料の種本と言うんでしょうか、それはどのようなになさっていたんですか。

天城 教育委員会制度は、元はアメリカの制度ですからね。あれは、ミッション・レポートにかなり詳しく出ているんです。だけど、アメリカの実態はよく分かりませんから、僕はCIEに行つて、資料をずいぶん借りてきました。アメリカの教育行政に関する大学の教科書のような本も借りました。それから、アメリカの教育長協議会で作つた、いろいろなレポートとか、そんなものも借りてきました。それは、ほとんど貸してくれましたよ。

例えば、東大の五十嵐（顕）教授なんかは、「教育議會は議決機関、教育長は執行機関」とした案を作っていましたよ。そうじゃないんですよ。合議制行政機関というものの考え方を、彼は知らなかったようです。

伊藤 合議制の執行機関という考え方は、戦前は全然ないでしょう。

天城 日本では戦前、町村制と市制があつたでしょう。市制の中に「市参事会制度」というのがあつて、あれは合議制ですね。

伊藤 あれは、執行機関なんですね。

天城 そうです。

伊藤 でも、実際は市長とか知事とかが……。

天城 戦後、合議制行政機関として、公安委員会や教育委員会ができました。それから、会計検査院や公正取引委員会、あるいは中央の公安委員会と選挙制度委員会も、そうですね。いろいろ、できたんです。しかし、日本では合議制執行機関というのは、なかなか上手くいかなくてね。教育委員会も、あちこちで説明会をやつたのですが、皆さん、なかなか理解できないんです。教育委員会自体が執行機関で、教育長というのは、それに対する専門職で、具体的な執行に当たる。専門職だけれども、専門的なことはアドバイスできるので、単なる事務局長で

はない。その辺の組み合わせが、なかなか理解できなかったんですね。

伊藤 公安委員会だつて、上手く機能していないですよ。

天城 そうですね。公安委員会だつて、「いざとなれば、飾り物じゃないか」という議論になつたでしょう。あれは、警察庁が県警本部長の任命権を持っていますからね。教育委員会は、教育長の任命権を持っていますから……。

小池 最初に、そういう合議制の機関をつくるときには、自治省の動きなども、先生は見られていたわけですか。

天城 教育委員会制度に関しては、自治省は頭から無視しているんですから。

小池 完全に別個という形で？

天城 ええ。もう全然別だ、と、そんなものは入る余地はないという前提ですからね。

伊藤 しかし、GHQは、どうしても「これをやれ」と言うわけでしょう。

天城 CIEは、ね。

伊藤 GSは、必ずしもそうではない？

天城 GSは「ノー」とも言わないし、「やれ」とも言わなかったでしょう。

小池 知つたことではない、という感じですか。

天城 ええ。

伊藤 それは、やりにくいですね。

天城 そうですね。教育委員会制度の話に入るなら、まだいろいろお話しすることがあります。

伊藤 実際の問題として、先生が担当なさつたのは第三特別委員会

あつたわけですよ。やっぱり教育委員会法の問題が中心になるわけですね。

天城 苦勞して生まれた教育委員会法は、その後、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」というものに改正されてしまったので、ある一時期だけ存在した制度なんです。

伊藤 一時期と言つても、かなりありましたよ。

天城 おそらく占領下の日本の立法で、こんなに苦勞した法律はないですね。それは、基本的に教育行政の独立性を民意に置き、委員は選挙で選ぶことでしょう。そして、執行についても、知事や市町村長から離れて行く。ですから、委員の選び方と、予算の編成と、執行のところが一番大きな問題ですね。

伊藤 ですから、アメリカで歴史的に形成されてきたものを、全く歴史的な伝統の違ふところにボンと持つて来て、「何が何でも、これをやれ」ということの無理ですよ。

天城 そうそう。それは何遍も議論して、喧嘩したんです。

伊藤 先生ご自身も、向こうとやりあつた場面があるわけですか。

天城 僕は、年がら年中、喧嘩していましたよ。誰も、やらないんです。これは一字一句、僕が喧嘩して作り上げたんですから……。こんな嫌な思いはないですね。

伊藤 それが、教育委員会法という法律ですね。

天城 ……という形になっています。

小池 「森戸文書」の中に、ニューゼントに対して、教育委員会法を陳情している会談録があるんです。これは多分、先生が作られたかも知れないんですが、会談録みたいな形のもんです。今度、お持ちします。それで、そのときに森戸さんから、「教育委員会法だけを、ちよっ

と待つてくれ」みたいな発言があつて、ニューゼントが「それはマッカーサー元帥が決めることである」と言っている。それで、会談が閉められているんです。

天城 森戸先生もニューゼントと会つて、やっぱり反対の意見を述べられているんですね。それは、森戸先生のメモワールにも載っていますよ。森戸先生の『私の履歴書』にも載っています。それは文部省を挙げて、国会も挙げて反対したんですからね。それで最後に、「どうしてもやれと言うのなら、ディレクティブを出せ」と言ったんです。したら、「ディレクティブは出さない」と言うんですよ。

伊藤 何で、出さないんですか。

天城 それは、間接行政ですからね。

伊藤 間接行政でも、ディレクティブはあり得るわけですよ。

天城 いやいや、間接行政は全部、強制してでも日本政府にやらせたんです。有名な大学管理法案の問題も、「我妻試案」として出しているんですが、あれも全部アメリカが作つて、「これをやれ」と言ったんです。それで困つてしまつて、委員会をつくつて、我妻（栄）先生が委員長になつて「我妻試案」というのを出したんだけど、これも大学から猛反対を食らつて葬っちゃったんです。

小中学校の教育課程だつて、例えば勝田守一さんが文部省の教科調査官のときに、司令部からアメリカのどこの州のカリキュラムをもつて、「これで日本案を作れ」と言われて、しょうがないから翻訳しているんです。ほとんど翻訳です。そして、それを文部省試案として出させた。もう一人、保柳睦美さんが、やっぱり同じように小学校と中学校を分けて、それも文部省試案として出した。だから、あの時分の学習指導要領は全部、試案ですよ。

伊藤 教育委員会法の問題で、一番向こうと食い違ったのは、財政措置の問題と公選という、その二つが大きかったわけですか。

天城 いやいや、たくさんありますよ。

伊藤 一番大きな問題は、何ですか。

天城 大きな問題は、確かに公選ですね。それから、高等学校の所管をどこにするかということ。どうしても、「市町村に移管しろ」と言うんですから……。これが、最後まで喧嘩した問題です。それから、教育財政の確立と、教員の任免権を府県にするか、市町村にするかという問題です。高等学校の問題は、非常に大きかったですね。

伊藤 何で向こうは、それほど頑張ったわけですか。

天城 さっき言ったように、アメリカは教育行政の基礎を住民に置くんです。何にもないところで、彼らは学校をつくってきたんですから、初めに小学校だけつくるでしょう。それで、だんだん人口も大きくなってくと中学校をつくる、高等学校をつくる。全部、一番ベーシックな行政単位が責任を負うんです。日本では市町村は小学校・中学校まで設置できて、高等学校は、なぜ県立なんだ、と。ベーシックなところが持つべきではないか、と。基本的な理念は、それだけです。アメリカの制度が一番正しいんだと言うわけです。頑強に主張するルーミスという担当官が、デンバーの教育長をやった、アメリカでは割と評判の学者でもあるんですね。彼はアメリカのことしか知らないものだから、それが一番いいと思っている。だから、県立一中だとか県立第一高等女学校とかを全部、「地元在市町村に移管しろ」と言うんです。こちらは、市町村に下ろしたら、いかに全体が不合理になるかという、細かいデータまで出して反撥したんですけどね。駄目ですよ。伊藤 ベーシックなところまで落とせば、入学できる生徒もベーシッ

クな……。

天城 県立学校は、県全体の地域配分に基づいてできている。だから、たまたま県立学校が、ある市や、ある町にあっても、その町や市のためじゃなくて、県内の子供たちのために配置されているんだ。従って、下ろせない、と。それで、埼玉県を例に、浦和の第一中学校を下ろしちゃったら、どれだけ狭い範囲になってしまっただけの生徒がはみ出してしまいか。一方、他のところは、どれだけ高等学校に行く機会がなくなるかという、細かいデータを全部出したんです。

伊藤 向こうの考えでは、例えば浦和市なら浦和市に高等学校があれば結局、生徒はその生徒を入れる、と。

天城 そうです。

伊藤 そうすると、さっきちよつと出たかも知れませんが、特別区みたいな、幾つかの小さいところを集めて、そこでまた別な高等学校をつくれ、と。

天城 学区がだんだん成長してきたら、小中学校を所管する能力があるところは全部、高等学校を持て、と言うんです。

それで最後に、「あなた方の主張は、高等学校教育が県民の子供たちに、機会が均等に行き渡ればいいんだろう。そっちのほうが大事なんだろう」と言ったわけです。そして、「そうだ」と言うんです。それなら、「無理に移管しなくても、通学区制を定めたらいい」ということにしたんです。県内を幾つかの通学区に分けて、その通学区内の生徒は、その学区の高等学校に行く。そうすれば、みんな機会均等になるじゃないですか、と。

所澤 通学区ですね。

伊藤 財政負担だけは、県立の高等学校という形ですね。

天城 そうです。市町村に下ろしても、負担できませんからね。だから、設置者は県立で、と。だけど、通学で機会均等を図りましょう、学区制をやりましょう、と。その学区については、小学区か中学区か大学区かという問題が、その後あちこちで議論になるんですけど、とにかく通学区をつくるという形でね。

伊藤 そういう意味では、妥協の産物なわけですね。

天城 ええ。そうでないと、動かないんですから。

伊藤 向こうの面子の問題もあるんでしょうか。

天城 面子というのか、アメリカの制度が一番良いと信じているのです。本来に、ルーミスというのは御し難い男でしたね。何遍喧嘩したか分からないですよ。

国会とCIEと民事部と……

所澤 今の話では、そのアメリカの人の言うやり方でいけば、小学区制にしないといけないような……。

天城 それがね、民事部というのが各県にあって、その民事部の言うことが、またバラバラなんです。西のほうは、小学区だと主張するんです。一校一学区でなければ駄目だ、と言うんです。関東から東北のほうは、それほどでもないんです。それから、男女共学も、西のほうは絶対男女共学でなきゃいけない、と。東のほうは、それでもない。だから、関東から東北には男子高校と女子高校が別々にできたのですが、西にはないんです。実施の段階で、大変困ったんです。

さらに、総合制でなきゃいけない、と言う。男女共学と総合制を主張するのです。日本では、中学校があり、農学校があり、工業学校があり、女学校があるでしょう。それを、「全部一緒にしろ」と言うんです。そう言わない県民事部も、あったのです。男子高校、女子高校、工業高校、農業高校が残ったところがあるんです。

伊藤 しかし、そういうのはアメリカにはないんですかね。

天城 アメリカは、「コンプリヘンシブ・ハイスクールが一番いい」と言う。だけど、当時の日本では、「男女共学は良くない」という議論が多く、「総合はいいだろう」と。やってみたら、男女共学のほうは何も問題が起きないんです。総合のほうは、問題を起こした。普通課程と職業課程は、伝統的に合わないです。農学校と工業高校を一緒にしても合わない。それで、だんだんと総合制がなくなっていくんです。

産業教育の伝統がありまして、それを非常に主張しているグループがいました。ちよつとあとになります。が、「あんなことをしていたら、産業教育が駄目になってしまう。産業教育振興法を作れ」と言うので、議員立法でできたのです。それで補助金を出せ、と。産業教育を振興するというのは、総合制から外れることです。それで、工業や農業の高校が生まれ始めたのです。産業教育振興というのは、明治以来、日本の一つの大きなテーマですから、それをゴチャゴチャにするのは、怪しからん、と。体質的にも違うんですね。だから、普通科と工業科を一緒にしても、先生の気風も合わないし、学校の校風も合わない。しかし、女学校と男子校を一緒にしたところは——男女七歳にして席を同じうせずで、そんなことしたら大変だと言われましたが——何も問題は起こりませんでしたね。

伊藤 そうですね。東北や関東には、女子校はたくさんありますよ。

男子校というのは、あまりありませんね。

所澤 いや、ありますよ。埼玉県の浦和高校とか、群馬県にもいっぱいありますね。

天城 関東から北なんです。西は、ないんですね。

小池 西は、ないですね。確かに、工業高校も広島県下は、ないですからね。

天城 それで一番強かったのは、京都の民事部で、徹底して小学区でした。

所澤 京都の高校の小学区制というのは、それで誕生するわけですか。

天城 そうです。あそこにいた軍司令部の教育担当官がね……。あそこが代表ですね。

伊藤 地方の軍司令部は、独自に権限を持っているわけですか。

天城 独自というか、基本的なものが決まって、法律ができて、執行の段階では裁量があったようです。

それで、公選制のときも、公選制をやるなら自治体の選挙法と同じにやらざるを得ない。地方自治に関する法制が進んでいるときに、文部省が選挙法を別には作れません。ただ、一般の選挙は政党を前提にしていますから、その点は外すことにしたのです。

伊藤 ところが、実際には政党色が付いたでしょう。

天城 政党色が付いてはいけないと言ったって、法律的に政党名を名乗ってはいけないと言っても、候補者に何党かという意思があったら、それはしょうがないじゃないか、と。むしろ、別の問題が出てきたのです。教員組合員が立候補したんです。すると、教育委員会はレイマン・コントロールだから、プロフェッショナルな教員は立候補してはいかンというんです。いけないというのなら、法律に書かなければな

らない。しかし、公選という趣旨からいくと、職業によって区別はできない。CIEは公選で押し切っているながら、立候補が始まると、民事部では教員が立候補するのを抑え始めたんです。何の権限も根拠もないんです。「教員が出るのは、怪しからん」と言って、声明まで出したところもありました。

小池 原案のときには、「教員は除く」というようなものがあつたんですよね。

天城 はい。

小池 それが国会で……。

天城 国会は、そんなものは公選の趣旨に反する、と。そこで、「現職教員を除く」という、例外規定を出したんです。司令部が「教員はいけない」と言うのなら、はつきり書いたほうがいいだろうと言って、書いたんです。そしたら国会で、「それはおかしい」と言うので、削られてしまったんです。そしたら、あちこちで教員が立候補したのです。

伊藤 議会での修正を、GHQのほうは抑えなかったわけですか。

天城 国会修正が幾つかあって、それらは司令部に持って行ってやっただけでも、その問題は抑えなかったですね。

伊藤 それは、GSか何かの……。

天城 そうでしょうね。公職選挙法に基づいてやる、と言うんですから。

小池 公職選挙法のほうが「親規定」みたいな形だから、それに準拠する形に全部しちゃったんでしょうね。

天城 そういうことですね。国会で修正しようとしても駄目だったものは、たくさんありますよ。速記録の中で「休憩」となっているでしょう。あれは、その間、国会議員が直接司法部に掛け合っていたので

す。

伊藤 「再開します」と言う、そのあと全然違う話になっていたたりして……（笑）。

天城 僕らが「駄目だ」と言ったにも拘わらず、CIEに押し切られた問題に対して、国会がまた「駄目だ」と言う。それで、国会から直接持つて行ったんです。

それでも、最後には国会修正の幾つかを、司令部は呑んだのです。そのときは、さっき言ったルミスが、ちょうど帰国していたんです。病氣治療が何かで、とにかく帰国していて、その間に法律が通ったんです。戻って来て、原案と違っている、彼が怒りましてね。僕に「怪しからん」と言うんだけど、僕がやつたんじゃないんだから。「国会がやつたんだから、俺に文句を言ったって駄目だ」って（笑）。ルミスとは喧嘩しました。

伊藤 直接のカウンターパートは、その人なんですか。

天城 彼が担当の主任ですね。

村上 今のお話は教育委員会法ができた二十三年のことだと思うんですが、いつぐらいから延々と、喧嘩をしていらしたんですか。

天城 始めたときから、ルミスですね。

村上 教育委員会法に関しては、教育刷新委員会が第一回の建議を出して、そのあとで文部省の内部で教育委員会法の案が作られていくわけですよ。それが知らない間に占領当局のほうから文句が付いて、二十二年の十二月に突然、全く関係ないようなものが出てくる。それに対抗する形で、教育刷新委員会でもた議論し直して、任命制にするというふうに話が流れていく。その背後では、文部省とCIEのルミスさんのほうとで、ずっと議論がなされていた、と。

天城 それは、実に怪しからんことでした。刷新委員会の建議を受けて文部省で法案を作成し、第一次案というのを五月に持つて行った。それが、全然、梨の礫で、返事を寄越さない。どこが悪いのかと、途中で何遍も催促したが、まだ審議しているから待つていろ、と。そうしたら、十二月になって、全然違う、自分たちの案を示してきたんです。

伊藤 しかし、その前にも十分に議論しながら作ったわけですよ。

天城 そうですよ。まあ、第一次案のときは、それほど突き合わせはしていませんでしたが、向こうにはちゃんと知らせてあるんですからね。それで、案として出しているんだから……。返事を寄越さなかった理由は、分かりません。おそらく、GSから抑えられていたんじゃないかと思いますが……。ガバメント・セクションが、教育制度だけ先に行くのを抑えていたんじゃないですかね。

これは、あとでアメリカに行つて分かったんだけど、アメリカでも教育委員会の独立性と行政の一元化という問題は、論争になっているんです。教育の面倒を見る制度ができていないから、住民が自分たちでやってきた歴史は分かれますが、だんだん地方行政が整つてくると、それでは駄目なんだ、と。それで、名前は忘れてしまいました。シカゴ大学に行政研究所みたいなものがありまして、そこで教育行政と一般行政の関係、あるいはその他アメリカでは類似の制度がある、と、そういうものの利害得失の研究をしているんです。そしたら、初期のことは別として、教育行政も大きくなったので、二つに分けてやつていく必要はない、ということを感じていました。学区もだんだん大きくなっていくし、市町村行政もだんだん育ってくる。ベリシックの公共団体として……。また、教育税をどうするか、人事権

をどうするかという問題にも絞られてきている。教育のために別の公共団体をつくるとか、コンソリデーションが進んで、小さな学区を統合するとか……。

だから、アメリカでも、両者の意見が食い違っている問題が、たくさんあるんです。州では、教育長まで公選にしているところがあります。

伊藤 州によって、かなりバラバラなんですね。

天城 バラバラです。全部が公選かと思つたら、そうじゃないんです。小さな小学校を一つだけ経営しているのでは、発展しない。中学校が必要になってくる。学区も、ある程度の規模に統合する必要がある。何万とあった小さな学区が、どんどん減っているんです。

伊藤 しかし、実際の一般行政の区画と学区とは、元々ずれているわけですね。

天城 元は、ずれていたんです。それを統合していく過程で、だんだん合わせるようになってきたんです。

伊藤 さっきのお話では、教育税という形で、独自の財源を持っているわけですね。

天城 持っていますよ。今でも持っているところが多いと思います。

伊藤 これは、どうやって徴税するんですか。

天城 これは不動産税、土地税ですよ。あれは、ミリタックスと言います。千分の幾つという数字を、掛けるんです。不動産税を徴収するときに、教育税としてミリタックス、一ミリとか二ミリというものを教育に回すという制度で、特別な財源はない。土地税の一部を教育目的に使う。

伊藤 徴税機構を、独自に持っているわけではないんですね。

天城 そうではないですよ。不動産税、土地税ですよ。

伊藤 税務署みたいなものは、ない。

天城 「千分の二は教育だよ」「千分の三は教育だよ」ということで、教育費を保障しているんです。アメリカの地方税というのは不動産税で、日本のような住民税や所得税ではないですから、そこで確保できるわけでしょう。

僕も、それは向こうに行つて分かつたんです。初めは、そういうことが分からないし、CIEが「教育委員会が教育税を徴収する」なんて主張したでしょう。自治省が、「そんな馬鹿なことできるか」って……。それから、「校舍を造るためには起債が必要だから、起債の権限を与える」とか。しかし、自治省が相手にしないわけですよ。実際、そんなことを、教育委員会ができるはずがないでしょう。馬鹿みたいですよ。

伊藤 嫌な思いをされたわけですね。

天城 嫌な思いですよ。自治省から見たら、「あいつら、無知蒙昧だ」と思っていたんじゃないかな。

伊藤 占領行政というのは、そういうものだということですね。

天城 おそらく教育の他の分野と違って、僕は一番嫌なところを担当したんですね。それから、僕は直接担当しませんでした。あとは国語の問題でしょうね。「ローマナイズしろ」と言つてね。これは、「トルコで成功したから、日本でもやれ」と、担当官が盛んに言つたらしいんです。

とにかく、この問題がある程度までいったときに、人事課長から「課長になるか、アメリカに行くか」と言われたんです。あれだけいろんなことを言われたんだから、ぜひアメリカの実情を調べてみたいと思

って、私は「アメリカに行きます」と言ったんです。

伊藤 それは、いつですか。

天城 一九五一年で、まだ占領下ですよ。

伊藤 そうすると、地方連絡課の課長補佐ぐらいのときですね。

天城 そうです。

伊藤 これは、どれぐらいの期間ですか。

天城 前に言いませんでしたか。「三カ月」と言われて、「これは留学ではなくて、視察だ」と。ところが、僕は向こうで病気に罹って、ニューヨークの病院に三週間ぐらい入院したんです。文部省に連絡して、「その分だけ、しばらく延期させてくれ」と。そしたら、「OK」が出て、五月までいたのかな。五カ月間いましたかね。

伊藤 費用は？

天城 それが、また酷いんですよ。費用は、くれないんです。

伊藤 それは、文部省が、ですか。

天城 そう。「延ばすなら、延ばしてもいいよ」と言うだけなんだな。入院したって、入院料はないしね。僕らは、保険を掛けていなかったんですよ。ガリオア、エロアで行った連中は全部、向こうで保険を掛けていましたが、僕は文部省で旅費と日当だけでしよう。それで、僕の家内がハワイ出身で、ハワイにまだ両親と兄がいたので、しようがないから連絡して、「日本に帰ったら、返すから」と言って借金しました。あの当時、まだドルの持出しが難しいですから、補助してもらったんですよ（笑）。

伊藤 そんなことがあって、大変でしたよね。

天城 大変ですよ。それで、こんなところに長くいたら大変だと思って、病院に「退院させろ」と言っていたんですが、「駄目だ」って言う

んですよ。僕は黄痘を起こしてしまって、担当した医者も、昔、黄痘をしたことがあって、「五週間は安静だ」と言うんです。「安静にしているから、とにかく出してくれ」と、いろいろ交渉しまして、やっと三週間で出してもらったんです。「退院したら安静にして、一週間に一遍ずつアフターケアに来い」と言われてましてね。

ちようど、コロンビア大学に、文部省からガリオアで行っていた者がいたんですよ。彼が、「大学院生の寮があるし、僕がそばにいるから、そこにいたらいんじゃないの」と言ってくれました。それで、コロンビア大学の大学院の寮に入れてもらったんです。しかし、さすがに一週間ぐらいはフラフラしていましたね。だけど、病院には二度と行きませんでした（笑）。

伊藤 その後は大丈夫ですか。

天城 大丈夫ですね。何でなったのか、分からないんです。物凄く疲れて、夜も眠れない。今でも覚えています、YMCAの宿舎にいたものだから、「お医者さんに診てもらいたいんだ」と言ったら、セントビンセントというカトリックの病院に行けと言われて、そこで診てもらったんです。そしたら「ヘパテディー」と、いきなり言うんです。何のことか分からないんですよ。「どこが悪いんですか？」と訊いたら、「鏡を見なさい」と。鏡を見たら、白目が黄色くなっていて、黄痘というのはイエロー・ジョーndeイスと言うんですが、「イエロー・ジョーndeイスじゃないか、絶対安静だ」と言われて、そのまま入院しちゃったんです。

結婚秘話——出会いと再会

小池 先ほど奥様のお話が出ましたが、前回のお話の中で、朝鮮総督府時代に結婚されたということを伺いました。ご結婚の経緯というのは、どういったものでしたか。

伊藤 プライバシーに関するのですが、お差し支えなければ、お願いします。

小池 ハワイで高等教育を受けられた奥様と先生とは、どういうところで、お知り合いになられたんですか。

天城 それは、もうプライバシー中のプライバシーですな。

伊藤 本当に、不思議な感じがしたものですからね。

天城 不思議に思うでしょう。それをお話すると、彼女のパーソナル・ヒストリーを話すことになっちゃうんですよ。横道に逸れて行っちゃいますよ。

伊藤 横道に逸れてもいいですよ。

天城 まあ、ちよつと筋だけ話しますと、彼女はハワイの二世で、向こうで生まれて、ずっと向こうで育ったんです。それで、日本は血統主義ですから、どこで生まれても日本人の子は日本人です。アメリカは出生地主義ですから、アメリカで生まれたらアメリカ人でしょう。だから、二重国籍になるんです。成人になると、選択できるんですね。

それで、彼女はアメリカにハイスクールまでいたんですが、ハワイは氣候のいいところだから、刺激がないし、単純でつまらないと思っ

たらしいんです。それで、日本で勉強したいと思って、ハイスクールを卒業してから、日本にきたわけです。そのとき、アメリカのハイスクールというものを、日本の教育制度がどう認めるか分からない。彼女の従姉が前に日本に来ていたんですが、日本の女学校に入っていたものだから、自分も女学校に行くと思っていたんです。そしたら、途中の船の中で東北大学の先生に会って、(両親の)郷里は広島ですから、「広島の女学校に入ろうと思ってるんです」と話したら、「ハイスクールを卒業しているんだから、日本の専門学校に入れるはずだよ」と。

それで、広島に公立の女子専門学校があったんですが、『女専』の校長を自分はよく知っているから、連絡しましょう」と言われたんですね。彼女は、それで「女専」に行つて、「こういう話を聞いたので、入れてくれますか」と言ったら、「入学試験をする」と言われた。「入学試験を受けたら落ちるに決まっているから、試験をせずつに入れてください」と言つたそうです。そしたら、そのせいかどうか分からないんですが、「それなら聴講生として受け入れる。一学期の成績を見て、二学期になったらどうするか決めましょう」と。それで聴講生で入つて、二学期から正規のコースに入れてもらったんです。

しかも、彼女は大胆にも国文科に入つたんです。というのは、彼女の従姉になる人が津田塾に行っていた。広島にいた伯父が、「早苗さんは、何で英語なんか勉強しているんだろう。ハワイなんか、みんな英語を話しているじゃないか」と言っていたと言ってますよ(笑)。それで彼女は、日本に行つて勉強するなら、国文だと思つたんですね。

それで、彼女は国文科を卒業したら、ハワイに帰るつもりでいたわけですが、ところが、平壤にアメリカのミッション系の女学校があつて、

そのアメリカ人の校長から広島女学院——これもミッシヨン系ですが——に連絡があつて、「いま国語の先生がいないから、広島女学院の卒業生を派遣してくれないか」と。だけど、誰も行く人がいなくて、今度は広島女学院の校長先生から広島女専に、「あなたのところで、誰か行ってくれる人がいないか」と言ってきたわけです。そしたら、先生が、「田中（旧姓）さんはハワイから広島へ来たんだから、朝鮮ぐらい何でもないでしょう」と（笑）。まあ、何でもないわけではないけれども、「あなたは大胆だから、行ってくれるんじゃないか」と言われて、すぐに彼女は「はい、行きます」と言つたわけです。「ただ、私はハワイに帰つてハワイ大学に入るつもりですから、新学期が始まる九月までの三カ月ですよ」と。「三カ月でもいい。とにかく、誰もいなくて困っているから、行ってください。その間に、誰かまた探しておきますから」と言うので、広島女専を卒業して、平壤のミッシヨン系の女学校に国語の先生として赴くんです。

それで、その年に、僕が榊華会のグループと一緒に鮮満旅行に行つたわけです。彼女は、ちょうど帰る前で、夏休みの旅行をしていた。それで、僕が金剛山に行ったときに、彼女も来ていて、そこではつたり出会つたんです。

伊藤 それが、初対面なんですか。

天城 そうですよ。道端で会つたようなものです。

伊藤 大変なロマンスですね。

天城 それで、僕たちのグループ四人は、そこから新義州を通つて満洲に行つたんです。彼女は一旦平壤に戻つたんですが、また旅行を続けて、彼女も満洲まで行つたんです。奉天から新京まで行つたそうですが、奉天は非常に中国らしい町で良かったけれども、新京は赤土だ

らけで、新しくつくつた日本みたいな町だったので、失望して、着いた日に帰つて来てしまつた。それで、ハワイに帰つてしまつたんです。伊藤 満洲で会つたわけではないんですね。

天城 ええ。それで、ハワイに帰つて、ハワイ大学に入つたんです。その間、日本人学校の先生をパートタイムでやって、日本語を教えながらハワイ大学を卒業したんです。それで、卒業したら、また日本に帰つて来たんですね。

小池 開戦前に帰つて来られたわけですか。

天城 最後の引揚げ船ですね。「これで最後だ」という噂が飛んで、それじゃあ帰ろう、と。『氷川丸』ですか、十二月の何日かの、最後の引揚げ船です。

伊藤 その金剛山で出会つてから以後は、文通も何もしませんか。

天城 文通ですね。

伊藤 それで、ご結婚なさつたのは朝鮮でしょう。

天城 前にも言いましたが、朝鮮電力管理令の問題で、東京に来て、法制局で審議をしていたでしょう。そのときに、一カ月ぐらい東京にいましたが、そのときに結婚して、朝鮮に一緒に行つたんです。

伊藤 向こうの両親とか先生の両親とかは、全然問題はなかつたんですか。

天城 まあ、問題はなかつたですね。あつたかも知れないけれども……（笑）。戦時中で、片方では「鬼畜米英」で、ハワイの二世と言つても国籍はアメリカ人ですよ。これと結婚するなんていうのは、よく親も許したと思つています。

小池 ハワイに帰られた段階で、奥様はアメリカ国籍を取られたわけですか。

天城 いや、アメリカ生まれだから、アメリカ人なんです。

小池 アメリカは、日本に行ったときに選択をしなければならないんですか。

天城 いや、まだ持っていました。ただ、向こうに両親や兄がいるでしょう。だから、いつ何時帰るにも、アメリカ国籍があったほうがいいので、二重国籍だったんです。そうでないと、ビザを取ったりなんかで、ややこしいでしょう。ただ、日本の選挙権を行使したければ、アメリカ国籍を離れなくちゃいけない。それで、彼女はしばらく選挙はしていなかったんです。ですから、しばらくパスポートを二つ持っていましたね。

伊藤 先生は、アメリカに行かれたときに、ハワイの奥様のご両親に連絡を取ったということでしたが、ご両親のほうは戦争中も、ずっとハワイにおられたということですか。隔離されたりとかは……。

天城 父はアリゾナに隔離された。それから、上の兄はアメリカに兵隊に取られていたんです。

伊藤 日系の、何とか部隊というのですか。

天城 いいえ、有名な四四二部隊ではなかった。でも、どこかの戦線で、僕とぶつからなくて良かったです。母親にすれば当時、旦那は抑留されてアリゾナのキャンプにいて、娘は日本にいて、長男はアメリカの軍にいる。「八つ裂き」なんです。一番辛いというか、不思議な運命に遭っていました。その間の消息が、国際赤十字を通じて掴めたんです。

小池 外務省で、まだ記録を持っていますよ。今の日本の国籍法ですと、二十歳になると、どちらかを選ばないといけないわけです。それで、奥様は結婚されたときは、もう二十歳を越えられていたわけでは

か。

天城 越えていましたよ。

小池 となると、日本国籍かアメリカ国籍かを選択する……。

天城 いやいや、まだ二重国籍でした。

小池 二重国籍のままですか。

天城 ええ。僕も、あまり詳しいことは知らないんですが、二重国籍でもボーン・アメリカで、十何歳まで育っていると、放棄しない限りは続くんです。ただし、日本の公民権行使、選挙で投票すれば、アメリカ国籍は放棄です。

所澤 でも、その頃、日本の場合、女性の選挙権は基本的にはないですよ。

天城 そういう制度なんです。

小池 ……しなければ、ということですね。

天城 ええ。それだけの話ですね。

所澤 ということは、女性の場合、日本にいれば大体、アメリカの国籍が続くということになりますね。

天城 詳しいことは知りませんが、何歳までか、アメリカで生まれてアメリカの国籍で来た人間は、その子供も自動的にアメリカ国籍が取れるんですね。

小池 今でもそうですが、アメリカで生まれたら、基本的にアメリカ国籍が取れるんですね。それから、その子供の場合も、アメリカ国籍を取れるんです。

天城 国籍法というのは、ややこしいですよ。

伊藤 国によって違うわけでしょう。

小池 ヨーロッパとかアメリカなんていうのは、戸籍がないですから、

国籍法は事実上は、ないんですよ。

天城 子供が三人いるんだけど、三人とも国籍が違うという人がいますよ。一人はアメリカ、一人はカナダ、一人は香港とか、そんな人がいますよ。

伊藤 それで、ご結婚なさって、實際上、あまり問題はありませんでしたか。

天城 やっぱり、いろいろありましたよ。僕は、それほど感じませんでした。彼女はずいぶん感じたでしょうね。

小池 先生のほうでも、役所のほうで問題があったとかは？

天城 ないですよ。だって、日本人ですもん……。外務省は、どうなっているか知りませんが……。

小池 この頃の官吏の場合は、何もないということですか。

天城 何もないですね。「二世と結婚しました」なんて、一々言う必要はないしね。

まあ、そういう形で結婚しましたが、そのときは、もう総督府に在籍していましたから。それで終戦になって、アメリカ軍が進駐して来たでしょう。そこで、アメリカと交渉になったわけですが、そういうことをする者は、誰もいないんですよ。それで、家内と僕と二人でやっただけです。彼女はアメリカにいたから、「アメリカ人という者は、こういうものだ」ということで、この前の酒屋の主人の話とか……。アメリカ軍も僕たちも、ずいぶん便利だったんじゃないかと思えますね。

それで、いろいろ折衝役をやって、日本に帰って来ました。僕は何か教育の仕事をやりたいので、改めて大学に行こうか、などと思っていました（笑）。彼女は帰って来てから、G H Qに勤めたんです。これ

がまた偶然な話ですが、東京のどこかで、ばったり昔のハワイ大学の先生に会ったんです。その人は軍人で来ていたんですが、元は大学の言語学の先生で、G H Qのランゲージ・プールという、通訳のセクションの長になっていたんですね。それで、「田中さん、来て手伝いなさい」と言われて、G H Qに入ったんです。しかも、彼女は極東裁判をやらされたんです。極東裁判では、アメリカの検察側がいろいろ資料を用意しなければならず、日本語の資料がたくさんあるので、その翻訳を担当したのです。

伊藤 月給も、良かったわけですよ。

天城 良かったです、僕よりも、遙かに……（笑）。

ハワイ大学を卒業して日本に帰って来て、彼女は僕と結婚する前は、ジャパン・タイムズにいたんですよ。あのときも、僕よりも月給は高かったです。彼女は、また変わり者で、ジャパン・タイムズで月給が幾らと言われたら、「私は、まだ何も知らないんだから、そんなに要らないです」と言っただけです。それでも、あの時分、百円以上取っていたでしょうね。我々が、大学卒業で六十五円のときですよ。

それから、経緯はどうだったか忘れましたが、その後、彼女は関東民事部に移りました。

伊藤 アメリカ軍のですか。

天城 G H Qじゃなくて、民事部というのがありまして、そこで婦人教育か何かの担当の仕事をしていたのかな。だけど、そのポストと意見が合わなくて、衝突したんですね。向こうが（彼女を）アメリカ側のようなつもりで扱っても、彼女には「どっこい日本人だ」というところがあるし、日本人であるかと思うと、アメリカ人でもあるし……（笑）。それで、衝突しちゃって「ファイアする」と言われて、彼女

は「フアイアされる一分前に、私はクイットする」と言っ、出て来ちやっただね。

アメリカの教育行政を視察

天城 さっきのアメリカ旅行の話に戻りますが、ニューヨークで三週間入院していたときは絶対安静で、ベッドから下りてもいけないんです。バイタミンのピールスを飲まされて、あとは食事療法なんです。メニューにはハイプロテイン、モドレット・ファットと書いてあつて、美味くないんです。日本なら、しじみ汁を飲んでいたらいいのにね。それで、ハイプロテインだから、プロテインは必要なんでしょうね。モドレット・ファットで「脂肪分は抜け」と言うんだから、鳥肉なんかが出て、何かスポーツしていて、味のしないような肉でしたね(笑)。参りましたよ。

それで病院に訊いたら、入院料と治療費で一日十ドルぐらいた、と。あの時分、ガリオアなんかは一日十ドルで、僕が文部省から支給されたのもガリオア、エロアに準じるものですから、一日十ドルぐらいたったんです。これは大変だ、こんなところに長居してはおれないと思つて、「帰してくれ、帰してくれ」と言っただけですが、なかなか「うん」と言わない。そこで、最後には「実は、私は金がないんだよ」と言っただけですよ(笑)。「出してくれれば、ニューヨークに友達がいるから、友達の家に転がり込んで、しばらく静養してから帰るから」と言っ、それで何とか出してもらったんです。

それからあとは、最初に予定していたプランを幾つかスキップしながら、東から始まつてボストンからシカゴ、そして真ん中を行こうと思つてカンザス、ミズリーを通つて、カリフォルニアに出て来て、ロスに行きました。ロスから北に上がつて、サンフランシスコからサクラメントまで行つたんです。その間、教育委員会を訪ねて、教育行政の話の聞いたり、大学などを見学しながら行つたんです。

それで、先ほどお話ししたルーミスはデンバー出身なんですが、もう一人、カーペンターという人がいて、この人はルーミスが帰つたあと、交代で来た人なんです。ミズリー大学の教授で、物凄く人のいい、おっさんなんです。それで、ちょうどアメリカの真ん中を行こうと思つていましたし、カーペンターがいるのでミズリーに行つたんです。あそこは、ブレッドバスケット・オブ・アメリカと言つて、小麦の生産量が一位だし、ちょうど真ん中ですから、ハート・オブ・アメリカとも言ふんです。カーペンターからは、「俺の家に来い」と言われていたものだから、そこに一週間ぐらいいましたかね。

それからロスに行つて、ロスにもGHQに来ていた人がいたんです。戦後の教育改革が終わつたあとに、新しいリーダーを養成するためのIFEL(The Institute For Educational Leadership)という名前のプログラムが始まつたんですが、彼は、その担当官なんです。それで、日本でいろんな新しい教育の講習会や研修会をやつたんですが、彼はロスの高等学校の校長で、とてもいい人で、「ロスに来たら、俺のところに来い」と言うので、彼のところにも一週間ぐらいいたんです。

ですから、ミズリーのコロンバス、ロス、それから今度はだんだん北へ行つて、一番ベーシックなスクール・ディステイクトからカウンティ・ディステイクト、それから州へと、アメリカの教育行政の重

層システムをずっと見て回って、それでサンフランシスコから州政府のあるスクラメントに行って、そこから帰って来たわけです。

伊藤 そのときに、一般行政組織と学区とが食い違うところは、ございましたか。

天城 それは、分からないですね。そういうところは、探せませんでした。ただ、シカゴ大学の研究所で、そういう話を聞きました。データー的にはいろんな資料をもらって、なるほど多いなと思ったんですけどね。

それから、一番下のルーラル・ディステイクトは、小さいところではワンルーム・スクールもあるぐらいですからね。カウンティーに行くと、ちよつと広くなるし、州に行くと、またこれは全然別で、州と同じ地域ですからね。その広さが違ってくるわけでしょう。だから、住民の意思を捉えて学区でやるというのは、一部のベシックなところの話であって、大きな都市では市の行政と教育行政が一致しているんです。教育委員も、任命制になっているところがたくさんありましたしね。だんだん選挙から任命制に変わってきていましたが、州でも公選制のところ、少数ですがありました。また、ノースカロライナでは教育長が公選で、委員は州議会の任命なんです。だから、教育長は威張っているし、権限も強いんですね。

実際、アメリカのあちこちを見ました。ミズリー州のカーペンターさんというのは熱心なクリスチャンで、日曜日になると、僕を教会へ連れて行くんです。その当時でも、アメリカの若い者と年配者とは説教が合わないと言って、若い者と年配者とを分けて、二回ミサをするんです。その両方に連れて行くんですよ。「違うんだから、聞いてみる」と。参っちゃいましたよ。それから、タウン・ミーティングみた

いなものがあるんですが、「それに出てみる」とか。町のおじさん、おばさんに紹介されて雑談するんだけど、困ってしまうんだな。教育制度の話とか、教育委員会制度の話なら、専門用語もかなり分かるんですが、雑談になってくると、何の話をしているか分からない。こういうのが、一番苦勞しました。タウン・ミーティングにも出だし、教育委員会にも出ました。教育委員会なんかは、委員がみんな仕事を持っているから、夜にやるんです。夜六時から八時までとかね。そんなことを経験したり、大学に行ったり……。

その間に、いろんな日本から来ている方にもお会いして、グラントキャニオンに行ったときには、ばったり蠟山政道先生にお会いしてね。蠟山先生は私の名前を知っていたし、顔も、ちよつと曖昧だったんだけれども覚えておられたようでした。もちろん、自己紹介しました。それで、先生とロスまで一緒に来ました。それがご縁で、そのあと蠟山先生とはいろいろと、ご交際をいただきました。

伊藤 その当時は、まだ戦争が終わってから五、六年ですよ。

天城 平和条約前ですから、占領下ですね。

伊藤 その頃、アメリカ人の日本人に対する悪感情というのは、あまりなかったんですか。

天城 当時は、マッカーシズムの時代で、都留（重人）さんなんか引つ張られたでしょう。そういう風潮が片方にありまして、何かの機会に誰々が「赤」だとかといった話を聞きましたが、僕が視察した限りでは、その影響を受けるとか、日本に対する反撥がどうこうということはありませんでした。さっきのタウン・ミーティングには、GIで日本に来ていた人もいましたが、幸い日本に対する印象は悪くなかったですね。日本に対しては、エキゾチシズムが中心だったかも知れ

ません。ですから、嫌がらせみたいなのは、どこでも受けなかったですね。

伊藤 まあ、GIに來た連中は、みんないい思いをしていたわけですからね。

天城 そうでしょうね。話は前後しますが、朝鮮に進駐して來た米軍のケイ大尉が、その後、極東裁判でB・C級戦犯の弁護をしたことは、前回お話ししたでしょう。彼はマイノリティー・サポートで、サウスキャロライナにいたんだけれども、そのために白人に嫌われて、弁護士がセントビンセント病院に行ったその日に、ケイさんと会うことになっていたんです。「実は、こういうわけで、とても体がきつい。いま病院に連絡してもらったら、診察に來いと言われた」と言いましたら、「自分が案内しよう」と言って、僕を連れて行ってくれたんです。

彼とは、その後、何遍も会っていますし、うちの家内なんかも彼の奥さんと大変親しくしていました。その後、僕は家内と一緒にアメリカに行ったときにも、彼の家を訪ねたりして、長く付き合っていたんです。最近、便りが來ないので、あるいは亡くなったかな、と。僕と同じくらいの歳でしたからね。

まあ、とにかく、それが初めてのアメリカ行きですよ。

伊藤 アメリカの豊かさとか、そういうものはお感じになりましたか。天城 驚きましたよ。「でかいなあ」と思いましたね(笑)。広いし、でかいし、奥深いというか、いろいろあるなと思って……。それで、そのときは、それほど感じなかったけれども、その後、何度かアメリカに行くうちに、ニューヨークやシカゴ、ロスといったアーバン・シティーと、古いローカルなコミュニティとは、凄く違いがあること

が分かりました。「ニューヨークやシカゴなんていうのは、アメリカじゃないよ。我々は、あんなところに暮らさないよ」と言っている人もいましたね。都会とは非常に雰囲気違った、穏やかなところもあるんです。

所澤 アメリカにいらしたときには、黒人の学校などもご覧になりましたか。

天城 行きましたよ。その後も、僕は何度かアメリカに行っているものだから、どのときに、どうだったということは覚えていませんけどね。『ウエストサイド物語』ではないけれども、ニューヨークのスラム街にも行きましたよ。「あそこは危ないから、行っってはいけない」と言われたんだけどね。

伊藤 その頃は、まだ白人と黒人とは分離の時代でしょう。

天城 そうです。セグメンテーションとか、セグリゲーションとか言われていた時分ですからね。

伊藤 そのことについて、アメリカの民主主義者たちは、あまり矛盾を感じてはいなかったんですか。

天城 社会的には大問題ですよ。白人と黒人の分離を強く主張する人と、融和しなければいけないと言う人と、いろいろありました。あるとき出会った人は、「黒人と白人とは共存しなきゃいけない」と言っていないが、最後に「自分の娘が黒人と結婚すると言ったら、やっぱり俺は反対するな」と。そういう人もいましたね。

伊藤 学区で小学校をつくると言っても、白人と黒人が一緒の学校をつくるわけではないでしょう。

天城 南部と北部では違います。

伊藤 そうすると、一つの学区の中に二つの学校をつくるということ

ですか。

天城 そういところもあるし、黒人のことは何も考えない州もあるしね。

伊藤 何も考えないというのは、つまり黒人は行く学校がないわけですか。

天城 極端に言えば、そういうところもあったんでしよう。黒人のスラムなんかは、どうにもならない、と。その中で黒人たちが、自分たちで学校をつくろうとしていたところもありますよ。

所澤 地域によっては、黒人で構成されている教育委員会のようなものもあったんですか。

天城 黒人が多い地域では、そういう学校をつくって運営していたところもあるんです。それから、その後のことですけれども、ニューヨークシティの教育長に黒人がなったことがあります。今は知事でも市長でも、たくさんいますけどね。

伊藤 最初に行かれたときに、白人と黒人が一緒の学校もあったわけですか。

天城 はっきり覚えていませんね。一緒の学校もあったと思いますよ。ワンルーム・スクールとか、ワンティチャー・スクールなんて、たくさんありましたから。

伊藤 何年生も一緒に、ということですか。

天城 そうです。先生が一人、学校が一つ。黒人の先生とも何人か会っています、州によってバラバラですからね。

伊藤 黒人の先生というのは、黒人の学校の先生ですか。

天城 カリフォルニアなんかは、今、英語を話せない人間が半分以上で、ヒスパニックのための学校がたくさんつくられていますよ。それ

で、スペイン語でやっているんですね。ニュー・エイジアンなんて言っている、ベトナムのボート・ピープル以来、カンボジア、ベトナム、ラオス、朝鮮、中国なんていう国の人が、どんどん増えてきている。特にヒスパニックは、「公用語としてスペイン語を認める」なんていう運動を起こしているんですよ。だから、プルーラリズムが、あちこちで起きているんです。アメリカのシンボルは国旗と言語ですから、その言語も守らない連中をどうするのか。それでは市民生活ができないので、結局、行政のほうでは「スペイン語やポルトガル語でもいい」となるでしょう。

伊藤 行政の負担は大きくなりますよね。

天城 大きいですよ。ワンルーム・スクールも行政負担が大きいですからね。適正規模にしないと、手厚い教育ができない。人的にも無理ですからね。一人の先生で、一年坊主から六年生まで担当するなんて、それはいい加減なことしかできませんよ。

伊藤 日本でも「分教場」というのがあって、一年から四年ぐらいまで教えていましたが……。

天城 その点は、今のほうが全て手厚いですよ。

伊藤 教育の問題というのは、国の独特の在り方とも関係しますから、アメリカのものを無理やり押し付けられてしまったということで、非常に不愉快だったと思いますが……。

天城 特に高等学校問題では、行政システムとの絡みがあって苦労しました。最後には、通学区ですり抜けたんです。しかし、地方によっては小学区を強制したところが出てくるし、男女共学を強硬に主張するとか、教員は教育委員になつてはいけない、とかね。

でも、CIEの中には、実態を知らないと駄目だと言って、日本側

に連絡しないで、文部省なんか全く知らない間に、通訳を連れて学校を訪ねていた人がいました。これは、あとで聞きましたけどね。千葉だとか埼玉には、CIEの誰それが来たとか。しかし、「こうやれ、ああやれ」と言いに来たのではなくて、「実情を教えてください」ということで、非常に丁重だったと言っていました。

伊藤 それでも上手く反映はできなかったわけですね。

天城 そうですね。

伊藤 今日は、時間がかかなり超過してしまいました。しかも、非常に面白いお話をありがとうございました。今後も、あまり脇道に逸れることを恐れずをお願いします（笑）。

天城 あまりプライベートなことは、ね。何か、皆さんの誘導尋問にかかってしまった。

伊藤 いやいや、そんなことおっしゃらないでください。やっぱり全部のお話がつながっていたじゃないですか。

天城 それは、まあ、つながっていますけどね。

伊藤 ああいうつながり方というのは、予想もしていませんでした。

天城 つながりは大きいんですよ。

伊藤 それで、いま奥様は元気でいらっしゃいますか。

天城 元気ですよ。

伊藤 奥様にも、インタビューしたいぐらいですよ。

天城 これも、ある意味では物凄く面白いんですよ。ああいうユニークなギャリアの人間は、あまりいませんからね。一度何かの機会に、今日出海さんにちよつと話したら、「あつ、それはいいや、小説に書く」なんて言われてね。その後、その機会がなくて良かったです（笑）。

彼女は朗らかで、呑気で、恐いもの知らずなんです、それでもハ

ワイにいるときに、日本の悪口を言われると癪に障ったし、日本にいて、アメリカの悪口を聞くと癪に障るなんて言っていました。彼女なりに、異文化の狭間を感じているようです。

伊藤 どうもありがとうございました。

〈以上〉

天 城 勲
オーラルヒストリー
第4回

[2000年11月29日 14:00～16:25]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

小池聖一(広島大学助教授)

所澤 潤(群馬大学助教授)

村上浩昭(政策研究大学院大学リサーチ・アシスタント)

(於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター)

総理の私的諮問機関

村上 今回は、質問事項に沿ってお尋ねしようと思いますが、その前に教育刷新委員会の総会について伺わせてください。総会が開催されていた場所ですが、議事録によると、最初は文部省の大臣次官室で開かれていて、その後、第一会議室に変わっているようです。会議室そのものにグレードというのか、そういったものはあるのでしょうか。

天城 その時分は、「大臣次官会議室」と言ったかも知れませんが、とにかく文部省の中の大きな会議室で、その後、「第一会議室」と名前が変わったのかな。それから、省の局長会議でも部屋がなくて、一時、次官室を使っていたんです。次官も端っこにいてね。それで、あとで少し余裕ができて、「局長会議室」とか「省議室」とかを別につくりました。ですから、それは何も意味はありません。大体、大会議室でやっていたし、あるいは部会などは別の会議室を使ったかも知れませんが、ただ、総理官邸でやったのは、最初と最後だけですかね。

村上 第一回建議を出す前——昭和二十一年十二月も、あの辺りでやっているんですか。

天城 やったかも知れませんが。

それで、質問事項にいろいろ書いておられますが、総会に関して①②③（後註）とあるものは、私にはよく分かりません。ただ、南原さんが「教育内容については、取り扱わない」と、はっきりおっしゃったかどうかは知らないけれども、ああいう委員会で教育内容を議論す

るのは無理なんですね。戦後改革というのは、主に制度論の問題ですから、南原さんにしても、小中学校の教育内容などを取り上げられたら、分からなくなっちゃうでしょう。だから、正確にそう言われたかどうかは知らないけれども、全体の雰囲気としては、あまり教育内容の問題には入っていないんですね。

次の、「教育刷新委員会の任務は終わったと、委員の中から声が出ているのに、二十七年まで続いているのはなぜか」ということですが、これは前にも触れたと思うんです。戦後、どうしても新規にやらなければならぬ仕事というのは、基本法とか教育委員会法とか、国立大学の地方委議をやるかどうかで、そういう問題が終われば刷新委員会の役割は終わったという印象を、誰かが持ったとしても無理はないと思います。その後のことをご覧になれば分かりますように、新しい教育改革というよりも、文部省の重要事項を審議していくという形になっていますからね。やがて教育刷新審議会も「中教審」に変わっていくわけですが、大事な問題は、やはりそういうところで審議することになったのです。そして、それぞれ担当の局が当たっていたように、私は記憶しています。私は、二十何年かな、まだ占領中でしたが、その仕事を離れてアメリカに行ってしまったし、関係していませんので、よく分かりません。

それから、「吉田内閣のときに、文教政策に関する私的な審議会が設置された」と言われますが、これは何という名前ですか。

村上 安倍能成さんの「自叙伝」では、「教育懇話会」と呼ばれています。また、教育刷新委員会の総会でも一度話が出ているんですが、そこでは「文教審議会」と呼ばれています。それで、質問事項には第二次吉田内閣と書きましたが、正しくは第三次吉田内閣のことで、教

育刷新委員会の議事録を見ますと、昭和二十四年か二十三年の五月ぐらいに議論が出ています。それで、これについても教育刷新委員会のほうで心配しているというか、「既に教育刷新委員会という法的根拠のある審議会があるのに、似たようなものが、もう一つ出てくるのはおかしいのではないか」というようなことが言われているんです。

天城 その私的諮問機関が、何をやってたか出ていますか。

村上 これは吉田首相に対して、いろいろな……まあ、茶話会と言ったらかしいでしょうが、質問をしたり、意見を言ったりするような形になっていったようです。まだ、よく分からないんですが……。

天城 私は、それは全然知りません。総理の私的諮問機関というのは、その後も、いろいろあるんですよ。それは、ほとんど正式なものではないのもあるし、小渕（恵三）さんのときに次々につくったものも、私的諮問機関です。あれなんかは、新聞にも出ているから分かっていますけどね。何かつくっては、そこに丸投げしたなんて言われましたね。小渕さんが亡くなると、森さんがそれを全部引き受けたわけではないので、尻切れトンぼでしょう。

伊藤 だからこそ、私的なんだろうなという気はしますが……（笑）。

天城 ちょっと話は飛びますが、大学紛争の頃に佐藤（栄作）さんが、大学の学長とか有識者の方に官邸に来てもらって、話をしたことがありますよ。それも、ある意味では私的懇談会ですよ。それは「会」になっていませんが、二回ぐらいありましたかね。それで、そのときは総理以外にも、文部大臣の経験者も一緒に出てくれないって言われて出ましたね。中曽根（康弘）さんは文部関係はやっていませんが、多分、拓大の学長を兼ねていたからかも知れませんが、そんな会をやったことがあります。そういうのは、いろんなところにあるんですから、

教育刷新審議会のほうでは心配したかも知れませんが、どう言うこととはないんじゃないですかね。

村上 競合させようという気持ちがあったとか、文部省が心配していたとか、そういうことも全くありませんか。

天城 別に、ないですよ。総理が、自分で少し勉強しようというものが多し、有識者の意見を聞くためとか……。大平（正芳）さんのときも、いろいろありましたね。

一般にはあまり知られていないのですが、中曽根内閣のときに臨時教育審議会ができましたね。あの一年前に、「文化と教育に関する懇談会」という名前で、全く私的な懇談会があったんです。中曽根さんは、そのときに「別に急ぐわけではないから、ゆっくりいろんなことを自由に議論してください」と言われて、それで一年近く経ったら、急に「『臨教審』をつくる」と言って、彼の頭はそちらに行ってしまったんです。それで、あのかの官房長官は藤波（孝生）さんなので、「これは、どうするんですか？」と訊いたら、「総理がそう言うので、新しく法律に基づく委員会をつくるので、『文化と教育に関する懇談会』はもうやめます。しかし、せっかく一年やっただから、まとめてくださいよ」と。「まとめると、誰がやるんですか？」と訊いたら、「天城さん、まとめてくださいよ」と言われてね。しかし、みんな勝手なことを言っていたものだから、まとめようがないんですよ。それで結局、ソニーの井深（大）さんと私とで、とにかく毎回の話をまとめて、記録もできているので、報告書も出したんです。昭和五十九年三月です。そのとき、総理の私的諮問機関というのは、気紛れだなど思いましたね。

伊藤 そのときのメンバーは、「臨教審」に移行したわけですか。

天城 全く別です。新しくできた「臨教審」に行った人は、慶応の石川（忠雄）先生と……。井深さんは、行かなかったと思いますね。私も、行きませんでした。

伊藤 全然、別な筋なんですね。

天城 ええ。私なんかは、藤波さんから電話がかかってきて、「こういうのをやるから、出てくれ」と言われただけですからね。ちょうど私が別の用でバリにいたら、ホテルに電話がかかってきて、「藤波です」なんてね（笑）。そんなやり方ですから……。この懇談会のメンバーは、京都大学の田中美知太郎、曾野綾子、山本七平、鈴木健二の方々に、七人でした。

ということで、せっかくのご質問ですが、①②③は、これ以上のことは分かりません。

ミッション・レポート VS. 「学区庁案」

村上 それでは「学区庁」のことですけれども、この間も少し話題になりましたが、田中二郎さんは、あの構想にどのくらい関与なさっていたのでしょうか。

天城 「学区庁案」については、この間は、お話が十分できていないくて、部分的でした。これについては、はっきりさせておかなければならないんですが、発想は田中耕太郎さんです。地方教育行政に関して、結局、教育委員会制度というものが出てくるんだけど、その骨格はアメリカ教育使節団のミッション・レポートに全部出ているんです。

ですから、CIE側はそれをやろうとするし、田中さんは、それとは関係なしに「学区庁」というものを構想されたんです。

田中先生の「学区庁構想」と、ミッション・レポートにある制度とを比べた場合、一致しているところと、全く離れているところがあって、そこをきっちり分けておかなければ、話がゴチャゴチャになります。あと、刷新委員会が答申が出ますでしょう。これは、「学区庁案」を一部取り入れたような案なんです。

特に、ミッション・レポートで言っていることは、「教育行政というもののは、一般の政治から、ある程度独立していなければいけない」という考え方なんです。それで自律性とか独立性とか言っていますが、司法権のような形にはいかないわけですから、どうやって三権分立のシステムの中で教育権の独立を保つかということが、最大の問題なんです。田中さんも、そのことは知っているんだけど、アメリカのほうは、「その基礎は、全て住民の意思にある」と言うわけです。一番底辺からやらなければいけない。だから、公選による教育委員会が必要だと言う。一般の政治に対する国民の意思と違って、「教育の意思を吸い上げる」ということです。前にもお話ししましたが、アメリカでは学校教育が発足したときには、まだ包括的な地方公共団体はできていませんでしたから、教育行政のために基礎的な制度を作る必要があった。理念的には地方自治であり、民主主義なんです。

田中先生の考え方は、行政制度や三権分立の整った時代の話ですから、司法権の独立のようにはいかないけれども、何か政治に動かされない制度はないかということで、旧制帝大の自治を頭に置いたんです。教育行政を、大学自治の制度で担保したら一番いいのではないかと。それで、当時は旧制帝大が七帝大あったので、金沢と、確か広島だっ

たと思いますが——名前は具体的には出ていませんが——その辺に、もう二つ帝大をつくって、全国を九ブロックに分けて、それぞれの帝大の総長が学区庁長官を兼務する、と。それで、大学が大学自治を保っているから、そこに教育行政を任せる。小中学校も全部、その学区庁の中でやろうという案なんです。だから、相対的独立性という点では似ているんだけど、田中さんは「公選によって、住民に基礎を置く」というような考え方ではなくて、あくまでも大学自治というものを頭に置いていたんです。そこが、最後まで食い違った点なんです。

最後には、占領下の民主革命の時代ですから、田中さんのようなやり方は適さないのではないかと、下手すると官僚政治に戻ってしまうのではないかと、とも言われたりしましてね。それから、私学の問題があるんです。九帝大を中核とする制度の中に、私学を置くのはおかしい、と。そういう、いろんな議論が残ってしまつて、田中先生の実権の独立というのは、最後には挫折したわけです。九ブロックというのも、七帝大プラス二帝大で、九つなんです。

伊藤 そのときは、学区長の下に、一種の行政機構みたいなものをつくるんですか。

天城 「学区庁」という役所をつくる。それで、長官を帝国大学の学長が兼務する。「学区庁案」では、全国に九つの教育行政官庁ができるわけです。それで、結局は上からの管理行政ではないか、という批判が起きる。アメリカは、「そんなものは駄目だ。下からなんだ」と言うわけです。

田中さんの案では、「学区庁」に教育委員会を置くんですが、これはあくまでも審議機関という形なんです。さらに、府県にも「学区庁」の支庁を置いて、支庁にも諮問委員会として地方教育委員会を置くこと

というような構想でした。ですが、この案は法案を作るまでにはいかなくて、要綱だけでお仕舞になっています。

伊藤 その要綱を作るのは、天城先生のお仕事だったわけですか。

天城 仕事って、田中先生が言われたことですから、私が担当していたことは事実なんです。

それから、前回は言葉足らずで、文部省の資料の中に、フランスの「学区庁」の資料があったような印象を与える発言をしてしまいました。外国の教育制度をいろいろ調べたので、フランスの教育行政制度では大学区に事務局があつて、そこから小中学校が運営されているということは知っていたんです。学区制そのものについて、まとめた資料があるわけではありません。

今はフランスも制度が多少変わっていますが、フランスの大学では、日本で言う学部が大学なんです。例えば、パリ大学というのは、パリ学区にある各学部の総括です。ソルボンヌとか、その他いろいろあるでしょう。それが、実質的には大学なんです。当時の、フランスの大学の総長というのは、学区庁長官で行政官なんです。言わば、大学学部の協議会議長みたいなものです。

伊藤 先生が、その要綱をお作りになった段階では、私学の問題はどういうふうに考えていらしたんですか。

天城 私学の問題は、高等学校以下と大学と二つありました。大学については、帝大を中心とする「学区庁」に私学は入らないという意見があつて、戦時中、官僚統制を受けていたということで、私学はかなり文部省に批判的なんです。それで、戦後民主化の流れの中で、私学の自主性を保って、私学独自の行き方をしようという意見が、私学に

あつたんです。文部省は当時、国立大学もまだできていないし、専門学校を含めたものを全部、新制大学に切り換えるとか、一県一大学構想とかに忙殺されていたわけです。それで、私学をどうするか、文部省が積極的ではなかった間に、私学が司令部と直接に接触して、私学独自の体制をつくるという動きが出て来たんです。それが私立学校法を作ろうという動きで、それまで財団法人だったものを私立学校法人に改め、私学はそれぞれ独立してやっていくという形になったんです。

それから、高等学校以下についても、「教育委員会は公選」と言っているのは、公立学校の話で、もちろんその中に私学は入らない、と。それで、教育委員会制度を作るときに、私学の一部で、私学の委員会を別につくろうという話が出て来たらいいんです。これは、物になりませんでしたけどね。しかし、教育委員会は公立学校の管理機関であり、私学が教育委員会をつくつたら、また管理機関じゃないか、と。私学は自由に行くとやっているのに、自分たちの首を締めるような管理機関を何でつくるのか、ということですよ（笑）。

それで、もちろん教育委員会の傘下には入らない。公選委員会なんかには入らない、と。従来通りでいいのではないかということになって、知事の傘下に入った。放って置くわけにはいかないし、私学の設置認可の仕事もあるし、ということで、知事のほうに入った。それで大学は、国・公・私立含めて、文部大臣の所轄という言葉を使っているんですね。それは、何か関係ないと宙ぶらりんになっちゃうからということですよ。そういうことで、文部大臣は管理機関ではないんです。私学については、教育刷新委員会や司令部側で、積極的に「こうしよう」というよりも、私学のほうが先に動いていたんだと思います。

それで、私立学校法というのは、あとでできるんですけども、これも法律ですから、文部省で法案を準備して出すわけですが、司令部側と私学側とが接触して、ずいぶん進めていったんですね。司令部というのは、教育刷新委員会がどうだとか、ステアリング・コミッティーがどうだとかと言っても、そうではない別なところで、いろいろなことをやっていたんです。

村上 その場合の私学というのは、どの学校が分かりますか。

天城 私学の連合体ができたんですね。戦前の古くからあった私立大学は「私大連」——私立大学連合会です。それから、新しくできた大学とか専門学校から変わったのは私立大学協会——「私大協」です。それから、どっちにも入らないのは私大懇話会で、その三つの連合体ができたんです。その後、合従連衡はありますが、今でも「私大協」と「私大連」は別ですね。それで、古いほうの「私大連」は大体、中心は早稲田・慶応です。会長も、ほとんど早稲田・慶応から出ているんですよ。「私大協」は、そうじゃないですけどね。それから、「どっちにも入らない」と言ったのは学習院だとか、昔の高等学校——成城とか成蹊とかなんです。

その時分、どこの団体が中心になってやっていたかと言うと、もう一度調べないと分かりませんが、実際に動いていたのは早稲田の浜信泉さんとか明治大学の総長とか、そういう幾つか有力私大の学長が中心になってやっていたと思います。

伊藤 それは、GHQと直で、ですか。

天城 そうです。

伊藤 私大の許認可権は、文部省が持っているわけでしょう。

天城 持っていますよ。それが私立学校法を作るときに、文部省の権

限を大幅に制限しようとしたんですね。でも、設置認可は文部大臣です。それで大きな問題は、法令に違反したときに、どうするかということです。その規定が学校教育法にあって、国公立・私立に共通する事項として規定されていたんですが、私学法で、私学についてはその条文を適用しないことにしちゃったんです。これは、あとまで問題を残しまして、私学の経常費助成を始めるときに、その問題がまた蒸し返されたんです。

ですから、私立大学に関しては、あとでだんだん整ってきますが、大学設置委員会があつて、そこで許認可をする場合に、諮問するんです。しかし、学校法人にならなければいけませんからね。そこで、法人審議会とは別につくるということで、私立学校法人の設置認可のための委員会をつくったんです。これも、私立大学側の人は何名と、委員数を法律で規制しちゃった。だから、ある意味では自己規制で、自分たちの仲間で、いろいろな制度をつくってしまったわけですよ。

それから、(質問に)「学区庁案が読売新聞に漏れた」というお話がありますが、これは何のことか分かりません。出たかも知れませんが、それでも、別に何ともないですね。

それから、「地方教育委員会が姿を消した」というのは、「学区庁」を九ブロックに置くという「学区庁案」がなくなったんだから、地区委員会というのもなくなったんですね。それで、ここでちょっと補足しておきますと、刷新委員会の第一回建議は、アメリカのミッシン・レポートで言っていた教育委員会制度と、田中耕太郎さんが考えていた文部省の「学区庁案」の要綱みたいなものと、その両方をくっ付けているんです。だから、「案」には九つのブロックの地方教育委員会が載っているんです。それが、最後に言ったような形で無理だということで、

最初は載っていたんですが、あとでなくなりました。

伊藤 その「地方」の場合も、公選なんですか。

天城 いえいえ、最初の案では、都道府県教育委員が推薦人になる。それで、市町村教育委員会の委員のほうは、司令部の方針があるものだから、刷新委員会の建議では公選という前提になっているんです。だけど、その後、刷新委員会で公選は無理だと言って、推薦制にしたかどうかという案も出るんです。その地方教育委員会が姿を消したというのは、九帝大中心の「学区庁」の教育委員会ですから、当然、姿を消してしまうわけです。

さっきの、読売新聞に構想がバレたというのは、何かに載っていたんですか。

村上 第三特別委員会の議事録の中で、渡辺鉄蔵さんなどが、「こういうのが出ているけれども、どういうことなんだ?」というふうに、質問をしていたと思います。それを受けて田中二郎さんが、「実は、こういうこういう内容なんだ」というふうに、「学区庁構想」に関して説明されていらつしやいます。

天城 それから、「田中二郎さんが、どこまで関与したか」というご質問ですが、これもご質問の意味がよく分からないんです。とにかく耕太郎先生が、「私は私法専門だから、行政法は分からない。これからの立法は全部、行政法なんだから、東大で行政法の先生をやっている田中二郎君に手伝ってもらいますから」と言った。どうやって手伝ってもらおうのかと思ったら、いつの間にか「参与」という名前ですね(笑)。それで、文部省に、よく来られましたよ。これは、前にお話ししましたね。

伊藤 それは、文部省の参与ですか。

天城 そうです。別に部屋があるわけでも、何でもありませんよ。当時の調査局長の部屋に來られたので、我々も先生とお話は、いつもそこでやっていました。

前に、私が何か研究会をつくったというような意味のことを申し上げたかも知れませんが、それは別に、正式にそういうものをつくったわけではなくて、何人かで集まって、田中二郎先生のお話を聞いていたわけです。

伊藤 それは省内で、ですか。

天城 局長室ですよ。局長室の端っこでソファに座って、いろいろな話を伺ったんです。主に、行政の立法上の問題をやっていただくので、田中先生が戦後の改革をどうやったかというようなことよりも、どうやってそれを法律の形にするかという、その作業をやっていたんだいんです。

村上 その集まりに参加なさったのは、天城先生のほかには、どんな方がいらしたんでしょう。

天城 審議室の連中ですね。

村上 この間おっしゃっていた宮地茂さんとか……。

天城 そうですね。宮地君とか安達健二君とかね。

現職教員の被選挙権——教育委員

村上 田中二郎さんがいらしたしたのは、田中耕太郎氏が学校教育局長をやっていた頃からですか、それとも文部大臣（昭和二十一

年五月〜二十二年一月）になってからですか。

天城 文部大臣になってからですね。

村上 ということは、春が過ぎて五月、六月になってからということですか。

天城 そうですね。

それから、この前は話が部分的になっていたもので、全体が曖昧だと思うんですが、ミッシン・レポートは教育委員会制度の骨格となる構想をかなりはつきり出しているんです。文部省では、田中さんが「学区庁案」という構想を作っていた。それで、刷新委員会は、それらにどう対応したのか。刷新委員会の建議というのは、幾つかあるんです。第一次案、第二次案と出てくる。その関係が一体どうなって、最後にああいう制度になったかというところが、ややこしいんです。この前、それをまとめてお話しする機会がなかったので、今日整理してお話しますと、刷新委員会はミッシン・レポートを基にして、教育委員会制度を作らなければならないと思っていたんです。文部省は、まだ法案にならないけれども「学区庁案」という構想を持っていて、これも刷新委員会に要綱（昭和二十一年八月、教育行政刷新要綱案）で示したわけです。そこで、九つの地区委員会を入れたり、ミッシン・レポートの基本を取り入れたりして、刷新委員会の建議になるわけです。

その建議が、形の上で第一次、第二次、第三次案と三つあるんです。これは、大体一カ月ぐらいの間をおいてです。なぜ、その三つがそれぞれ変わっていたのか、私も細かいことは忘れてしまいました。文部省は、「学区庁」をつくって、文部大臣の権限をなるべくそっちに譲り、中央にも文部大臣の諮問機関として、中央教育委員会を置く、と。そ

ういう考えを採ったんですが、十二月の末（昭和二十一年十二月二十七日）に刷新委員会から建議（「教育行政に関すること」）がございましてね。この刷新委員会の第一回の建議では、教育財政の問題に言及しているんです。ところが、ミッシン・レポートは、財政のことは何も言っていない。当時、財政問題は大きな問題です。六・三制に変わる前提として、戦災復旧が緊急の課題でした。

それで、刷新委員会の建議を受けて文部省が準備した法律案には、三つの名前があるんです。十二月に建議を受けて、「地方教育行政に関する法律案」というのが、翌年（二十二年）の一月十五日に出ているんですね。それから三カ月経って、四月三日には「地方教育行政法要綱案」となっているんです。そして、五月二十日に「地方教育委員会法要綱案」と変わってきているんです。

それは要するに、ミッシン・レポートの評価の仕方と文部省の「学区片案」との間で、だんだん意見が詰まってきた。特に、この間に司令部との交渉がいろいろあったし、それから片方では教育基本法（昭和二十二年三月公布）を作らなければいけないし、学校教育法（同）も作っていかねばいけない。教育委員会法というのは行政組織ですから、自治省その他との関連が多くて、みんな同時にやろうと考えてはいたんですが、とても間に合わないんです。それで教育委員会のような、行政組織のほうは後回しで、だんだん時間がずれていったんです。その間に周囲が固まってきて、少し置き去りを食らっただけ時間もあったものですから、だんだん形を整えてきた。刷新委員会の趣旨を最も忠実に生かした「地方教育行政に関する法律案」というのが、一番の基本になるわけです。というのは、これは財政の問題も入っている。やがて、ブロック案は外れていくし、最終的に、だんだんミッ

シオン・レポートに近い方向に向かっていった、結局、三案のうちの、最後は「地方教育委員会法要綱案」という、昭和二十二年五月二十日のものが、文部省の最終案になるんです。そのプロセスがいろいろあるんですが、そういう両方の歩み寄りみたいなものがあつたんです。

その間に、選挙をどうするかとか、設置単位をどうするか、難しいことがずいぶんあつたんです。それで、昭和二十三年六月十五日に、とにかく、地方教育委員会という、範囲を狭めた行政機関の設置という形の法律案を国会に提出して、国会でも散々修正を受けるわけです。修正を受けるのは、もっともなんです。国会で質問されても、提案者が自分の意思でないものを出しているわけですから、説明できないですね。速記録を見れば分かりますが、実にしどろもどろの答弁しかできないんです。それに国会で突かれた点は、ほとんど、我々が司令部と散々喧嘩して、「これは駄目だ、駄目だ」と言うのに、向こうが押し付けるので、やむを得ず国会に出したものですからね。国会でも、そこが一番問題になっているんですよ。妙な審議でしたね。

小池　ところで、これは「森戸辰男文書」に入っている教育委員会関係の文書のコピーです。

天城　これは、何かに載っていたの？

小池　いいえ。森戸さんが文部大臣期に、執務のときに使っていた資料の中から、教育委員会関係のものをコピーしてきました。見ていただくと分かるんですけども、まず昭和二十二年段階のものはありません。二十三年以降の資料です。

天城　これは「森戸文庫」に入っているの、広島大学にあるの？

小池　そうです。いま僕が整理しているんです。それで一番上にあるのが、「教育委員の選挙と無報酬制度の不相当とする諸点」というもの

で、これは何年に作られたのかは、ちょっと分からないんです。それから二番目が、「秘」と打ってありまして、「教育委員会法案要趣」ということで、司令部の意見と文部省の意見と参考意見とを並べて、文部省が二十三年の四月二十六日に作ったものです。それから、五月十四日のCIEのニューゼントとの会談メモがあります。二十三年です。この当時、朝鮮人学校の問題があったわけですが、それと同時に後半の部分で教育委員会法に関する文部省の意見について説明しています。天城 これは河井ミチさんですか。

小池 そうですね、河井ミチさんです。彼女が、いろいろ説明するんです。しかし、ニューゼントは、「第二の教育委員の選任法について……」云々と言ったあと、「最後の決定はマッカーサー元帥にある」というふうに宣言をする文章です。

その次の頁は、日教組の修正意見です。その次が、これはちょっとよく分からないんですけれども、「教育委員会法案に関する日本政府の意見案」で、これは「連調次長案」と書いてあるんですよ。

伊藤 連調次長というのは、何だろう。

小池 終戦連絡調整事務局の次長ですね。それが政府案を取りまとめて……。

天城 政府の対司令部窓口をしていたんです。

小池 それを取りまとめた案です。そのあとが、昭和二十三年六月十日に教育委員会法案を閣議決定したときの「要綱案」です。その次は、昭和二十三年九月九日の、これは国会審議が終わって、全部決めたあとなんですが、ニューゼントと森戸との会談記録です。この中で面白いと思いましたが、森戸さんが、「其の改正の時、私共は非常に心配し、これで良いのかこれで良いのかと尋ねましたが、よろしいという

ことでしたのでそのままにしておきましたが、あの時は教員組合の圧力が加わって、ああいうことになりました」というふうに述べていることです。要するに、国会の修正に関して、教員組合の圧力があったというのは、森戸が……。

天城 これは、教員の公選の話？

小池 ええ。要するに、教育委員会法が施行されて、選挙が行われるわけですが、その選挙前に教育委員会法がいろいろ修正されてしまったわけですね。そのことについては、ニューゼントも森戸も、あまり愉快ではなかったわけで、そのようなことが書いてあります。「そのことで、このような修正になるのは、もう分かっていたことじゃないか」と。「そのことは、大丈夫だ大丈夫だと言っていたじゃないか。あなたがこれで良いと言うから、こういうふうになったんだよ」と、森戸は言っているわけですね。

それから、「参考資料」と書いてあるのが……。これはちょっと順番が狂っていますが、「第十七回教育刷新委員会総会決議 参考資料二」と書いてあります。その次に「一」がありまして、これは読んでよく読めないのですが、「教育委員会法制定過程の要旨」というものです。あとは全部、その付属文章になっています。

伊藤 これは読んでいて、よく読めないね。

小池 以上のようなものです。これは、森戸さんの「文庫」の中に入っているんです。

天城 森戸先生は、よくいろんなものを取っていたんだね。

小池 ええ、不思議なほど……。ご自身は、ご自宅を持たれたことがないわけですね。ずっと、官舎にいたわけですから。大臣のときも間借りをしておられたわけですし、広大のときもずっと官舎におられて、

そのあとはNHK学園の官舎におられたり……（笑）。最後に、今の奥様と結婚されて、フランシスコ・ヴィラという、まあ老人ホームみたいなものなんですけれども、初めて自分のお金で買った家に入られた。その間、溜め込んだ資料は、息子さんのところにあつたり、あるいは一部、自分のお姉さんのところにあつたり、そのお姉さんのところにあつたものは「横浜市史」に入りました。奥様と息子さんが持つておられたものが、「森戸文庫」という形で、広大が整理しているんですけども……。

天城 そうすると、「森戸文庫」には、いろんなところのものが全部、集大成して入っているの？

小池 いま集大成しているところです。横浜のものも、全てマイクログレコピを撮りましたから、基本的には全部です。

天城 横浜は、どこに入れているの？

小池 横浜市史編集室ですね。これは、お姉さんの息子さん——森戸さんにとっては甥にあたる方が、横浜に住まっていたんですね。それで横浜に寄贈するというか、そういう形になりましたものですから。

天城 細かいことは分からないけれども、流れは私も大体分かります。

小池 この滲んだものなんかは、先生が書かれたものではないですか。

天城 それは分からないね。

伊藤 字から見て、どうですか。

天城 よく見ないと、分からないね。

それで、今、ちよつと途中まで話しましたが、（教育委員会法に関しては）国会で修正された問題が、最後の問題なんです。それは、我々が司令部と散々交渉をしたにも拘わらず、通らなかった点なんですからね。国会がこれを審議していて、「政府の答弁は、なつちよらん」と

言つて、あのとき、どこを通してやったのかは知らないけれども、国会側が自分たちで司令部と交渉したんです。前にお話ししましたね。速記録を見ると「休憩」となっていますが、その休憩の間に、実は交渉をしていたんです。それで、司令部とずいぶんやつたらしいんですけども、我々の言つたことほとんど同じなんです。

その中で、教育委員会をどの単位で設置するか。人口一万という線ですね。これも、我々が散々反対していたんですが、国会でもまたそういう質問を受けて、我々も答弁ができないんです。最後に、そんなややこしいことをするよりも、地方分権なのだから、全市町村に置いたらどうかということで、これが修正になつちゃうんです。

それから、もう一つは被選挙権で、教員は認めないということ。これも現職の教員はいけないという形でやつたし、教育職員の免許を持つている者は、教育委員会の委員の被選挙権を有しないという形で出したんだけど、国会では「そんなのは平等権に反する。公選でやるなら制限をするのはおかしい」と、制限を外してしまつたんです。我々も、レイマン・コントロールの立場からいくと、教員が出るのはおかしいけれども、選挙資格を制限してしまつたら一般公選にならないからというので、散々議論していたんです。そこで、「当選したら、現職は駄目だという形にしよう」と言つたんだけど、国会はとにかく初めから条件なしに広げる、と言う。それで、その原則論に対して、司令部も呑んでしまつたんです。だから、国会修正で、「条件を全然付けない、誰でも立てる」となつたんです。

伊藤 要するに、任命権を持つている教育委員会を、任命される教員のほうが、その委員になれるということになるわけですか。

天城 選挙法の趣旨からいけば、公選でやる以上は、刑罰などの欠格

条項以外は、誰でも立候補資格があるのだから、「教員がいけないというのは、おかしいじゃないか」と。それが、国会の主張なんです。それだけの話なんですよ。司令部は、「レイマン・コントロールだから、教員はいかん」と言うし、「そんな制限を付けるのはおかしい」と、国会が言い出した。文部省も初めは、教員の立候補を制限するほうがいいんじゃないかと思っていたんだけど、最終的な法案を作るときに、法制局かどこから、「そんなのは、おかしい」と言われたんですね。司令部は、「教員は立候補できないという条項を入れる」と言ったんです。それで、文部省が初め、それを入れて作ったんだけど、確か法制局だと思いましたが、「そんなのはおかしい」と。それで、国会も同じ議論になって、「森戸さんもニューゼントも心配していた」と。さっき言っていたのは、そこなんです。

ところが、いよいよそういう形で決まりますと、今度は教員の立候補者が出て来たんです。それで、これはちょっと先の話になるんだけど、でも、地方民事部なんか「教員の立候補は、けしからん」と、干渉を始めたんです。それで、余計に組合の反撥を買ってしまったんです。法律に違反していないじゃないか、と。これは非常に大きな問題になったんです。

それから、選挙についても、政党選挙じゃなくて政党色を除くという形で作ったのに、日教組は政党以上に力を持ってきて、それがどんどん出て来た。

あと、報酬の問題なんていうのは、実につまらない話なんです。ボランティアだから報酬なんか取ってはおかしい、費用弁償だけだ、と。ところが、公安委員とか農地委員とかという行政委員は、報酬をもらっているわけです。もらっているというか、そういう制度があるわけ

です。それなのに、なぜ教育委員会だけが報酬を支払ってはいけないのか、と。それで、これも散々議論したんだけど、どうしても駄目だ、と。レイマン・コントロールだ、と。簡単に言えば、ボランティアでいいんだということなんです。ところが国会では、戦後の、みんなが貧乏しているときに、ただ働きとは酷い、報酬を出せ、と。こっちが言ったことを全部、また同じことを繰り返しているんです。

それから、教育長の権限が問題になった。これは、国会の議論がおかしいんだけど、行政委員会というものを十分に理解していないものだから、原案では教育長の権限が強過ぎると言うんです。我々は、「アメリカでは教育長は単なる事務局長ではないし、専門職として張り付いている。歴史的に発展してきた流れから、アメリカの教育長は、みんなこのような立場でやっている」と説明したのですが、「あまりにも教育長の権限が強くなって駄目だ」と、国会は反対した。教育委員会は議決機関、教育長は執行機関というような考え方が抜けないんです。合議制行政機関の意味が分からないので、これは国会の意見が通ってしまった。

それから、もう一つ大きな問題は、高等学校の移管問題です。これは前にもちよつと申し上げましたが、司令部は県立高等学校を所在の市町村に下ろせ、移管しろ、と。要するに、一番ベーシックな公共団体が国民教育を管理するべきだ、と。県立一中だの県立第一高等女学校だなんて言っているのは、おかしい、と。しかし、「いきなり下ろしたら、市町村の財政が大変だし、県は県内で中等教育の地域配分を頭に置いてつくっている。だから、たまたま、それがどこかの町にあるから、その町に下ろせと言うのは駄目だ」と、散々やり合ったんです。これは結論としては、通学区域という形で、司令部と調整がきま

た。

もう一つは、「人事権を市町村に下ろせ」と言われたんだけど、「それでは狭い範囲で駄目だ。給与負担は都道府県になっているので、一致させたほうがいい」ということで、我々は人事権を下ろすことには、最後まで反対したんです。しかし、「学校を所管している以上、人事権を持たせろ」と、どうしても司令部は呑まなかったんですね。しかし、法案が出ていたものだから、次のような案を国会で作ったんですね。「人事その他、共通する必要事項を協議するため、都道府県教育委員会と、その地域の教育委員会との間で連携して協議会を設けることができる」と。しかも、「この協議会での議決は全会一致」という規定を入れたんです。全会一致の機関なんていうのは、全然動かないに決まっているんです。要するに、片方が上級、片方が下級じゃないということを明瞭にするために、同等で連絡協議会をつくるということなんです。

それから、これもおかしい話なんですが、「教育委員会の運営に要する経費及びその他所掌に関わる経費は、国庫からこれを補助することができる」という規定を、国会修正で入れたんです。「経費及びその他所掌に関わる経費」というのは、何のことか分らないんです。教育委員会に関わる経費と言えば、機関の経費ですから、そんなものは当該団体が払うのが当然です。それ以外の教育に関わる経費は、国庫から補助ができるというのは、やろうと思えばできるんですから、何もここに書かなくてもいいじゃないか、と。六・三制の学校建設費だとか、給与の国庫負担をどうするか、という問題はあるわけです。そういう問題を教育委員会法の中に書くのはおかしいじゃないか、と言っていたんだけど、入れてしまったんです。実害はないんです。

が、こういう規定が入ってしまった。

もう一つ、設置時期を、いつにするかということです。「学校教育法や教育基本法と同じときに公布しろ」と言われましたが、間に合わないです。これだけの制度を全国的に普及徹底し、選挙をやるためには時間がなきゃ駄目だし、ましてや市町村同時になんてできないので、府県と大きな都市に限ろう、と。それで、町村は延ばすようなことを、いろいろ細かく付則で入れたんですね。これは昭和何年、これは昭和何年と入れたんです。

そのような修正がありまして、とにかく、もう日にちが切られてしまっているものだから、六月十五日に法案を出して、こんなのは例外なんだけれども、衆参同時に審議を始めたんです。衆議院で通ったあと、参議院を通していたら間に合わない。それで両方で同時審議をしたんです。大臣、政務次官と手分けして、政府委員にも手分けして、やっと通った。それもギリギリで、第二回の国会の、最終日（七月五日）の終鈴がリンリンと鳴る直前に通ったんです。形式的には、法案は最後の日に参議院に回って、終鈴まで委員会と本会議で議論してね。そんな切羽詰まった状況でした。

国立大学の地方委議問題

伊藤 この法案が通ったというのは、GHQのバックアップというところで。

天城 バックアップというよりも、「やれ」と言うわけですからね。

伊藤 修正は、党派とはあまり関係ないわけですか。

天城 関係なかったと思いますね。

それから、これと関連しまして、教育委員会法制定で司令部と交渉をしているときに、私立学校をどうするかというのが問題になったんです。さつき申し上げたように、私立学校法を作るという構想があったことと、私立学校は公選の教育委員会の所管から外すこととなったわけです。

もう一つ、これも当時、大きな問題だったんですが、国立大学を地方に委譲するという話が、CIEからあつたんです。そのときに司令部から、「旧帝大は文部省直轄でいいけれども、その他の国立大学は全部地方に委譲すべきだ」と。これは、さっきの高等学校と同じで、地元に移管しなさいということです。委譲したら誰が所管するのか。教育委員会か、という問題になるんです。これは、国立大学の在り方の問題で、教育委員会制度とは別個のことです。

半年ぐらい音沙汰がなくて、十二月（昭和二十二年）に文部省の担当者で司令部に呼ばれた。さつき言った「要綱」は、みんな司令部は口頭ですが、このときはメモを取ったものが残っている。そのときに、国立大学の地方委譲も言われたんです。ところが、国立大学の問題は当時、学校教育局が所管していたので、その課長が呼ばれて行った。新学校制度が新しくできて、まず専門学校を大学にするだけでも大変だし、それを地方に委譲すると言っても、その受け皿作りをどうするんだと言うわけですからね。文部省は、とてもそんなことはできないという前提で、大学所管の問題は教育委員会制度とは切り離して、別途慎重に検討しなければならないという態度を取ったんです。実は、私は司令部からは教育委員会制度についてはいろいろ言われたんです

が、大学の地方委譲の問題については学校局の庶務課長に伝達があつたんです。そのときに彼が、「これは大変だ。こんなことできるものか」と言つて、これは表向きになっていませんが、ある新聞記者にポロッと漏らしたんです。そして翌朝に、バツと出た。それで、大学側から猛反対が起きて、できなくなった。彼が非常にタイミング良く、リークしちゃったんですね。

所澤 情報を新聞社に漏らしたことは、問題にならなかったんですか。
天城 「漏らした」とは、誰も言わないですよ。新聞記者も、どのソースだなんて言わないですからね。漏らしたのを知っているのは、僕だけです。

所澤 ということは、CIEはいろんな方に話しているということですね。つまり、一人にしか話していなければ、必ずその人が漏らしたということが分かりますよね。

天城 他のことは知りませんが、これはちょうど同じ時期に学校局に言われたんです。それで、彼が上手く、スパッとリークして……（笑）。確か、東京新聞の記者で、私も知っているんです。

それで、刷新委員会でも大変心配して、「大学の地方委譲と自治尊重並びに中央教育行政の民主化について」という、別の建議を出して、「地方委譲反対」を唱えたわけです。だから、相当大的な問題でした。それからもう一つ、財政問題があつたんです。当時、財政が非常に困っていましたから、刷新委員会も第一回の建議で、教育財政の整備という項目を出しているんです。特に、義務教育における人件費の負担が最大の問題で、それが十分保たれるように、「国庫負担を大いに増やせ」という意見が載っています。最初に触れたように、「教育委員会の教育経費は、国庫補助を申請することができる」という一項が入っ

ていたんですが、その問題を受けて、財政問題について、教育費をどうするかという話を、また司令部と始めているんです。教育委員会法には載っていませんが……。

そこで司令部が、地方分権しても「全国的な教育のスタンダードは、国で作ってもいい」と言うんです。そして、どういうふうに教育費を賄うかと言うと、原則は国と府県と市町村で分担する、と。国の出す金は、不均衡の是正を基本とする、平衡交付金みたいなやり方ですね。国がスタンダードを作って、原則的には市町村、県が負担する。文部省の言う通りでいい、と。ただ、いきなり国庫負担を増やせと言わずに、スタンダードから見ても、不均衡は正のための金を出す。それはそれで、上手くいけばいいんですね。都道府県や市町村は、「うちは、国の基準以上の経費を出してもいい」とか、「地方分権になったんだから、国が作るスタンダードを保証するという前提でどうだ」とか、そのようなことを両方で話していたんです。ところが、この問題は国の財政制度に関わりますから、「文部省の一存で、これをやります」と言うわけにはいかないので、教育財政の基本的な構造についての話し合いは、司令部と文部省との間で行われたんです。けれども、教育委員会制度の実施と同時に、国庫負担ができると思っていなかったんですね。こういう方向で考えようということだったんです。

それで、ここで一番の問題は、国のスタンダードをどうやって作るかということ、これは大問題なんですね。それができたら、平衡交付金みたいな金の出し方でいいと言うんだけれども、それができるかできないか分からないわけです。基本的には、こういうことではないだろうと考えてやったんですが、その後、文部省はどうとうこれを作れなかった。

それから、教育予算の「二本立て制度」というものがあるのです。府県教育委員会で教育予算を編成し、知事の査定を受けますね。知事は、府県の予算を一本にまとめて議会に出すのが原則です。教育委員会は知事の査定を受けるので、どうやって教育財政の独立を図るのか。それで、知事部局の査定を受けて駄目であっても、教育委員会は、なお必要と考えたら、直接議会に（教育委員会から）予算案を出せる。それで、知事の出したものとどちらが良いか、議会が判断する。その「二本立て予算」という案を考えました。

これは、司令部の考えではないんです。最高裁は三権分立で独立していますが、予算をどうするかという問題があつて、最高裁の予算について、この方式が採られたんです。法務省が予算を作りますが、それを最高裁が不十分だと考えたら、最高裁はそれと併せて、自分の案を国会に提出できるんです。しかし、これが実施されたことはなかったと思いますけどね。この構想は、田中二郎先生のものでした。

伊藤 その場合、歳入はどうするんですか。

天城 歳入じゃない、歳出ですよ。

伊藤 歳出だけですか。

天城 歳入権はないですから。

伊藤 そうすると、やっぱり教育税の問題になるのかなと思ったんですが……。

天城 不徹底かも知れませんが、予算編成に関して、最高裁はこれを認められているんです。今はどうなっているか知りませんが、おそらく、これは実施されたことはないと思います。教育委員会もこれに倣って「二本立て予算制度」を採ったんです。これは、実施されたケースが一件、岩手県でありました。このときは、教育委員会の案が通り

ました。しかし、これは財源その他、いろんなことが複雑になって、自治省側が物凄く反対したんです。それでも取り入れたというのは、とにかく教育財政を確保しようという意欲が強かったんですね。

以上の、国立大学の地方移譲、私立学校法の制定、教育財政の確保の三つが、教育委員会法の制定過程では表に出なかったけれども、関連した大きな問題でした。

村上 教育委員会の委員に、地方議会の議員が入るようになっていますが、あれはどこからそういう話が出て来たんですか。

天城 僕も、どこからというのは思い出せませんが、教育委員会は執行機関か議決機関かという問題があつて、教育に関しては議決機関みたいなところもあるので、そういう経緯の中から、議会との連絡を図ろうということを入れたのではないでしょうか。これは、あまり大きな議論もなく通ったんです。

村上 CIEのほうも、全然構わないと考えたわけですか。

天城 そうでしょうね。この問題について、特に議論した記憶はありません。

村上 文部省の中から出て来たんでしょうか。

天城 そうでしょうね。原案ですから、CIEの発想とも思えないし、国会修正でもないと思います。

考えてみると、おかしいですよ、審議機関の議員が執行機関に入っちゃうというのは……。

伊藤 でも、昔の府県会には参事会があつて、これは執行機関でしょう。

天城 府県はどうだったのか……。市が、そうですね。ロンドンがそうですね。市長がいなくて、参事会みたいのがあつて、それがや

っていたんですね。

伊藤 その参事会の長が、市長になるんですか。

天城 市長ではないですが、そうですね。イギリスでは社会党がロンドン市政を牛耳っていたものだから、サッチャーがバツとやった。保守党は、ロンドン市に手を付けられなかった。それを、彼女が根っこから潰しちゃったんですから……。

日教組に乗っ取られた「教育」

伊藤 実際に、日教組に教育委員会が完全に支配されてしまうことも起こったんですか。

天城 選挙をやってみたら、日教組に乗っ取られてしまったところがたくさんあるんですよ。現職は続けられないけれども、日教組が推薦して出て来た委員がたくさんいるんです。あの時分、国会にもずいぶん教員が多かったんですよ。社会党や日教組ではなくても、あの時分、「教育立国」とか何とか言つて、教員がたくさん政治に出て来たんですよ。特に地方では、日教組推薦の議員が出て来た。極端なところでは、教育委員会の委員長に県教組の委員長がなつて、教育長には書記長がなつてしまった。それがあとで、公選制廃止の大きな理由にもなつた。これには、司令部も困つたでしょう。レイマン・コントロールと言つたつて、おそらく三分の一ぐらいは教員出身……。

小池 大体、三五パーセントぐらいだったそうですね。それで当選率が九六パーセントぐらいで、立候補したら、大体通るんですよ(笑)。

天城 第一回選挙の資料が全部ありますが、委員長も教育長も日教組なんていうところがありますからね。

小池 党派という形では出て来ないで、無所属という形で出るんですが、実際には教員組合の出身という人が多いようですね。

天城 そういう県では、「公立学校は日教組が支配している」というので、父兄が公立から逃げちゃったところもあるんです。

所澤 実際に日教組が支配した場合に、学校の中は、具体的にどういうふうに変わったんでしょうか。

天城 まず、学校の中に組合の支部がでちゃうんですね。だから、校長のコントロールが利かない。職員会議は、組合の集会になっちゃう。一番極端なのは、これはあとで事件にもなりましたが、夏休みの宿題の日記帳に『毛沢東語録』が入っていたんです。当時は、何事も革新と保守とに分かれていましたから、社会党を中心に、共産党も出て来て、あちこちで争いがあったんですね。ですから、現場で一番困ったのは、職員会議が日教組に乗っ取られて、校長は孤立無援……。

これは、理論的にはいろいろ問題があるんですが、昔は学校の法律関係は、「营造物理論」として取り扱っていたんですね。「营造物理論」でいくと、营造物の長というのは、ある意味では包括的な管理権が認められていた。学生処罰も、みんなそれでやったわけです。昔の公務員も、「あれやれ、これやれ」と命令ができた。ところが戦後、「营造物理論」は強権的だということで、行政法理論の中から消えていったんです。これは、大陸法の系統なんですね。例えば、フランス法ですね。戦後は英米法が入ってきますから、権利義務に関することは、法律の規定がなければいけないことになった。それで、校長は手も足も出なくなっちゃったんです。職員会議なんていうのは、ただ職員の意

見を聞く会だったのが、議決機関みたいになっちゃって、校長は職員に対して、何もできなくなりました。戦後は、そのところが、学校現場での大きな問題でしたね。

大学でも、学生処罰の問題で、ずいぶん困ったんです。その後、判例で、だんだんと明瞭にはなってきたんですが、当時は新しい行政法の理論の中から、「营造物理論」というものがなくなってしまうものですね。それで、裁判も民事と刑事のほかに、行政事件というのがあったんです。行政事件訴訟法というのが別にありまして、別系統でやっていたんです。しかし、それも廃止されて、全部一本の司法になった。ですから、行政事件も一般の司法裁判で行うことになったんです。その後、法律が整って、例えば学校で事故が起きたときには、营造物を設置・管理する設置者の責任だということで、今は市や町村が賠償責任の対象でしょう。そういう判決によって、少しずつ直されてきたんです。教員個人の責任ではない、建物の管理が悪かったからだとか、そういう公務員を雇っていたからだとかいうことで、設置者の責任になるんです。国の营造物については、損害賠償に関する法律（国家賠償法第二条）ができていますね。

伊藤 校長には業務命令を出す権限がないんですか。

天城 特別権力関係という考え方は、ないんですね。あとで出て来ますが、超過勤務をどうするかというのは、最後まで揉めたんです。その後、僕は初等中等教育局長になったときに、「超勤問題」で、もう一遍揉めたんです。「教員に『超勤』を出すな」という議論と、「実体は、やっているじゃないか」という議論とがあって、結局、調整手当を出すことにしたんです。

伊藤 GHQは、日教組に乗っ取られたようなところについて、あま

り干渉はしなかったわけですか。

天城 労働運動や労働組合を勧めたのは、司令部ですからね。

村上 教育委員会制度の中で、要になるのは教育長であるわけですね。文部省が最初に案を考えた段階で、教育長になるような人というのは、どういう人物を想定していたらっしゃったんでしょうか。

天城 教育委員会制度を持ち込んだアメリカは、「教育長というのは、教育職だ」と言っていたんです。「普通の行政官になるものではない」と言うんですね。それで、「教育職としての免許を持っていないといけない」と言い出して、免許法に教員のほかに教育長というのを加えたんです。それで教育長は、みな「教育職員免許法に基づく教育長」の資格を持つていなければいけない。ところが、行政官から出ている人がたくさんいたでしょう。そういう人たちには、一定の研修を受けることによって、教育長の資格を与えることになった。今でも全国の教育長の半分以上は、教員出身じゃないですか。

伊藤 その資格を、教員出身の人は取りやすいわけですか。

天城 教育長の免許と教員の免許は別ですが、教員の免許を持っている人は、すぐ取れますよ。

村上 内容的には教育関係の……。

天城 教育関係のことです。そんなことをしていたら、とても教育長に人材は得られない、偏ってしまうから駄目だと言うので、教育委員会制度改正のときに廃止になったんです。でも、慣習的に、今でも教育長は県内の高等学校長をやった人が多いようです。

伊藤 大体、そうなっていますね。

天城 東京都では、行政職の人がなっていますね。地方に行くと、県内の有力高校の校長さんがなっていますね。

伊藤 指定席みたいになっているようなところがありますね。

所澤 校長の権限の問題なんです。最近、「小中高校の職員会議は伝達機関であって、議決機関ではない」ということがよく言われて、東京都なんかも教育委員会の訓令か何かが出されています。これまで、職員会議が議決機関のような雰囲気になってしまっていたのは、教育委員会制度と関係があるんですか。

天城 教育委員会制度と言うよりも、戦後、「營造物理論」が後退して、包括的な命令権が出せなくなったことです。職員会議も、別に議決機関でも何でもなかったんですが、組合が中心で、組合の分科会みたいになってしまったんです。今は教育委員会は「管理規則」を作れることになって、校長が何をするかということを明文化しています。これは、大学の学長も学部長も同じなんですけど……。

所澤 「營造物理論」が弱くなっていたというのは、法令が変わったということなんですか。それとも、実体が変わってきたということなんですか。

天城 日本の法体系が大陸法から英米法に変わって、新しく作られてきた行政法というのは、英米法的な思想に基づいているわけです。そういう前提で、法解釈がそうなっちゃったんです。だから、「營造物理論」を振りかざして議論することがなくなりました。今、營造物に当たる物を、行政法では「公物」と言っています。ですから、身分関係も、昔は「營造物理論」で職務命令を出したり、業務命令を出したんだだけども、今は、そういうものは全部、権利義務に関わるものだという事で、法令の根拠がなければできなくなりました。国家公務員の場合には、一々法律ではなくて、人事院がそれに代わってやるという事で、「人事院規則」という、かなり強い規則がありますね。地方も、

同じようなことをやっている。「人事院規則」というのは、公務員に対しては、法律と同じ力を持っていますね。

小池 教育委員会法ができて、財政の問題で、場合によっては提出権を持たせるということになった。そうなりますと、当然、地方分権というか、地方自治を扱っている自治省との対立関係は、非常に大きくなりますし、地方でも行政体系が二つという形になりますよね。このことに関して、法案成立の段階からその後に至るまで、先生はどのような注意を払われましたか。あるいは、自治省のほうから文句が出たり、というようなことはなかったんでしょうか。

天城 財政問題ですか。

小池 事務が二系列みたいな形になりますよね。教育委員会があつて、地方の問題ということになると、財政の問題が一番大きな問題になると思いますけれども、そのことに関して自治省のほうは……。

天城 それは、法律を作るときに散々議論して、できた以上はもう……。

小池 しょうがない、という感じですか。

天城 そうでしょうね。

小池 やはり地方では、いろんな問題が起きたんでしょうか。

天城 それほどでもないと思いますね。「二本立て予算」の例も、一件だけです。

伊藤 教育委員会の人事ですが、県庁の中で異動とか、そういうのはやっているわけですか。

天城 ええ、やっていますよ。今でもやっています。

伊藤 元から県の教育委員会は、県庁の人事でやっているわけですか。天城 教育委員会ができる前にも、教育部には「視学」その他の仕事

で、教員出身者がかなり入っていました。今は指導主事ですけどね。優秀な教員が、かなり入っていたんです。今でも、それはそういう形で、指導主事とか課長クラスには、教員出身者が入っています。

伊藤 人事体系は、一般の行政職とは違うんですね。

天城 事務局職員については、違いはないと思いますよ。

教員との関係が——これは細かい話になりますが、「視学官というのは、けしからん」と言うんですね。「視学」というのは、教員の中で優秀な人がなつて、学校の教育の指導をやるわけです。同時に「視学」が人事を、実際には左右していたんです。行政をやるためには、人事とか行政事務とか財政を握っていないと、できないんです。しかし、教員出身ですから、財政には縁がないし、行政事務もそんなにやる必要はなかったの、結局、人事に力を注いでいたんです。有力な「視学」の中には、人事のボスになっていた人もいたのです。それで、そこを止めなければいけないというので、「視学」という名前をやめて指導主事——ティーチャー・コンサルタントという名前になった。それで、「お医者さんだ」と言うんです。教員の教育上の問題について、相談相手になる。これも講習会をやったり、免許法を改正したりして、それで指導主事となったわけです。

小池 「森戸文書」の中に、結構、陳情みたいなものが入っているんです。それは、戦前の「視学官」の人たちの多くが、公職追放みたいな形になったので、自分の「身分復帰」というような陳情書を書いているんですね。それで、「視学官」の人たちが指導主事になつていく過程の中で、当然、人数の異同や内容の異同があつたんです。委員会法の制定過程とは、ちよつと話がずれるような気がするんですが、「視学官」の方は、どのようにして指導主事に移行していったんでしょう

か。

天城 「視学官」はなくなったんだから、「視学官」ではないわけです。

小池 元の「視学官」の人は、一回首を切った形にして……。

天城 「視学官」がなくなって、指導主事は新しい免許状を持たなければならぬんですから、必要な人は、みんな免許状の再講習会を受けたわけです。

伊藤 指導主事の免許状ですか。

天城 ええ。で、そういう講習会は大変でしたよ。それから、名校長だとか有力な校長は、ずいぶん追放になっていますし、指導主事も追放になっています。占領軍の指令に基づく「教職追放」というのがありましたからね。「そんな審査を受けるのは嫌だ」と言って、自ら辞めた先生も、ずいぶんいます。

IFEEの教育講習会

村上 話は飛びますが、免許の必要な教職員というのは、教育長と指導主事のほかに、何があったんでしょうか。

天城 校長と教員以外には、教育長と指導主事と、それから社会教育主事ですね。

村上 教育委員会法の中に、免許が必要な職員として明示されるのは教育長だけですか。

天城 指導主事も入っていたかな……。ちょっと忘れちゃったね。

村上 指導主事の名前そのものは出ていますが、免許については出ていないので、どのぐらいの範囲だったのかな、ということなんです。

天城 じゃあ、免許法のほうですね。戦後は、いろんな免許職があちこちで出て来ました。指導主事もそうだし、社会教育主事もそうですね。それから、ライブラリアン——司書ですね。それから、博物館の学芸員——キュレーターですね。みんな、それぞれ法律に出ているんですよ。すぐには免許が取れないから、「当分の間はいいい」としてやっていたんですが、原則として、みんな免許職になったんです。今でも困っているのは、ライブラリアンとキュレーターじゃないですか。博物館や図書館が、ずいぶんあちこちにできたでしょう。

伊藤 キュレーターの資格を持っている人は、たくさんいるんですよ。小池 僕も、持っています（笑）。

天城 学芸員がない博物館もあります。

小池 それは大陸法ではなく、英米法の影響を受けるようになってきた過程で、免許制度みたいな形の、アメリカの制度が入って来て、ということなんでしょうか。

天城 英米法との関係かどうかは知りませんが、「専門職は資格を持たなければいけない」というのは、今でも議論にはなっていますよね。日本では、それほど強くは言っていませんが……。職業資格で国家試験を要求しているものを調べたことがありますが大変な量なんです。それは、床屋さんやフグの料理人もいるんですからね。それは労働省がやっている職業資格ですが、ずいぶん多いんですよ。

伊藤 一般に、役所の中では司書とかキュレーターというのは、何となく隅っこにいますかね。

天城 それは一般行政職との関係でいくと、普通の行政官ではないと

いうことになっちゃうんですね。

伊藤 だから、なかなか昇進はできないしね。

天城 ライブラリアンの資格を持っていて行政官になった人もいますが、それはおっしゃる通り少ないですね。日本では専門職と言うと、何か一般と違う、と。それで、だんだん狭められていくんですね。今は専門職の見直しがあちこちで出て来て、大学院の修士課程が高度の職業人養成ということで、専門職を量産しようとしています。今、一番大きな議論になっているのは、法務職でしょう。司法制度との関係で、それをどうするかということなんですよ。

伊藤 弁護士会が反対しているじゃないですか。

天城 MBAというのがあるでしょう。あれは資格じゃなくて、学位なんですよ。日本では、それがよく分からないものだから、大学でMBAコースと言っていますが、マスター・オブ・ビジネス・アドミニストレーションですから、資格ではないんです。ただ、アメリカのMBAというのは、かなり卒業生が評価されているものだから、MBAという形で定着しているんです。日本でも、いま経済系統でMBAコースを設けていますが、これは資格ではないんです。

今、エンジニアの資格も、アメリカはどんどん進んでいます。これは工学部卒業生に与えるんです。それは個人に与えるのではなくて、その工学部がエンジニアリング・サイエンスの教育をしているかどうか。つまり、アーティキュレーションを受けている工学部の卒業生が、プロフェッショナル・エンジニアなのです。

伊藤 卒業すれば、自動的に……。

天城 そこで卒業を認められた者は、プロフェッショナル・エンジニアです。これが日本と違うのは、例えば建築会社でも土木会社でも、

プロフェッショナル・エンジニアがいなければ、極端に言えば公共事業には入札できない。そういう規制があるんです。

日本でも、エンジニアの資格をどうやるかという運動が起きていて、日本学術会議の吉川（弘之）さんとか、工学院大学の大橋（秀雄）学長なんかが一所懸命にやっています。

伊藤 建築でも、現場監督になるためには二級建築士の資格がないと駄目ですしね。

所澤 群馬大学でも、問題になっているようです。国際的な基準を適用すると、ある水準を超えた学生以外は卒業させてはいけないということになって、現在の日本の工学部では、かなりの数の学生が卒業できないんです。これが、かなり大きな現実的な問題なんですね。

天城 医学部も、そうなんですよ。医学部で、幾らインチキな教育をやって学生を卒業させても、国家試験を通らなければ医者じゃないわけです。国家試験の合格率が発表になるでしょう。何々大学は九〇パーセントとか、何々大学は八〇パーセントとか。八〇パーセントではみつともないからというので、成績の悪い奴は落第させて、受けさせないわけです。そうすると、九〇パーセントを超える。だから、医学部を卒業しても、医者になれない者が出てくるんです。歯学・薬学、みんな同じでしょう。

今のエンジニアの話は、エンジニア個人の資格というよりは、大学の工学部が、その認定を得ていなきゃいけないんです。

伊藤 大学は、きついですよ。

天城 大学に対する評価なんです。アメリカは大学評価制度が確立されています。

伊藤 そうすると、大学を、また評価し直さなければならぬことに

なるわけですね。

天城 そうですよ。だから、アメリカでは、ちゃんとアーティキュレーション・ボードがあるんです。それで、日本でもそういうものを作ろうかと言っているんだけど、まだ、みんなが納得していないらしいんですね。

所澤 いま問題になっているのは、国際規格を通らないと、今度は日本の大学に留学生が来なくなるんです。私のいる群馬大学の工学部は、それに非常に危機感を持っているようです。博士号を取って国に帰っても、役に立たないということになっては、博士課程に留学生が来なくなる……。

天城 アーティキュレーション・ボード・オブ・エンジニアリング・アンド・テクノロジー——ABETというのがアメリカにあって、そこが工学部を審査しております。日本でも、それにジャパンを付けてJABETと言って、設立はしたのですが、大学がどこまで加入するのか、いま言ったような問題があるためか、なかなか進んでいないんです。だから、先ほど言われたように、東南アジアの留学生が来なくなる。シンガポールや香港の大学は、それに入っているんです。ヨーロッパも、そういうのに入っていますから、「日本だけが置き去りを食らうぞ」と、吉川さんや大橋さんが心配しているのです。

これは別の話ですが、資格というものは、いろいろなところで出てくるわけです。ただ、資格社会が良いのか悪いのかは、別問題です。

所澤 戦後のこの時期に、アメリカは日本の大学の教員について、資格の問題を出さなかったんでしょか。

天城 公職追放以外はないですね。大学設置基準に、ごく簡単にある程度です。

ただ、これは別ですが、IFELという組織ができて、これは校長とか指導主事のほかに、大学の先生も対象になっているんです。これは何も公的なものではありませんし、アメリカの占領下でやったものです。アメリカから、わざわざその担当官まで来まして、いろんな教育の出身についての講習会をやりました。例えば、新しいカリキュラムをどうするか。ガイダンスなんて何のことか、最初は分からなくてね。それから、大学については、ちょっと私は覚えていませんが、やはり教育関係だったんじゃないですかね。教育学部が、たくさん大学にできましたから、ガイダンスとか、カリキュラムなんかのコースがあつたんじゃないですか。「ガイダンスの講習会をやる」と言ったら、分からないものだから、ダンスだと思って運動靴を持って集まった、なんていう話もありますよ。講習会は、いろいろありましたね。

小池 「森戸文書」の中にも、いろんな講習会の記録があつて、IFELもありましたね。

天城 IFELは、かなり大きな組織でしたからね。

伊藤 そういう講習会に、先生は直接ご関係なさる立場にはないんですね。

天城 IFELの中で、新しい教育制度の講習会をやりましたね。

小池 文部省の方は、必ず来られているんですね。

天城 よく覚えていません。

村上 先ほどの、免許を必要とする教育関係職員のことですが、それは予め教員経験者があるというようなことが想定されていたんでしょうか。教育長や指導主事のような免許が必要な方というのは、結果として教員の人が多かったというようなお話でしたね。

天城 いいえ。従来の行政官で、教育長や指導主事をやっていた人も

いましたから、みんな短期の研修会を受けたんですよ。

村上 従来の行政官の方たちを想定していたということですか。

天城 ええ。東京都の教育長なんかは、元は行政官だったんだけど、その研修会を受けていましたよ。宇佐美（毅）さんというのは、終戦のときの東京都の教育局長だったんですね。あの人が教育長に移りましたから、やっぱり簡単に受けたんじゃないですかね。

村上 それから、先ほど、「県視学の方が、教員人事のボスになった」とおっしゃいました。しかし、教育刷新委員会のお話の中では、町村であれば、町長とか村長とかが——都市においては、よく分からないんですが——人事ボスになっていた、と。そういう戦前的な政党の人たちに対して、教育刷新委員会の中にも、文部省の中にも、非常に警戒感があつたというなお話でしたが……。そこら辺のことは、教育委員会法制定のときには、どういうふうに影響していたんでしょうか。

天城 地域のボスがどうのこうのとか、そんな議論はありませんよ。そんなことを議論していたら、公選制は成り立ちませんからね。社会の、いろんなところにボスがいますからね。

今のあなたのお話で言えば、人事を直接担当する人間が「視学」なんです。「視学」がボスに動かされたかどうか、それは分かりません。今だって大騒ぎしているでしょう。貸し渋りの口利き話……。どこにでも、ああいうのがたくさんあるんですよ。

伊藤 昔から、教員人事というのは、そうですね。

天城 ええ。有力者に口を利いてもらおうというのは、たくさんあります。これは、どこの社会でもありますよ。

小池 それも関係するのも知れませんが、例えば教育委員会法がで

きて、第一次の教育委員会の委員の選挙がありますね。その教育委員会法ができてから、日教組と長野県の信濃教育会の二つが、「選挙をするまでの期間を、もっと延ばせ」という意見を出しているんですが……。

天城 いやいや、二つじゃないですよ。文部省もそう思っているし、刷新委員会もそうです。

小池 みんなそうなんですが、特にこの二つが教育委員会法ができたので、自分たちの既得権益を守るための準備をしていたというふうに……。

天城 いやあ、信濃教育会というのは日教組に入らないでしょう。

小池 ええ。全然違うグループであるにも拘わらず、一緒の意見を出したというところが面白かったです。

天城 率直に言えば、教育委員会制度というのは、やってみないと分からない。市町村は任意設置だから、とにかく県と市の幾つかでやってみれば分かるから、少し様子を見ようという気分はありました。

伊藤 それは全体に、ですね。

天城 全体に。文部省も、延ばそう延ばそうとしたんですよ。

伊藤 では、早まったというのはGHQの意見ですか。

天城 いやいや、早くなったというよりも、初めからGHQは学校教育法と教育基本法と同時に実施するつもりでいたのです。それができないで遅れて、ギリギリになったのですから。文部省としても、こんなに急にやっても、準備はできない。毎国会に、施行延期の法律を出しているんです。三回ぐらいやっているんですね。昭和二十五年に出したら、また延ばして、それで最後にまた延ばそうと思ったら、「バカ野郎解散」（昭和二十八年三月）になったんです。

非常勤講師として教育行政を講義

伊藤 さて、前回のお話の続きですが、アメリカからお帰りになって、今度は課長になれることになりますか。

天城 教育委員会制度ができたあと、私は（調査普及局）地方連絡課からアメリカに行つて、それで帰つて来て、しばらくして（社会教育局）著作権課に行つたんですね。

伊藤 しばらくしてから、ですか。

天城 すぐではないですね。ちよつと履歴書を見ないと分かりませんね。

伊藤 著作権課長になられたのが、二十七年の八月二日ですね。

天城 二十七年がデッドラインで、教育委員会は市町村に一斉設置ということになりました。そのときは、私はどこにいたか忘れましたが、これの普及と説明に全国を飛び回りましたね。

伊藤 そうすると、やはり地方連絡課の課長補佐のポストに、ずっとあつたんですね。

天城 だつた、と思いますね。

伊藤 この前、ちよつとお話がありましたが、東大の教育学部の非常勤講師を務められたのが同じ二十七年なんです。どういう経緯で、そうなったのかを、お聞かせください。

天城 戦後、大学の文学部教育学科が全部、教育学部になって、そこにいろんな新しいコースを置くことになった。それもG H Qのサジェ

スチョンだと思うんですが、教育行政学とか図書館学とかを設けることになったんです。しかし、従来の教育学者というのは、ほとんどが哲学系統や歴史が専門ですから、それをやる人が足りないんですね。それで、私どもは新しい制度の説明会や講習会に飛び回っていました。そこには、できたばかりの教育行政学の講座の教授も出席していました。その先生たちと、いろいろお話をしているうちに、「講義に來ないか」と誘われました。そのとき、九大と東北大には、「先生として來ないか」と言われました。

伊藤 文部省を辞めて、ということですか。

天城 ええ。それで、前にも言いましたが、東大の宗像誠也さんにその話をしたら、「いや、君は文部省にいてくれよ。その代わり、東大に來て講義をしてくれ」と（笑）。それで、非常勤講師で行くことになったんですね。だから、九大と東北大には非常勤講師で行っていたんですが、とうとうお断りしちゃいました。

伊藤 それは集中講義ですか。

天城 もちろん、そうです。東大もやりましたが、東北大は担当の先生が替わつてからも、「また來てくれ」ということで、こちらも集中講義で六、七年やりましたかね。

伊藤 かなりお忙しいですね。

天城 大変でしたよ。東大は毎週でしたしね。

所澤 授業の内容としては、どのようなことを教えられたんですか。

天城 「教育行政特講」という名前でやつたんです。

伊藤 教材みたいなものは、何か作られたんですか。

天城 教材とかテキストとかは作りませんでした。警察行政とか福祉行政とか教育行政というのは、行政の中の一部ですから、行政の本質

的な意味が分からなければ、分からない。しかし、行政や行政法の基本をやると、一年経っても終わりません。東大は法学部もあるし、総合大学ですから、「君たちは法学部の講義を聴いて来てくれ」と。単位は取らなくてもいいが、聴けば分かるだろうから、それで行政の勉強をしなさい、と。

戦前にも、教育行政という科目はあるんだけど、ほとんど行政法だけです。行政法の教育分野というテーマだけを、講義していたようです。私は、そうではなくて、「行政が分からないと、教育行政をやっても分からない。少なくとも行政法と行政学の基礎をやつてくれ。法学部があるんだから」と。

行政学も戦前からありましたが、戦後は新しい展開がありました。戦前の行政学というのは、田村（徳治）さんという先生が「行政学の祖」なんて言われていたし、蠟山先生も行政学をやっていたんです。これも幾つかの流れがあつて、蠟山さんは主に行政制度論をやっていたんですね。それと、もう一つ、行政を経営の面から見ていくアドミストレーションというのがあります。国の行政はパブリック・アドミストレーションですが、プライベート・アドミストレーションもあります。これは経営学の考え方なんです。アメリカなんかは、むしろアドミストレーション一般の面から、教育行政を見ているのです。日本では公行政、公の面が強調され過ぎている。そこを、もう一度見直そうということで検討したのです。行政法も必要だし、行政学の新しい考え方も必要だという観点から、講義をしていたんです。

特に、人事の問題になると、戦前は特別権力関係で人事を見てきたけれども、これは企業体の従業員の人事や組織体の人事に通じる点があるとか、教員の身分をどう考えるかとか、そういうような戦前とは

異なる視点で話して来ました。最後に、「学校を管理するというのは何か」という話をしていたんですね。

伊藤 それだけ長くおやりになって、それは結果として教科書にはならなかったんですね。

天城 ええ。毎年、考えては修正していましたからね。

伊藤 プリントか何かは出されたんですね。

天城 横着でしたから、プリントも出さないと。いま考えると、ちゃんとシラバスを出さなければいけないかったですけどね。

伊藤 その頃、シラバスなんてないでしょう（笑）。

天城 講義内容を考えるのも、一苦労ですからね。半分勉強しながらやっているんですから、毎年毎年違ってくるわけです。

宗像さんがやっていた講義は、「教育行政というのは、行政のための教育だ」という考えです。「教育のための行政でなければならぬ」と。戦前・戦中に、国家権力の手段としての行政が教育を圧迫したことを強調するんですが、戦後の民主憲法下の教育行政の理論は何も提示しなかったのです。

伊藤 これは履歴書を見ると、無給となっていますが……。

天城 非常勤手当をもらいましたよ。無給となっていますか？ それは知りませんね。

伊藤 無給というのと、非常勤手当をもらうのとは違いますよね。

所澤 手当は、手当ですね。

小池 文部省では、非常勤講師に行く場合に、内部には抵抗感はなかったんですね。

天城 ないですね。ただ、表向きは、やはり職務専念義務がありますから、建前としては「非常勤講師は土曜日の午後」ということになっ

ていました。

小池 先生のように、大学に講義に行かれる文部省の職員は多かったんですか。

天城 その後、出て来ましたね。

小池 先生が最初ということですか。

天城 そうですね。

小池 やはり教育行政学が主ですか。

天城 大体、そうでしょうね、教育行政学科というのがあるしね。その後、現役の役人が非常勤講師で、あちこちで教えていますね。東大も、まだ続いているかな。それから、埼玉大学だとか東北大学だとか、京大、九大も、そうですね。

伊藤 人事記録を見ていますと、確かに昭和二十七年のときは、「給与なし」ですね。その後になりますと、「月手当二千百十円」と書いてあります。

小池 二年後ですね。

所澤 最初はなかった。

天城 最初は、なかったかも知れないな。

伊藤 ずいぶん長いことやっておられますね。

天城 そうですよ。東大は十年ぐらいやってるんじゃないかな。

伊藤 途中、抜けたりなんかもしていますけれども……。

天城 いや、抜けていないですよ。

小池 「東大の教員にならないか」というお話はなかったんですか。

天城 ありましたよ。最初のときは、宗像誠也に「君は文部省にいてくれ」と言われましたが……。どこで、何をしようかなんて、何も決めていませんでしたからね。

所澤 長いこと東大で教えていらして、大学紛争の頃に向かって、大学の雰囲気が変わってくるころがありましたか。

天城 大学紛争は、もうずっとあとですよ。

所澤 安保闘争ですか、昭和三十五年ぐらい……。

天城 学生運動というのは、戦後すぐ始まったんですよ。「全学連」も結成されたしね。

伊藤 教育学部は、「全学連」を支持するような先生が多いでしょう。

天城 東大紛争のときの「全共闘」というのは、共産党支配ではなく、「民青」憎しで、教育学部の中でも民青系と全共闘系に分かれていました。「この際、民青やっちゃえ」と言う人もいたんです。それから、同じ左翼でも、これは私はよく分からないんだけど、「構造改革派」というのがあったんです。

伊藤 社会党系ですね。

天城 ええ。江田（三郎）さんとか、横浜国大の経営学部長をやった長洲一二さん（のちに神奈川県知事）とかが「構造改革派」なんです。この連中は、「大学を解体」というのではなくて、中を改革しようとしていたんですね。それで、入り乱れていましたが、学内の衝突というのは大体、「民青」と「全共闘」とがやったんですね。

伊藤 その前は、大体、「民青」が支配していたということですね。

天城 そうです。それで、紛争が終わって、「全共闘」が各セクトに分裂し、学外闘争に走ってしまったら、また「民青」支配になっちゃったんですね。

伊藤 先生が東大に行っておられた頃も、学生運動は盛んだった時期ですよ。

天城 ありましたね。それは、「民青」です。

所澤 教育学部の教官の全体的な雰囲気は、かなり左傾しているような感じだったんですか。

天城 そうですね。大体、教育行政学科なんかは、全部そうですね。宗像誠也、五十嵐顕……。もう一人の名前は忘れしました。三人とも定年前に亡くなったんですが、みんな左翼系ですよ。

伊藤 それでは、時間も過ぎましたので、次回は著作権課長のところからお話をいただきたいと思います。

天城 私は、役職では著作権課長その他をやってきましたが、途中から国際問題に関わり始めたのです。これは、ポストとは必ずしも関係ないんです。

伊藤 ないんですか？

天城 いや、関係あるときもあるんですよ。

小池 日米文化会議とかですか。

天城 それも一つですね。ユネスコとかOECDとか、ずっとあるんですよ。そういう問題は、まとめてお話ししたほうがいいのか……。

小池 それは別途、先生が関係された国際問題という形で……。

天城 ポストに関係しても出て来ますし、それは非常に僕にとっても大きな流れですからね。

伊藤 昭和二十八年のユネスコのところで、お話しいただくことはできませんか。

天城 まあ、どこでもいいんですけどね。それで、それに関して文部省が作ってくれた出張命令の記録があるんです。ユネスコとかOECDとかカルコンとかに、僕がいつ出席していたのかという記録なんです。それを見れば、いつ、どこに行ったかというのが分かります。何が何だか分からないけれども、いろんなところに行っていますから

ね。

伊藤 文部省の「国際係」みたいなところがあるんですね。

天城 初めの頃は、ユネスコ関係以外の記録はあまり整理されていませんでしたが、だんだん整ってきて、今ではかなり整っています。私の国際関係の仕事は、文部省を辞めてからも、ずっと続いていましたから……。

伊藤 それは、ユネスコのところで始めてくださってもいいと思いますが、どうですか？

天城 大体、六〇年代ぐらいになると思うんだけどね。

伊藤 発端はユネスコなんですか。

天城 ユネスコもあるし、日米は池田・ケネディ会談というのがあって、日米経済会議とか、日米科学技術会議とか、教育文化会議というのが始まったんです。教育文化会議には、ずっと入っています。ユネスコには独立前から日本は加盟していましたし、OECDはかなりあとに加盟しました。OECDで教育関係を議論しているなんて、誰も知らないものですから、初めは多少齟齬があつたんです。そんな経緯です。

伊藤 そうすると、この履歴書だけでは分からないですね。

天城 ちょこちょこ出ていますが、流れが分からないですね。

伊藤 では、それをお話しいただき、また適当な時期にまとめてお話しさせていただくことで、次回もよろしくお願いいたします。

〈以上〉

(後註)

① 南原繁氏は総会場で、しばしば「教育刷新委員会は教育に関する制度的枠組みに関して審議する場であって、教育の内容そのものは取り扱わない」旨を言明していますが、教育刷新委員会官制には「教育刷新委員会は……教育に関する重要事項の調査審議を行う」とあるだけで、南原氏の言うような限定はありません。しかし、実際の審議内容を見る限り、この南原氏の意向は尊重されているようです。この発言の根拠となるものは何かあったのでしょうか？ また、教育刷新委員会がそのような方向を取ったのは何故なのでしょう？

② 昭和二十一年十二月二十七日に第一回建議を採択した後、翌昭和二十二年春頃に、「これで教育刷新委員会の役割は一応終結した」との意見が、委員の内部から出ています。実際には、その後昭和二十七年まで教育刷新委員会は存続することになりますが、こういった議論の背景に関して、ご存知のことがあればお話し下さい。また、文部省はこれをどのように受け取っていたのでしょうか？

③ 第二次吉田内閣期に、文教政策に関する私的な審議会が設置され、教育刷新委員会にこれを警戒する発言が見られますが、文部省ではこれをどのように見ていたのでしょうか？ また、一般的に言って、第一次吉田内閣から片山内閣、芦田内閣から第二次吉田内閣と政権が交代するに際して、教育刷新委員会に対する政府与党の関与はどのように変化したのでしょうか？

天 城 勲
オーラルヒストリー
第5回

[2000年12月26日 15:10～17:25]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

小池聖一(広島大学助教授)

所澤 潤(群馬大学助教授)

村上浩昭(政策研究大学院大学リサーチ・アシスタント)

(於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター)

僅か二カ月の著作権課長

天城 今回は、著作権課長のときの話からですね。著作権問題について話すと、切りがなくなってしまうんです。

伊藤 予想もなかったことですか。

天城 課長就任（昭和二十七年八月）は予想もしませんでしたし、たった二カ月でクビですから、なったのもびっくり、辞めたのもびっくり、しかもその間の仕事もびっくりと……（笑）。

伊藤 二カ月なんていうことが、普通あるんですか。

天城 あまりないですね。それに、その二カ月の間に国際条約の締結でしょう。それが、また非常に複雑で分かりにくいんです。分からないうちに、終わってしまったんです。

伊藤 前任者からの引継ぎもあるわけですね。

天城 まあ、若干はありましたが、著作権問題というのは長い歴史があり、また多くの変遷がありますから、今では一層分からないです。

伊藤 そうですね。実は、このオーラルも著作権問題がありまして、我々も悩んでいるところなんです。例えば、先生との間に最終的にはやはり、ちゃんとした契約を作らなければいけない、と。

天城 いや、それはいいんですよ。それは、私法上の契約の問題だから……。

伊藤 ですからね、そちらでも相談に乗ってください（笑）。

天城 今、もつと複雑なのは、情報伝達の手段が複雑化したでしょう。

コンピュータから始まってインターネットですね。また、私は分からない。分かっている人は、ほんの僅かでしょう。毎国会、著作権法を直しているのに、追い付かないんですから。

伊藤 このときは、どうでしたか。

天城 このときは、まだそんなに複雑ではないんだけど、その芽生えがたくさんありました。

伊藤 この頃は、海賊版の問題もありますよね。

天城 海賊版は、そんなに大きな問題ではないんです。今だって、海賊版はたくさんあるんですから。

伊藤 日本で、ですか。

天城 世界中に……。

伊藤 それは、世界中にはたくさんあると思いますが……。

天城 アジアなんかは、全部そうでした。でも、だんだん整ってきて、中国も著作権法を作ったでしょう。それで今、「国際的に、締約国は協力しよう」と言って、日本がそれに一役買っていて、中国も仲間に入れているんです。著作権と、それに工業所有権は大問題なんです。

伊藤 どういう問題なんですか。

天城 僕もその後、著作権のことについては全然離れてしまっていますから、今のことは全然分かりません。

伊藤 むしろ、この当時、どうだったのかということですね。

天城 この当時の著作権問題というのは、今とかなり状況が違っています。基本的な著作権の考え方としては、著作者の権利というのが一番の基本です。その著作者の権利の中には、人格権と経済的権利の二つがあつて、後者は財産権とかと言われますね。要するに人格権というのは、自分の創作したものの中身を（他人が）勝手に使ったり、変え

てはいけないことです。さらに、著作物というのは、その利用によって一定の経済的価値を生む。それが財産権と呼ばれていて、今うるさくなっているのは、この後者の問題です。

著作権というものは、書いたもの——論文でもいいし、小説でもいいし、音楽でもいいんですが、それらについては、人格権としてはつきりしているんです。問題は歌っている人とか、レコード会社とか、もつと面倒臭いのは放送局です。こういうところの権利の問題が起きてきて、これは「隣接権」と言われているんです。広い意味での著作権というのは、著作者の権利を中心とした人格権と経済的権利と、もう一つは「著作隣接権」です。そして、メディアが増えてくるに従って、権利関係が複雑になっていく。著作者との経済的利益を、どう考えるか。本来、著作者というのは個人でしょう。ところが、著作者が個人ではなくなってきたりしている場合がある。企業が著作権を持ったり、団体が持ったり……。そうすると、どうしても、経済的利益の問題になる可能性がある。

私が著作権課長になったのは、昭和二十七年八月一日でした。九月に「万国著作権会議」がジュネーブで開かれる一カ月前なんです。それで、何のために、その会議が開かれたかということで、著作権自体の話をしなければならなくなるんですが、まず大きく分けると、著作権条約には「ベルン条約」と言っているものがあります。

伊藤 それは、戦前からあるものですか。

天城 「ベルン条約」というのは、もちろん戦前からあって、ずいぶん古いものです。その「ベルン条約」に加盟している国々で、「ベルン同盟」というものを組織していました。一方、アメリカと南米を中心とした「米州条約」というのがあるんです。それで、「ベルン条約」の

考え方と「米州条約」の考え方が、ちょっと違ったんですね。それは不便で困るということです。しかし、どちらが優位だとは言えませんが、ユネスコが真ん中に立って、架け橋の条約を作る——ブリッジしようとしたわけです。

伊藤 このときに、ユネスコが出て来るわけですか。

天城 それで、ユネスコの条約は「万国著作権条約」と言っているんです。これは、米州の著作権の考え方と「ベルン同盟」——ヨーロッパの国と、日本もこちらに入っていたんですが——の考え方を、ブリッジしようとしたものです。だから、ここで突っ込んだ話をする、米州機構の著作権の考え方と、「ベルン同盟」の著作権の考え方の、両方の話をしなければならいんです。そうすると、大変基本的な問題になってしまふし、それで今日まで来ていますからね。ここでは「ブリッジしたもの」ということだけにさせていただきます。

とにかく、「ベルン条約」というのは、一八八六年にスイスのベルンで作られた大変古い条約です。

伊藤 日本は、最初から入っていたわけですか。

天城 日本は明治三十二年に加盟しています。そのときから日本には著作権法があつて、それ以来ずっと続いています。部分改正をやったんですが、戦後も生きていた片仮名の法律なんです。それで、昭和四十六年に初めて平仮名の著作権法に作り直したのですが、七十七年経っているのです。この間、非常に複雑な動きがありまして、一九八六年に文部省が『ベルン条約百年史』という本を作っています。かなり分厚い二冊本で、それを見直せばよく分かるんですが、とてもそんなものを読んで暇はないですからね。話は非常に古くて、複雑です。多分、戦後に最後まで残っていた片仮名法律じゃないですか。

四十六年に、やっと平仮名の著作権法ができたんです。これは、著作権審議会ですいぶん審議しまして、法案ができて、法制局で議論を重ねて、国会に提案するまでに七、八年かかっているんです。それほど著作権というのは複雑なんです。

言うまでもなく、著作権というのは、作者の権利を守るものです。が、どうして守るかと言うと、使いたい人が作者に許諾を求めるのです。契約を結ぶので、私法関係です。元々、国がどうこうと言うものではないんです。だから、「著作権課長は、どのような仕事をしていたんですか」という質問については、要するに、そういう著作権の趣旨を著作者や利用者に普及徹底する必要があるわけです。紛争が起きても、結論は私法ですから、民事訴訟なんです。

伊藤 「裁判所に行きなさい」と言うわけですね。

天城 最後は、ね。紛争そのものを調停するのではなくて、いろいろ指導助言をする。それから、あとは国際条約関係ですね。

面白い話がありました。三越デパートの包み紙の話です。あれは当時、凄い評判だったんです。それで、あの色を変えて、他の店が使い始めた。水色にするとか、グリーンにするとか。それで三越が慌てて、これは三越の商標みたいになっているから、商標登録をしようとしたんです。しかし、商標登録は、使い始めてから一年以内にやらなければ駄目なんです。それ以上は、もう商標登録ができないんです。それで、三越のケースは一年以上経っていたので、商標登録による保護はできなくなりました。そんなときに、文部省の著作権課のところに相談があったんです。いろいろ話を聞くと、あの絵柄を描いたのは猪熊弦一郎だと分かった。彼は画家ですから、「それなら、これは画家の絵にしちゃいましょう」ということで、著作権法で保護したんです(笑)。

先ほど申したように、日本は「ベルン同盟」に入っていたのですが、戦後の占領下では、そういう国際条約は中止させられていたんですね。国内行政は全て、司令部が日本政府を使って間接統治をしていたんですが、著作権だけは間接統治をさせないで、GHQが直轄したんです。所澤 つまり、アメリカの考え——米州機構側の発想ということですか。

天城 そうではなくて、占領政策の目的に則して、自分で直接やろうとしたわけです。著作権法というのは妙な法律で、制定されてから、ずっと内務省の所管なんですよ。文部省ではないんです。しかも、警保局が所管していた。言論・出版・思想の取締りとしてやっていたんです。それで、内務省が解体する直前に——警保局が治安維持法の廃止で駄目になったので——文部省に移管することになったんです。

だから、文部省にとっても、馴染みのあるものではなかったんです。社会教育局に移管して、著作権課というのができたんです。そのうちに平和条約が締結され、条約関係も元に戻すということで、日本は「ベルン条約」に復帰した。ところが、そのすぐあと——昭和二十七年四月に日本は国際社会に復帰して、その年の九月にユネスコが「万国著作権条約を作ろう」と言い出したんです。

伊藤 そうすると、その会議のために課長に任命されたんですか。

天城 そうではないですよ。その前に平和条約ができて、一応、日本は国際社会に復帰し、「ベルン条約」が、また生き返った。著作権については、占領下、米軍の直轄行政で、言わば超法規的にアメリカがいろいろなことを自由にやっていた。例えば、アメリカの出版社が乗り込んで来て、自分たちで翻訳権を握っていて、日本の出版社から高い翻訳料を取ったりしていた。アメリカの指令で、やっていたんですよ。

それで、著作権制度を整えるために、著作権制度研究会ができた。それで、ユネスコは条約本会議の前に専門家会議を二、三回開いていたんですが、日本はまだ独立していなかったもので、それには参加していませんでした。しかし、そこで大体の素案ができていた。日本は研究会を中心に、参加するための準備をしていたんです。それで、いよいよ九月に会議がもたれるという、その一カ月前に私は就任したわけなんですよ。

なぜ、私が著作権課長になったかと言うと、私はそれまでずっと教育委員会制度の仕事をしていたでしょう。あの制度は政府提出の法案で、国会承認を受けていましたが、いろいろ問題があつて、文部省も完全実施を引き延ばそうとして、実施延期法案を国会に提出していたんです。しかし、国会解散で、二十七年にやらざるを得なくなつた。私は、そのちよつと前にアメリカに行つていて、帰つて来たら、教育委員会制度も既定の方向で進んで行つてしまつていたのです。幹部から見ると、「あいつは、少し暇になつたな」と思つたんじゃないですか。伊藤 今まで苦労したから、少し楽をさせてやろうというわけではないんですか。

天城 そんなことは、全然ないですよ（笑）。「あつちのほうの仕事が一段落したから、こいつを使つてやれ」ということになつたんじゃないですか。

これは内輪の話で、この間の事情は、あまり他の人は知らないと思うんだけど、著作権制度を整えようということで研究会をつくりましたが、その中心になつていたのが勝本正晃先生という、東北大学の国際私法の先生だったんです。それで、いよいよ代表をジュネーブに送るということで、首席として勝本さんに行つてもらふことになつ

た。あと誰が行くのかを決める段階で、著作権課の課長と、もう一人、専門職の人がいたんです。しかし、この二人の關係が必ずしも良くなくて……。実は、その専門職の人のほうが非常によく知つていて、勝本先生と常に行動を共にしている上に、司令部との關係もその人がやつていたんです。課長は、途中からなつたので、あまりよく知らないんです。ですから、勝本さんと、当時はジュネーブにいた外務省の萩原徹さんの二人を全權にして、代表団をつくらうとした。これはあとで知つたのですが、法制局の林修三さんも代表団にいますよ。それで、文部省の著作権課からも誰か行かなければならない。どっちが行くかということで、二人が競つていたものですから、次官（日高第四郎）も困つて、さつき言つたように、私が少し暇になつたから、「お前、著作権課長をやれ」と。そういう変な話ですよ。

いつだったか忘れましたが、土曜日に急に「著作権課長をやれ」と言われた。「実は、あと一カ月で、ジュネーブで万国著作権条約會議があるから、お前は勝本先生と一緒に行け」と言われたんです。そのときは、著作権の「著」の字も知らないんですよ。それで慌てまして、その土曜日に著作権課に行つて、著作権に関する法律の本や解説書などを借りて来ましてね。土曜日と日曜日と二日かけて、取り敢えずそれらを読んだんです。それで、月曜日に文部省に行ったら、次官に呼ばれて、「君に行つてくれと言つたけれども、あれはやめになつた」と言うので、「それは、どっちでもいいですよ」と。というのは、今朝、勝本先生が来て、専門職の人——この人は、あとで立教大学の法学部教授になつたんですが、非常に立派な専門家なんです——を、どうしても連れて行きたいと言つている、と。僕は、全くの素人ですしね。「先生がそう言うんだから、君は諦めてくれ」ということなんですよ。だ

から、喧嘩両成敗になって僕が入ったところへ、また勝本先生が巻き返して、専門職の男が行くことになった。行かなくて良かったですよ。だから、そういう妙な経緯で著作権課長に、急になったんです。

それで、とにかく条約の草案が出て、日本側の意見も検討しなければならぬし、訓令も用意しなければなりませんし、今度は外務省の条約局の課長さんたちと相談していただきます。そのときの課長が藤崎万里さんという方で、外務省の条約局というのは出世コースですね。その筆頭課長の藤崎万里さんは、その後大使になり、外務省を辞めてから、最高裁の判事になりましたね。藤崎さんには、条約外交としてどう対処したらいいかという、技術的な問題も含めて相談しました。藤崎さんに、「短期間で、よくここまでマスターしましたね」と褒められました。とにかく、この全権団を送り出したのです。

しかし、その条約会議は大変揉めたのです。始終、請訓が来るんですね。私も、その度に外務省とも相談して、訓令を出すわけでしょう。それで最後には、条約会議が終わって、全権が署名するということに、日本は署名しないんです。二人の全権は署名をせずに帰って来たんです。細かいことを言うと、ちよつと複雑になりますが、要するに意見が合わないから、日本は署名しなくてもいいということになったんです。その代わり、署名の期間が「百二十日オープン」になったので、帰って、国内でゆつくり相談することになって、その場ではサインせずには帰って来たんです。ところが、その帰って来る日に、もう私はクビになっていたんです。

伊藤 でも、その期間は必死になって勉強されたわけでしょう。
天城 もう、それは二カ月間、夢中になってやっていましたよ。

複雑化する著作権問題

所澤 それで、配置換えになった理由は何ですか。

天城 その話はあとでね。著作権について、もう少し話しましょう。

「ベルン条約」と「米州条約」との考え方の違いは、方式主義とか登録主義とかという点です。アメリカでは、著作権は登録しなければ発効しない。ところが、「ベルン条約」は無方式主義とか言われていて、登録しなくてもいいんです。日本も「ベルン同盟国」だから、登録主義じゃない。そこで、両者の架け橋をどうしたかと言うと……。最近の本なんかには、よく◎という記号が書いてあるでしょう。あれを本に付けておけば、発行した場所と著者名で、登録主義の国全部に通ずるという形にしたわけです。

伊藤 あれは、登録の代わりというわけですか。

天城 ええ。それで、◎方式というのは、このときに採用されたんです。なぜか知らないけれども、ヨーロッパでは、最初に申し上げた人格権というものを重視しているんです。精神的な成果だということで、文学にしても音楽にしても絵にしても、ね。それと同時に、財産を生むから財産権となっているんですが、米州法ではあまり人格権のことは強く言わないんです。むしろ、経済権・財産権のほうを重視している。登録主義のアメリカは、確か国会図書館に登録するんだったかな。その架け橋というわけです。

お互いに、かなり著作権に対する考え方が違うので、保護の仕方と

か期間などについて、会議中に二、三度、採決をやった。問題ごとに、意見が三つぐらいに分かれてしまった。初めは日本が参加していたほうが勝ったのだけれども、アメリカが巻き返して、またやり直して、と何度もやって、結局、最終的に日本の意見が通らないというので、調印しないで帰って来たわけです。しかし、結局は、両方の架け橋の法律だから、これは参加したほうがいいということで、あとになって署名したわけです。そんな経緯が、この間にあるんです。

それ以上は、著作権の歴史を話さなければならぬし、私も忘れてしまいましたしね。

小池 先生は、向こうで会議をされているときに、訓令電報でやり取りをしていたわけじゃないですか。そういうのは、やっぱり先生が起案をされて、ということですか。

天城 それは、そうですよ。こっちは留守部隊ですからね。基本的な考え方はこうだから、じゃあこっちで行けとか……。問題が複雑だと、外務省と相談したり、そんなことをやっていましたね。

伊藤 訓令を出すのは、外務省ではなくて著作権課長なんですか。

天城 訓令は、日本政府です。主管の省なり局が中心になって……。でも、こういう条約交渉になると、全部条約局を通さなければいけないんですよ。

小池 しかし、先生が原案を書かれて、それを条約局に持って行って、条約局から外務省で発信するという形だったんですか。

天城 形式で言うと、そういうことです。今でも国際関係は全部、外務省が窓口です。複雑なんです。それ以降、私も何遍も経験していますけどね。ユネスコだって国際機関ですから、あそこで何か決議したりするときは、やっぱり日本政府の意向ということで、外務省はどう

しても一枚噛むんです。まあ、これは外交一元化と言えば、それまでも知れませんが、外務省だって複雑になってくると、内容はなかなか分かりにくいですからね。各省の仕事で、国際的になってきたものが、たくさんありますからね。通産でも大蔵でも、農林でも……。外務省が、全部、それに張り付くんですからね。科学技術関係など、なかなか分からない。それで、外務省には科学技術担当の審議官が置かれました。

ちよつと話が飛びますが、著作権は、私が去ってからどんどん複雑に発展しました。さっき言った「隣接権」の問題とか、特に最近、うるさくなってきたのは、コンピュータのソフトやプログラムをどうやって保護するのかという問題です。それから、インターネットというのは、一体どう捉えたらいいのか。最初の頃の著作権法というのは、やはり書いたもの、印刷したもの、そういう形だったんですね。それが、今はコピーですからね（笑）。それでも簡単にコピーできないものが、たくさんあるんですね。それで、見るのはいい、聴くのはいいと云っても、見るために何で見るか、聴くために何で聴くのか。これは、メディアの問題です。メディアが、どんどん増えてきてしまった。それを、どう保護するか。例えば、音楽が著作権で保護されるとしても、普通の人が聴こうとすれば、当時はレコードです。レコード制作会社というのは、それで儲けますから、著作権者と契約して印税を払うんだけれども、レコード会社自身も二次著作権者だという議論になってきたんです。これが放送・映画になってきますと、ますます複雑ですからね。

伊藤 そのレコードを使うと……。

天城 放送でも映画でもいいんですが、BGMが使われるでしょう。

あれば、一つ一つ著作者と著作権契約を結んでいるんです。大変ですよ。メディアが複雑になればなるほど、著作権の扱いが複雑になって、「隣接権」の問題というのが非常に大きくなっていく。これが、さっき言ったように、個人が持っているわけではないんですね。映画を作ったって、監督が持っているわけじゃない。会社が持っている場合が、たくさんあるんですね。それで、映画の場合は、例えば「大映社長・永田雅一」と出ていて、それが大映の作品だということを示している。伊藤 それにコピーライトを付けたわけですか。

天城 いいえ、大映が著作権を持っているという意味ですよ。

伊藤 そういう多人数で作ったものというのは、誰が著作権を持つかというのは難しいですね。

天城 難しい。だから、大映の永田社長だということにしちゃったんですね。

例えば著作権でも、大学の先生が自分で論文を書いたりすると、著作権は本来、伊藤さんなら伊藤さんのものでしょう。論文の著作権は大体、個人個人になっているんですよ。ところが、工学部とか理学部だとかで、発明されるものがあるんですね。そうすると、それは本人なのか、大学なのかという議論になってくるんです。これは「任務発明」と言って、大学がお金を出しているじゃないか、国の施設を使って実験をしているじゃないか、と。企業なんかは、みんなそうなんですよ。「任務発明」と言って、企業で作ったものは企業の研究者に所属するのではなくて、企業が持つということになってきた。その人を雇用しているし、そういう研究所をつくっているし、そういう機会を与えて金を出しているから、特許権は企業が持つ。大学でも論文の成果が、特に理工系では問題になる場合があるんですね。そうすると、

それは本人に属するのか、大学に属するのかということ、薬品なんかは、たくさんありますよ。ビタミンCの何とかを大学で開発して、それを製品化した、と。製品は会社がつくるわけですね。そうすると、その特許権は本人なのか、大学なのかという議論ですね。

伊藤 その場合は、特許権なんですね。

天城 特許になるものもあります。学術研究の成果は、著作権で保護しなければならぬ。例えば、論文なんかは著作権で保護されるよりも、世界の学会誌に載せたほうが、認められるのは早いという人もいますね。だから、文部省では、「大学の先生は、特許のことをもっと考えるようにしたらどうか」と言うんだけど、先生の中には、そんなややこしい手続きをやるよりも、世界の有力なる学会誌に、ちゃんとレフェリーがいるところに載ったほうが、世界的に評価されると思っている人も多い。例えば、白川（英樹）さんの、今回のノーベル化学賞を受賞した研究についても、発表は三十年ぐらい前でしよう。プラスチックは電気を通さないと思われているところに、電気を通すプラスチックを発見したわけでしょう。そのときは、そういう新しい化学上の発見ということで、それは国際的な学会で認められているんですね。製品化するのは、ずっとあとですよ。だから、この問題は非常に難しいんです。科学技術立国となってくると、ますますこの問題は複雑になってくる。

「ベルン条約」を作った頃は、一九世紀で、ヨーロッパは隣接する国がたくさんあって、相互に作品が流通していた。二国間で、交渉してやっていた。しかし、そんな方法は面倒だから、みんな一緒にやろうというので、「ベルン条約」「ベルン同盟」ができた。「ベルン条約」では、改正するときは全員一致ということになっているんです。

その後、「ベルン同盟」にどんどん入ってきました、百カ国を越えた。全会一致では、動きが鈍い。それで、「ベルン条約」には特例を作れる条項があって、それを足掛かりにして「隣接権」が出て来た。「ベルン条約」から派生したんだけど、実際は全然別の条約になっていた。そういう複雑な状況があります。

それで、先ほど申したように、経済権のほうが強くなってきて、企業が関心を持っている。今やウルグアイ・ラウンド以降、特にそうなんです。WTO——World Trade Organizationの中で、特許権と併せて知的所有権が大きな問題になっています。WIPO——World Intellectual Property Organization（世界知的所有権機関）という国際機関は工業所有権が主ですが、著作権も入っていますよ。つまり、その基になる思想は、人の創造力をどうやって保護するかということ、それがまた経済的な効果を生むわけです。そうすると、今、科学技術立国なんて、各国が言い出していますから、工業所有権と深い関連があり、大きな国際経済問題になってきました。その基になっているのは、やはり創造性ですから、著作権の問題になってくるわけです。大変複雑な問題で、今の問題は私には分かりません。

伊藤 著作権課長以後、著作権との関わりというのは、全くございませんでしたか。

天城 ありません。その後、どんどん優秀な課長が出て来て、やっていますからね。

知的所有権関係の研究者や学者は少ないんですよ。いま高度職業専門人の養成の一つとして、法学部の修士課程に、そのためのコースを作ろうという話が出ています。企業の法務要員の養成ですね。そこには、無体財産権の問題が入っているんです。そういう専門家や学者も

少ないんです。先ほど触れた勝本先生も著作権の専門家ではなくて、国際私法の専門家だった。国際私法の方が、大体著作権をやっていたんです。

それでも企業には、工業所有権や特許権の問題について詳しい方はたくさんいますよ。企業法務です。先端的なことをやっている企業——例えばソニーにしても、東芝にしても、日立にしても、世界の特許権がどうなっているかということ、常に調べているんです。自分のところで新しいものを作っても、抵触することになったら大変だし、そういうのがどうなっているかということで、専門家をたくさん抱えていますね。

とにかく二カ月間やりましたが、もうこれ以上は著作権や条約会議については、質問しないでください。

伊藤 特許は特許庁がちゃんとあって、大きなシステムですが、著作権のほうは相変わらず著作権課でしょう？

天城 そうですね。でも、今は文化庁が非常に充実してきて、著作権課と国際著作権課と二つあります。特に、アジア地域の著作権思想について、著作権の思想が徹底しないと、お互いに不便だからということで、日本が中間的な立場で、新しい研修などを行っています。

義務教育費国庫負担法を巡って

伊藤 それにしても、二カ月とは短いですね。

天城 短いですよ。私個人としては、ある種の被害者ですよ。

それで、二カ月経ったら財務課長でしょう。当時の財政状況はドッジ・ラインだとか「シャウプ勧告」だとか、次々に米国のミッションが来て、超インフレを克服するために、いろいろ対処した。その中で戦後の教育改革をやっていくものですから、制度的にも非常に難しい問題があったと同時に、金がなければできない仕事がたくさんあったんですね。

昭和二十二年に、新学制が実施された。そのときの最大の財政問題は、六・三制で中学校三年まで義務になったのだから、校舎を造ることでした。既存の校舎には焼けたものがたくさんあって、戦災復旧と新制中学の整備が急務で、設備費を確保して、机や椅子も全部揃えなければならぬ。建物の建設と設備費、この二つが非常に大きな問題でした。それにもう一つは、教員の給与ですよ。給与と建物で、そのための金が最大の問題になったんです。

教員の給与というのは、明治の学制発布以来、地方財政の最大の問題なんです。『地方財政史』というのを、ご覧になれば分かると思うんですが、地方財政の最大の問題は、ずっと教員給与です。どこで、それを負担するか、どうやって給与の水準を保持するかということが、教育政策と地方財政の最大の問題で、さまざまな歴史があるんです。簡単に言うと、市町村で払っていたのでは払い切れないし、格差が生じる。義務教育の学校は市町村で建てても、義務教育の教員の給与は府県で負担しよう、と。ところが、その府県にも貧富の差がありまして、教員の給与に格差が出てくる。結局、国で面倒を見なければいけないのではないかと。それで、長い間の議論の末、昭和十五年に義務教育費国庫負担制度というものができたわけです。二分の一を国で負担する。

そういう状況だったんですが、戦後は、その他に「盲聾」も義務制になったんですね。それと、あと「精薄」に対する養護学校については、就学者がまだ少なく、義務制を延期していたんです。それから、給与についても、本人の月給だけではなくて、扶養手当その他の手当が加えられてきた。義務教育費国庫負担法の給与の範囲が、広がってきた。

それで、どうしても文部省としては、義務教育費国庫負担法による国の半額負担の、中味の充実を図りたい、と。二十二年に新学制が発動して、二十三年に「盲聾」が義務制になるので、その機会に義務教育費国庫負担法を改正したんです。人件費一切含めて、国がその二分の一を負担にして、二十四年度から実施するつもりでいたんです。しかし、「実績を負担する」と言っても、その時分、地方では賃上げ闘争が激しくて、勝手に上げられたものを、半分負担しては国の財政が成り立たない。そこで、枠をはめようということで、教職員というのはどこまで入るのか、と。普通の教員のほか養護教員も、あるいは事務職員も……。『盲聾』では、助手や寮母などもあります。それから、全体をどのくらいの定数にするのか。教職員の範囲と全体の定数と、給与の基準を決めなければいけない。要するに、基準ですね。

伊藤 給与表みたいなものですか。

天城 それは給与表になりますが、最高はどこまでだとか……。従来の義務教育費国庫負担法に、政令で標準を作ったんです。国の財政事情もあるから、それもやむを得ないと思ってね。

それで、二十三年に法律を直して、二十四年から実施しようとしていた矢先に、ドッジ使節団が来たんです。それで、超緊縮予算になった。激しいインフレを抑えようと、教育費は全部一割カットで、バツ

とやられたんですよ(笑)。それで、二十四年から実施することが決まっていたところを、バツとやられたものですから、それは大変ですよ。そのとき、一番酷かったのは、六・三制の建物の補助金がゼロにされたんです。市町村で建物を造っている最中に、「予算ゼロ」というので、自殺した村長が出たりしたんです。

伊藤 現実に、もう建て始めているところで、カットされたわけですか。

天城 そういうところもありました。予定したところは、たくさんありますからね。

伊藤 その自殺という話を聞いて、当時、私は何で自殺するんだろうかな、と。

天城 片方では子供が目の前に控えていて、片方では建てなければならぬ。国から予算は来ないし、金はない。進退窮まったということ、責任を感じて自殺したんでしょうね。実際、この件は国会議員にとっても、市町村にとっても大問題になって、猛烈な陳情がありました。何しろゼロですからね。確か、その年の秋に補正予算で、十数億円が付きました。

伊藤 でも、文部省に陳情してもしようがないでしょう。

天城 いや、文部省じゃなくて国会ですよ。

伊藤 国会だって、言われたって困るんじゃないですか。GHQに言ってくれ、と(笑)。

天城 占領下は、そんなことはたくさんありました。国会議員も反対ですよ。国会議員だって、地元に戻れば、みんな突き上げられちゃうし……。だから、国を挙げて大問題でしたよ。それで、せっかくいろいろ準備を整えてやっていこうとしているときに、ドッジ・ラインで

超緊縮予算をやられたものですから。

そこで、建物のほうは補正予算で若干付けるという形で解決したんですが、その翌年かな、シャウブ税制使節団というのが来て、今度は日本の税制を改正することになった。当時は地方財政平衡交付金ですから、国の予算なんですね。これは、財政事情で動いちゃうんです。要するに、教育費の確保にはならないわけです。義務教育費国庫負担法も廃止ですからね。

それで、文部省を中心として関係者——市町村も教員組合もみんな一緒になって、「標準教育費の確保に関する法律」というのを作ろうとしたんです。要するに、平衡交付金で見られるけれども、教育費の積算の基礎になる標準教育費を法定して、それは必ず教育に使え、と。ちょっと無理なんですけどね。

伊藤 袋の中の、この部分は教育費だということですか。

天城 ええ。その法律案を作って国会に出したんですが、それは無理だということでは通らなかったんです。知事会も強い意向だった。けど結局、駄目になった。

義務教育費は明治以来、教員の給与を保障するために、苦心して積み重ねてきたもので、その政策が全部なくなってしまったのです。それで、義務教育の水準を保つためにも、地方財政の大きな負担を支援するためにも、義務教育費国庫負担法を、もう一度復活しようという動きになってきた。それが二十七年の国会で、大変な議論の末、成立した。義務教育費国庫負担法が復活したと言うよりも、新法ができたんですね。そして二十八年から、これに基づいて、改めて予算措置をしようということになった。

そんなときに、私が財務課長(昭和二十七年十月)になったのです。

私の前任者が大変奮闘したんです。彼も「右肩上がり」で栄転して行きました。後任については、いろいろな意見があったようですが、結局「あいつにやらせろ」ということになるんですね。だから、著作権課長をクビになったんじゃないんです。財務課長は初等中等教育局の筆頭課長ですから、皆から「大栄転だ」と言われました。

伊藤 十月というのは、異動の時期なんですか。

天城 必ずしも、そうではないんです。国会が終わると、よく異動があるんですが、それが何かの関係で遅れることがあるんです。あのときは、国会が遅れていたのかな。

いよいよ二十八年度の予算を作ろうというときで、新しい義務教育費国庫負担法に基づいて、予算を編成したんです。それが一応終わって「やれやれ、お正月は家にいられる」と思っていたら、次官から電話がかかってきて、「大臣が大変なことを言い出した」と言うんです。

「半額国庫負担を、全額国庫負担にすると言い出した」と。教員の身分を全部、国家公務員にする、と。それで、せっかく前の国会ですつたもんだして、半額国庫負担を復活してやろうとしているときに、いきなり全額負担だとか、国家公務員だとかいうことになったら、やり直さなきゃならない……。

伊藤 法律改正ですか。

天城 新しく立法しなければ、駄目なんです。しかし、「とにかく、やってくれ」と言われた。その電話は暮れにかかってきたものですから、「元日は、皆さん無理でしょうから……」ということと、財務課の主だった課員に電話して、「二日の正午に集まってくれ」と。それで、二日の日に皆さんに来てもらって、それから二週間、一度も家に帰らないで泊り込みですよ。

そこでは二つの仕事がありまして、全員を国家公務員にするというのは身分関係の切替えですから、全部、法律がいるわけですね。それから、予算は二分の一で組んでいたんだけど、全額にしなきゃいけないから、これも組み直さなければならぬ。

伊藤 その年度の内に、変えようというわけですか。

天城 そうそう。一月に予算を国会に提出して、その国会でやろうと言うんですから、無茶ですよ。

そのときの文部大臣は岡野清豪さんという人で、銀行屋なんです。大蔵大臣が一万田尚登さんです。まあ、「そういうふうには決まったから、やれ」と言うわけで、身分関係のほうは地方課でやりまして、木田（宏）君なんかが、そこにいたんです。それで彼のほうで、「全員を国家公務員に直す」という法律案を作ったんです。ですから、このときの法案というのは、「義務教育学校職員法」という名前なんですよ。

伊藤 それは身分のほうですね。

天城 私のほうの財務課は、給与費を国費に全部組替えなきゃいけない。半分しか入っていないのを、全部にしなきゃならない。それをどこからか持ってこなければならぬ。暮れに予算案は決まっているんです。

伊藤 それは、大臣同士で話がついているわけですか。

天城 予算案は決まっているでしょう。だから、その中で全てやらなきゃいけない。交付金の中の一部を持って来て、文部省予算として組替えなきゃならない。「自治省と文部省とで交渉してやれ」と言うんです。とにかく、「大臣同士で話を決めちゃったから、やれ」と言う。大蔵省側では一万田さんが、「岡野君が日教組、日教組と一人で騒いでいる」と言っている、と。一万田さんの話も、あまりはつきりしていな

いけれども、決まったことは決まったようなので……。だけど、大蔵省も予算を決めてしまったから、お金はない。平衡交付金に入っているものから引つ張り出してきて、国家公務員の教員の給与に切替える以外ないと言う。だから、自治省と交渉してくれ、と。そんなこと言ったって、国の予算を直すんだから、とにかく三者で相談しよう、と。そしたら、大蔵省の主計官は、「わしは、もう軍配を持って土俵から下りるから、自治省とやれ」と言うんです。酷いものですよ。

ところが、ご存知の通り、交付金では基準財政需要額が決められていて、それを賄うために交付税で、例えば七〇パーセント出るとすると、三〇パーセントは地方の自前の財源でやる。だから、標準教育費があっても、交付金に入っている金は、その七割から八割しか入っていないんです。それを全額にするなら、七割じゃなくて、十割持つてこなければいけないでしょう。そしたら、今度は交付税が凹んでしまう。交付税が働かなくなっちゃう。土台無理なんですよ。それで、こっちは国家公務員にして、全額国で払うと言う以上は、標準教育費でもらわなければ、実施できないんです。自治省と交渉です。それに大蔵省は、「金がないよ」と言っ出てきません。

このときに、僕は財務課長になったばかりで、まだ新米だったんですが、自治省の相手は奥野誠亮さんなんですね。あの大先輩が担当課長ですよ。嫌な巡り合わせになっちゃってね（笑）。高等学校も先輩だし、役人としても先輩だし、ベテランの課長でしょう。でも、とにかくやらなきゃいけないんですね。このときから、教員給与のほかに、教材費の一部負担が規定されていた。教材費で非常に困っていました、教材費の基準も国で作って補助しようということで、これも加えていたんです。とにかく全額国庫負担で、こっちは国家公務員になるとい

うことで、もらわなきゃしょうがないから、と。それで、奥野先生と一所懸命交渉して、これも妙な話なんだけど、うまい具合に標準教育費でフツと抜けたんですよ。

伊藤 「抜けた」というのは、どういうことですか。

天城 文部省が、もらっちゃったんです。そうすると、交付金が減るでしょう。そういう形で決着しちゃったんです。

伊藤 よく自治省が認めましたね。

天城 いやあ、それが不思議なんです。そのときの自治省の次官が次長が鈴木俊一さんで、鈴木さんが文部省にやって来た。こちらは劔木（亨弘）さんが次官だったんですが、劔木さんのところに鈴木さんが来て、「あれは自治省としては、非常にミスった。あれは御破算にしてくれ」と（笑）。それで、教材費の一部負担も、うまく入らないんです。それで岡野さんにも、「ここまで来たんだけど、教材費が入らないんです」と。そしたら、「金がなかったら、銀行から借りたらどうか」と言うんですよ、銀行屋なものだから（笑）。そういつた経緯がありまして、結局、「返してくれ」と言われても、「もう決めちゃったんだから」と。それで、奥野氏も非常に困ったらしいんです。あのベテランが、どうしてそうなっちゃったのか、ちよつと僕もよく分からないんだけどね。

でも、結局、全額国庫負担を取りまとめて、「義務教育学校職員法案」を作った。法制局でも、苦勞したんです。法制局の審議では、大蔵省は何だかむくれて、法制局に來ないし、自治省も反対して來ない。それで、佐藤（達夫）法制局長官が、担当参事官ではなく、「俺が直接やる！」と言って、長官の目の前に、みんな呼び集められて……。 （笑）。とにかく、法案を作ってもらって、国会に出したんです。

そしたらね、国会解散でしょう。僕たちも一応、形だけは作ったけれども、実際に動くかどうか分からなかったんです。職員法を作ったけれども、細かいところは、みな「政令で定める」「政令で定める」で、委任しちゃったんです。法律で書き切れないところが、たくさんあるものだから……。実際に始まったら、どんな政令にするのか分からない。結果は解散で、吹っ飛んでしまったでしょう。僕らも、「政治的に決まった、決まった」と言うものだからやった。「金がなければ、銀行から借りて来い」なんて、勝手なことを言う。まあ、こんなことを言うてはいけないけれども、我々は「万歳！」をしましたよ（笑）。予算のほうは、二重底になっているんですからね。「半額」国庫負担法の予算が通っていて、ゼロにはならないんだから、架空の案がなくなれば、もう問題はありませんからね。念願の「半額」国庫負担ができているんだから……。

伊藤 架空と言っても、正月の二日からやった仕事がパーになって……（笑）。

所澤 それで「万歳！」では辛いですよね（笑）。

天城 とにかく、二週間は一日も家に帰りませんでしたからね。

伊藤 文部省の中に寝泊まりですか。

天城 ほとんど文部省の中で寝泊まりしましたし、あの時分、そこら辺に小さな宿屋があつて、そこに泊まったこともありました。

所澤 今の立法の論理なんです、国家公務員にすることのほうが優先して、そして給与を全額国庫負担にすることという発想だったんですか。

天城 そうです。

伊藤 その国家公務員にするというのは、どういう意味なんですか。

天城 地方公務員だと、各府県の教育委員会が所管です。あつちで突き上げて、こつちで突き上げる。日教組を抑え込もうという考えがあつたんじゃないですかね。国家公務員にすれば、労働組合もできないし……。いやあ、単純なんです。だって、「銀行屋さん」と「日銀総裁」と、二人で話しているんだからね。

伊藤 それは、もうそれでお仕舞ですか。

天城 吹っ飛んだんだから、お仕舞ですよ。徒花ですね。

伊藤 次の議会に、ということにはならなかったわけですか。

天城 国会解散ですから、廃案です。

伊藤 予想できないことが、次々と起こるものですね。

天城 いやあ、いろんなことが起こりました。それで、剣木次官も怒っちゃつて、僕らを突き上げるんですよ。しかし、「そんなこと言つたて、次官、しょうがないでしょう。大臣がそう言つたて、できないんだから」と。彼も、間に挟まつてね（笑）。さすがに「教材費は銀行で借りて来い」と言われたときには、次官も怒っちゃつて、「大臣、国の予算を作っているんですよ」と言つたことがあるんです。

小池 それは省議の席上か何かで、岡野さんがおっしゃられたんですか。

天城 いや、始終相談していますから。二週間、僕も徹夜で朝昼晩やつていたんだから……。

小池 岡野さんは、その前は地方自治庁長官でした。ですから、地方税制に詳しくはないにしても、ある程度のは分かっていたと思うんですけどね（笑）。

天城 いやいや、駄目ですね。

伊藤 それで、実際に実行されたのは、二分の一の国庫負担というこ

とですか。

天城 ええ、それで始めたんです。お蔭で、それで済みましたけどね。ただ、二十五年に、「シャウプ勧告」の前に復活してやろうとしたときには、定員定額制をやろうとしたでしょう。今度は、二分の一の実績負担なんです。

伊藤 実績負担なんですか。

天城 ええ、実績負担です。でも、最初から富裕県をどうするかという問題は、大蔵省との間にありましたし、地方団体の間でも不公平じゃないかという議論がありました。予算を組むときに、見込みでしか予算が組めないで、必ず不足して、翌年精算でしょう。大蔵省が、「やり切れない」と言うんです。これが定員定額制の論議に入ってくるんです。標準教育費が必要だということになる。それから、「交付税をもらっていない、いわゆる富裕県には交付しない」という政令を作ったんです。初め、東京とか三県ぐらいあったかな。この負担法を巡っては、教員の定数をどうするかとか、話がずっと続くんです。

伊藤 それについては、東京みたいなところから、不満は出ないんですか。

天城 法令できつちりやれば、特に不満は出ません。

伊藤 非常に不公平な感じですね。

天城 交付金制度というのは、大蔵省が「今年は金がないから、駄目」と抑えたりするから、地方では評判が悪かった。それで、国から金を出すなら、その分は地方税に回せという話もあった。地方税ではバラバラだからというので、国税の一定比率を本来の地方の税金ということで、その後、交付金は交付税制度に直されました。

でも毎年、基準財政需要額というのを作りますからね。標準規模の

学校を想定して、その費用を入れてあるんです。それは、そのまま使えるわけではないんだけど、そういう積算にしてあるものだから。その後、自治省も給与が上がれば、それを足したものを標準とするのです。

伊藤 教員給与は地方によって違う、ということはないわけですか。

天城 一応、基準がありますから。

伊藤 不交付団体も同じことですか。

天城 教育公務員特例法によって、地方公務員である教職員の給与は、国家公務員に準じて制定しろ、となっているんです。だから、国の人事院の勧告で、国の給与が決まるでしょう。だから、国の給与法を見ながら、地方の人事委員会が決められているので、金のあるところは若干高い……。東京が一番高かったんですね。

所澤 今でも、恐らく東京が一番高いんですね。

天城 最近になって、また東京都の給与が高過ぎるんじゃないかと言って、議論されているんですね。また、市によって、グッと上がっているところがあるんです。教員ではなくて、市の職員ね。それが財政構造会議が何かの話から始まって、「見直しをやれ、見直しをやれ」と自治省が盛んに勧告して、それでいま直してきているんですね。

伊藤 大阪の近辺が高いんですね。東大阪市とかね。

天城 やっぱり地域情勢から、上げざるを得ないと思って上げているし、突き上げが強いところは、どうしてもね。

伊藤 自治労の近くとか……。

天城 「義務教育費国庫負担法始め」の一幕は、これで終わりです。当時の地方教育費を巡る問題は、給与が一番大きく、それと建物の問題だけれども、これだけではないんですね。

僻地教育と特殊教育——財務課長時代

天城 その頃、教育の特定分野の振興を図る動きが出て来ました。特に、産業教育です。高等学校は、総合制とか学区制とかという問題に押されて、産業教育が振るわない。日本では、戦前から資本主義の発達に伴って、産業教育という大きな流れがあるんです。産業教育振興会などのグループもあって、強い政治力を発揮し始めて、国会議員に働きかけて、議員立法で産業教育振興法を作った。商・工・農・水産などの専門教育に国が補助して、産業教育の振興を図ったのです。

そしたら、「理科教育も大事だ」と言い出した。理科教育は実験実習のための設備費が必要なので、議員立法で理科教育振興法というのを作ろう、と。産業教育とか理科教育に関しては、初等中等局にそれぞれ担当する課があつてやつていたんです。しかし、次々に議員立法が始まると、義務教育費国庫負担法で、せっかく新しく教材費をまとめて取り上げた意味がないでしょう。教材費は、そういうものをみんな入れて考えていたんです。産業教育は一部の高等学校だけでも、理科は小中学校全部ですからね。それで、「教材費の中から、理科教育分を抜け」と、今度は大蔵省が言い出すんです。次々に議員立法が始まったら、せっかくの教材費もバラバラになっちゃう。学校の裁量を認めた教材費という形を作ったんだから……。

私は財務課で、義務教育費国庫負担法の給与と教材費を担当していたものだから、「そんな議員立法をやたらに作ったら、折角の教材費は

分解してしまいます」と言つて、（理科教育振興法を）担いでいた議員に文句を言つたんです。それで、怒られちゃってね。特に、理科教育については、「お前は理科教育振興に反対するのか」と。「反対しているんじゃない。予算の問題です」と言い返したんですが、どやしつけられて、「二度と来るな」と、お出入り禁止になりました。

それから、教育全体を見ていて、そういう特定の領域ではなくて、底上げをしなければならぬ問題があると考えました。一つは僻地教育です。僻地というのは山間部や島や岬などの、要するに地理的条件あるいは気候的な条件で、ハンデを背負っている地域です。子供たちも、そこに勤務する先生方にも、何か特別の応援をしなければと思いました。僻地教育振興方策を考えたのです。元々、東北を中心にして、僻地教育振興に非常に熱心なグループがいました。

伊藤 それは議員さんですか。

天城 いいえ、僻地の先生と教育委員会です。彼らに突き上げられて、議員さんも動きました。「僻地教育振興をやろう」と。その中に物凄く熱心な先生がいて、私に「立法をしてくれ」と言うんです。

僻地の条件と、その対策はかなり違ひまして、いろいろ話を聞いてみると、非常にバラエティに富んでいました。一番傑作だったのは、北海道に二風谷というところがあつて、沙流川という川を上つて、ずっと奥に入つて行ったところなんです。元々はアイヌ部落なんですね。そこが非常な僻地で、アイヌ人の子孫が多かった。北海道の教育委員で、アイヌ問題に非常に熱心な人が私のところに来て、「あそこの子供たちは風呂にも入らない。あの習慣を直さないといけない」と。

「学校に風呂を作りたい」と。そこでは亜炭が採れるから、燃料はある。学校に浴場を作る補助金をくれ、と。それから、電気が来ないか

ら、当時話題になっていた風力発電をやりたい、と。あるいは、山の奥のほうでは、溪流を使って小規模な発電をすれば、電気が点く。そんな話がたくさん出て来ました。それで、教員には生活上不便が多いから、僻地手当を出す。それから、学校は単式が多いし、複式も多いし、その教育には苦勞も多いし、手間もかかる。しかし、これについては、文部省の中に、特に所管がないんです。ただ、財務課は給与の關係で僻地手当を担当していたので、「それなら、俺のところで行うか」と決心しました。

今でも思い出しますが、渡辺ユキさんという女の先生がいましたね。元々は会津の山の中の、僻地学校の先生だったんですが、その先生が大変熱心で、県内でも熱心に運動していました。その先生が、福島県の教育委員会で、僻地担当の指導主事になったんですが、団体の仕事の關係で、しばしば東京に来るんです。そのうちに、「私は、どうしても僻地教育振興法を作り上げなきゃいけないから」と言って、辞めて東京に来てしまったんです。それで、「渡辺先生、裸になったってしょうがないじゃないか」と言いましたら、「退職金もありますから」なんと言う、物凄い先生でね。東京都で何とか身分を保障してやれないかということで、東京都の教育長に話して、東京都の僻地教育の担当指導主事にもなったんです。東京都の僻地というのは、昔は三多摩の奥のほうと、伊豆諸島です。今では、ちよつと考えられないんだけど、私が夜の十一時ごろ家に帰ると、渡辺ユキさんが来て待っているんです。家内は事情がよく分からないものだから、「待たせてください」と言われて、座敷に上げる。「ここまで来なくたって、分かっているよ」と言うんだけど、「昼間、文部省ではゆっくりお話しができない。どうしても、やってください」と。そこで陳情ですよ（笑）。「も

う遅いんだから、泊まんない」なんて言うことで、泊まって行ったりしましたね。まあ、ほかにも教育委員の中には熱心な人がいましたよ。岩手県なんかは、たくさんいましたね。

それで、とうとう財務課が中心になって、僻地教育振興法を作ろうということで、立法作業を始めたんです。予算も碌に付いていないので、「法律を作ってから、予算を取ろう」なんて言って……。初めは僻地手当とか、ちよつとしか付いていなかった。それをネタに、法律を作ったんです。しかし、予算がないと、どうにもならない法律です。理念だけ書いても、どうしようもないですから、なかなか法律にならないんですよ。それで、法制局の参事官も、「主旨は十分分かったから」と言って、将来の予算化を見通して、前向きに協力してくれました。これが、うまくいきました。当時、国会で予算修正が時々行われました。政治的配慮で、特に民主党の修正がよく通りました。我々は、この方法を取りまして、民主党から予算増額を提案してもらい、これが成功しました。それから、いま言ったようなものが、だんだん付けられましたね。財務課長だったけれども、僻地教育振興法を作りました。これが二十九年だったかな。それで、これもだんだん改正されて、中味も充実してきました。

もう一つは、特殊教育についてですが、教員の給与は「半額」国庫負担法で処理されることになったでしょう。しかし、「盲聾」など、不自由な子供がいる家庭の経済的負担が大変なんです。それで、全般的に就学奨励をどうするかという問題があるんです。貧困な家庭の子供に対しては、就学奨励のための補助金を出すという制度が、戦前からあるんです。戦後は生活保護法ができて、生活保護法の中に教育費を含めたのです。一定水準以下の家庭の子供には、教育費を扶助するこ

ととなったわけです。ところが、生活保護の基準で切ってしまうと、ボーダーラインの子供の就学が困難になる。それで、生活保護法では「要保護」というのに対して、「準要保護」を認めて、そこに金を出す、と。

それから、それと同じ考え方で、特に特殊教育の就学児童・生徒を持つている父兄には、余計に負担がかかるので、「就学奨励費」を出そうと考えた。だって、一方には議員立法で派手にやっている産業教育振興、理科教育振興などがありますが、特殊教育については、あまり応援する人がいないんです。それで、この二つを、言わば私が初中局の代表として、財務課長のときに作ったんです。もう一方の六・三制の建物のほうは、施設部という別のところでやっております、これは市長・村長などが付いているので、サポートが強くて、予算のときは賑やかでした。ある意味で、義務教育の落ちこぼれ部分と考えて、私は「僻地」と「特殊」を一所懸命にやりました。財務課長時代のことでですね。

伊藤 三年間ですね。

天城 二年半でしたかね。二十八年、二十九年、そして三十年の一月に……。

所澤 三十年の九月に大臣官房になっていきますね。

天城 三十年の九月か……。

所澤 大体、三年近くですね。

天城 それで、官房会計課長に替わりました。

伊藤 しかし、まあ、いろんなことをおやりになりますね。

天城 「僻地」と「特殊」は、今でも特別に関心があります。文部省を辞めてから、私は民間の財団で、この二つを今でも応援しています。

伊藤 驚くようなことばかりですね（笑）。

天城 驚くようなことばかりですからね。著作権課長だって、そうですよ。特にジュネーブの国際会議なんかは、訳の分からん二人の争いで、「喧嘩両成敗で、お前が行け」と言われたでしょう。それで結局、行かなかったけれども、そうしたら今度は義務教育費国庫負担法も通って、「こつちが大事だから」と財務課に行き、全部国庫負担という悪夢と戦い、そのあと定数基準の問題や義務教育の教員の問題をやってきたし、高等学校問題も、ずつとやっていますけどね。その後、私はもう一度、初等中等局では局長を務めることになりました。

義務教育で一番困るのは、児童・生徒の急増・急減なんです。絶対的な与件ですからね。就学年齢の子供は小学校、中学校、高等学校に進学して、さらに大学に行く。年齢別に増・減が生じる。それに応じて、それに合わせた措置が必要ですからね。他の省の仕事にも、こういうことに近いものがあるかも知れないけれども、とにかく絶対的な与件ですからね。例えば子供が減ると、教員は余るから定数を削る。それはまた、教員養成に影響してくる。今は少子化が進んでいるから大変なんですよ。あつちこつちに、波及しますから……。

ところで、所澤さんは教育学部ですね（笑）。

所澤 そうなんです。教員採用数の減少は頭が痛いですね。

初等中等教育局にいらしたときは、教員養成の問題には全然タッチされていないんですか。

天城 教員養成そのものは、大学局でやっていました。

所澤 教員の研修のほうも関係はないんですか。

天城 研修ですか。大体、教職員養成課ですね。

所澤 小学校や中学校には、事務の職員がいますよね。それで、昭和

二十年代の前半ぐらいは事務職員がいなくて、教員が事務をやらされていて、あるときから事務職員が置かれるようになったそうです。それには、何か関係されていますか。

天城 教職員の範囲をどうするかという問題は、初めからありました。小さな学校で、事務職員なんかいないところはたくさんありました。事務職員や養護教員を、どの程度の規模で置くかとか、盲聾学校には寮があつて、寮母さんが要る。そういう方々の給与を、義務教育費国庫負担法に含めるかどうかという議論は、散々やりましたね。いつの段階で、どれが入ったかというのは、今はちょっと覚えていません。

小池 特殊教育みたいな形になりますと、例えば、今言う厚生省などとも折衝をされたんですか。

天城 厚生省とは、よく連絡しましたよ。僕の場合は、まだ文部省の特殊教育については課がなくて、「特殊教育室」だったんです。この室長は心理学の専門家で、前は厚生省にいたんですが、文部省に移られた。児童福祉や監護は厚生省の仕事でしたから、厚生省とは非常に縁が深くて……。

特殊教育には、判別基準というのが要るんです。目が悪いと言つても、完全な全盲か、半分ぐらい見えるのか……。耳が聞こえないと言つても、全く聞こえないのか、難聴なのか……。特に、「精薄」になってくると、段階が1、2、3、4ぐらいあつて、全くの白痴なのかとか、いろいろあるんですよ。それに基づいて、この子なら養護学校に入れるとか、普通学級に行つても大丈夫だとか、入学するときに面接か調査をやるんです。ところが、ダブル・ハンデがずいぶんあるんですね。今でも多いんじゃないですか。目が見えないと同時に「精薄」だとか、耳が聞こえなくて「精薄」だとか。そういうダブル・ハンデ

の子供がずいぶんいます。ヘレン・ケラーのような人が、時々いるんです。

山梨の聾学校では、ヘレン・ケラーのような「三重苦」の子供の教育も、実験的に行っていました。大変ですよ。その頃、山梨の聾学校にいた男の子は、成功したかなあ……。いずれにしても、やや普通の生活に近いものを送れるようになった。しかし、女の子は遂に失敗しちゃったんですね。というのは、そういう子は家庭でも、どうにもしようがないものですから、座敷牢みたいな部屋に入っているんです。

それで、特別な教育をするのが遅かったので、なかなか慣れないんです。僕が訪問したときは、男の子がいましたが……。成功したような子供でも、先生は大変です。手の感覚だけで、自分の先生だと分かるんです。「この子と握手してごらん」と言うので、僕もちよつと手を出したら、パツと放しますね。そのくらい一人一人の面倒を見てやるんです。でも、それはなかなか一般化しませんでしたね。今、どうなっているのか、僕もちよつと縁遠くなつたけれども……。判別基準というのは難しいんですよ。

伊藤 それは、お医者さんがやることですか。

天城 「精薄」関係だと、精神科のお医者さん。まあ、聾学校とか、そういう学校の教師の中には専門家がいますからね。教員養成大学にもいますよね。そういうところの専門家が判断するわけです。

伊藤 それが僻地だったら、もっと大変ですね。

天城 大変ですよ。僻地もその後、道路ができて自動車で行かれるようになったとか。あれは、基準があるんですよ。村役場から何時間でその学校に来られるとか。道路は、相当重要です。それから、豪雪地帯には「冬季分校」というのが置かれるんです。冬は学校に通学で

きないので、冬季だけ全寮制の分校を開いて、そこに子供たちが寝泊まりして教育を受ける。二風谷の学校に風呂を作ったのは、面白い例でした。

僕も、幾つか僻地学校を視察しましたよ。島の学校とかね。何で、あんなところに住むのかと思うんですが、岬の先のほうに住んでいたりとか（笑）。漁村ですけどね。それから、北海道みたいに広くて、子供がなかなか通学できないと、たくさん小さな分校を造る。別海村なんていうのは、香川県ぐらいいあるんじゃないですか。北海道も行ってみると、ずいぶん広いですよ。

伊藤 しかし、財務課長という職務を考えたら、何か全然違ったことをやっておられたように思いますね。

天城 最初申したように、財務課は初等中等局の筆頭課で、連絡課とも言われていました。局全体に気を配り、当時は局の審議官制度がなかったので、時には局長の代理を務めなければなりませんでした。

所澤 いや、財務課長という名前からは想像がつかないですね。

小池 予算の執行とか、予算の組み立てをずっとやっておられるかと思っただんですが……。

「研修会」で教育行政を講義

所澤 履歴書を拝見すると、所々に「講師に併任」とあって、「教育委員会事務局職員研修会」という記述があるんですが、先ほどのお話では二十八年の一月二日から立法作業をされておられる。そして、十

六日から講師になっているんですが、それは作業が終わったら、すぐに講師にいらしたということですか。

天城 その日に、発令されたんでしょうね。

所澤 それで、任期が一月二十二日までになっているんですが……。

天城 講習会？

所澤 講習会です。

天城 ええ、講習会には行きましたよ。そんなのがずいぶんありましたね。

所澤 これは、どこにいらしたんですか。各地の教育委員会を転々と……。

天城 どこでやったかな、履歴書に書いていませんか？

所澤 最初のところは書いていないんですが、あとのほうは鹿児島県とか宮崎県とか書いてあります。

天城 そのとき、どこに行ったのかは覚えていませんが、あちこち飛び歩いていましたね。

所澤 その当時の研修会というのは、どういう話をされるんですか。

天城 新しい教育制度及び教育行政制度ですね。

伊藤 どうして先生が行かれるんですか。

天城 新しい制度ですから、大学の教育学者はあまり知らないんです。従来の教育学というのは、大体、哲学か心理か歴史でしょう。僕も教育学を知らなければいかんと思って、勉強しようと、いろいろな本を見たけど、その当時はみんな教育史、教育哲学、教育心理学です。教育行政というのは戦前にもありましたが、大体、行政法の一部をやるだけなんです。だけでも、新しい教育行政というのは、かなりアメリカ的な考え方です。法律も必要だし、行政学も必要だし、それから人

事行政なんているのは、特別権力関係の理論しかない。今では、経営学ですからね。これなんか、みんなアメリカの方式です。

所澤 そうすると、その研修会で聴いている人たちというのは、現場の先生ではなくて、教育委員会の人たちなんですか。

天城 そのテーマによって違うんですが、行政上の問題は教育委員会の事務局の人と校長が多かったと思いますね。

伊藤 ここにも書いてある「併任」というのは、どういうことですか。

天城 何だろうね？

小池 出張ではないんですね。

所澤 今だと出張になりそうなことなんですけど……。

小池 普通の役人だったら、出張ですよ。

天城 出張も、一々、そんなことは書かないでしょうからね。いつのことですか？

所澤 二十八年、二十九年頃ですね。

伊藤 いまお話しの、大変忙しい頃です。

天城 IFELかな。あなたはIFELを知ってる？

所澤 分かりません。前にも出て来ましたよね。

天城 ええ。前にもちよつと話しましたが、IFELかな。IFELというの、僕もあまり詳しくは分からないんだけど、文部省ではないんですね。IFELの講師団なんて、アメリカから来ていたからね。それで、「日本の新しい教育の研修をやる」ということでやっていたんです。だから、それにはずいぶん出て行きましたよ。

伊藤 でも、これは独立後ですからね。

所澤 二十八年、二十九年ですから。

天城 独立後も、いたんじゃないかな、ちよつと覚えていません

けれども……。

大学の先生も対象だったんですよ。というのは、戦後、大学に教育学部が急に増えたでしょう。ところが、昔の師範学校が昇格したところもあれば、文学部から分かれてできたところもあって、要するに先生がいらないんです。

伊藤 「併任」が変だと言うのは、要するに文部省の命令になっているから？

所澤 そうです。文部省になっていますね。

天城 発令が文部省？

所澤 ええ、文部省の発令になっています。

天城 これは何だろうな？

所澤 この事務局が文部省の中にあつたわけではないですよ。教育委員会事務局というところに……。

天城 だから、「教育委員会事務局職員研修」というシステムを作ったんですね。

伊藤 全国の職員を集めて、講習をやったという意味なのかな。

所澤 どうでしょうね。あとのほうは鹿児島県とか宮崎県というようなことが、上に付いているんですよ。

伊藤 でも、そのときだつて任命は文部省でしょう。

所澤 そうなっていますね。

伊藤 だから、それはその場所でやったという意味じゃないの。だって、それぞれの県の講習会なんか、財務課長が回っていたのですね（笑）。

所澤 ちよつと想像がつかないんです。

天城 僕も、そんなのはあまり気にしてなかったから（笑）。

伊藤 お若い頃だから元気一杯で、何でもおやりになったということでしょうか。

天城 いやいや、そうじゃないですよ。

所澤 あ頃は行くのだって、一泊二日ぐらいじゃないと着きませんよね。

天城 そうですよ(笑)。

伊藤 戦後の、あの大変なときにも、政治家などはしょっちゅう列車に乗って、何時間もかけて遠くまで行っているでしょう。それで、またすぐ帰って来て、また別なところに行くとか。よく体力が続くものだなと思いますが、あの頃の人は、みんなそうなんですかね。

天城 初めの頃は、列車も大変でした。窓から乗ったりなんかしたんですからね。

小池 先生も、そういうときには指定席とかはなくて、一般の人と一緒に乗られたんですか。

天城 昔は、指定席なんてものはなかったですよ。あなた方は遙かに条件のいい時代に生きているから、指定席だ何だと言っているけれども、こっちは乗ればいいんだから……。

伊藤 この当時、列車に乗るということは、場合によっては床に新聞紙を敷いて座ってでも乗るし、デッキに掴まってでもという……。

天城 そうですよ。そんなことは、僕も何遍もありますよ。

伊藤 文部省のお役人だからと言って、特別なことはないわけでしょう。

天城 まだ終戦直後だったかな、広島から東京まで立ちっ放しで来たことがありますね。

伊藤 さて、今回は会計課長になってからのお話になりますが、また

多分、どんでん返しが出てくると思います。よろしくお願いいたします。

天城 また、何か事前に質問を出していただけますか？

伊藤 はい。それで、今日ぐらいいの感じの質問のほうがいいんじゃないですか。

天城 そうですね。あまり細かくやられると困っちゃうし、僕もそれで思い出して、若干調べなければならぬものがあれば、調べて来ます。今日の著作権法についての質問は困ってしまいましたよ。著作権の「百年史」があるんですが、そんなもの、今更引つ繰り返したつてしようがないしね(笑)。

文部省でも、著作権に非常に詳しい男が時々出ているんですね。四十六年に著作権法を七十年ぶりに直して、片仮名から平仮名の法律にした。あのときなんか、優秀な者がいました。文部省を辞めて、いま愛媛県の知事をやっています。加戸守行君と言うんだけど、彼が一番詳しいんじゃないかな。そのほか、大学に行つて、著作権法を講義している者もずいぶんいます。もう僕なんか、全然駄目ですね。その後、触れていないし、さっき言ったように、ほとんど発展していつちやうしね。ましてメディアが、だんだん多角化しちゃうから……。

所澤 コンピュータのプログラミングとか、あれは難しいですね。

天城 あれは結局、著作権法で保護しているんですがね。

所澤 そうみたいです。最近では、でき上がった製品から、逆にプログラミングを解読してもいけないことになっているんですね。

天城 あのと、別の一つの権利を作ろうかという話もあったんですが、国際的に、やっぱり著作権でやろうかということになりました。

所澤 初等中等教育局のところで、一つだけ質問があるんですが、東

京に水上生活者のための、水上小学校というのがありましたよね。

天城 ありました。

所澤 それは、先生が初等中等教育局にいらした頃に関係されましたか。

天城 関係ありません。あつたことは知っていますよ。あれはその後、廃止になりましたけどね。あれは、水上運送業者の子弟のための陸上の学校でした。

それと、夜間中学校を義務教育として認めるかどうかという論議がありました。「義務教育を、夜間にやるとは何だ」とか、「義務教育というのは、昼間の学校で行うのが原則だが、昼間は働かなければならないので、学校へ来られない。だから、夜だけでもやるべきだ」とか。「そんな学校はもぐりか」とか、「その教員の給与は誰が払うのか」とか。そんな議論もありました。それで、その後、年取った人が夜間中学に来るようになったんですね。昔、小学校を卒業しただけで社会に出てしまつて、大人になつたけれども、中学だけでも出たいと思う人が来る、まあ、今の「社会人入学」ですよ。

伊藤 それでは時間も過ぎましたので、終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

〈以上〉

天 城 勲
オーラルヒストリー
第6回

[2001 年 1 月 31 日 14:00～16:20]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

小池聖一(広島大学助教授)

所澤 潤(群馬大学助教授)

村上浩昭(政策研究大学院大学リサーチ・アシスタント)

(於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター)

政策を予算化する会計課長

伊藤 時間ですので、そろそろ始めさせていただきますと思います。
今日の主な質問者は村上君になりますので、よろしくお願いいたします。

村上 今日は、大臣官房の会計課長時代（昭和三十年九月～三十五年一月）について伺いたいと思います。その直前の時期に、先生は日本ユネスコ国内委員会の調査委員を併任されたり、西洋美術館の設立準備をされるお仕事に就いていらっしゃいます。こころの事柄が、後の国際的なお仕事に関わっていくのではないかと考え、最初にお訊きしておきたいと思います。

天城 履歴書だけ見ると、そう取られるのですが、国際関係に関連する仕事に携わったのは、その次の官房長と調査局長の時代です。会計課長というのは、各省みんなそうですが、ハウス・キーピング・セクションで、裏方ですね。政策に関しては担当の局があつて、そちらが中心ですからね。どこの省でも人事、総務、会計というのは、全て裏方です。

伊藤 言ってみれば、会計係みたいなものなんですか。

天城 名前は会計と言うけれども、単なる会計係ではないんですよ。省によって若干の違いはありますが……。僕は会計課長を五年近くやりましたが、お金を見たことはありませんし、計算をしたこともないです。要するに、政策を具体的なものにするには、全部、予算の裏付

けがなければいけないです。ですから、いろんな政策を各局で考えた場合に、どのくらいお金がかかるかということで、必ず綿密な資料を作ります。それを省全体として、どのくらいの規模にまとめるかとか、過去との関連とか、バランスをどう考えるかとか、そういうことをやっているんです。ですから、ある意味では政策の裏方ですね。

伊藤 そのときには、省の幹部の人たちが、どういう方向付けをしているかということを呑み込んでおかないと、それはできないわけですよ。

天城 そうですね。それで会計課には、お金を支払う経理のほか、予算・決算に関連する法規がたくさんあるので、その会計法規の解釈とか適用の問題とか、決算をやらなければいけない。それから、文部省では「用度」というのが大きな仕事です。もちろん、最大の仕事は予算編成ですが、みんな班が分かれていて、それぞれの班が一課に匹敵するぐらいの重要性を持っています。

伊藤 その班には、班長みたいな方がいるわけですか。

天城 班には、「班主査」がいます。

それから、予算のほうで言えば、文部省の会計課長というのは、実は直轄機関の仕事がたくさんあるんです。それは、博物館、美術館、研究所、大学で、特に国立大学の場合は大学と病院と研究所がありまから、大きな組織です。だから、予算班には大学係と研究所係と病院係があつて、それぞれ専門に担当します。病院なんかは収入がありますし、本省の係と予算班というのは凄く大きいんです。

伊藤 東大に医学部があつても、医学部の附属病院というのは一応、予算の上では独立した形ですか。

天城 もちろん、東大の中です。東大に限らず、医学部では予算的に

は病院のほうで遙かに大きいんです。千ベッドくらいの病床数を持っているところもあるでしょう。病院は医学の研究と学生教育のためですが、同時に、社会的には質の高い診療機関、要するに病院です。

それで、大学病院というのは、ほとんど全ての診療科があり、外来診療と入院患者を抱えた、かなり複雑な組織ですね。ですから、医師や看護婦を始め、多様な職種の要員を抱えています。例えば、東京医科歯科大学などは、大学教育としては医学部と歯学部だけの専門大学で、それに両学部の附属病院という構成ですが、八百ベッドくらい持っていますからね。しかも、地下鉄から上がって行けるという交通の便があつて、おそらく毎日の外来の診察数は、東京都内では一番多いのではないですか。

これは、大学学術局と会計課と一緒にやっていますね。現在は大学課のほかに、医学教育課と学術機関課という専門の課があります。そういうので、表向きはあくまでも「ロジ」ですよ（笑）。

伊藤 最近流行の「ロジ」ですね（笑）。

天城 いま流行のロジスティック——兵站部ですね。だから、政策に直接の責任を持っているのは各局ですが、それらを全てお金の面から見ているとセクションなんです。従つて、保守合同だとか、あの時分は安保の問題もありましたが、そういう動きには、直接的にはどれも関係はありません。省内の各局・各課の政策を、どう予算化すること、それを査定すること、直轄機関——特に国立大学の予算をどうまとめていくか、それから大蔵省との交渉と、国会での説明ですね。

伊藤 しかし、国会の場合、政府委員として説明するのは……。

天城 原則としては、局長が政府委員なんです、会計課長だけは政

府委員なんです。

伊藤 それは非常に忙しいお仕事ですね。

天城 物凄く忙しい仕事でした。国会の予算委員会がありますね、あれは大臣が出て行って答弁するんですが、分科会というのが各省別にあるんです。そこには大臣は出席しないで、会計課長が責任を負うんです。今はちよつと違うかも知れませんが、昔はそうでした。分科会が始まって、今日は文部省と言うと、その日の朝からずっと文部省の予算をやるんです。会計課長は隅から隅まで、まず全貌を説明して、それから質問を受けて説明をしなければならぬ。だから、省内の仕事を、本当に熟知していなければ駄目ですね。私は五年くらい会計課長をやりましたが、お蔭で本当に文部省の仕事が隅から隅まで分かりましたね。

伊藤 全国の国立大学に至るまで、ですか。

天城 ええ。大体、六月頃から予算編成が始まるんです。本省については各局・課でやり、大学は各大学で始めるんです。それが、七月頃に大体、文部省に集まってくるわけですが、今度はその査定をするために会計課でヒアリングをするんです。七月、八月と、一番暑い二カ月間、ほとんどそれをやっているんです。

伊藤 それは大体、予算班がやっているわけですね。

天城 そうです。八月三十一日締め切りで、大蔵省に提出です。それから、九月に入ると、大蔵省への説明でしょう。これは各局が中心になるんですが、会計課長は全部、それに付き合っていないわけじゃないんです。

伊藤 その相手をするのは、大蔵省の中のどこですか。

天城 主計局の中に、担当があるんですね。

伊藤 文部省班みたいなものがあるんですか。

天城 文部担当主計官がいるんです。そこに主計官と主査と、その下に職員が配置されています。大蔵省の主計局には、課はないんです。総務課と経理課という課だけで、あとは全部主計官ですから、みんな実質的には課長なんですね。

伊藤 主計官というのは、課長なんですか。

天城 課長ですよ。あれも面白い組織なんですね。

伊藤 そうすると、課長と課長とで、これをやるわけですか。

天城 最初は、そうですね。ですから、八月は省内でやって、九月になると大蔵省に説明をして、予算を上げるのが十二月ですね。その間に、大蔵省からまた追加の説明要求があったり、あちこちから陳情がたくさん来たり……。ですから、六月から十二月まで、十二月の三十一日近くまでやって、そこで初めて「撃ち方、やめ！」ですからね。

伊藤 その間に、次官レベルとか大臣レベルの折衝も……。

天城 それは最後ですね。十二月の最後です。

伊藤 あれは、実質的に、本当に意味のあることなんですか。

天城 時たま大臣折衝まで行って、本当に議論しなければならぬものもあります。そうでないものは、半分はセレモニーですね。向こうも、だんだん主計官から、主計局長に上がって行くんですよ。

伊藤 会計課長の相手も、ですか。

天城 ええ。それで、他の省は知りませんが——多分そうだったと思うんですが——あの時分は文部省は全部、会計課長の責任なんです。局長も出て行きますが、途中の説明だけで、「撃ち方、やめ！」の最後のギリギリは、会計課長が全部決めてくるんです。それで、その間に、「これは、ちよっと大臣に持たせようよ」なんて「種分け」をするん

です（笑）。「これは最後まで頑張るんだから、大臣の折衝に残しておく」とか、「いや、そんなことしないで、下ろして、ここでやってしまおう」とかね。

伊藤 やはり大臣にも花を持たせなければならぬでしょう？

天城 そうなんですね。まあ、それは大臣によるんですが、大臣もあまりいろいろなものを持って大変ですから、主なものだけを持たせるんですけどね。それで、大臣によつては「みんな君たちで、やってくれ」なんてね（笑）。特に、私の頃には「党人派」の大臣が多くて、「役人上がり」は、あまりいなかったんですね。

伊藤 そうすると、細かい説明は無理なんですね。

天城 ええ。例えば、省内で予算編成をずっとやって、最後に大臣説明というのがあるんです。松永東（昭和三十二年七月～三十三年六月）さんという大臣ですが、松永さんは東京都の市会議員から上がって来た人で、全くの「党人派」です。予算説明を僕が始めると、寝ちゃうんですよ。それで、「しょうがねえなあ」と思って説明をやめると、目を覚まして「君、簡単に、簡単に」って言うんです（笑）。それを、二、三度繰り返してね。

伊藤 うるさい大臣というのは、いませんでしたか。

天城 細かいことをおっしゃる人は、やはりいますよ。「役人上がり」の人は、そうですね。

伊藤 個別に自分が陳情を受けて、「何とかしろ」とか、そういうことはないんですか。

天城 ありますね。自分の選挙区か何かの陳情でね（笑）。そうすると、大蔵省と話して、「これは大臣の出身地だから、大臣に花を持たせなさいよ」と言つて、残しちゃうんです（笑）。それで中身は、ほとん

どセットしちゃったりして……。

それから、事務的に細かいというよりか、きっちりしていたのは、例えば灘尾（弘吉、昭和三十一年十二月～三十二年二月、三十三年六月～三十四年一月）さんですね。灘尾さんは、内務省の会計課長もやった人だし、厚生省の次官もやっていました。予算の話ではないのですが、灘尾さんが、こう言われました。「役所というのは、予期しないことで、急に金が必要になることがある。何がしかの現金は、常に用意しておくこと。火災その他、非常事態にも、必ず庁舎に入れる非常口を用意しておくこと」と。多分、二・二六事件の「戦訓」だったのではないですか。庁舎管理の責任は会計課長ですからね。昔は、会計課長には役所の近所に官舎がありました。

松永東さんなんかは、破格ですよ。大臣折衝というのがあてしやう。その大臣折衝で大蔵省に行く途中に、「俺は、ちよつとほかに行ってくるから」と言って、どこかへ行ってしまったんです。どこへ行つたのかなと思っていたら、親分の河野一郎氏のところへ相談に行っているんです。まあ、こんなのは極端な例ですけどね。

あと、東京から出た中村さんという人がいたかな。

伊藤 中村梅吉（昭和四十年六月～四十一年七月）さんですね。

天城 衆議院議長までやった人ですが、あの人は「党人派」ですからね。あと、清瀬一郎（昭和三十年十一月～三十一年十二月）さんとか。**伊藤** 清瀬さんは弁護士だから、うるさいんじゃないですか。

天城 清瀬さんは、書類を持って行くと、その場で「うん」と言わないんです。「読んでおきますから」と言って、みんな家に持って帰るんです。あの人は読まないで、承知しないんです。聞いただけでは駄目なんです。それで、いつ読むのかと思っていました。こんな厚さ

（十センチぐらい）の書類を持って帰るんですよ。平河町に清瀬弁護士事務所がありましたから、あそこへ持って帰って、全部目を通す。読むことは苦勞しないんですね。法令に関係のあることを説明すると、「六法全書を見せて」と。そうでないと、納得しないんです。

伊藤 文部大臣によって、いろいろ個性がありますね。

天城 ええ。「党人派」の大臣というのは、確かに特色がありましたね。政治家というのは、あのほうがいいかも知れませんが。

伊藤 ただ、議会で上手く説明してくれないと困るんじゃないですか。

天城 ええ。「党人派」の大臣だと、議員の質問の仕方もまた違うし、細かいところを吹っ飛ばして、妙な答弁をしても満足するんですね。清瀬さんなどは、弁護士で極東裁判も担当した人で、いろいろなことをよくご存知なんだけれども、あの人も大所高所の答弁しかしないんですね。

伊藤 「これは非常に大事な問題ですので、政府委員に答弁させます」と言った大臣が、昔、いたそうですね（笑）。

天城 まあ、そういう人もおられたようですけれども、私のときにはそんな人はいなかった。けれども、あるとき、社会党の議員が清瀬大臣に道德教育に関して質問し、「文部省の考えは古い儒教の思想で、四書五経に基づいて……」とか何とかと言ったんです。それで、「大臣の所見は、どうだ」と言う。大臣は立ち上がると、ポケットから鎖の付いた懐中時計を出して見ながら、「道德教育に関しましては、日頃、いささか感ずるところがあります。お時間をいただきましたが、所感の一端を述べさせていただきます」と。それから、演説ですよ。

伊藤 「待ってました！」というふうなものです（笑）。

天城 まず、「あなた、四書五経って何だか知っていますか？」と、

逆にね。そこから始めて、演説というか、お説教ですよ。今なら、そんなことをやったら、また「ギヤーギヤー」言うかも知れないけれども、全然言わないですね。

伊藤 清瀬さんが言われるんだから、それは権威があったわけでしょうからね。

天城 ありましたね。そんなことで、私は三十五年の始めまで会計課長でいましたが、いま言ったようなお話で、主に政策をどう数字化するかということが中心でした。それで、各局・課で考えていることを全部聞いて予算書を作り、春から暮れまで、特に八月の末に大蔵省に出すまでは、動きが取れませんでした。まだ、あの時は部屋に冷房がなくて、暑くて干上がっていましたよ。氷柱を立てて、扇風機を回して、クタクタになりますよ（笑）。それで、九月から大蔵省に行って説明をするわけです。

そのほかの期間は、もっぱら現場視察ですね。あの当時、大学が今よりちよつと少ないけれども、確か六十か七十あったでしょう。それで、九州から北海道まで大学を訪ねて、実情もいろいろ見なければいけません。会計課長を二年くらいやっている間では回り切れないんです。それで大体、東京から始めたり、関西から始めたりしますから、北海道とか九州には会計課長が来たことはない、という話になるんです。それで、僕は逆にやろう、と。

伊藤 遠隔地が先ですか。

天城 ええ。北海道から始めて、次に九州をやつてという形で、五年近くいたものですから、二、三の特別なところを除いては、全部行きました。それで、学長や各学部長に会って問題点を聞いたり、どういうふうに予算化するかとか、そういう話をするんですね。それは、物

凄く勉強になりました。

伊藤 やつぱり現地に行くと、ずいぶん違いますか。

天城 ええ。建物の問題もありますからね。どこを増やさなければならぬとか、どこが壊れているとかね。

まだ新制大学は、「たこ足大学」がたくさんありましたから、移転だとか、統合の問題だとか、いろいろありました。例えば、名古屋大学が今の東山に統合移転するという話では、まず土地を買わなければならないですね。当時は、土地購入予算はなかなか計上しにくくて、とても買えない。これについては、今でも関係者がよく覚えていてくれると思いますが、文部省は予算がないし、毎年の不動産購入費にも限度がある。いろいろと折衝の末、「三年間無利子で、毎年払ってください。これは言葉で言う」ということで、名古屋市が買ってくれたんです。信頼関係がなければできません。予算は単年度主義ですからね。名大の事務局長は須川さんという非常に偉い人で、僕もいろいろ教わりました。それから、学長の勝沼（精蔵）先生も、大変立派な方でした。名古屋市と、学長と、事務局長と、私たちとの間の信頼関係で、三年間無利子で金を借り、毎年の予算で支払ったんですから……。

伊藤 統合問題というのは、到る所で起こっているわけですよ。

天城 地元の因縁がありまして、それには旧藩の話が出てくるんです。例えば、名古屋の教育大学——「師範」の統合は、一番困りました。

昔の尾張藩と三河藩の因縁が出てくる。それから、新潟大学の高田分校なんかは、最後まで駄目でした。地元は絶対に統合を認めないと言って、動かないところもあるし、教育学部の統合のためなら移してもいいけれど、代わりの学部をつくれとか……。それで、大学の整備

ができなかったところがありました。古い藩時代の因縁ですね。富山なんか「呉東呉西」と言って、富山と高岡が突っ張り合う。他の学部は、みな富山大学に統合したのに、高岡に一つあった工学部は移れないんです。

伊藤 高専か何かですか。

天城 旧工業高専です。富山大学の工学部になっていたのが、移れないんです。政治家が裏に付いているでしょう。正力松太郎と誰だったかな……。

伊藤 松村謙三かな。

天城 そうですね。大政治家が付いていたんですよ。それぞれの選挙区ですから、簡単には動けないんですね。

名古屋のときは、尾張と三河でしょう。それで、最後は統合してもいいということになったんですが、場所がなかなか決まらない。知事が間に入って、いろいろ話してくれて、最後に「知事一任」ということにしたんですが、知事が持つて来た三つの候補地が三つとも、昔の尾張と三河の境目ですよ（笑）。

それに近い話は、あちこちでありましたね。特に、旧制師範学校が二つとか三つとかあった場合の教育学部の統合ですね。福岡、愛知、新潟、北海道がそうだし、大変でしたね。

伊藤 そういのは、地元で大体まとめて……。

天城 幾らこちらがやろうと思っても、地元が「うん」と言わないとできないですよ。

伊藤 文部省が指導的にやるということは、あまりないんですか。

天城 やろうとしても、地元が反対ではできませんよ。

戦後、国立大学は一県に一大学という原則を立てたのですが、長野

県なんて、まとまりっこないです。長野県は、見方によると四つだと言う人もいるし、五つだと言う人もいますが、そもそも長野と松本が基本的に対立していましたからね。だから、大学は信州大学という名前でしょう。長野という名称は使えないんです。今でも、本部は松本なんですよ。

伊藤 別に、長野大学というのがあるじゃないですか。

天城 あとで、長野大学（私立）というのができちゃった。

伊藤 会計課長として、そういうことに巻き込まれることもあるんですか。

天城 ありますよ。やっぱり予算を組まなければいけませんからね。それで、一遍に決まらないと、統合準備費を付けるんです。委員会をつくって議論をしてくれ、と。だから、大学の予算に関しては、大学局と会計課長と、同じレベルで巻き込まれるんですね。

北海道教育大学（当時、学芸大学）だって大変ですよ。札幌と函館と、それから旭川と釧路の「たこ足」です。札幌のそばの岩見沢にもあったんです。結局、旭川を統合する代わりに医科大学をつくり、岩見沢は教育ですが、最後に札幌と一緒にになった。函館は水産学部を残して、釧路は統合できなくて残ったのかな。そんな形で、これには苦労しました。

伊藤 そうでしょうね。まあ、地元にとっては大きな問題ですからね。

天城 今、民主党になったかな、社会党出身で北海道知事をやった人……。

伊藤 横路（孝弘）さんですか。

天城 あの人はい世ですが、あの人のお父さん（横路節雄）が北海道出身の日教組なんですね。あの方は札幌師範出身で、教員だったんで

すね。ですから、岩見沢との統合については、彼が中に入っているところとやってくれたんです。富山でも、松村謙三と正力松太郎を除いては、絶対に話ができませんよ。「呉東呉西」なんて、変な話を聞くんですからね。呉羽山という山が真ん中にあるものだから……（笑）。あれをやっていると、昔の藩の話が必ず出て来て、未だにそういう伝統の強さを感じましたね。

伊藤 話し合いの中で、そのことが出てくるんですか。

天城 出て来ますよ。

村上 政治家の方が出てくる場合は、会計課長としてお話をしたりするんですか。

天城 そんなのは、会計課長も大学もあつたものじゃないですよ。それは、文部省を挙げての問題ですからね。まあ、担当は大学課長とか会計課長になるんですけどね。

これは、ずっとあとの話ですが、いま会津大学というのがあるんですよ。これは県立なんですけど、あそこもまた、浜通り、中通り、会津と、歴史的に三つあるでしょう。それで、会津がいろいろな点で一番遅れてしまった。それは結局、明治維新の白虎隊以来、中央政府に苛められたからだと言う。会津に「日新館」という藩校があつたんですが、それが潰されてしまったでしょう。それで、会津に大学をつくりたいということで、国立大学という話があつたんだけど、最後には佐藤さんという知事が——あの人は非常に偉い人だと思うんですが——会津に藩校を復活する、と。名前は福島県立ではなくて、ただ会津大学ですね。会津と言えば、もう分かる筈だと言う。「日新館」が滅ぼされてから百年目、「ここに復活するんだ」と言う地元の意気込みがありました。

伊藤 百年くらいは、ついこの間のことなんです（笑）。

天城 しかも、一番先端的な「コンピュータ理工学部」というのをつくったんです。

ちよつと、余談になってしまいました。会計課長と言うと、金の計算をしているだけかと思われるでしょうが、大学の統廃合にはずいぶん巻き込まれました。そのことを申し上げようと思って、余談に流れましたが……。

南極観測と宇宙観測

伊藤 このときは、まだ私学助成をやっていない頃ですよ。

天城 もう少しあとですね。

ただ、この時代は、義務教育費国庫負担法のときに申し上げたように、ドッジが来て「ゼロ査定」や、「シャウブ勧告」に基づく平衡交付金が始まった。日本のインフレを抑えるためだったから、国も地方も大変だったんです。それで、教員の給与負担が大きな問題で、私が会計にくる前の、財務課長のときに半額国庫負担が復活したわけです。朝鮮戦争の特需で、言わばブームになったんですね。それが弾けてしまったものだから、この当時は経済も財政も大変だったんです。

それで、質問の中にユネスコのことなど出ていますが、これは本来の会計課長の担当ではないんですね。たまたま西洋美術館の話が出ていますが、これは「松方コレクション」の措置ですね。松方（幸次郎）さんが戦前ヨーロッパで集めたもので、フランスに残っていたものは

全部「敵性財産」として押さえられてしまっていた。しかし、平和条約ができて、フランス政府も「松方さんの私有財産だから、返す」と。ただ、それについては、松方さんが集めたものは非常にいい絵が多くて、西洋美術の粹みたいなものばかりだから、「日本でちゃんと保管し、公開するための美術館を造ってくれ」という注文付きだったんです。それで、西洋美術館を造ろうということになったんですが、「フランスで有名な、コルビジエという建築家に設計をさせてくれないか」という話だったんです。

伊藤 いろいろな条件が付いているんですね。

天城 「松方コレクション」という西洋美術の粹を、「東京で保存してくれるなら、無償で返します」ということなんです。没収した敵国財産をどうするかという問題は、戦後、ナチの問題やソ連の問題など、いろいろあったのです。

そういった経緯で、西洋美術館を造ることになったわけですが、文部省でも、こんなものをどこに造るのか分からなかったんです。それで、美術館ができたのは、私のときより、もう少しあとだったと思うんですが、話があったのは事実です。そんなことで、西洋美術館ができたのは、いつでしたか……。

伊藤 その準備段階でお入りになったというのは、やはり会計のことですか。

天城 予算のことです。

村上 西洋美術館そのものは、三十四年の六月に設置ということですね。

天城 そうでしょう。だから、フランスとの間の折衝が始まったのは三十三年くらいですね。まあ、いずれにしても、これは国際関係でも

何でもありませんね。

もう一つ、南極地域観測についてですが、これはまた未経験の仕事が飛び込んできたわけです。これは、「国際地球観測年」という国際共同観測事業の一つで、二十五年に一度やるんです。それは、地球全体をいろいろな角度から、世界共同で観測しようという学術研究なんです。それで、国際学術連合会議——ICUSという機関があるんですが、そこで「国際地球観測年をやるう」ということが決まった。ICUSの日本での担当は日本学術会議なので、ICUSの代表は学術会議から出ているんです。

その中で、従来なかったものが南極地域の観測と、宇宙のロケット観測で、これが全く新しいものだったんです。それで学術会議は、日本も、その両方に参加しよう、と。そのほかにも、あるんです。例えば、緯度の観測ですね。南極と北極は、緯度でいくと一番北と南です。経度でいくと東経何度、西経何度と、地球を南北に貫く線です。日本には緯度観測所というのが、前からあるんです。それで、水沢の緯度観測所が、これに当たることになりました。

伊藤 それは、どこの管轄ですか。

天城 今は天文台の一部に入りましたが、文部省です。あれは定点観測で、ずっとやっていなければならぬものですから、半分はルーチンワークですね。

それで、南極観測と言っていますが、本当は「南極地域観測」です。関係するところがいろいろあるので、南極地域観測本部を文部大臣が本部長になって、文部省の中につくったんです。南極地域観測は、確か十一カ国が参加したんですが、ほとんど各国ともネービーが加わっているんです。ネービーでなければ、輸送ができないからです。日本

でも防衛庁の参加の話があったんですが、学者たちから、「日本は純然たる学術調査で行くから」と。防衛庁は、大変関心を示したんです。防衛庁も、寒冷地の極地作戦の研究をする必要がありますから、設営とか寒冷地訓練の観点から、強い関心を示しておりました。

ところが、南極に行く船がないんです。結局、海上保安庁が持っていた、灯台補給船の『宗谷』という老朽船を使うことになったのですが、砕氷船に大改造しなければならぬ。この仕事は、担当した造船会社が大変な苦勞をしたようです。学術観測と言うけれども、南極は日本から二万キロの彼方、暴風圏や氷の海を行くのですから、やっぱり大事業です。

それに、南極の厳しい気象条件の中で、まず生活をしなければならぬ。設営ですね。これもロジですよ（笑）。まず、どうやって住むのか、食料をどうするのか、建築委員会と食料委員会という専門委員会をつくったんです。これを、どこが担当するのか。結局、会計課ということになった。さつき申し上げた「用度班」というのがありまして、そこで担当することになりました。

建築委員会では、建築の専門家が南極に行くわけにはいかないので、素人が短時間で組み立てられるもので、しかも風が物凄く強いので強度が必要です。いろいろ議論があったのですが、これは専門家にとっても面白かったようです。断熱性の高いパネルで、箱を作ったわけですよ。作ったのは、竹中工務店だったと思います。

それから、食料・食材ですね。南極では食べるものはないので、全部持って行かなければならない。寒いところとは言え、一年間保つ食料を用意しなければならぬんです。一番困るのは生野菜で、不足するとビタミンCの欠乏ですね。

伊藤 脚気ですね。

天城 それで、乾燥野菜をどうやって作るかとか、いろいろなメニューを集めて、見本を作ってもらったんです。

今、いろいろな乾燥食料やインスタント食品が出ているでしょう。あれの元は、ここで作ったのがたくさんあるんですよ。インスタント・ラーメンなんかも、そうじゃないですか。要するに、プレハブ住宅とインスタント食品の走りですね。

それから、必要経費の予算を組まなければならない。金は向こうで使えるわけではないから、必要なものは全部こっちで買って、持って行かなければならない。研究機材、燃料、食料等を全部含めて、経費を見積らなければならない。それから、隊員の給与については、みんな出張ですから、出張手当の問題があります。極地手当は、それまで日本には根拠がないんです。それでも、南極地域観測用の予算を作り、パネルを作り、食料を作った。事業が決まってから、確か一年ぐらいいろんなかった。いわゆる「ロジ」ですから、「会計課でやれ」ということになってやったわけです。

その後、だんだん南極地域観測も大きく充実してきました、やがて極地研究所という、学術的に極地の研究をする研究所ができています。

伊藤 それは文部省直轄の研究所ですか。

天城 ええ、今でもあります。

それで、これをやるというときに、茅誠司さんが大将だったんですね。それで、茅さんのお弟子さんの永田武さんが第一次観測隊の隊長になりました。彼が国の内外にわたり、学術面の中心でした。若くして傑出した研究者でした。この人たちが中心になって隊員を集め、観測隊を編成しました。京都大学から西堀英三郎先生が加わりました。

この方は京大の山岳部出身で、海外の登山の経験もあって、越冬隊長を務められました。山男であり、探検家であり、優れた技術者でもありました。船は海上保安庁の『宗谷』を使って、とにかく準備が一応整ったので、「行つてらっしゃい、万歳!」と言つて、晴海から送り出しました。(昭和三十一年の)十一月に出て行つたんですが、物凄いい見送り人でしたよ。ところが、第一報が船から入つたんです。「みんなと別れて部屋に入ったら、ハンガーが一つもない」と言うんです(笑)。今では本当に笑い話ですよ。

しかし、出発までに間に合わないものもありました。例えば、アザラシなどを撃つための鉄砲がなくて、外国に注文したんですが、それが間に合わなくて、あとからシンガポールかどこかに送りました。

ハンガーの件は、「館山にちよつと寄るから、その時間までに送つてくれ」と言うので送りました。いずれにしても、南極地域観測はそういう経緯で始めまして、全く軍の参加なしにやつたのは日本だけですね。これはそれなりに、あとはどんどん発展しまして、今では大きなプロジェクトになっています。

『宗谷』は修理を重ねた船で、氷の海には無理なのです。最初のときも、三日程、氷に閉じ込められた。翌年は、基地から二百海里のところまで進めなくなつて、十一人の越冬隊員を飛行機で収容しました。樺太犬の「タロ」と「ジロ」を置いて来てしまった。

伊藤 アメリカか、どこかが助けたんですよ。

天城 ソ連ですね。「SOS」を出したら、近くにいたソ連の『オビ号』が来てくれた。これは軍の砕氷船で、「ガンガンガンガン」と水路を切つてもらつて、それでやつと抜け出したんです。氷に閉じ込められるというのは、危ないんですよ。氷のほうが強くて、船が潰れてし

まうんですね。その後、南極観測は船がなくて、途中でちよつと中断するんです。『ふじ』という新しい砕氷船ができるまで、中断していたんです。

伊藤 話題になりましたね。

天城 このときは、確か朝日新聞が初めに「応援する」ということを言つて、金を出した。と同時に、全国的にアピールしてくれて、国民からの献金も集まりました。あとで茅さんが言っていたんですが、「俺『朝日』に騙されちゃったよ」と。「朝日」が幾ら出すと言つたのかは忘れましたが、キャンペーンをしてくれ、寄付も集まったのですが、とてもそんな金では足りず、国費をかなり出さなければならなくなつたものですからね。

伊藤 初めてのことでですから、今までの予算の枠組みからはみ出るようなものも、だいぶ出てくるわけですよ。例えば、新しい項目を作らなければならぬとか。

天城 項目もさることながら、根拠のないものがありました。パネルにしても食料にしても、それを全部持つて行かなければならないんです。例えば、お酒は何を持つて行くのか。関税は、どうするんだとか(笑)。帰つて来るときに、余つた酒を日本に持つて来たら、どうするんだとか。日本酒、洋酒、煙草その他、いろいろ細かいことがたくさんありました。例外でやらなければならぬのか、と。そういうのをクリアして、とにかく出発したんです。

伊藤 海上保安庁の船は、チャーターしたことになるんですか。

天城 チャーターと言うけれども、南極観測用に『宗谷』を使うので、その費用は全部新たに計上するわけです。全部国費ですからね。

伊藤 でも、物事の事始めというのは、最初は暗中模索でしょうけれ

ども、やってみたら非常に面白いということでしょうね。

天城 ええ。食料委員会で作ったものは、一々、私はフォローしていませんが、その後のインスタント食品に非常に貢献しているんじゃないかと思います。パネルもその後、改良してだんだんと大きくしていきます。最初のものは南極に置いてあったんですが、当時の建築委員会の人が、「あれは歴史的な作品だから、持って帰りたい」と言われました。どのくらい風雪に耐えたか、非常に貴重な研究資料になるから、と。あれは、あとで持ち帰ったと思いますね。

伊藤 この予算は、大蔵はどうだったんですか。

天城 大蔵だって、よく分からないですよ。

伊藤 査定のしようがないということですか。

天城 大蔵省も分からないことがあったけれども、あれを切って、これを詰めてと、ちよつと忘れましたが、一定の規模が決まったんです。さっき言ったように、予算折衝については会計課長が行って、大蔵省とやらなければならぬものですから、最後に「じゃあ、これでもいいです」と言って、帰って来たんですね。そして、その予算を南極観測の本部長——大臣（清瀬一郎）ですが、実際には大学学術局長（稲田清助）がやっていましたから、局長がそれを見て、「この予算ではできません」と言い出したんです（笑）。とにかく、要求が削られ過ぎていて、やれない、と。やれないと言われても、「撃ち方、やめ！」で、手を打って来てしまったんだから……。

それで、次官（田中義男）の前で、大学学術局長と私と三人で、暮れのギリギリに、「無い袖は振れないじゃないか。どうするんだ」と散々やっただけです。しようがない。「いいです、私がまたやって来ますから」と。それで大蔵省に行って、例の義務教育費国庫負担法なんで

すよ。あれは実績半額負担で、予算を組むときは見込みですから、必ず翌年、精算しなければならぬ。それが、何億という額になるので、「年度末に、どうせ精算しなければならぬのだし、文部省の全体から見ると、増減はないじゃないか」と言って、大蔵省の担当と話して、それを引っぱがして南極予算に加えたんです。最初は、そんなことなんです（笑）。臨機応変にやらないと、どうにもならないんですね。

それから、もう一つ国際地球観測年で、これも将来、非常に大きな事業になるんですが、超高層のロケット観測に日本も参加しました。これは南極とは別に、東大の宇宙航空研究所で担当することになりました。秋田県の道川というところに実験所を造って、「ペンシルロケット」と言われた小型のロケットで始めたんです。これも、その当時から分かっていたんですが、ロケット砲という問題があつて、軍事的にも使える、と。しかし、日本は絶対、軍事目的ではなくて、学術的な宇宙観測だから、「大学がやります」ということになったのだと思います。

私は細かいことは忘れてしまいましたが、これは液体燃料と固体燃料を使う二種類ありまして、目的によって違うようです。これがあとで、国会でずいぶん問題になりました。「文部省でやっている超高層のロケットは、いつでもロケット砲になるから、軍事研究だ」と言うような攻撃が出て来ました。これではずいぶん、社会党に苛められましたね。「宇宙航研」の高木昇先生という所長が、毎国会、それで苛められて苦勞されていました。糸川英夫さんが中心でいたんですね。

伊藤 「糸川ロケット」の方ですね。

天城 ええ。これは、大変政治的には際どい問題だったようですが、

日本は学術的な目的で宇宙観測をするという方針でしたからね。ところが、要するにロケットで打ち上げる人工衛星の、実用的な目的がたくさん出ていました。ソ連とアメリカが始めたのは軍事衛星ですが、日本は気象観測とか測地——地図を作るとかの実用衛星を打ち上げなければならぬということで、科学技術庁が始めたのです。今は国際協力で、宇宙ステーションをつくるということまで来ていますね。

当時は、軍事力を持っている国でなければできなかったんですから、ソ連とアメリカですよ。ヨーロッパも、個々の国ではもうやらないということ、ヨーロッパ諸国は協力しているんです。こういう先端技術というのは、軍事が引っ張るんですね。第二次大戦でも、ロケットは最初、ドイツがやっただけでしょう。それで、敗戦後、ドイツの研究者はアメリカへ亡命したり、連れて行かれたり、一部はソ連に行っちゃったんですね。最初は第二次世界大戦中、ドイツが「V2」というのを始めて、その流れから今度はスプートニクが上がると、ソ連にやられたということ、アメリカが大慌てで追い掛ける。アメリカの科学技術政策に、政府が力を入れ始めたのは、あれからですよ。

伊藤 理科教育を充実しなければならないことですね。

天城 そうですね。とにかく、そういう芽生えがありますね。

伊藤 会計課長という職から、今のようなお話が出てくるとは思いませんでしたね（笑）。

天城 だから、僕は金のこと、何も知らないんですよ。

南極も、たくさんエピソードがありますよ。昭和基地というのも、最初あてがわれたところは、あまり条件が良くなかったんです。しかし、昭和基地をとにかく造って、その後、南極の極点までの雪上横断旅行をやったのは、日本が最初なんですよ。あれは、五千キロぐらい

かな。オーロラ観測からオゾンホールを発見したのも、日本隊です。その後、だんだん大きくなりまして、今、第何次かは忘れてしまいましたが、大プロジェクトになりましたね。

その後、私は官房長から調査局長、大学学術局長をやって、ユネスコとかOECDだけではなくて、国際的な学術協力がどんどん増えてきて、それらに関係しました。さっき言ったICUSなどは非常に大事な機関で、そこからビッグ・サイエンスのプロジェクトが出ました。高エネルギー物理研究所というのがあります。これは、ずっとあとの話ですが、筑波につくりまして、後に、さらに巨大な加速器建設の問題に発展します。いずれも、大きな予算問題ですね。

伊藤 そういった国際協力ということになりますと、外務省との関係も生じてくるわけですか。

天城 生じますよ。しかし、こういう問題は外交ではなくて、学術協力的ないし技術協力ですから、ICUSとかユネスコなどが大きく出てくるんです。あと、海洋観測も出て来たり、黒潮調査とか、「人間と生物圏」(MAB)の問題などがありますね。また、機会があったらお話ししましょう。学術関係では、いま最大の関心である環境問題の芽生えが、みんな、これから後に出て来ている。

所澤 そういうプロジェクトで、科学技術庁と文部省の関係はどのようになつていたんですか。

天城 科学技術庁は、あったかな。

所澤 この後ですか（註・昭和三十一年五月設置）。

天城 原子力というエネルギー問題が、大きな関心だったと思います。中曽根（康弘）科学技術庁長官（昭和三十四年六月～三十五年七月）のときからです。原子力も原爆と結び付きますから、原子力研究につ

いては賛否両論あったんです。

伊藤 国会では、社会党が猛烈な反対をしましたしね。

天城 そういう種類のものが学術研究にはあるんです。

ベビーブームで理工系の増募

伊藤 さっきお話に出ましたが、日本学術会議というのが僕はよく分らないのです。あれは、文部省との関係はどうなっているんですか。

天城 法的には関係ないですよ。

伊藤 全然関係ないんですか。

天城 あれは、総理大臣の直轄機関なんです。それについては、また別のことで、機会があったらお話ししますが、あれも本当に妙なところで……。『学者の国会だ』なんて言っていて、本当に学術的な議論をしていたのか……。ずいぶん、政治的になりましたね。

伊藤 大体、左翼になりましたからね。

天城 牛耳っていたのは左翼の連中で、私は後に大学学術局長のときに、学術会議と正面衝突するんです。

伊藤 そのときのことを忘れないように、あとでお伺いします(笑)。

ちよつとここに書いてありますが、ベビーブーム時代のこととか、この辺は如何でございますか。

天城 私は、三十一年から三十四年まで四度本予算——実質的には五つの予算に関わっているんです。三十一年の一月でしょう。一月というのは、前の年末に作った予算案が国会にかかりますから、そこから

関わるわけです。それから最後の年は、翌年度の予算案を作って大蔵省に提出しましたから、実質的には五回やっているんです。

それで、戦後のベビーブームとか、理工系の増募の問題とか、義務教育費負担、アジア大会、西洋美術館、南極地域観測、それから「青年の家」など、みんな関係がありましたね。みんな新しいことばかりですから……。会計課長としては、財政全体の動きが大きな関心事でした。もっとも、財務課時代に、すでに義務教育費国庫負担法をすつたもんだの末に作り上げて、これは実施の段階に入っていましたから、教育費の安定という点では非常に良かったと思っていました。それから、全体としては産業教育振興法、理科教育振興法等が次々と成立しているときで、活気付いてきたんですね。「もはや戦後ではない」と言ったのは、三十年ですか？

伊藤 そうです。

天城 それで大体、三十年前後になって、少しずつ安定してきたんです。それまでは全部、言わば戦後処理ですからね。

それから、理工系の増募というのは、これからの日本の復興のためには理工系の人材、技術者が足りないのではないかとということで、理工系を増募しようという話になったんです。これは、二度ありました。

それから、ベビーブームについては、戦時中の日本の人口増は最低で、戦後は物凄いベビーブームですよ。つまり、戦争から若い人がみんな帰って来て、「生めよ増やせよ」で増えてきたわけです。第一次ベビーブームは、昭和二十二年頃から始まるのかな。いま大体、五十歳ぐらいから五十二、三歳の人たちですね。小中学校の建物も、先生も足りないところへもってきて、生徒が増えてきますので、これは絶対的与件の増加です。政策的に、どうこうできないのです。

理工系については、さっきも言ったように、これからの経済復興・経済成長のためには理工系の増強が絶対必要である、と。今だって質的な面で、盛んに技術立国と言います。当時の増募計画は、確か三十二年に目標年次を決めて、「八千人増募」で始めたんです。ところがすぐ、これでは足りないということで、二万人の増募計画に膨らんだんです。

伊藤 それを、各大学に振り分けるわけですか。

天城 国・公、私立に増員を割り振って、そのための補助金を出すんです。

伊藤 私立の大学にもですか。

天城 ええ。でも、理工系は金がかかるものだから、公・私立は設備費ぐらいでは、なかなかやってくれないんです。ですから、主に国立でやりましたが、それ以来、理工系と人文社会系のバランスが崩れましたね。日本は高度成長期に入っていくと、高学歴者が足りないものですから、人文社会系は、みんな雇用市場に吸収されてしまうんです。そこで、文学部も就職志向になっていく。みんなサラリーマンになってしまう。日本の大学は、全く高度成長の人材需要に吸い込まれたんですね。

伊藤 我々のときも、ほとんど銀行だとか商社に行きましたからね。

天城 そうなんです。それで、理工系が足りないから増募することにしたのですが、私学は金がかかるから、なかなかやらないんです。国立偏重というわけではないが、国立でやらなければならぬ。それで理工系の増募計画を立てると、国立が中心になるので、私学は「国立にばかり金を出す」と言って、この計画に反対するんです。そこで、「私学もやってください。補助金を出します」と言くと、「その程度のお金

ではできない」と言うでしょう。最初は、なかなかやってくれなかったんです。その後、私学でも理工系の学部ができてきました……。伊藤 東海大学みたいに、そういうことを狙いにした大学は、また別でしょうけれどもね。

天城 私学では、例えば慶応の工学部は藤原銀次郎さんのような方がバツと金を出したので、「藤原工学部」なんて言われていましたね(笑)。

そんなことで、理工系増募の問題は、最初は八千人だけでも、すぐ二万人に変えて、三十九年までにやろうということになったんです。伊藤 東工大の位置というのは、そういう中ではかなり大きいわけですか。

天城 東工大は工業高専の時分から、「蔵前」という愛称で、大きな存在でした。東京地区で国立の工学部というのは、東大工学部と東京工業大学しかないんです。東京には、国立の総合大学は東大以外はないうですから。一橋にしても、東京外語にしても、東京医科歯科にしても、みんな特定の専門分野の大学です。

所澤 あと電通大とか……。

天城 電通は、あとから電気通信大学になったんですね。それから農工大もあります。関西には京都、大阪、神戸と、工学部もある総合大学があるんですがね。私学は、ほとんど総合大学になりました。

所澤 千葉大にも工学部がありますよね。

天城 いやいや、「ない」と言っているんじゃないですよ。東京には私立の工業系の単科大学はありますよ。東京電気大学、工学院、芝浦工大などね。その後の話で、特に最近言われていますが、プロフェッショナル・エンジニアの養成という点では、日本の工学部は国際基準には及ばないそうです。私も、この話にはびつくりしたのですが……。

小池 東北大学は、どうなんですか。あそこは工学部が強いですが。
天城 東北大学の工学部は、それなりに歴史があります。「東北」は研究中心の大学としてできたものですから、研究所がたくさんあって、文化勲章の受章者が何人も出ています。特に、金属材料の研究とかですね。

小池 金属とか磁鉄鉱とか。それで、人事的に東京のほうに下りてくることはなかったんですか。

天城 文化勲章の受章者で、前の学長の西澤潤先生も東北大出身です。東北地区にも工学部のある大学ができていますから、あちこちに東北大の卒業生が行っていますね。昔、「帝大、帝大」と言いましたが、理工系以外の学部全体を見ると、「東京」と「京都」以外は大了したことはないんですよ。「名古屋」も理工系ですからね。特に、人文社会系は不十分でした。「東北」も法経はなかったし、「北海道」もなかったんです。「北海道」は農学部が有名で、「東北」も理工系でした。

だから、東京にもっと総合大学ができてもいいんだけど、今は私学があちこちにできたものですからね。

村上 ベビーブームの話に戻りますが、小学校や中学校というのは必ず入るわけですが、高校は入るかどうかわからないですよ。それで、高等学校をどういうふうに増やしていくかというのは、やはり一つの大きな問題だったと思うんですが、そこら辺はどうだったんですか。

天城 高校急増問題をどうするかというのは、大きな問題でしたね。義務ではないから、行きたい人が行けばいいんじゃないか、と。だけど、国民挙げて、物凄い進学意欲ですよ。義務教育まで全員一〇〇パーセントになると、それを終わったら、高校に行くのは当然だという

ことになりました。それで、高校進学意欲があちこちで起きて、収容力が足りなくなる。一部では、高校義務制の主張まで出て来ました。高校急増問題というのは、このあとずっと続くんですが、非常に大きな問題でした。

伊藤 まだ、このときは高等学校の問題まで行かないでしょう。

天城 まだ、行きませんね。

伊藤 今、中学くらいまで到達したところですよ。

天城 高校問題が出てくるのは、もうちよっと、あとですね。そのうち追い掛けて、大学拡充問題が出て来ました。

所澤 小中学校を増設していけば、学校の先生が非常に足りないという状況になりますが、教員養成学部の学生増募などについても担当されたんですか。

天城 それは、僕が担当したわけではないのです。臨時教員養成所というのを、二年間でやっただけです。教育学部に併設して、短大レベルで短期の養成をしたんです。戦時中は先生も戦争に動員されてしまっているし、戦後は小学校の先生で師範学校出は、むしろマイノリティーだったんですよ。それで、僕が覚えているのは、「豆訓」——「豆訓導」という言葉がありまして、昔の小学校の高等科を卒業した人たちを、取り敢えず先生にしました。

伊藤 代用教員ですね。

天城 戦後は「豆訓」がたくさん残っていました。それで、「豆訓」をどうするかということで、免許法でそういう人たちを救って先生にする一方で、それに代わるものをつくらうということの、両方でやっていたんです。ところが、ベビーブームで絶対与件がどんどん増えてしまつて、もう間に合わないの、さっき言った臨時教員養成所をあ

ちこちらにつくった。教育学部は、ほとんどの大学に置いたでしょう。

それで子供が減ってくれば、今度は「余った、余った」で、教育学部というのは絶対与件に動かされますから、困るんですね。

伊藤 ある程度、人口は予測が付きませんが、進学率だけは分からないですからね。

天城 ええ。でも、高校も大学も進学率が落ちたことは、戦後はありませんからね。大体、前年度の何パーセントの伸びということでしょう。

それで、一部に「高等学校を義務制にしろ」という意見があったんですよ。だけど、義務制にするとすると、これまた大変なんです。そのとき、進学率はもう九〇パーセントを超えていましたかね。でも、九〇パーセントを超えたら、入りたい人は入るはずなんですがね。そしたら、希望者全員入学という運動になってきて、ほぼその方向になったんです。とにかく毎年の進学率の伸びが凄くて、高等学校に行くのは当然だという雰囲気になりましたから、戦後の教育改革というのは、「教育年数の延長」と「進学率の拡大」という点では成功と思います。

ですから、それだけ見ていくと、「日本の戦後の復興は、教育が大きな力になっている」と、外国でも言われるんですが、今になってみると、中味の問題になってきてね（笑）。しかし、あの時分の進学意欲というのは、凄い勢いでしたよ。

伊藤 因果関係が、逆かも知れないですよ（笑）。

天城 それから、「青年の家」というのは、これもまた一種のハブニングみたいなものなんです。富士山の麓で陸軍が演習をするときに、兵隊が行って泊まる所がありました。戦後は、そこに米軍が入って、

北富士の演習場で演習をしていた。それが、米軍の基地整理問題などから撤退して、日本に返還してきた。僕には突然に思えたんですが、「皇太子御成婚」（昭和三十四年四月）の記念事業として、青年のための施設として活用したらどうか、ということになったんです。

伊藤 それは、文部省の中から出て来た話ではなくて、ですか。

天城 僕から見ると、突然なんです。富士の演習場の施設を文部省で面倒を見て、青年の施設に直せということなんです。どんな施設か分からない。まず実体を調べなければならぬというので、文部省の施設部の技術者と私とで、富士山麓に行ってみて来たんですが、米軍が撤退してから、一年ぐらい経っていたかな、人が住んでいないので荒れ放題でしょう。「こんなもの、青年施設にはならんよ」と、みんなで言ったんです。だけど、「せっかく青年のために施設をくれたんだから、何とか補修してみようじゃないか」ということになった。アメリカ軍がいたときに、新たにボウリング場を造ったんですが、そのボウリング場だけが素晴らしい。しっかりしているのは、そのボウリング場だけでした（笑）。とにかく、応急修理をしたんです。皇太子の御成婚記念事業と青年教育施設という組み合わせは、アイデアとしては素晴らしいかったと思います。

小池 そのときは、特別に予算が下りてきたんですか。

天城 もちろんですね、必要です。「青年の家」というのは、その後、あちこちに増えてきましたけどね。

小池 例えば日本青年団とか、戦前から青年団運動を継続しているような団体からの陳情などもあったわけですか。

天城 僕は、その辺の事情は分かりません。青年団というのは、戦争中変質し、だんだん衰退していった。青年問題や地域社会の問題と、

深い関連がありますから……。

伊藤 次男、三男が都会に吸収されますからね。

天城 地域の青年団というのは、成り立たなくなっていく。戦時中は何よりも戦争に取られてしまつて、ほとんど成り立たなくなつた。それで、青年の組織を、もう一度つくらなければならぬのではないかという動きが、戦後ずっとあつたんです。そういう動きと「青年の家」とが結び付いたのかどうかは知りません。また、青年団の陳情があつたのでやつたのかどうか、それも分かりません。

伊藤 これは、誰のアイデアなんですかね。

天城 誰のアイデアかは、僕は分らないです。

小池 文部省の社会局のほうではなかつたんですか。

天城 そうでしょうね。

村上 自民党の青年部か何かが、かなり関与したという話を聞いたことがあるんですが……。

天城 あるかも知れませんがね。自民党の青年部と言うと、竹下登さんですね。

伊藤 あの人は、青年団の団長ですからね。

天城 あの時分、竹下さんは「竹下青年」と言われていました。若いこともあつてね。私は、彼が代議士として出て来たときから知っていますよ。青年団上がりの、若い代議士ということでした。当時は、地域青年会とか地域婦人会というのが、復活の過程だつたと思います。戦時中は、みんな国防と兵役に取られていましたからね。

村上 国立の「青年の家」ができる以前に、都道府県レベルだと思ふんですが、地方の「青年の家」がどんどん先行してできていったんですよ。その「締め」みたいな形で、国立のものができたんですよ。

うか。

天城 社会教育施設は、むしろ公民館運動が原動力なんです。公民館と言ふか言わないかは分かりませんが、ああいう種類の動きは戦後あちこちで起きたんです。廃墟になつた日本を立て直すために、地域社会がしっかりしなきゃいけない、青年が立ち上がらなければいけない、と。そういう動きがいろいろあつて、まさに公民館はその一つで、文部省も最初は公民館という施設を造ることよりも、公民館運動として盛り上げようとしたんです。そのうちに公民館法というものができて、補助金も出すことにしたわけです。日本国民というのは、グラスルーツの立ち上がり方という面では、なかなか凄いですね。その後、何でも「国がやれ」と言いますが、必ずしもそうじゃないんです。公民館などは、完全に民間主導の運動ですね。

僕の身近な経験ですが、東京が廃墟と化して、東京で仕事が無かつたので、出身の地元に戻つた人がたくさんいたんです。その連中が学校の先生になったり、公民館運動をやつたり、地域社会の青年団をやつたりしていったんですね。僕の友達でも、何人かいますよ。地方に帰つて学校の先生になつて、その後、青年団をやつたとか……。それから、海外から引き揚げてきた人の中には、なかなか優秀な人がたくさんいたんです。それで、郷里に戻つた。あの時分の地方には、日本の有能な人材がたくさん蓄積されていたんです。

僕の同級生でも、地方に戻つてしまつたのが三人いたかな。一人は秋田、一人は山口、一人は神奈川。不思議なことに、この連中はみんな高校の先生になつて、そのうちにみんな引つ張り出されて、市長になつたんです。本荘に帰つた佐藤憲一君は東大の哲学を出ているんですが、初め高校の社会科の教師になつて、福沢諭吉の『学問のすゝめ』

を教材にして授業をしていた。県が、「佐藤というのは面白い」と言っ
て指導主事にしたんです。彼は、青年とばかり付き合っていたんです
ね。「今度、社会教育課長をやれ」と言われた。始終、青年と一緒に酒
を飲んで付き合っていたら、次は市長に担ぎ出されてしまった。それ
で二十五年間、秋田県本荘市長をやったんですね。非常に面白い男で
す。

神奈川県に行った人は医者ですし、山口県に行った人は、お母さん
が女学校をやっていたので、女学校の先生になった。この二人とも、
途中で市長になりました。いい人材が郷里に帰ったんですね。

そういうことで、青年団とか公民館とかは、その後の表面だけで見
ていくと、本当の動きは分かりません。そういう人材の地域活動が、
非常に大事なんですね。

伊藤 背景がある、ということですね。

天城 ええ。そういうものがなければ、いきなり文部省が「青年の家」
をつくるなんてことはできませんよ。

村上 「青年の家」というのは、文部省の中ではどこが担当なさるん
ですか。

天城 社会教育局ですね。

伊藤 会計課長は、何でも関わるわけですね。

天城 そうです。あらゆる政策に関係しますから、何でも関わります
よ。そのうちに、妙なところだけ、分担する……（笑）。南極の「ロジ」
だとかね。

伊藤 どこか管掌するところがないと、そこに行ってしまうんですね。

天城 どうなんでしょうね。とにかく不思議なんですよ。

伊藤 それとも、天城さんということで（仕事を）振ってくるんです

か（笑）。

インターハイ・「国体」・アジア大会

村上 今まで先生のお話を伺っていると、担当するところがないから
やらされたという感じが、結構強かったように思います……。教育
刷新委員会のお話もそうでしたし、いろいろ大変な仕事が回されてき
ているんじゃないですか。

天城 そうですね。それで、これはあとに回してもらいますが、この
あと官房長から調査局長になって、そのとき、あなたが言われている
ユネスコとか国際関係が出てくるんです。それで、全体としてこの時
分は、保守合同（昭和三十年十一月）の前後で、直接は予算の関係で
はありませんが、教員の勤務評定実施に日教組が反対して、「勤評反対
運動」というのがあちこちで起きたんです。

伊藤 これは、猛烈な運動でしたね。

天城 これは、愛媛（昭和三十二年四月）から起きたんですね。それ
から、片方は「安保改定反対！」で国会まで突入（昭和三十五年六月）
して、岸内閣が崩壊し、次に池田内閣でしょう。そして、「勤評」も全
国的に、あちこちで教員闘争が広がった。日教組も、「安保」と「勤評」
とが最後は一緒になってしまっただけ、いろいろなことが起きたので、外
はもう荒れに荒れて、大変でしたよ。でも、それは直接、会計課長と
して関係していませんでしたからね。

伊藤 予算の問題ではありませんからね（笑）。

天城 むしろ木田（宏）君なんかは、これに巻き込まれたんじゃないかな（当時、地方課長）。彼に聞いたほうが有意義かも知れませんか。所澤 アジア大会（第三回、昭和三十三年五月、東京）は、どうですか。

天城 アジア大会も、たまたま出食わしたことです。古橋（広之進）さんの「フジヤマのトビウオ」が大きな刺激になっていて、スポーツで、日本人の意気を盛り返そうという動きが強かったと思います。少なくとも、当時はスポーツは全部、アマチュアなんです。戦時中のスポーツには国の干渉や統制がありました。戦後の主体は全く民間なんです。

それで、アジア大会準備委員会をつくることになって、僕もその委員になったのですが、重要な仕事は競技場を造ることでした。まず運営のために特殊法人をつくり、その監事になりました。僕は会計課長で公務員ですから、本当はなれないんです。それで、これは期間を限った特例だったのです。そして、神宮外苑の競技場を改築することになりました。今でも覚えていますが、競技場というのは建物なのか何なのか分からないですね。

伊藤 屋根がない（笑）。

天城 それで、建築屋が設計するのか、土木屋が設計するのかという議論があったんです（笑）。二、三日前にも、西武ドームの課税問題が起きたでしょう。壁があるからどうか、柱があるからどうかとか……。このときは、結局、両方に見てもらったんですが、考え方が違うんですね。土木屋は土木屋の見方で設計するし、建築屋は建築屋の見方で設計する。「なるほどな」と思いましたが、計ってみると寸法が違うんですよ。だって、あれは一階か二階か分からないですよ。

裏に入って見れば二階でも、外から見ればスタンドでしょう。屋根はないしね。その後、ドーム付きもできましたが、今はどうなっているんでしょうね（笑）。そういうことで、アジア大会については、競技場造りに関係しただけです。

ただ、アジア大会の組織委員会にも参加しましたが、あのとき、つくづく思ったのは、競技団体というのは本当に、みんな手弁当でやっているんですね。だから、恐いものなしなのか、実に強いですよ。文部省の体育課長なんていうのは、競技団体の幹部から見ると、後輩も後輩、小僧扱いですから、呼び付けられて、文句を言われていましたね。

伊藤 当時は、「水連」（日本水泳連盟）なんかは、ずいぶん……ね。

天城 「水連」の田畑（政治）さんなんて、凄いですよ（笑）。そういう強面（こわもて）の人たちと一緒にやっていましたね。「これは大変だな」と思いましたよ。これは余談になるけれども、その後、私は体育局長をやらないかと言われたんですが、あの連中とお付き合いするのは御免だと思って、そのときは逃げてしまいましたよ（笑）。

所澤 その頃、もうすでに東京オリンピックを視野に入れて、そういうことを計画されたりしていたんですか。

天城 東京オリンピックの問題は、戦時中の、紀元二千六百年に日本でやるのが決まっていたんですね。それが戦争でできなくなっちゃったわけですが、東京オリンピック自体は前から決まっていたことなんです。そういった大きな問題は、一年や二年ではできませんし、オリンピックも四年に一度と言っても、議論しているのは次の次の話をしているわけでしょう。サッカーのワールドカップだって、先の先だと言っているうちに、もう二年以内でしょう。ですから、準備は大変ですよ。

オリンピック自体にも、いろいろ問題はありました。その後、ユネスコ主催の世界的な競技との関係についての議論もありましたが、その綺麗事だけではないですね。テレビの放映権料はどんどん上がるし、コマーシャル化してきています。どうしても現実問題に巻き込まれますからね。かつてのベルリンのオリンピック大会などは、ヒトラーが「国威発揚」に使ったんですからね。

それで、アジア大会は、当然オリンピックを頭に置いていたから……。

伊藤 置いていたんですか。

天城 そうですよ。だって、紀元二千六百年にやることになっていったから……。競技場だけで済むとは思っていませんでした。今、代々木公園に室内体育館や水泳場などの施設があるでしょう。皆、東京オリンピックのときの遺産です。

所澤 その当時のスポーツで、先生が関わられたかどうかは分かりませんが、確か昭和三十年代からインターハイ——高等学校総合体育大会というのが始まるんですね（註・昭和三十四年に「高体連」——全国高等学校体育連盟は初めて文部省から全国大会国庫補助を受けた。昭和三十八年から総合体育大会化）。その大会がつけられるときに、かなりいろいろな問題があったと思うんです。各スポーツ団体が、「旧制

中学時代からやっていた全国大会を、一堂に集めて開催しよう」ということで、大会がつけられたんですね。これは、財政的には文部省は関わっていませんでした。

天城 私は、関係していません。

所澤 文部省の主催（註・正しくは後援）という形になっていたと思うんですが……。

天城 スポーツで、国が主催するのは「国体」です。それで、高校については、スポーツ団体ごとに全国大会があります。全国大会をやる、学校の負担も大きいし、練習と授業との関係で、スポーツ団体だけでは決められないことがあるわけです。特に、中学校は義務教育だから、「全国大会は認めない」と文部省は言っていて、それで長らくなかったんです。今は、やっていますけどね。高校の大会も、学校体育の延長なんです。ですから、学校の先生が中心の「高体連」という連盟ができて、学校体育の対外試合という形になっているわけです。

伊藤 これは補助金の対象ですか。

天城 補助金については覚えていません。

所澤 文部省はインターハイに関しては、最初から「高体連」を支援するという形で……。

天城 そうですね。その後、もう一つ文化関係もできたんですよ。体育以外の、いろいろな文化関係の全国的な催しです。

伊藤 「国体」（国民体育大会）は何年からでしたか。

所澤 「国体」は昭和二十一、二年ぐらいからですか。

天城 ずいぶん早い時期ですよ。「国体」は、最初はどこでやったかな。

当時、まだ米は配給制で、外食ができないので、参加者はみんな米を持って行かなくちゃならなかった。地方でも、宿泊施設のあるところというので、戦災を受けていない京都でやったんだと思います。

先ほど、補助金については覚えていないと言いましたが、「国体」は、国が応援するというので、準備に補助金が出るんです。それで、地方はいろいろな施設を整えることができるんですよ。例えば、道路を造るとかね。それについては、「国体」を理由にして、いろいろなところ

を整備したという非難もあったんです。岩手でやるタイミングなど、三陸海岸の陸の交通が大変不便だったので、第三セクターの鉄道を造ったり道路を整備したり、あとで『全部、『国体』のお陰でできました』と言われましたね。県当局者になると、大事業だけれども、「この機会に」ということでやるんですね。

伊藤 予算は、体育局の予算ですか。

天城 はい。それで体育関係も、国際関係や全国大会が多いものだから、金がなくて困って、その後、振興基金ができています。同じように、芸術文化についても振興基金ができています。

伊藤 基金ですか。

天城 国も出しているし、民間からも集めて一緒になって、ね。

伊藤 でも、基金をつくっても、利子を生まないでしょう。

天城 つくったときは、そうではなかったんですが、今は超低金利です。だから、非常に困っています。

伊藤 どこでも困っているんですね。

天城 みんな、そうですよ。そのときは、年間利率がどのくらいで、基金が何百億あれば、どのくらいの事業ができるという見積もりで始めたんです。

伊藤 少なくとも、当時は五パーセントはありましたからね。

天城 今は、基金でやっている仕事は、どこでも大変です。

全国行脚で大学の実態把握

伊藤 会計課長は足かけ五年で、大変忙しい日々を送られた、と。

天城 忙しいというか、本当に勉強になりましたね。

伊藤 それは、忙しいから勉強になるんでしょうね。

天城 私は、それまでは大学関係は全然やっていないんですよ。会計課長になって初めて大学に接して、このときから大学に大変関心が深くなりました。退官後の今でも、主としてIDE（民主教育協会）という組織を通じて大学のことをやっていますが、そういう縁がこのときに来たんです。大学はずいぶん回りましたし、先生方にずいぶん教えていただきました。

伊藤 大学を回って歩く時期というのは、予算が上がってからですか。

天城 主に、春と秋の間ですね。

村上 集中的に回ってしまうんですね。

天城 例えば、一番頑張ったのは、九州を一回りしちゃったこととか、北海道も一気に一回りしちゃったこととか……。

伊藤 当時の状況ですから、体力が要りますよね。

天城 体力も要りますしね。

伊藤 飛行機で行くわけじゃないですから（笑）。

天城 車で回るんですよ。

村上 やはり、国立の大学が中心ということになるんですか。

伊藤 中心というか、国立の大学だけじゃないんですか。

天城 個別の国立大学を知るためですからね。

村上 私学は見ないんですか。

天城 私学には寄りませんでした。会計課長ですから、主に予算の問題で回ったんですね。一口に北海道大学と言っても、演習林はあるし、臨海実験場もあるし、牧場もあるし……。北海道の、いろいろなところにあるんです。そういうところは、チョコチョコ行かれませんか。ね。北海道に行けば、札幌の北大に行つて、それから雨竜の演習林に行つて、厚岸の臨海実験場に行くとか。また、厚岸に行けば、帯広畜産大学に行くとかね。それから、道産馬の放牧場が日高にあります。帯広畜産大学は、あの辺の開拓地の指導をしていたものですからね。帯広畜産大学に行つたときには、別海村なんかの大きな開拓部落にも行きました。いろいろ回りましたよ。

伊藤 東大の施設も、全国にありますよ。

天城 北海道には、東大も京大も、みんなありますよ。

伊藤 みんな演習林を持っていますね。

天城 雨竜の演習林とか、富良野の演習林とかね。東大も京大も、みんなあそこら辺にありますね。「森林経営とは何か」とか、「森林の研究で何をやっているか」とか、「苗木から育てなきゃいかん」とか、「公有林とどう違うか」とか、「伐採の仕方」などを、みんな教えてもらいましたよ。

伊藤 それは、勉強になりますね（笑）。

天城 本当に勉強になります。

伊藤 どういうふうにお金が必要かということが、ある程度分かるわけですね。

天城 そうです。それを考えなければならぬものですからね。

厚岸というのは、暖流と寒流がぶつかるところで豊富な漁場なんです。が、とても不便なところに臨海実験場があるんです。そこで、他の大学の水産関係、あるいは理学部関係の先生や学生と一緒に研究しているんです。

そんなことで、辛い病気もしないで五年間やりました。

伊藤 忙しくて、病気になる暇もないですね（笑）。

伊藤 そのときに官房長になったんですか。

天城 私の前に総務課長の斎藤正さんが官房長をやつて、私はその次（昭和三十五年一月〜三十七年一月）ですね。これは、サンドウィッチのハムみたいなものです（笑）。次官補みたいな仕事をやらなきゃいけないんですね。官房長は国会対策が多いし、しかも官房三課を知っていますから、人事の問題だとかも……。

伊藤 官房の取りまとめですか。

天城 そうです。官房の取りまとめですね。

伊藤 官房長くらいになると、政治家との関わりが出てくるということですか。それとも、会計課長の時代からですか。

天城 会計課長は政府委員ですから、国会の予算委員会を中心にやるわけでしょう。官房長になると、今度は法案その他で、各政党に根回ししなければいけないし……。

伊藤 会計課長のときは？

天城 法案の根回しは、担当局がいますからね。官房長は、局長に事故があるときには、局長の代わりをしなければならぬとか。僕のとくも、ちょうど高等専門学校の法案が国会にかかったときに、大学学術局長（小林行雄）が病気で来ないんですよ（笑）。それで、衆議院の審議は、全部僕が代わりに担当していました。

伊藤 会計課長として政府委員になって、それで委員会や何かでは、かなり発言なさったんですか。

天城 委員会では、担当局長が主にやります。

伊藤 予算の分科会ですか。

天城 予算分科会は予算委員会の中ですから、これは全面的に会計課長の責任ですね。あとは文教委員会ですから、各担当局長と課長がやるんですね。

伊藤 文教委員会も、会計課長は政府委員として出るんですか。

天城 喚ばれば行きますが、普段は文教委員会には行きません。会期中は、政府委員です。ただ、辛いんですね。予算委員会というのは何が出るか分からないでしょう。

伊藤 予算のことが出るわけではないですからね。

天城 グラグラ……と、いろいろなことをやるでしょう。それに、全閣僚が出なければいけませんから、文部大臣が出ていると、誰か政府委員が付いていなければいけない。そうすると、結局、会計課長が出ているんです。だけど、一日、何も用がないんですね。防衛問題や何かをやっているときにも、聞いていなければならぬ。まあ、文部大臣に、事前に通報があるんですけどね。それでも、灘尾さんなんかは厳しかったですね。「予算委員会だから、お前、聞いてなきやいけない！」と言われて、あれには参りましたね。

伊藤 例えば、自民党から「いろいろ説明に来い」とかいうことはあるんですか。

天城 始終ありますよ。

伊藤 会計課長として、ですか。

天城 予算に関してはそうですが、政策問題は担当局や課ですね。

伊藤 社会党から「来い」ということはないんですか。

天城 各党回りますよ。根回しに回るわけです。

伊藤 「会計課長として説明に来い」というのはあるんですか。

天城 それは、予算に関係があるときは、ね。

伊藤 社会党であろうと、共産党であろうと、ですか。

天城 そうですよ。だから、各党の文教関係の担当者とは、みんな昵懇になりますね。

伊藤 会計課長を、それだけ長くやるという方は、あまりいらつしやらないですか。

天城 私の前に、と言つても戦前ですが、五年やられた方が一人いました。戦後は、私が一番長いですかね。

伊藤 その後、そんなに長い方はいらつしやらないですか。

天城 もう一人、安嶋彌君というのがいまして、彼が同じくらいやりましたが、あとは大体二年くらいでしょうね。

伊藤 しかし、五年近くやると、本当にベテランになるんでしょうね。

天城 ある意味では、本当に文部省のいろいろなことが分かりましたね。それで、会計課長を辞めてというか、「どこかの局長になれ」と言われたときに、大体、手の内が分かっていますから、どこの局長もあまり面白くないと思いましたね（笑）。

伊藤 やつぱり、そういうものですか（笑）。

天城 そう思いましたね。それで、私は「それなら調査局長（昭和三十七年一月〜四十年七月）になりたい」と言っただけです。あれは、また実に面白い局で、何をやっているか、外からはちよつと分からないでしょう。調査、統計、企画という課があるんですね。あと国語、宗教——宗教ですね。これは、戦後の中央省庁の改革のとき、行政政策

に直接関係のない仕事をまとめようということで、調査、統計、企画の三課と、それに宗務と国語を加え、さらにどの局にも入らない新しい仕事の国際教育文化の六課でつくったんです。だから、全然違うものばかりで、一緒に局議をやっても意味がない。見方によると、いろいろなことを勉強することができます。国語と宗務は、日本の文化と伝統の本質に関わる問題です。宗務課には専門家がたくさんいるし、国語課にも専門家がいる。それから、国際教育文化というのは新しい仕事だし、ユネスコもここで所管していました。留学生問題も、ここから始まったんですね。沖縄援助も、ここで取り扱っていたのです。

特に、あの時分の調査課は今とは違って、物凄くいろいろなことを研究していたんです。いろんな新しいアイデアで調査したり、発表したり、それはまた改めてお話ししますが、『日本の成長と教育』という文部白書を作りました。あれは、国際的にも評価されました。英文で出して、ユネスコで非常に高く評価されて、国際会議で使われたりしたわけです。ちょうど所得倍増計画があつて、「人的能力開発」なんていうテーマを、経済企画庁でやっていたでしょう。大来佐武郎さんとか大変親しくしていたものですから、始終お話ししていた。それで、教育投資論などの勉強をしたかったものだから、他の局には行かずに、調査局長を三年やらせてもらったんです。三年半かな。

伊藤 希望が叶えられるということが、あり得るんですね。

天城 どうか知りません。ポストについて希望を述べたのは、このときだけです。会計課長を五年間やって、ずっと見ていると、局長のやっている仕事は、大体、手の内が分かっているし、国会相手、大蔵省相手に疲れてしまったから、これは充電しなければ、と思つてね。それで、「体育局長をやらせないか」という話があつたんですが、アマチュ

アの連中にどやしつけられたら敵わない、と思ひましてね。それに、調査局長というのは、ほとんど国会に出ないんですよ。

伊藤 一応、政府委員にはなるんですか。

天城 どうだったかな、ほとんど出ないですね。大蔵省との交渉もほとんどないし、非常に快適でしたね。充電ですよ。

報償費の必要性について

伊藤 その充電の時期については、この次にゆつくりお話を伺いたいと思います。ところで 調査局は、今もあるんですか。

天城 もう、なくなりましたね。新しい文部科学省は、まだ十分整っていないようです。

伊藤 再編成ですね。

天城 本心に定着するのには、まだ時間がかかりますね。

伊藤 あの煽りで人事異動がずいぶんありまして、僕の大学の人もワーストと替わりましたので、大変だと思ひますね。

天城 外務省の政務官が、報償費の使い方をも何も報告していなかったと、いま文句を言っています。副大臣二人、政務官が二人いて、誰が、どこに報告するんだか分からないようです。下手すると、官僚の負担が多くなるでしょうね。

伊藤 文部省も、報償費というのはあるんでしょう？

天城 それは、各省にあります。

小池 外務省は多いですね。

天城 あそこは、何十億とあるんでしょう。ところが、僕も詳しくは知らないけれども、あのうちの半分以上は在外公館に行っているんですね。

小池 そうですね。三十六億円ぐらいは行っていますね。

天城 だから、独立公館の長で、大使とか総領事とかは、みんな機密費を持っていますね。大使を二、三年やったら、一財産できるでしょう。昔から、そう言われていますよね。

小池 外務省の場合、特にずっと外勤だと一財産できますね。

天城 だから、あれを突つつき出すと大変でしょう。特に、総理官邸なんかは、ね。

小池 あれは、政治家の名前がゾロゾロ出てきますね。

天城 それは、与野党出ますよ。野党対策費も、官邸から出ていますからね。

小池 それから、外務省の報償費で、自民党の外交関係に流れた金もあると言われていますから……。

天城 国連の安全保障の常任理事国になるための金も、ね。その工作費は、みんな機密費ですから、そんなもの一々表に出せないでしょう。

小池 スパイの情報収集費なんて物凄く莫大な金ですが、日本は諜報機関を持っていませんからね。冷戦が終わってから、特に米国に頼っていたという疑惑も絶えないですし……。

天城 日本は、公式なスパイがいまいませんからね。公安調査庁も、正式にはスパイではないし、しかし、あそこだって機密費で仕事をしているんでしょう。そんなものを洗い出したら、大変ですよ。

伊藤 どんな組織でも、組織がある以上は、機密費的なものは絶対必要ですよ。

天城 ええ。平たく言えば、交際費みたいなものはね。政治工作費は別ですが、例えば文部大臣だって、時には与野党の議員を夕食に招待して、説明したりするでしょう。そういうのは、お金が要りますからね。

小池 ああいう潤滑油みたいなお金を「悪い」なんて言ってしまうっては、どうしようもないですからね。

伊藤 「悪い」と言ったら、それは駄目なんですよ。

天城 極端に言うと、大学でも要るんですよ。

伊藤 あれは、会計操作をやっているんだと思いますが、あるんですよ。

天城 今は「学長管理費」と言ったかな、それでまとめているでしょう。

伊藤 それは、今もありますが、あれだって機密費的に使うのはなかなか難しいですからね。

天城 でも、接待費は使っているんですよ。

伊藤 そうです。

天城 場所によるんですね。京都大学なんかは、お客さんが多いから大変ですよ。国立大学では京大が一番、お客さんが多いんじゃないかな。

伊藤 文部省も、外国からのお客さんが多いじゃないですか。

天城 それは多いですよ。文部省も若干、使える交際費はあります。予算が付いているんですよ。ただ、そういうのと機密費というのは、ちよつと違うんだな。

伊藤 今は機密費とは言わないんでしょう？

小池 やっぱり外務省の中では、機密費と言いますよ。

天城 報償費ですね。

伊藤 しかし、今度の場合は馬と女と……。

所澤 マンションを買ったとかですね。

小池 僕が外務省にいたのは十年前ですが、その段階でも、彼は評判が悪かったんです。

天城 しかし、競馬の馬を買ったとか、マンションを買ったとか、あいうことになってくると、駄目だね。

伊藤 あれは本当に困りますね。

天城 よく、そんなことやるな……。

小池 やはり問題は、会計課長と直属の次官ですよ。やっぱり、あれは黙認していたというのが、事実だと思うんですよ。

天城 やつぱり、それなりに有能だったんでしょか。

伊藤 有能でなければ、ここまで来ないでしょうね。

小池 「ロジ」に関しては、そうですね。「即位の礼」と「大喪の礼」では、彼が裏方の中心人物でしたが、全く問題はありませんでしたからね。有能でしたね。

天城 僕も、会計課長のときに「ロジ」をたくさんやったけれども、お金は触ったことがないですからね（笑）。

小池 そうでしょうね。会計課長では、お金は触らないですね。

天城 全く金は触らないからな。

伊藤 「ロジ」という言葉も有名になりましたね（笑）。

天城 「ロジ」がなければ、行動できませんからね。

「即位の礼」などをしますと、各国の元首や首相が一度に大勢来るでしょう。そうすると、外務省も、元首それぞれにそれなりの対応をしなければならぬので、「手が回らないから、各省で分担してくれ」

と言うんですね。

小池 局長クラス、課長クラスになると、必ず声がかかりますね。

天城 例えば、「あそこの国は教育大臣が来るから、文部省で引き受けてくれ」とね（笑）。

小池 先生なんかは、特に、そういうお声がかかったんじゃないですか。

天城 あのとときは、僕もやりましたよ。そういうのがよくあって、実際的なお付き合いとして招待することは、当然、起きてくるんですね。

伊藤 そうですよ。だって、こっちが行ったときには向こうが接待するわけですし、向こうは安くても、こっちは物が高いし……。まあ、東京は高いですからね（笑）。

天城 そんなところなら問題はないんだけど、今度は馬を買ったとか、マンション買ったとか。ああいうことだから、いけないんですよ。伊藤 どうもありがとうございました。雑談も、とても楽しかったです。

〈以上〉

天 城 勲
オーラルヒストリー
第7回

[2001 年 2 月 26 日 13:00~15:30]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

小池聖一(広島大学助教授)

所澤 潤(群馬大学助教授)

村上浩昭(政策研究大学院大学リサーチ・アシスタント)

(於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター)

「学力調査」で分かった教員能力

天城 今日はまた、まとまらない調査局の話をするんですね。

伊藤 そのほうが面白いんですよ（笑）。先生のお話は意外性の連続ですからね（笑）。

天城 調査局には国際的な事柄を担当する課があるんですが、国際的な問題は、その後、文部省全体にどんどん広がっていましたからね。

これはあとで、まとめて申し上げたほうがいいと思うんです。それで、ちょっと前に、文部省に「僕のやったことを調べてくれないか」と言

ったら、こういうもの（天城勲元文部省顧問の日本ユネスコ国内委員会委員歴等について）を作ってくれたんです。これは、どれだけ国際会議に出たかという記録で、ユネスコとかOECDとか会議ごとにあるんですが、これでもまだ抜けているんですよ。

伊藤 ずいぶん、いろいろなところに行ってますね。

天城 それは、主に国際会議でね。

伊藤 世界中を回っているような感じですね。

村上 そうしますと、調査局長時代（昭和三十七年一月～四十年七月）の国際的なお話は、またあとで何うということですね……。

天城 まとめたほうがいいんじゃないか、と思っっているんですね。それに、私は文部省を辞めてからも、ずっと国際的な問題には関係してきたものですから……。

伊藤 まあ、「事始め」くらいは、ちょっとお話しただけ……。

それで、前回は調査局の概要をお伺いしたんですが、もう一度、どんなものだったのか、ご紹介いただけませんか。いろいろなものの寄せ集めだと言われましたが、局の中に課が七つか八つあるわけですか。

村上 調査局長になられたときに、確か七課ございましたね。

天城 まとまりがなくて、局議をやるうとしても無意味なんです。

村上 この間のお話では、調査局の中に企画、調査、統計、国際文化……。

天城 ちょっと、イントロだけお話ししますね。調査局と言うんだけれども、その前に「調査普及局」というのがあったんです。

伊藤 その「調査普及」の「普及」がどこかに行ってしまったわけですか。

天城 ええ。要するに調査専門で、あと普及するだけだったんですね。それが調査局に変わって、私が行ったときは調査局でした。

それで、調査課と統計課と企画課は似たようなところがあるんですが、本当は企画課は違うんです。そのほかに国語課と宗務課があつて、それから国際文化課というのがあったんです。

村上 先生が局長になられる前に、広報課はなくなっていたんですか。

天城 ええ。普及ということで、そんなものをゴチャゴチャと、また集めていたんです。

伊藤 六課あったわけですね。

天城 はい。調査と統計は緊密な関係がありますが、国語と宗務は関係ないんですよ。まあ、関係ないことはないんですが……。ある意味では、日本文化の源流に触れる仕事であるし、伝統とか文化というものに関係があるんです。国際文化というのも漠然としていて、新しい

分野なので、ここにくっ付けてしまったんです。そういうことで、他の局のように行政対象がはっきりしていて、そこだけやるというものではない仕事を集めてしまったんですね。

伊藤 最初に調査とおっしゃいましたが、それは調査課が独自に企画して調査をするわけですか。それとも省内のいろいろな調査を引き受けてやるんですか。

天城 追々お話ししますが、統計については、統計法ができてから、幾つかの統計は指定統計とされて、申告義務になったんです。例えば、文部省で行う学校基本調査は指定統計になっているものですか、毎年やるんですね。そのほかに、三年おきにやるものがあります。これらは、どうしても全国的にやらなければならないものですから、大規模な統計作業になります。考え方によると、典型的なルーチンなんですね。

実は教育委員会法ができたときに、アメリカ側から、行政はなるべく客観的にやらなければいけないが、それには調査とか統計が非常に大事だ、と強く言われました。それで、教育委員会事務局には、必ず調査・統計課を置け、と法律に書いてあるんです。だから、都道府県の教育委員会の事務局には、調査・統計課が置かれたんです。ですから、文部省としても、各地方ごとの調査・統計はもちろんのこと、全国的な調査・統計も必要ですから、それについてのネットワークができていました。そして、人の養成もやったりして、非常に盛り上がりつつあったんです。調査局は、その本家ですから、「調査・統計とは」という議論もずいぶんしていたし、特に調査課は行政の裏付けになる独特の調査をやっていました。戦後の行政の中で、客観的な行政をやっていくために、調査・統計は非常に重んじられたんですね。

話は前後しますが、戦後すぐに文部省は調査局を潰してしまって、伝統的にやってきた調査局の仕事は、官房の文書課の一隅に押し込んでしまっていたんです。そういうことではいけないということで、また調査局が復活したんですね。そのときに、「普及」という言葉を加えたのです。これは教育委員会法ができて、地方分権を進めるので、地方の教育委員会を行政的にはコントロールしないという前提があつて、「普及したり連絡したり」という意味で、初めは地方連絡課という課をつくりました。局の名称も「調査普及局」という名前になって、広報課が入ったり……。その後、地方教育行政が整備されてきたので、地方連絡課は地方課となり、初等中等局に移りました。

そして、その後、宗務と国語は調査ではないんじゃないかという議論もあつて、調査局が分解するんです。

伊藤 あとで、ですか。

天城 そのあとで……。それで、調査・統計は官房に入り、その後、宗務と国語はその他を含めて文化局になったんです。それがまた母体になって、文化庁になって行っただけです。ただ、宗務と国語というのは、戦前からずっとある文部省の仕事の一つで、この当時は居場所がはっきりしなかった。ある意味で、過渡期のような時期でした。

伊藤 文化財なんかは、そこには入っていなかったんですか。

天城 文化財は、文化財保護委員会という行政委員会があつたんです。

伊藤 あれは、別なんですね。

天城 ええ。それで、半独立のような文化財保護委員の下に事務局が置かれました。その後、文化局と文化財保護委員会の事務局を一緒にして、文化庁ができたんですね。

それで、私の頃の教育調査についてお話ししようと思いますが、

『文部省年報』の第一報が明治六年に出ているんですね。明治六年に出ているということは、明治五年の新しい「学制」からのことが載っていて、それ以来途切れたことがないんです。

伊藤 昭和二十年も、ちゃんと出したということですか。

天城 そうです。今日まで百何年、ずっと続いているんですよ。戦争中も、もちろんそうです。ただ一度、関東大震災で途切れそうになったことがあったんです。しかし、関東大震災の前の日に『年報』ができて、一冊持っていたので、大変熱心な担当者が前の日に印刷所に見に行つて、一冊持って帰っていたんですね。そしたら、翌日が関東大震災で、その印刷所は潰れてしまったんです。それで、彼が持っていた一冊だけが奇蹟的に残つて、それを復刊して、連綿と続いているんですよ（笑）。しかも、これはどういう経緯か知りませんが、『文部年報』というのは、当時の言葉で言うなら、「編集上奏」という言葉を使っているんです。つまり、編集して天皇陛下に上奏するんですね。だから、そのくらい教育を大事にしていたわけです。明治以来、ずっと上奏していて、宮内庁に献本していたんでしょうね。

伊藤 それが、ずっと続いていたわけですか。

天城 続いていたんですね。そういう長い歴史があるので、今でも大変貴重な歴史的な資料です。他の省には、こういう連綿と続いた年報はないでしょう。

それで、昭和二十二年に統計法ができて、幾つかは申告義務になってきたわけです。その代表的なものが「学校基本調査」で、これは非常に大事ですから、文部省は毎年、途中で「速報」を出すんです。これは、教育関係者にとっては必需品になっていますね。それから、数年に一度やるものとして——ほかにたくさんありますが——「教員

調査」というものがあるんです。これも指定統計で、小学校から大学教員まで全部……。

伊藤 それは、私立学校も入るんですか。

天城 みんな入ります。それから、もう一つ貴重なものとして、「学校保健調査」があるんです。これも毎年、「基本調査」と一緒にやるんですね。この「学校保健調査」は、全国的な子供の発達段階が経年的に記録されているので、専門家も非常に重視しているんです。例えば、子供の発達や健康がどういうふうに変わってきたかといった研究論文は、ほとんど、これを基に書いているんですね。

伊藤 よくテレビなんかでもやっていますよね。

天城 ええ、あちこちで、これを使っています。それから、さっき言った「教員調査」のように、隔年と言うか、少しずつ間を置くものでは「産業教育調査」や「教育施設調査」もやっていました。いずれも、統計が中心になりますね。

それから、調査課としては、文教施策の基本になる、あるいは役立つ調査を独自に考えて、いろいろやっていました。その一つとして昭和二十四年以来、毎年続いている調査に「地方教育費調査」があるんです。これも貴重な調査になっているんですが、これと並んで、「父兄が支出した教育費調査」というものがあるんです。

伊藤 それもテレビなどに、よく出ていますね。

天城 ええ。これは二十七年以来ずっとやっていて、これも貴重な資料で、こういうものは外国にもないものですから、国際的にも高く評価されました。

それから、もう一つ、政策的なことでは、「職場の学歴構成調査」というのを行いました。例えば一次産業、二次産業、三次産業ごとに、

どういう学歴の人が、そこにいるかを調べたわけですね。

伊藤 それは教員ですか。

天城 職場ですよ。例えば、ある企業に雇われている人たちが、どういう学歴構成で、どういう仕事をしているかという、職場における学歴構成調査ですね。この頃は戦後の経済復興期で、労働力不足で、東京や大阪には、いわゆる集団就職とか「金の卵」などと言われて、地方からの中学卒業者が続々と吸収されていきました。一方、高学歴者の需要が強まってきました、これが後に、いろいろなところで非常に大きな意味を持つてくるんです。

伊藤 そういうことは、サンプリングでやるんですよ。

天城 そうです。要するに、教育と社会的人材需要との関係がどうなっているかということで、いろいろな教育計画に使われるんですね。これについても、「国際的に、こんな調査はない」ということで、非常に貴重がられたんです。

戦後始まった教育社会学の学者が、この文部省の調査に非常に関心を持つてくれたので、我々もいろいろ相談してたんですね。例えば、東大の清水義弘さんは、元々は社会学出身で、教育を広い観点で見たい方です。文部省の調査課には、教育社会学の卒業生が必ず来ていたんです。広島大学の二宮皓君も、大学を卒業してしばらく文部省の調査課にいましたし、いま上越教育大学に行っている新井郁男君とか、教育社会学の人たちが、「ここだと、実際の仕事で以て勉強ができる」ということで、代々送り込まれて来ていますね。

こういった調査が、理工系増募等の基礎になるわけです。教育が高学歴化していくに連れて、社会にどのように吸収されていくかとか、どこではなお足りないとか、そういうことを調べましたね。

伊藤 その基本調査みたいなものは、教育委員会からずっと上がってくるわけでしょうが、全部、そうですね。

天城 ものによつては、文部省で直接サンプリングしてやることもあるし、教育委員会の協力を得てやるものもあります。全国的にやるときにも、教育委員会がサンプリングをやってもらふ必要があるんです。だから、調査統計の仕事の根は、日本中に広がっています。

「悉皆（しっかい）調査」とサンプリングがあるんですが、「悉皆」が大変なんです。サンプリングも、あまり多過ぎると、「忙しい」と文句を言われたことがあります（笑）。地味ですが、それが統計課と調査課でやっていた仕事ですね。

伊藤 統計と調査は、かなりくっ付いているわけですか。

天城 くっ付いていますね。でも、統計はやはり数字が中心ですし、さっき言ったように、やらなきゃならない基本的なものがありますからね。調査のほうは、いろいろな政策的な必要がありますからね。これは、サンプリングが多かったです。

それで、この時分にちよつと問題を起こしたのが、「全国学力調査」ですよ。「学テ、学テ」と言われてね。これは、文部省では「学習指導要領」を作っていますから、それがどう実施されているか、学校教育でどう反応しているのか、評価しなければならいんですね。ですから、小中などの、特に義務教育については、いつからかは忘れましたが、かなり前からやっていて、数学をやるとか、国語をやるとか、あるいは国語と数学をやつて、次は英語を加えるとかという形で、サンプリングで学力調査はやっていたんです。ところが、この頃になって、五教科全部を全学校で、ということになったんです。

これにはいろいろな理由があるんですが、学力がどう進んでいるか

とか、教員の指導がいかどうかとか、「学習指導要領」が適切であるかどうかとか、それから教科書がどうかとか、地域社会の条件がどうかとか、そういったことを見ようということをやってきたんです。

一方、高校入試の問題との関連で、内申書をどこまで重視するかという議論が、ずっと続いていました。例えば、「地域の条件や教師の能力による学校差があるので、あまり内申書を重視することはできない」という意見や、「只一回の入試テストよりも、普段の学力のほうが、将来に対しては基本的な能力を示しているんだ」という議論もあるんです。これらについては、部分的に調査もあるんですけどね。そういうこともあって、とにかく、この頃から高校進学率が高くなってきまして、それから、それを頭に置いて、中学の学力調査を「悉皆」にしようとしたことも、一つあるんです。

ところが、この時分、経済企画庁を中心にして、人的能力の開発という議論があったものですから、「この調査で、人間の能力が分かるようになっていないんじゃないか」と言われたり、あるいはまた、当時の次官が「悪平等ではなくて、人間の能力を見るためには、やはり、こういうテストが必要だ」とかと言ったんですね。

それから、この種の調査を進めていくと、教員の能力も分かってくるんです。例えば学校の規模も、地域の社会条件も非常に似ているのに、成績が違う、と。これは、やはり教員の能力の差ではないか。それから、教育条件が悪いと思われている僻地でも、物凄く成績がいい学校が出てくるんですね。あまりに成績がいいので、問題が途中で漏れたんじゃないか、なんてね(笑)。そこで、その事情を具体的に調べてみたら、先生が物凄く立派なんですね。少人数で以て、一所懸命やっている。そういうことから、教員の能力が分かってくるので、日教

組なんかは反対なんです。教員の評価をやるんじゃないかとか、文部省の「全国学力調査」というのは、何を狙っているのか分からないじゃないかとか……。だんだん、そういうふうな問題が広がってくるし、各学校でやりますから、実施と集計が大変なんですね。それに、教育委員会の事務局も、くたびれてきちゃった。そういうこともあって、「一斉にやらなくてもいいだろう」とか、「全部やらなくてもいいだろう」とかという話が出て来て、すったもんだして、四十年にやめたんです。

日教組は、「これで、文部省が教員の評価をしようとしている」と言っていて、猛反対したんですね。特に、各県別に平均すると、違いが分かるでしょう。文部省は、「それは公表しない」という前提でやっていたんですが、いつの間にか、分かっちゃいます。そうすると、「うちの県はビリに近いぞ」とか、「うちは、いま何番だから、頑張ればトップになれる」とか、そういう各県の競争が起きてしまったんです(笑)。それについても、たくさんエピソードがあるんです。ある県では、非常に悪かった。それを、新聞なんかを書くんですよ。それで県議会で、「うちの県に限って、子供の頭が悪い筈はない。教育のやり方が悪いんじゃないか」と、教育長なんか批判されるわけです。それから、別のある県では、「学力調査」の前に県で問題を作って、予備テストをやって、その年は全国で上位になったりとか、そういう副作用が出て来てしまったんです。そんなこともあって、やめてしまったんです。

しかし、全国規模で、こういう調査を行うことは必要で、サンプリングは今でもやっています。そうでないと、次の「学習指導要領」改訂の資料が得られませんからね。外国でも、やっているんですよ。イギリスでも、アメリカでも……。だから、やり方だけではなくて、目

的は何かということですよ。しかし、その当時は日教組と文部省がいろいろな面に対立していたものですからね。「勤評反対」があったし、「安保反対」があつて、それに「学テ反対」と来て、テスト実施を妨害したために処分されたり、訴訟になるとか、いろいろなことが、これに纏わつてしまつたんです。それで、「学テ闘争」なんて言われてしまいました。とにかく十年間ぐらいやりましたね。

伊藤 全国調査は、天城先生が局長のときに始められたんですか。

天城 いや、私の行く前から行われていましたし、いろいろな問題はもう出ていたんです。私は三十七年に行つたわけですが、一斉テストは三十年代から始まつていたんです。それで、本当は初等中等局の仕事だつたんですが、初等中等局が「これは調査としてやったほうがいいだろう」と言うので、調査課が引き受けたんです。それで、私が行ったときは、まさに大騒ぎをしている最中でした。

伊藤 それについては、国会でも問題になつたんですか。

天城 なりましたよ。これは、日教組との対立の中の、一つの問題として取り上げられたんです。日教組は、反対でしょう。それで、「全国学力一斉調査を拒否する」とか、「うちではやらせない」とか、「調査官が来れば妨害する」とか、それでいわゆる闘争問題になつてしまつたものだから、国会でも問題になつたんです。それに、「勤評闘争」が一緒になつたり、「安保反対」があつたり、何のことだか分からないような状況で、教育闘争が起きてしまつたんですね。

伊藤 局長としては、そういうときは国会に行かなければならないんですか。

天城 国会に行つたことがありましたかね。ほとんど、これは日教組との関係の問題ですから、初等中等局が正面に立つていたんです。

伊藤 日教組との関係は、やはり初等中等局だったんですか。

天城 ええ。

伊藤 調査局長で良かったですね。

型破りの「白書」——『日本の成長と教育』

天城 そういったことで、「学力調査」というのが、この時分「学テ闘争」などと言われて、政治的な問題になつたので、そのことだけちょっと申し上げておこうと思ひました。

実際、調査課ではいろいろな調査を行いましたよ。職場の「学歴調査」のほかにもね。これは、僕が行つてからやつたんですけれども、『日本の成長と教育』という「教育白書」を作つたんです。その前から、文部省では「教育白書」というのを作っていました。「白書」は、各省でやつていたんですね。今の情報公開じゃないけれども、教育の現状を広く社会に知らせようということと、将来の政策の方向を示すという事で、「白書」を出していたんです。各省から刊行物がたくさん出る中で、「白書」というのは、閣議の了承を得て出すんです。それで、文部省では、それまで『我が国の教育水準』という形でやつていたんです。国際的に、どのくらいのレベルになっているかということも含めて、ですね。

それで、私が行つてから、何か独特なことをやろうじゃないかという事で、みんなで議論したんです。その当時、池田内閣の所得倍增計画があるし、それと関連して「人的能力開発」ということが言われ

しており、経済審議会でも、「経済成長をするためには、日本人の能力を高めなければならない」という議論をしていたんですね。これは、その当時の企画庁だけの考え方ではなくて、ある意味では世界的な傾向であり、その代表がOECDなんですね。ですから、この辺から国際的な問題と非常に絡み合って、話をしなければならいんです。

ご存知だと思いますが、OECDは最初、OEECだったんです。

Organization for European Economic Community —— マーシャルプランの受け皿として、ヨーロッパの国がつくった制度なんです。それにアメリカとカナダが加わってOECD —— Organization for Economic Cooperation and Development —— になるのが一九六一年で、その変わったときか、変わる直前かは忘れましたが、ワシントンでポリシー・コンファレンスというのが持たれました。OECDの出版物に『ワシントンのポリシー・コンファレンス』という有名なシリーズがあるんです。OECDは本来、経済に関するものですが、戦後のマーシャルプランの受け皿としてのヨーロッパの発展のためには、教育と科学が大事だという議論がありました。その基礎になる『スベルニルソン・レポート』というものがあるんです。これは、当時の教育と経済との関連、あるいは経済の発展に教育がどう貢献するかというような、大変貴重なレポートなんです。

そんなものが周りにありましたので、日本で「教育白書」をつくるなら、少し政策的なことをやろうじゃないか、と。できるだけ歴史的に見て、客観的な資料で以て、日本の教育の発展と経済の発展が、どう関連しているかを証明しようじゃないかと考えて、『日本の成長と教育』というテーマで、三十七年に白書を出したんです。それを、今日持ってくれば良かったんですが……。

村上 コピーでしたら、ありますが……。付録はコピーしていません。付録というか、後半部分に付録部分がありますよね。

天城 「参考資料」としてありますが、非常に重要な部分なのです。それで、古い統計を見つけないで苦勞しました。例えば、GNPの計算方法なんか、古い時代のものは、今とは違うんですね。経済の発展には「資本」と「労働」と「土地」の三要素があるわけですね。それで、明治何年からか忘れましたが、土地価格の上昇と労働力の増加と、経済成長を比べてみると、土地価格とか労働力の増加以上に、経済が伸びているんですね。それから、教育費を見ると、遥かに多く支出されているんです。そうすると、経済発展というのは、「土地」とか「資本」だけでは説明できないものがあるんです。要するに、教育投資が累積されてきた、その蓄積の効果だということを、計算で実証したんです。

これについては、いろいろな学説や計算方法があるんですが、シカゴ大学のシュルツという経済学者が——この人はその後ノーベル賞をもらいましたが——アメリカでやった方法があるんです。それから、ソ連にはゴスプランという国家計画委員会がやった方法もある。しかし、ソ連は社会主義経済ですから、ちよつと違う。それで、我々はシュルツの方式でやってみたんです。そしたら、結局、国民所得の増加部分の約二五パーセントが、教育資本の増加に基づくものであると推定されました。その計算方法を、この「参考資料」に全部載せたんです。それは、当時はまだ戦後で、必ずしも教育費が十分伸びていなかったの、所得倍増とか、いろいろなことを言うなら、「教育投資をもつとやれ」という政策的意図もあって、やってみたんです。

それで、これを全部英訳したんですね。OECDやユネスコも、当

時そういうことに関心がありました。特に、ヨーロッパの人は非常に関心がありましたから、その連中にも見てもらおうと思って出したら、ユネスコなどでは非常に評価されましてね。その後、ユネスコ主催のアジア教育計画会議が東京で催されたとき、これがそのまま使われました。また、バンコクの会議では、私に「説明しろ」と言うので、行って説明したことがあります。どこの国でも「教育は大事だ」と言うし、「金を出せ」と言うけれども、具体的に、実証的に証明したのは日本だけだったので、非常に評価してくれました。

ところが、これを出したときの国内の新聞論調は、極端に言えば、「教育が社会の発展に貢献しているのは、当たり前じゃないか」というものでした。だけど、それを歴史的に、理論的に証明したものは、それまでないでしょう。そのことを言わないで、教育が大事なのは当たり前前で、特に新しいことではない、と。「教育というのは、やはり、人間の人格の完成を目指すという点を忘れてはいけない」とか、そんな論調ばかりなんです。真面目に論調したのは、一つか二つかな。我々が、どういう考えで、こういう計算方法でやったのかを見てもらいたかったし、また批判してもらいたかったのですが……。

自民党の一部の、日教組のことしか頭にない人々から、「日教組征伐をやっているときに、お前たちは、何をこんな余計なことをやっているのか」と。そういう批判もあつて、いささかがっかりしたんですが、経済企画庁の太田武郎さんなんかは非常に評価してくれました。それから、一橋大に中山伊知郎さんのお弟子さんで、坂本二郎さんという人がいたんですが、彼も、「経済学者がやらなければならない仕事を、あなた方はよくやってくれた」なんて評価してくれましたね。理解してくれる人には、かなり理解していただいたし、碌すつぽ見てくれな

い人は、いい加減な評価しかなかった、と（笑）。初めから賛否両論あるだろうと思っていましたし、かなり大胆な発想だと思っていんです。それまで哲学的な教育論ばかりやっていますから、少し新風を入れようと思って、そういうのをやってみたんです。それは意外な反響でして、一つの試論としては成功したと思っていましたし、悪口を言われることは、承知していましたからね。

ただ、経済審議会で当時、「国民所得倍增計画における長期教育拡充計画」という報告を出しているんです。それから、人的能力部会というのが経済審議会の中にありまして、「人的能力政策の基本的方向について」というものもあるんです。それから、「経済発展における人的能力の課題と対策」というのも経済審議会から出ているので、向こうでも、そういう意識があつたんですね。そういう関係で、大来さんとも、ずいぶんお話をしたことがあるんですよ。最近ではエコノミストも、このことを言わなくなったんですが、その時分は国際的には、戦後の経済復興に対して、教育と経済の関係の意識が強かったんです。それで、この議論が先進国にも発展途上国にも影響を与えましたし、いろいろな意味で乱反射をしながら刺激を与えたと思っていますよ。

小池 この時期の「森戸辰男文書」を見ていますと、「能検」というのがあるんですね。これは「学テ」の後身になるわけですか。

天城 「能検」は、ちよつと違います。本来は大学入試問題なんですよ。今の「センター試験」の基になるようなものなんです。

小池 これは、ちよつと違うわけですね。

天城 ちよつと違うんです。今の「センター試験」の基は「能検」から始まるんですが、別にまた機会があつたらお話します。大学問題のときに、お話してもいいと思うんですがね。

村上 ついでにお伺いしておきたいんですが、『日本の成長と教育』を担当したのは何課になるんですか。

天城 調査課ですよ。

村上 そうすると、分担執筆の形になるわけですか。

天城 それは調べるのも、書くのも、分担しました。伊藤良二さんという人が調査課長としていまして、この人が非常にアクティブな調査マンで、彼を中心に、そのスタッフと一緒にやりました。私も、全部見ました。時間がないし、過去のデータを分析するとか、いろいろと調べなければならぬんですよ。あるいは、その当時の教育政策がどうであったかとか、比較のための外国の事情を調べるとか、それは全部分担と協力でした。これは短期間で、夜業、夜業の連続で大変でしたよ。

村上 十カ月ですよ。

天城 そうです。さっき私がちよつと申し上げたように、その前から国際的には、そういう動きがずつと出ていましたからね。しかし、これについては文部省の連中も、また政府でもあまり気が付かないし、みんな『スベルニルソン・レポート』なんていうものすら知らないんです。これは、あとで『経済発展と教育投資』という題名で翻訳されたんです。

それに、OECD加盟のときのことを申し上げますと、当時日本政府は、OECDの教育活動を知らなかったんです。CSTP——Committee of Scientific and Technological Personnel——科学者技術者委員会というのがあったんです。それで外務省は、OECDから日本が加盟するまでのいろいろな報告書や書類を日本に送ってくれたときに、CSTP関係の書類はその名称からだけで、全部、科学技術

庁に渡したんです。ところが、科学技術庁はその中を見て、教育のこんなか関心がないから、棚に上げてボカしちゃったんです。それで、私が「ワシントン・コンファレンス」以来、OECDは教育問題を熱心にやっているから、その資料がある筈だと言って外務省に問い合わせたら、科学技術庁に全部あるから、と。それで科学技術庁に問い合わせたら、「それはあるけれども、棚に上げてある」と言うわけです。伊藤 こういう出版物というのは、「調査局限り」で出すことができるんですか。

天城 いや、そういうわけではないですよ。担当は調査局ですが、文部省名で出しています。序文は大臣が書いていますからね。

伊藤 「上」まで上げて、省議か何かで、「一応よろしい」というふうなことになるんですか。

天城 ええ。これは「白書」ですから、閣議に出さなければなりませんから。

伊藤 これも「白書」なんですか。

天城 「白書」の型破りで、前にもあとにもありません（笑）。あとは大体、さっき申し上げたように『我が国の教育水準』という同じ表題で出しているんです。

伊藤 それも「白書」なんですか。

天城 ずっと、みな「白書」ですよ。今でも続いています。ただ、今のものは内容は二部制になっていて、一部で特別のテーマを取り上げ、二部で文部省の仕事の全貌を示しているんですね。今の情報公開みたいなものは第二部に入っていて、第一部に政策的なものを出しているんです。だから、高等教育が大事なものには高等教育に触れるし、社会教育が大事なときは社会教育でやるとか、去年のものは「文化立国

を目指して」という内容で、文化政策を主に出していました。政府刊行物センターに行くと、売っていますよ。

村上 『我が国の教育水準』のほうは、五年おきくらいに出しておられましたか……。

天城 前は、ね。

村上 先生が局長をなさっていた頃ですが、『日本の成長と教育』のような特別な白書は、いつも出るわけではなくて、一つのテーマで、臨時に出る形のもですよ。これは、そのようにやろうと思って、やっただけですか。

天城 やろうと思って、やっただけです。『我が国の教育水準』のような、国際比較だけでは面白くないと思ったわけです。当時の世界情勢にも新しい動きが出ていましたし、さつき申し上げたように、経済企画庁でもいろいろなことをやっているんだから、「教育からも声を出そう」と思って、特別にこういうことをやっただけです。

伊藤 『我が国の教育水準』とは、別にですか。

天城 別ではありません。これをやるのは一苦労なんです。これは三十七年の「教育白書」で、こういう型破りの「白書」は、これ一回だけです。あとは全部、『我が国の教育水準』で、ずっと来ていますね。

ただ、今度は科学技術庁と一緒にしたのでどうなるのか。『我が国の教育水準』だけやるのか……。科学技術庁は科学技術庁で、膨大なものを毎年出していましたからね。科学技術とは、別にやるのかな。まだできたばかりだから、よく分かりません。そういうことも、まだたくさん残っているんですよ（笑）。

小池 一緒になったと言っても、文部省なり何なりというのは、そのまま残っている形ですよ。例えば、今回の「文化立国」云々という

のも、別途立てにするようなことを……。

天城 いや、あれは今まで全部、文部省ですからね。文部科学省になってからどうするかは、まだ私は知りません。

伊藤 文部省は、名前が変わるのは初めてのことですよね。

天城 ただ、教育、文化、スポーツというのは変わらないでしょう。学術関係が科学技術庁のサイエンス・ポリシーと一緒にあって、科学技術三局というのができたでしょう。それは、科学技術庁の局と文部省の学術関係が一緒になって、再編成されたんです。あとは、初等・中等、青少年、スポーツ、文化庁、生涯学習と、文部省はそのままです。

伊藤 あれは日本語だと文部科学省ですが、横文字にすると、いったい並んでいますね。

天城 ええ。従来、文部省がそうなんですから……。Ministry of Education Science and Culture だったんですからね。「それにスポーツを入れる」と、誰か大臣が言って、スポーツが入ったんです。それに、今度はテクノロジーが入ったものですからね。

伊藤 だんだん長い横文字になっていくわけですね（笑）。

天城 ええ。実態でやるよりしようがないんです。

村上 『日本の成長と教育』の最後のところには、「これからは長期的で総合的な教育計画というものが必要である」という形で、ある種の政策提言があったわけですが、それはその後、どういうふうに実現したというか、まとめられていったんでしょうか。

天城 これは結論的には、「総合的な長期教育計画を作れ」と言っているんですよ。その後、文部省は全体について、長期総合教育計画は作っていないんです。なかなか、できないんですよ。それで、ちよっ

とあとになります。昭和三十八年に「中教審」が出した「三八答申」と、その次の「四六答申」がありますね。「四六答申」で、また「長期総合計画を作れ」と言っているんです。そこで、「四六答申」で言った総合教育計画が、高等教育について一部始まったんです。ところが、中曽根首相が「臨教審」を言い出して、「戦後を見直す」と。そのときから、二年ばかりいろいろやって、大学関係だけは大学審議会というものができて、長期計画的なものは、ずっとそのまま続いているんですね。あと、初等中等教育とか幼稚園とかいうものについては、必ずしも総合計画はできていないんです。これをやるのは、大変なんですよ。

それで、「三八答申」もいろいろあるんですが、その後「中教審」は「四六答申」、さらに「臨教審」と発展しますが、改めて話さないとバラバラになるので、いずれまとめてお話しします。

国語政策の問題点

伊藤 それでは、調査局に話を戻しましょう。

天城 調査・統計というのは、いまお話ししたところが主なことでした。あと、国際文化と、国語と宗務があるんですね。これが極めてユニークで、先ほど申し上げたように、日本の伝統や文化に関する問題ですから、ある意味では非常に大事な課なんです。

ところで、最近、朝日新聞に「国語審議会物語」というのが出ていて、びっくりしたんですよ。

伊藤 一つの新聞ですか。

天城 二月十五日（平成十三年）ですね。

伊藤 最近ですね。

天城 そうですよ。二月十五日から「ニュースラウンジ」という夕刊のコーナーに、社会部の記者が書いています。毎週木曜日と金曜日に連載されていて、既に四回出ていますよ。最初の頃は、まさに国語審議会の問題が載っていたんです。「こんなものが、今頃なぜ？」と、びっくりしていたら、四回目は国際化の中で日本語をどうするかとか、そういう議論になっているんですね。

小池 英語を公用語にするなどの問題がありますよね。

天城 小学校でも英語をやるとか、いま新しい問題があるので、そっちに話を持って来てしまっているんですね。本来の国語問題でやれば良かったのに、ジャーナリストだから、やっぱり途中からそっちに動いてしまったんですね。最初の頃は、純粋に国語審議会の問題でした。

それで、国語課というのは派手な行政ではないんですが、日本にとっては基本的な問題です。また、国際的に見ても、自分の国の言語をどうするかというのは、どの国でも地味だけれども基本的な問題ですね。例えばフランスのように、「フランスとはフランス語だ」と言うくらいに、フランス文化とフランス語とを結び付けて、それを公然と主張している国もあります。フランス語を使わない国際会議には、政府代表を出さないとか、そんなことまで言い出すでしょう。

一方、日本語というのは大変複雑なんですよ。「漢字仮名交り文」であり、表音と表意の文字を用いているでしょう。我々の祖先が偉くて、片仮名だとか平仮名だとかを作ってしまったでしょう。特に、平仮名は「女文字」と言われていますし、日記文学というのは日本独特のも

ので、ほとんど女性が書いていたでしょう。今、世界には日本文学を研究している外国人の研究者や留学生がずいぶんいるんですが、日記文学をやる人が意外に多いんですね。紫式部とか清少納言とか……私も、何人か外国人で日本文学を研究している研究者を知っていますが、女性が多いですよ。

それで、いつ頃から、こんなことを議論しているのかと思ったら、実に早いです。一番最初に国語問題を取り上げたのは、前島密という人ですね。この人は「郵便の父」とか言われていますね。だから、幕末ですよ。彼が、徳川幕府に建議書を出しているんです。いよいよ幕府が終わるということが分かったときでしょうね。「新生日本は教育が基本だが、教育をやるためには言語が非常に大事だ。今までは言語が難し過ぎた。庶民に新しい知識を普及するためには、国語の合理化とか簡素化とかをやらなければ駄目だ」と。そういうことを、徳川幕府に既に出していたんです。国語問題は、それ以来なんですよ。

その後、国語審議会ができて、いろいろやっているんですが、戦前にも仮名文字論者がずいぶんいました。特に戦後は、アメリカの「教育使節団報告書」の中に「国語の改革」という一章が設けられて、「日本語を簡易化しなければ、日本の民主化はできない。漢字なんかやめて、ローマ字にしよう」と、強制していたんです。また、それを受けて、CIEの担当官が盛んにローマ字化を勧めたわけです。それは、トルコが第一次大戦後、近代化するときにローマ字を採用して、大成功した。だから、「日本も漢字なんかを使っているのは駄目だ。ローマ字を使い」と言うんですね。そこで、戦後いろいろなことが新しくなるんですが、国語審議会は戦前からあって、そこでは国語改良、つまり漢字の簡易化、漢字の制限、あるいは常用漢字をどうするかとか、学

校でどこまで教えるんだとか、そういうことを議論していたわけです。

ところが、これは国語審議会だけではないのですが、国語審議会が特に強く考えていたのは、日本語の中に表意文字と表音文字があることなんです。漢字は表意文字で、平仮名・片仮名は表音文字ですね。それで、アルファベットなんかは、みんな表音でしょう。日本は漢字があるから表意になるんですね。それが「漢字仮名交り」だから、非常に複雑なんです。「簡易化しろ」と言うのは、結局、表意というものが複雑過ぎるから、漢字を制限しろとか、常用漢字を作れとか言うわけです。それから、漢字の音も「呉音」と「漢音」がありますから、複雑なんですね。それから、仮名遣いも、万葉仮名から始まっているものなど、いろいろあるわけでしょう。例えば、昔は「蝶々」は「てふてふ」だし、「学校」も「がっこう」なのか「がっこ」なのか……（笑）。「がっこお」と言っているけれども、書くと「がくかう」でしょう。こんなのはおかしいじゃないかと、そういう議論がたくさんあったんです。「頭」も「こうべ」なのか「かうべ」なのか、とかね。それで、なるだけ簡易化して、漢字制限とかで、表音に近くなってくる。ところが、表意派がたくさんいて、その両者が争っているんですね。

それと、もう一つ、どういう経緯か知りませんが、国語審議会は普通の審議会とは違って、「建議機関」ということで、自分たちで考えて自分たちでどんどん意見を作っていくんです。諮問委員会ではなかったようです。それが、ちょうど私がいる頃か、ちょっと前でしたか、普通の審議会にしよう、と。要するに、諮問機関にしようということです。そして、その当時は委員の任期が来ると、交代する前に、前の委員が次の委員の候補者を推薦するとか、本当に自主的な動きをして

いたんです。

伊藤 諮問機関でもないということは、何なんですか。

天城 諮問機関なんですが、「建議機関」と言って、自分たちで考えていろいろなことを決めていってしまうくらい、自主性を重んじていたんです。ところが、その中で表意派が少数派になってしまったんですね。

伊藤 仮名文字派が多数になったんですか。

天城 仮名文字ということではなくて、全体として表意派が少なくなつて、表音派のほうが多くなつてきたんですね。朝日新聞の記事にもそのことが書いてあつて、僕もびっくりしました。そして、この当時、国語審議会の中に、任期が来て交代するときに、次期委員を選ぶ推薦協議会というものを設けたと言ふんです。それで何人かが選ばれたけれども、国語審議会には表音派が多くて、表意派というのは少数で、辛い思いをしたと書いてあるんですね。

それから、もう一つ、その当時、国語問題協議会というのが民間組織としてあつたのです。

伊藤 今もあつて、それは表意派のほうですよ。

天城 表意のほうですね。そこには宇野精一さんとか、文学者としては舟橋聖一がいたんです。それで、国語問題協議会の代表が文部大臣と会つて、国語審議会の四十五人の委員のうち、表音派が十九名で、その同調者と体制順応者が二十人で、批判者というか、表意派がたった六人しかいない、と訴えているんです。これではもう駄目だ、と。福田恆存なんかも関係しているんですが、彼も表意派ですね。

伊藤 れっきとした表意派ですね。

天城 その時分、「カナ文字会」というのもあつて、これは伊藤忠商

事の創業者（二代伊藤忠兵衛）が、「ビジネスではカナが非常にいい」と言うんです。仮名文字論者なんですね。

そんなのが入り乱れていまして、結局、建議機関を諮問機関に改めた。いろいろな議論があつたけれども、新しく委員を任命して、全体としては国語の簡易化の流れで、ずっとやつてきたんです。それで毎に、国語問題協議会の人たちが反撃しました。ここで大変面白いのは、吉田富三さんという、あの当時は東大の医学部長だったかな……。その人が委員だったんですが、国語を使うユーザーの立場の人ですね。その吉田先生が、「誰が何と言つても、私は漢字仮名交り文で考えている」と言つていたんですね。当時の専門家で、いま生存しているのは林大さんという方で、もう八十何歳かな。

伊藤 宇野精一さんも、お元気ですね。

天城 宇野さんも元気ですね。今は何も言わないけど……。林さんは、その後、国語研究所の所長をやったんですが、この時分のことをよく知つていらっしゃるんですよ。それで、朝日新聞の記事にも林さんの名前が出ています。ここには、いろいろな名前が出ていますから、それでいろいろと思ひ出しましたよ。要するに、全体としては表意派と表音派の意見の対立の中で、時代の趨勢で、どんどん常用漢字と当用漢字を増やして、漢字を制限していくんです。特に、送り仮名の問題になってくると、余計に争いが酷くなったんです。

伊藤 送り仮名も、途中で変えたりなんかしていますよね。

天城 問題は、何を目的に、誰を対象に、国語の改造をやるのかがはっきりしないといけない。例えば、学校の子供たちに教えるために、義務教育では、どれだけの漢字にしようかと言うのなら分かるけれども、社会一般に対して、こうやらなければおかしいじゃないかと言う

のは、行き過ぎじゃないか、と。そういう議論もあるし、もう一つは官公庁の公文書をどう書くかとか、マスコミがどう漢字を使うかとか、その対象をちゃんと見て考えないといけないんじゃないか、と。一部の対象のために全体を直すというのは、おかしいのではないかという議論があるんです。それが、今、外国人に対する日本語教育の問題でもあるんですね。外国人が日本語を勉強しているけれども、せいぜい多く見ても二、三百万人だろう、と。その二、三百万の人のために、一億二千万人の国語を変えろというのは、とんでもないことだ、と。これは、江藤淳さんなども言っていたんです。

だから、問題は目的と分野なんです。例えば、学校の教育漢字を何字に制限すると言っているけど、「あれでは足りない」という議論が学校で出てくれば、また直すかも知れない。まあ、それはやっているんですけどね。

伊藤 やっていますよね。名前を付けるときに、使ってもいい字とかね。

天城 「姓名漢字」というもので、出生届のときに、とんでもない名前を付けたら困ってしまうということで、「公」のところで制限することがあるんです。それに対しても、姓名のことは個人の考えだから、無闇に制限するのはおかしいんじゃないかという議論は、いつもあるんですね。

ところが、最近は片仮名でも平仮名でも、どんどん増えてきてしまっているでしょう。特に、表意文字の片仮名・平仮名が、外国語としてどんどん入って来ますからね。それは、日本人が非常に順応性があるということでもあるんですが、外国語がどんどん片仮名で入っていて、「コンピュータ」なんて、もう訳す必要はないですね。「インター

ネット」も、訳しようがないでしょう。「インターネット」で通つていきますからね。

伊藤 日本語の訳がないんですね。

天城 そのまま使っているんですね。

伊藤 そのほうが便利なんですね。

天城 ただ、別の面から言うと、インターネットが世界的につながつてくると、英語になっていくんですね。それでフランスなんかは、アメリカの文化侵略だと、反撥しているんです。

所澤 フランス語で「BASILIC」というプログラミング言語を全部作るとか、何かそういうことをやっているらしいですね。

天城 ところが、日本は表意と表音があり、平仮名と片仮名があるものだから、割合、弾力的にやってしまうんです。最近は片仮名が多過ぎて、何のことか全然分からないですよ。外国語をそのまま使うなら、まだ分かるんですが、それを片仮名で書くものだから、分からない。こういう別の問題が、また現在では起きていますけどね。

伊藤 その片仮名を、また「圧縮」したりしますからね（笑）。

天城 そういうのが、たくさんありますよ。外国語でも「圧縮」はたくさんあって、例えば「国連大学」というのは、外国でもUNUなんです。OECDだって、そうでしょう。UNESCOだって、みんなそうです。だけど日本は、それをまた「ユネスコ」と片仮名で書いてやう。

小池 元が何だか分からなくなってしまうですよ（笑）。

天城 しかし、ポピュラーになると、「ユネスコ」と言えば、それで通るようになったでしょう。だから、言語という問題が非常に難しくなってきたんですね。日本の文化と伝統を守りながら、時代の変化に

対応してどう使っていくか……。」「国語が乱れている」と言うけれども、「乱れていないんだ」という議論があるのは、そういうことなんです。ただ、情報化と言われている中で、符号みたいな言葉だけでは駄目じゃないか、と。それぞれの国の言語を、ちゃんと守らなくてはいけないのではないかという議論は、どこの国でもあるんです。

特に、日本では「国語」と言っていて「日本語」と言わない。世界に、いま二百国くらい独立国があるでしょう。ところが、自分の「国語」のない国は、たくさんあるんです。それで、言語の数というのは、人によって違うんです。何千と言う人もあるし、何万と言う人もあるのに分らないんですが、要するに、みんな「複合言語国家」なんです。国民がみな同じ言葉でしゃべっている国のほうが、少ないんです。

伊藤 アメリカでさえ、そうやって来ているますからね。

天城 アメリカでは、「スペイン語を国語にしろ」なんて言っている人々もいるでしょう。

伊藤 漢字制限で、史料編纂所の「纂」という字が平仮名になったでしょう。あれは、みっともないと思ってるね（笑）。

天城 どうも、そういうところがあるものだから、これは幾らでも議論ができるんですよ。しかし、国語問題を真剣に議論するということは、非常に大事なんですね。ですから、国語審議会には、いろいろな人の意見を伺うということで、国語学者だけではなくて、ユーザーがたくさん入っているんです。特に、マスコミの人が多いですね。前の前の委員長はマスコミの人ですね。今も、マスコミの人かな？

所澤 先ほど、国語審議会を諮問委員会に変えるというお話があったんですが、それはどういう手順で変えられたんですか。

天城 僕は詳しいことは分かりませんが、要するに審議会というのは、

みんな審議機関なんです。それで、委員会というのは、行政委員会と言って、独立性の強いものです。政府で、みんな直したんです。だから、教育刷新委員会は教育刷新審議会に直す。一方、公正取引委員会であれ、公安委員会であれ、「委員会」と名の付くものは、みんな行政委員会なんです。あとは、みんな審議会に直そうということでやっただけです。

伊藤 いま行政委員会というのは、ほとんどないでしょう。公安委員会とか……。

天城 「公取」——公正取引委員会も、そうですね。

伊藤 戦後、たくさんつくったほどには、もう残っていませんよね。

天城 ええ。もう今は非常に少ないですね。戦後は、アメリカとかヨーロッパにあるものだから、日本も盛んに取り入れたんです。

伊藤 国語審議会は、元々は審議会なんですよ。

天城 審議会ですよ。だけど、そういう区別がなくて、自主性を重んじてやったんでしょうね（笑）。

伊藤 これは、国語課が管轄しているんですか。

天城 国語課が所管しているんですね。それと、国語研究所ができたんですよ。

伊藤 これは文部省の直轄ですか。

天城 もちろん、そうですね。今は文化庁の所管ですけどね。だから、国語審議会と国語研究所と国語課という、この三本柱で国語政策をやっていたんです。国語研究所は、国語の基本的な問題を研究しようというところで、例えば基本的な辞典を十年掛りでも二十年掛りでもいいから作ろうとしているんです。それで、「方言辞典」などを作ろうとしています。そのうち方言もなくなってしまうかも知れない。今のう

ちに方言を集めておこうということだね。

国語研究所でやっていた仕事で面白いのは……。日本語は、いろいろな歴史の流れがあるものだから、言葉が豊富なんですね。英語にはベーシック・イングリッシュというのがありますが、あれは何語でしたか……。

所澤 千か二千ぐらいですか。

天城 そんなにないでしょう。千以下ですかね。それで、ベーシック・イングリッシュでバイブルを書き直したものがあります。私が国語研究所の先生方に、「ベーシック・ジャパニーズはできますか？」と訊いたら、「おそらく、やればできるかも知れないけれども、うんと不便になるでしょう」と。それに関連して、いろいろな調査があるんです。当時、ポピュラーだった雑誌を九十種類集めて、どれだけの言葉が使われているかを調べたんです。大体、八〇パーセントくらいまでは、ある程度、使用頻度が高いんですが、それから先はバーツと広がっていくんです。ベーシックが、なかなかできないんですね。例えば、和服の「袖」だとか「襟」だとか「裾」だとかという言葉があるでしょう。そういうものは、使用頻度は低いけれども、和服がある以上はやめられない。そういうことで、非常にケースは少ないけれども、バーツと広がってしまうので、ベーシックができないんです。

それで、おそらく文部省の研究所の中で一番最初にコンピュータを入れたのは、国語研究所だと思いますね。それは、「語彙調査」というのをやるためなんですね。夏目漱石の作品には、どれだけの言葉が使われているかとか、森鷗外はどうだとか……。今は国文学研究資料館というのが、もう一つあって、そこではコンピュータで全部、こういうものを調べています。誰の作品には、どういう言葉が多いとか（笑）。

国語研究所のほうでは、国語の基本問題を研究すること、できれば基本的な辞書を作ろうとか、あるいは方言をどうするかとか、そういった基本的な調査をやっています。

所澤 国語研究所というのは、文部省の他の直轄研究所と少し性格が違うのではないかと思うんですが……。今は文化庁の所管になっていますが、その当時、他の研究所の場合は大体、教官が置かれて、教授だとか助教授だとか、と。例えば、国立教育研究所の場合は一応、教官制で、部長だとか何とかになっていますが、国語研究所は教官制のような仕組みではなかったんですか。

天城 いや、初めの頃の研究所は、みんな教官ではないですよ。研究員です。あとから教授職に変えたんですが、初めは、みんな所員です。統計数理研究所や遺伝学研究所だって、そうです。今は、みんな国立大学共同利用研究機関という形になって、教授職・助教授職になっているんです。国語研究所だけではなくて、全部そうです。

あの時期、調査局が国語問題を引き受けていたので、ある意味では私も大変勉強させていただきました。現在は、国際社会に対応する日本語の在り方という問題を、国語審議会で議論しているんですね。

伊藤 太平洋戦争のときに、東南アジアの日本の占領地で日本語を教えるために、国語の簡易化とか漢字の制限とか、いろいろなことを考えたようですね。

天城 このときは、そのための先生を養成して、派遣したんですよ。その人たちが戦後、外国人に対する日本語教育をずっとやっています。朝日カルチャーセンターなんかでも、そういう講座をずっとやっていますし、ICUにもそういう講座がありました。いま大学でも留学生のための日本語教育というのをやっていますし、国語研究所は、

そういう方面の仕事もやっていますね。

伊藤 「カナ文字会」みたいなものが、一時期、ずいぶん盛んだったように思いますが、最近はあまり聞かないように思いますね。

天城 「全部をカナ文字に直せ」なんていう動きは、今はもうないでしょうね。今は言文一致——話し言葉と書き言葉を一致させようという主張があります。また、国語全体を、難しいのを易しくしようとか、送り仮名の問題とかで一時議論したけれども、誤解のない限り簡単にしようとか、そういう方向に入ってきていますからね。全体を仮名文字化するという動きは、もうないと思います。

志賀直哉かな、戦後、「フランス語に直せ」ということを主張したことがあるんですね。

伊藤 ローマ字化を主張している人は、もうあまりいないんじゃないですか。

天城 そうでしょうね。「漢字仮名書き」は定着しているでしょう。

伊藤 支持者がいなかったんですか。

天城 いないですね。僕は詳しいことは知りませんが、司令部の委託を受けて、民間で日本人の識字調査をしたようです。そしたら、日本人の識字能力は高く、難しい漢字仮名交りでやれるということが分かって、もうローマ字化は無理だと思ったんじゃないですか。ローマ字化の強い要請は消えてしまいましたね。「トルコが成功したから、日本でもやれ」なんて盛んに言ったけれども、違うんですよ。片仮名・平仮名を創り出す国民で、万葉仮名だって漢字を当てはめてやるとか、いろいろやりますからね。

今後は外国との関係で——特に、今のインターネット問題とか、あるいはグローバリゼーションの中での問題は、まだあると思います。

この頃、若い人たちの言葉で「ら抜き」とかがあるでしょう。感性で言ってしまうから、いろいろなことが起きるでしょうし、「国語の乱れ」という議論も、また起きると思いますね。

伊藤 漢字の場合、コンピュータ用の文字コードや略字の字体の問題もありますね。要するに、日本、韓国、中国、台湾の漢字を統一してしまうということ、それが問題になっているんですね。

天城 これは、ちょっとできないでしょうね。日本の「略字体」と、中国の「略字体」を一緒にしようかと言っていたときがあるんですが、全然考え方が違うんです。中国の「略字体」というのは、「音」でやっていますから、進んで行くとローマナイズしてしまうんですね。

小池 あれは、表音にし難いんですね。

天城 日本の「略字体」はそうではなくて、難しい漢字を簡単にしようというだけなんです。だから、考え方が違うので、一緒にはできなくなっただけなんです。それから、中国は、ほとんど造語するんですね。

伊藤 まあ、日本も造語しますけどね。

所澤 中国の化学記号なんかは、凄いですね。元素の名前などは、ほとんど全部新しい漢字で、例えば金属元素は全部「金偏」なんです。

天城 それでまた、台湾と中国が別々にやっているんですよ。僕が驚いたのは、ゼロックスは「全録」という言葉を使っているんです。これは、全部写してしまうんですから、意味も非常にはっきりしているし、日本語でもゼロックスでしょう。そしたら、あれは台湾が考えたものだから、中国では使えないらしいんです。ピンポンなんかも、漢字で書いていますね。

伊藤 いろいろなクイズに、よく出てくるじゃないですか(笑)。

天城 それから、日本には「音」と「訓」とがあるしね。……国語の

話は、これくらいにしましょう。

宗教行政の問題点

伊藤 それでは、宗教の話をお願いします。

天城 宗教も大変なんですよ。宗教も日本の歴史のことを話さなければならぬし、今でも宗教問題は複雑ですからね。

実は、文部省の宗務課には、神道の専門家、仏教の専門家、キリスト教の分かる人、それから新宗教の分かる人……といった具合に、専門家がみんないるんです。仏教については、僕が行ったときには井上先生という大先生がいて、この方は文学博士で仏教学者ですね。それで、新しいほうを研究するのは、宗教社会学を学んだ人が多くて、東大の宗教学の岸本英夫さんのお弟子さんたちです。そのお弟子さんを、宗務課で勉強させてくれということで、先生が送って寄越して、それが代々続いているんですね。若い助教授クラスを、専門職として送ってくるんです。そういう連中と、今でも僕は付き合っています。これらの宗教学者というのは、別の面でも皆さん有能なんですね。

私は岸本先生とも大変親しかったので、宗教の古いところの話とか流れとかいうのを、今でも覚えていっているんです。とにかく、日本の宗教というのは世界的にも独特なんですね。今、国学院大学の学長をやっている阿部美哉君というのが、岸本さんのお弟子さんで宗務課に来ていて——もちろん宗教社会学をやっていたんですが——彼はアメリカにいたものですから、言葉ができるので世界宗教学会で議長とか委員

とかをどんどんやるんです。それで、大学から離れて、そういうことをやっていたんだけど、宗教学会で彼を放さないんですね。彼は国際学会に行つて、平気で議長とかをやってくる男ですよ。

それで、岸本先生の流れとか、そういうことで、いろいろ私もお話を伺っていたし、これは大変だと思つていたんですね(笑)。戦前には宗教団体法というのがあったんですが、それがいろいろな宗教の内容に干渉して、信教の自由を妨害しているというので、治安維持法の廃止と一緒に廃止されたんです。それで、政教分離・信教の自由というのが占領政策でもあるし、日本の新しい憲法の主旨でもあるので、戦後、すぐに「宗教法人令」というのを作つたんです。治安維持法と宗教団体法が廃止されたものですから、同じ年の暮れには、もう「宗教法人令」というのを作つて、許可ではなくて、承認主義を採つたんです。

伊藤 届け出制ということですか。

天城 基準を作つて、その基準に合えば承認するという届け出主義ですね。届け出で承認する、と書いてあるんです。それで、宗教活動も自由だし、自治を認めるという前提で直したんです。

伊藤 その「令」というのは、政令という意味ですか。

天城 政令ですね。まだ占領下ですから、これはみんな「マッカーサー政令」です。

伊藤 それが独立後は、法律になるわけですか。

天城 昭和二十六年に、宗教法人法になるんですね。

そこで信教が自由になったし、宗教団体も届け出主義で自由になったのはいいんですが、また逆に、いろいろな問題が出て来たんですね(笑)。例えば、免税措置があるから、税金逃れのためにやるとか、収

益事業を認められていたので、不適切な収益事業をどんどんやってみようとか、特に税金の優遇措置を狙って、いろいろありました。

例えば、これは全て悪いわけではありませんが、天理教に行つてご覧なさい。天理教では各県別に宿舍がダツとあるんですが、あれは宗教行事のときに信者が来て、寝泊りするところだと言うんですね。ところが、奈良県から見ると、あれは宿泊施設じゃないか、と。付近の宿屋と、どこが違うんだということで、税金をかけようとしたんです。それから、これは私のときではなくて、その後ですが、京都で古都税というのを作ろうとした。神社仏閣にみんな来て、お賽銭を上げるじゃないかということで、市で税金を取と言つたんです。これが、また大反対で、天理教のときも大反対で、とにかくいろいろな問題が出ました。

伊藤 宗教法人法になるときに、何か内容的には変えたんですか。

天城 基本的には、もちろん認証主義ですが、宗教の中身については何も言わないということなんです。それで、宗教というのが何だか分からないんですよ。宗教法人をつくるときとか、規則を変更するときとか、合併するときとか、解散するときとか、そういうときには認証を受けなければならない。……ということだけで、あとはそれを守っているか守っていないか、適切な指導をするだけになったんです。

それで、宗教法人法のどこを見ても、宗教の定義はないんです。「宗教の教義を広め……」と書いてあるだけなんです。「宗教の教義を広め儀式や行事を行う。信者を教化育成することを主たる目的とするもので、例えば神社、寺院、教会、修道院……」。そんなふうに書いてあって、宗教とは何かは分からない（笑）。だから、「鯛の頭も信心から」と言うのと同じで、中身には触れないという形にしてしまっているん

です。

それで宗教には——これは歴史的な問題なんです——「本寺」と「末寺」というのがあって、包括的な宗教法人と、単位の宗教法人があるんですね。今は、みんな単位の宗教法人になってしまっていて、「何々宗総本山」と言つても、「末寺」から上納金を取つて云々ということは、今はないんです。みんな独立の宗教法人なんです。戦後、私がこれを担当していたときには、宗教法人審議会というのは認証するだけですから、争いがいろいろ上がってくるのがあったんです。しかし、宗教法人審議会は「右だ、左だ」と決められないんです。ただ、持つて行くところがないものだから、相談に来るんですね。「本寺」と「末寺」の財産争いでした。そういうものが、ずっと続いています。宗教の本質に関わる議論は一切しませんし、文部省も手を付けないことにしていました。それで、「淫祀邪教」が蔓延してしまうんじゃないかという議論があるんですね。

伊藤 この間のオウム真理教のときに、少し問題になりましたよね。

天城 ええ、だから、ああいう問題が起きてくるんですよ。それで、包括法人は文部省所管なんです。単位の法人は都道府県の所管で、オウム真理教は単位宗教法人ですから、東京都の所管でしょう。それから、創価学会も東京都なんです。それで、「文部省は、もつと責任を持つて見ろ」と、あるとき大騒ぎをして、宗教法人法を改正しました。ですから、オウムなんかは、みんな文部省で見ることにしたんですよ。それに対して、創価学会が「また、宗教に政府が干渉を始めるぞ」ということで反対しまして、宗教審議会ですったもんだの議論をした結果、これはいま中央で見えています。

しかし、オウムの問題は宗教問題ではないんじゃないかという議論

があつてね（笑）。

伊藤 だけど、宗教の定義がないわけですからね（笑）。

天城 文部省が、見当違いをしているんじゃないかという議論もあつたんです。それも、向こうは宗教法人法で申請してくるわけですね。

それと、もう一つ、実はややこしい議論が歴史的にたくさんあるんですよ。例えば三重県の津市で、体育館を市で造つたんですが、その起工式のときに神官が来て、御祓をしたわけです。それは、公の施設ですから、地鎮祭の経費は、みんな市が払った。それが政教分離に反するということで、訴訟になったんです。これは、割合と宗教上は大きな問題であり、前から議論されていた「国家神道と政府との関係」という意味でも、象徴的な事件なんですね。

小池 玉串料訴訟ですね。

天城 玉串料も、もちろんそうですよ。それで、これは宗教行事ではないかということで、最高裁まで行つたんです。だけど、業者は「御祓をしないと、危険なことが起こる」と言つて、嫌がるんですね。それで今は、公共の建物でも御祓があるんですが、それは仕事を頼むほうには関係がなくて、業者がやるという建前になっているんですね。結局、津市の地鎮祭問題というのは最高裁まで上がつて、十年くらいかかったんじゃないですか。国家神道が一つの大きな問題なんです。

国家神道というのは、そんなに古いものではないんですよ。あれは、明治にできたんですね。明治のときの、一種のフィクションですね。今は、天皇の祖先が伊勢神宮に祀られていても、儀式自体は天皇家の宗教行事だということで、分離しているんですね。だから、国費は関係ない。昔は伊勢神宮の遷宮式は国費で出していたんですが、今は、もう国費は出しませんね。今は奉賛会というところが中心になつて、

寄附金でやっているんですが、大変らしいですね。そういった形で、いずれにしても政教分離で切つてしまっているんですよ。

それで、国家神道に問題があつただけでも、日本にはいろいろな宗教があるので、戦前は神道、仏教、その他というふうに分けて、内務省が所管していたんです。そして、神道に関しては神祇院が担当し、その他は宗務局なんですね。それが戦後、国家神道が禁止されて、宗務局だけが文部省に來まして、普通の宗教と同じように扱つたんですね。

ご存知のように、「廃仏毀釈」というのが明治の初めにあつたでしょう。それまで仏教と神道とが一緒になっていたのを、以後、仏教を排斥した。それが、今でも実際には、いろいろなところにつながっているんですね。

これも新聞に出ていた記事ですが、堺屋太一さんが経済企画庁の長官のときか、辞めたあとだったか、何かフランスで行事があつて行つたときに、フランス人から「日本に神道の信者は、いまどのくらいいるのか？」と訊かれた。そしたら、「一億人いる」と答えたんですね。「それなら、仏教はどうなのか？」と訊かれて、「仏教徒も一億人いる」と。それで、「人口は？」と訊かれて、「一億人」と答えたなら、「何を言っているんだか、分らない」と（笑）。ところが、『宗教年鑑』を見ると、そうなっているんですよ。

だから、外国の宗教研究者は、日本の宗教を研究するのが非常に面白いんですよ。家の中に神棚があつて、仏壇もある。結婚式は神前でやつて、お葬式はお寺でやるとか……。最近、信者でもないのに教会でやるでしょう。「日本人の宗教心とは何だ？」ということになつてくるんですね。それは、確かにそうなんです。これは、日本の文化

と伝統にみんな入っていて、それをみんな不思議に思わないんです。

伊藤 当たり前だ、と思っっていますからね。

天城 そんなに論理的に、宗教を考えていませんからね。

伊藤 そもそも宗教というのは、そんな論理的なものではありませんからね。

天城 そうですね。さっき言った阿部君なんか聞いた話では、国際会議に行く——日本には坊主になりたい人間は無限にいるけれども——カトリックなんかでは、神父さんに成り手がいないと言って、大騒ぎをしているそうです。それから、教会が繁盛しているか、繁盛していないかというのは、献金がどれだけ集まるか集まらないかだ、と。あるいは、日曜日の礼拝に何人の人が来るかと、そういう数字的なことばかり言っているそうです。要するに、宗教がインスティテューショナルイズ (institutionalize) されているんだそうです。

ところが、日本にはそんなものはないんですね。お布施なんか幾らか分らない。それから、坊さんの成り手は幾らでもあつて、途中から坊さんになりたければ、ちよつと修行すればなれるんですね。それで、彼の国学院大学には、神社の神官のための短期コースがあるんですって……(笑)。僕の郷里でも、幾つかの寺を知っているんですが、その寺の住職なんていうのは、寺では食えませんから、初めから市役所に勤めているんです。それで、寺は寺でやっていて、定年まで市役所にいましたね。それから、私の菩提寺の住職は、いま三島の市長をやっているんですから……。

伊藤 あそこは日蓮宗ですね。

天城 日蓮宗です。それで、寺もやっているんですからね。日本人は、そういうところが非常にルーズなのか、弾力的なんですね。

それで、これはよく考えておかねばならないと思うんですが、日本には「神仏習合思想」があつて、仏様と神様が一緒になっているんですね。長い間、神仏習合なんですよ。この神仏習合の専門の研究書もあつて、私も読んだんですが、宇佐八幡が出所なんですね。宇佐八幡は、八幡様ですから、本当は仏教でしょう。ところが、宇佐八幡宮と言うんですから、何だか分からないですね。それで、あちこちのお寺に神宮寺というのがあつて、東大寺にもあれば、どこにもあるんですね。それは、宇佐八幡宮が中心になつて、お寺に神宮寺というものを造っているんですよ。大きな神宮寺もあるんですよ。宇佐八幡なんていうのは、そうでしょう。だから、八幡様というのは神宮寺で、仏教か神道か分からないんですよ。

伊藤 分からないですね。ちゃんと鳥居があつて……。

天城 それで、宇佐八幡宮というのは、これはよく分からないけれども、どうもあの辺の人たちは帰化人じゃないか、と。その連中が宇佐八幡を造つたと言うんですよ。立派なお宮でしょう。だけど実体は、八幡菩薩なんですね。源氏が鎌倉に幕府をつくったときに、鶴岡八幡宮を造つて、「八幡菩薩は源氏の氏神で、源氏は何とか天皇の末裔だ」と言い始めたんです。

伊藤 清和天皇ですね(笑)。

天城 それで、日本中に「八幡信仰」というのが流行ってきたんです。それを突き詰めていくと、みんな神仏習合なんですね。私はよく知りませんが、お伊勢さんにも神宮寺があるそうです。

それから、これは歴史的事実なんですが、行基が東大寺を造るときに、あちこち募金して歩いたんですね。「勧進して歩く」と言う。その行基がお伊勢さんに行つて、神宮寺を造つていいかと訊いて、それを

造ったという話が歴史的な事実として残っているんです。

それで、司馬遼太郎が書いているのが一番面白いんだけど、どうも宇佐八幡宮の神様というのは、仏様に擦り寄ったんだと言うんですよ（笑）。そういう言い方なんです。それまでは伝来の信仰で、神道というのは一種のアニミズムですから、多くの住民には魅力がなかったらしいんです。そこに仏教という外来思想が入って来て、みんなを惹き付けてしまったので、神様も「仏さんと一緒になったほうがいいや」ということで、そうなっていったんだという言い方なんです。

日本は宗教戦争のない珍しい国で、蘇我と物部の争いが、唯一の宗教上の争いだと言われますね。蘇我氏というのは「帰化民」だとも言われているんですが、蘇我は仏教でしょう。それで、物部と蘇我の二つが争ったのは、単なる政権争いではなくて、宗教的には神道系と仏教系との争いであり、外来文化を受け容れる者と保守的な者との争いだった、と。それで当時、皇太子だった聖德太子は天皇の甥ですから、朝廷側——神道側の筈なのに、あときは蘇我氏、つまり仏教側に付いたんです。結局、蘇我が勝ったでしょう。要するに、新しい文明開化が勝った。明治維新と、同じなんです。ところが、蘇我がだんだん勢力を強めてきて、自分たちが天皇になるような勢いになってきたというので、それで今度は神道側が蘇我を打ち倒してしまう。だから、あの辺が非常に複雑だと言いますよ。それを宗教的に見ると、伝統的な宗教と、新しい外来の仏教との争いであり、保守的な者と進歩的な者の争いである、と。それで、聖德太子は朝廷側でいながら、仏教に帰依した。神仏習合の元祖だと言いますが……。

そういうふうに、ずっと来ていたのに、明治になってから「仏教と神道を分けてしまえ」と。国家神道ですよ。それで、神社から仏教

を追い出すでしょう。廃仏毀釈と言って、仏さんを追い出して、それで国家神道にしたんだけど、これは全くのフィクションですからね。それから、山伏が仏教か神道かも分らないんですよ。

歴史的に見ると、そういう問題が日本にはずっとある。仏教徒が一億人で、神道が一億人で、人口も一億だという議論になっちゃうんですね。そこが日本の宗教の曖昧さで、別の面から見ると、非常に融通無碍なんですね。神道というのは、これも司馬遼太郎に言わせると、教義もなければ教祖もないし、何もない、あそこは「無」だと言っているんですね。「無」ということは、何でも受け容れることだし、神道はある意味では非常に寛容であり、肯定的な性格らしいんです。

ですから、今でも世界宗教者会議というのがあって、これは日本が主催しているんですよ。あれは、立正佼成会の庭野日敬さんという人が始めて、世界中のあらゆる宗教の代表が集まるんですね。比叡山でやったこともありますが、どうも神道というのは現状肯定派であり、寛容であり、融通無碍だと言われるんですね。現に世界宗教者会議というのは、日本が中心になってやっているんですから……。

そういう中で宗教行政をやるんだから、うっかりしたことはできないんです（笑）。

伊藤 これが行政の対象になるのかどうか、非常に難しい問題ですね。**天城** ええ。だから、「淫祀邪教」というよりも、免税がありますから、これが行き過ぎないようにするとか、そういうことをやるくらいですね。あと、認証——届け出を確認したりとかね。そのうちオウムみたいなのが出てくると、「あんな宗教があるのか」という批判が出てくるんですね。ですから、宗教行政と言うけれども、大体は啓蒙・啓発をやっているんです。宗教法人法の内容とか、神社の財産の扱いを

どうしたほうがいいとか、このところは免税にならないよとか、そういうことを指導しているんです。

だから、曖昧なんですよ。さっき言ったように、「坊」なんか、すぐ宿屋になってしまつて、境目が付かない。最近、パーキング・プレイスも議論がある。あれは、神社の境内なら免税だし、料金を取っていれば商売だろう、と。そういった議論がたくさんあるんですね。

伊藤 結局、金絡みの話になるんですね。

天城 そうですよ。金とか財産とかの問題が、一番多いんです。だから戦前は、たくさんさんの国有地が神社仏閣の境内に認められていたんですね。私の郷里の寺なんか、山林と田畑をたくさん持っていたんです。ところが戦後、農地解放で田畑が全部なくなつてしまつたんです。それで、森林は、あのとき入つていなかったので、森林だけは大きいものを持つているんですね。ところが、森林の管理は寺ではできなくて、今では荒れ放題になっているんです。それで広い寺で、山門の中に田畑があったものですから、今ではそこに普通の人がたくさん住んでいましてね（笑）。

そういう歴史的なものをみんな持つていますから、普通に、ただ宗教行政などと言つてみただけでは、何も分からない。極端なことを言う、日本のいろいろな行事は、みんな神事と関係がありますからね。特に、日本は農耕民族ですから、それに纏わるものがたくさんあるでしょう。それについて厳格に言っていたら、政教分離で、全部駄目になつてしまいますね。

伊藤 政教分離と言つても、例えばアメリカの大統領は、宣誓式のときにバイブルに手を置いてやるわけでしょう。

天城 戦後、宗教教育の問題を、アメリカ側が言つたでしょう。アメ

リカは、キリスト教そのものは禁止していません。宗派を禁止しているんですよ。だから、特定の宗派に偏つた教育はしてはいけないと言ふんですね。これは、長老派だとかメソジストだとか、そういう教育はしてはいけない、と。しかし、バイブルを読むことは禁止していません。

ところが、日本では八百万の神々が併存していて、神様も仏様もいるでしょう。アニミズムですから、山を見ても神様だし、石を見ても神様だし、そういう中で「政教分離」と一言で言つても、国民の物の考え方の基礎まで、そういう形にはちよつとできないんですね。それが権力と結び付いたり、特定の勢力になつたり、あるいは財政上の特権だけをエンジョイしたりしないように、行政は指導しているだけなんです。今、日本の文化と伝統なんて、森（喜朗）さんは始終言っています。今、日本が、突き詰めていくと国語の問題もそうだし、宗教もそうだし、みんなそこに行くんですよ。

伊藤 創価学会みたいに、排他的な宗教というのはあまりないですね。天城 ええ。だから、世界宗教者会議には、あらゆる宗教が参加するんですが、創価学会だけは入っていないんです。あそこから言わせると、全部邪教ですからね。だから、一番近い日蓮宗とも争つていますでしょう。法華経というのは、そういうところがあるんです。日蓮上人の激しい「立正安国論」から始まっていますからね。だから、何でもなしは何でもなしだけれども、いざとなつたときは、こういう問題が日本の文化の内にはあるということを考えておかねければならない。

それで、私は三年ちよつとくらいしか調査局長をやらなかったけれども、その後も国語とか宗教という問題は、日本の文化や教育の基本

に深い関係があると思って、勉強は続けています。また、文明と文化についても国際的視点から考えているのですが、その場合、言語や宗教は重要なキーワードですね。

調査局の変遷——文部省から文部科学省へ

伊藤 あと、調査局には何がありましたか。

村上 企画課ですね。

天城 企画課は「中教審」の担当なんですよ。

伊藤 「中教審」の事務局みたいなものですか。

天城 それと、国際文化課があるんですよ。

村上 そうすると、企画課は文部省内の政策的な企画を立てるとか、そういうのでは全然ないわけですね。

天城 「中教審」担当なんですよ。

村上 そうすると、その後、調査・統計・企画課というふうに官房の中に入って、今は大臣官房ですよ。つまり、調査局がなくなった段階で、調査課と統計課と企画課は全部、官房に行ってしまったわけですが、その調査・統計・企画課というときの企画課は、相変わらず中央教育審議会の担当なんですか。

天城 官房に政策課というのができて、政策課でやっていたんです。その政策課と調査・統計課が今度、文部科学省の生涯学習政策局というところに移ったんです。「中教審」は、政策課が担当です。それで、調査・統計は従来のままですが、省内の政策企画は官房に残っている

んです。ちょっと、ややこしいんですよ。僕らも、あれをどういうふうに分けるのかと思うんですが、結局、そういうふうに分かれまてね。だから、「教育白書」なんかも調査課の仕事ですから、今は生涯学習政策局に行ったんです。

伊藤 ちよつと不思議な感じがしますね。

天城 ええ。ああいうふうに形で整えると、どこかで、その当時はおかしなところが出てくるし、ギクシクするんですが、そういうふうになっちゃいました。

それで、さっき申し上げたように、調査・統計は官房に戻って、また今度の生涯学習政策局に「政策」という言葉が付いたので、そっちに行ったんです。それで、生涯学習というだけでは、何のことだか分からない……。

伊藤 それは、「生涯学習」と「政策」の間で離れているわけですか。

「生涯学習政策」ではなくて、「生涯学習」と「政策」なんですか。

天城 いや、どこで切っているかは知りませんよ。間に、ポツ印も入っていませんよ。生涯学習政策局ですね。国語・宗務というのは文化庁に行っちゃったし、企画課はいま話したように動いているし、国際文化課はだんだん大きくなって、国際学術局に吸収されました。しかし、今度は国際学術局がなくなったものだから、官房に国際統括官というポストができたんです。これがよく分からないんだけど、官房長の下にあるのではなくて、局長扱いなんです。それが、ユネスコなんかを担当するんですね。ところが、官房長の下に国際課というのがあるんです。だから、今度の国際統括官というのは、手足は何もないんです。何かそういう人を一人置いて、ユネスコ国内委員会の事務総長をやり、ユネスコ総会を担当する。どうしても一人、そうい

うレベルの人が必要と考えられたようです。今までは局長がやっていましたから、そういうのを置いたんだけど、また複雑になっけていますよ。

伊藤 統括官というのは、局長クラスなんですか。

天城 今度の文部科学省の国際統括官は、局長クラスです。他の省のことは分からないけれども……。

小池 ただ、文部省の場合、審議官でも局長クラスの審議官と、次官と局長の間くらいの審議官と、その二つがあったような気がしたんですが……。

天城 審議官に二種類あるから、困るんですよ。完全に次官と同レベルの審議官というのは、文部省にはなかったんですね。これは、外務省と大蔵省と通産かな。というのは、国際関係が多くて、次官一人ではやり切れない、大臣一人でもやり切れない。外務審議官というのは一年中、外回りをしているんです。だから、次官と同じなんです。

それで、通産も国際貿易の問題があるし、大蔵省も財務関係があるので、そこにいる審議官というのは、みんな次官ですね。それから、文部科学省にいるのは、局の次長です。

小池 審議官ですね。

天城 官房にまとめて、官房審議官という名前にしてあるわけですが、実際は初等中等局担当、高等教育局担当というふうに、局別に張り付けるんですね。

伊藤 職員録を見ると、官房のところにくっついているんですが……。

天城 官房にくっついていますけど、何も官房でやっていたんじゃないんです。実際は、各局に張り付けるんです。今度、科学技術庁と一緒にになったら統括官が出て来ましたが、何をやるのかは実績を見ないと、

当分、分からないですね。

小池 あと、統括政務次官とかありましたね。

天城 いや、それもなくなつて、副大臣になりましたからね。あと、政務官もあるでしょう。これも何だかよく分からない。

伊藤 調査局長のあとは、何になるのかな。

村上 管理局長ですね。

伊藤 それで、今日も大体終わりの時間なんですけど、今回は国際的な問題のほうに行きますか？

天城 「中教審」も、あとでまとめてお話ししたほうがいいんじゃないかと思っているんですね。国際的な問題については、先ほどちょっとお見せしましたが、これ（天城勲元文部省顧問の日本ユネスコ国内委員会委員歴等について）を、今度コピーして来ます。

伊藤 私のほうで、いまコピーしましょう。

天城 それで、まとめてお話ししたほうが話しやすいんじゃないかと思うんですよ。

伊藤 そうすると、今回は国際的なことから話していただけますか。

天城 国際なら国際でもいいですよ。

村上 国際だったら、次官時代までまとめてもらつて……。

天城 次官じゃないんですよ。辞めてからのほうが、また大変なんです。

小池 「中教審」のお話を聞くにしても、企画課で「三八答申」があるし、そのあと「四六答申」という大きな山もありますね。

天城 「三八」と「四六」が中心ですね。それでやっていくと、「臨教審」まで入って、教育改革に入ってしまうんです。

伊藤 どういう聞き方にしたらいいでしょう。

天城　そして、大学局の話になってくると、今度はどこを話したらいいかわからない。僕も、あとでまた考えますが、二つくらいの点をお話ししようかと思っています。それから、次官のときに何があったかと言うと、大きな事件というのは、大学紛争なんですよ。ですから、これも大学紛争について、まとめてお話ししたほうがいいのかどうか……。

伊藤　そうですね。それで、試しに次回は、国際的な問題を一度ずつとお話ししていただけますか。

天城　残るかも知れませんね。

伊藤　それで次回は、こちらからは質問要項を作らずに、「天城勲元文部省顧問の日本ユネスコ国内委員会委員歴等について」を、私どもは見させておいていただいて、先生がお話しくださるということでしょうか。

天城　はい。これでも抜けているのが、まだあるんですよ。ユネスコだけでも、ナイロビに行ったり、ベオグラードに行ったり、ソフィアとかもあるでしょう。それから、アルジェリア、マニラ、バンコク、ジャカルタ……。あるいは、IIEP（国際教育計画研究所）なんて、みんな知らないかも知れませんが、このためにバりに何度も行きましたね。

伊藤　セネガルのダカールとかもありますよ。

天城　「二十一世紀教育国際委員会」ですね。あと日米関係があるんですが、ここには入っていないんですよ。「カルコン」(CULCON)と言うんですね。

小池　「日米文化会議」ですね。

天城　はい。「日米教育文化会議」というのがああるんです。

小池　先生のお写真が「森戸文庫」の中にありますよ(笑)。

村上　次回は盛り沢山みたいですわね。

天城　僕も、どうなるかわからないですよ(笑)。

伊藤　二回くらいで話してくださいよ。二回で終わるかどうかわかりませんが、二十回でも三十回でもやらせていただきますから……。

天城　そう言われても困りますね。それに、でたらめなことも言えませから、調べなければいけないことも出てくるんですね。

伊藤　あまり調べないでくださいよ。

天城　そうなんですよ。調べても切りがないしね。

伊藤　「そもそも論」から始まると、大変ですから……。

天城　そうですね。

伊藤　何か、大変なご講義を承っているような感じですね(笑)。私どもは大変勉強になります。

天城　こんなことを言っていて、役に立つんですか。

伊藤　いやいや、大変役に立っております。これが三十回くらい続けばね(笑)。

所澤　文部行政の教科書が一冊できるかも知れませんか(笑)。

天城　文部省の『学制百年史』というのがあるんですが、『百年史』というのは、戦前は海後(宗臣)さんが中心になってやって、戦後は僕がやったんです。それで、あの一冊を作ったんですよ。それで今度は『百二十年史』を作るときに、やる人がいないからというので、また僕にやってくれ、と。それで、『百年史』に二十年を加えて『百二十年史』を作ったんですが、これはどうしても勉強しなきゃならないですね。

伊藤　実際に、ご執筆もされたわけですか。

天城 いや、みんな動員してやるんですが、全部原稿は通して見ますし、全体の構成も考えなきゃいけない。最後に、「結語」というのを、私が書いた。

伊藤 やはり執筆されたわけですね。

村上 『百年史』も『百二十年史』も、いつもお世話になっております。

天城 『百年史』の年表なんか、作るのが大変なんですよ。あれも、あとで考えると、抜けているのがあるんですね。

伊藤 まあ、何でもそうですよね。完璧ということは、絶対ないですから……。

天城 そうですよ。

村上 非常に頼りになっています（笑）。

天城 僕なんか忘れちゃって、時々、あの年表を見るんですよ。「あれは何年頃だったかな」なんて思って、今でも、あれは手許にあるんです。それから、「教育白書」も揃えておくと、非常にいいですよ。

村上 政策研究院には、『百年史』は年表のほうしか入っていないんですよ。

天城 あれは、本文と資料編の二冊揃えて、箱に入っているんですよ。

小池 広島大学は全部揃っていますよ。当たり前ですが……（笑）。

伊藤 歴史のある大学と、まだスタートしたばかりの大学は違うんですよ（笑）。

天城 あとは、『日本近代教育百年史』かな。あれは、教育研究所が中心になって、何年もかかって作ったんですね。全六巻かな。あれは残念ながら寄せ集めで、非常にいいところもあるけれども、杜撰なところもあるんですよ。

伊藤 先生が『百年史』や『百二十年史』を作られたときは、どういう位置におられたんですか。

天城 いや、ポストとは関係なしに……。

小池 文部省OBということですか。

天城 『百年史』は、私が辞めてからですからね。

伊藤 編集委員長とか、そういう形ですか。

天城 そこに書いてあるでしょう。編集委員長ですね。誰が参加したか、みんな書いてありますよ。何日も泊り込みをしましたね。

伊藤 これは、先行き大変ですね。

小池 広島大学でも「文教白書」が揃っていないんですよ。

伊藤 広島大学にないのなら、私のところがないのは当たり前かな（笑）。

村上 『我が国の文教施策』は、一通り入っていますよ、やっぱり新しいだけあって……。

天城 あれは、ちよつと厚いやつでしょう。

村上 ……というか、背が高いんですね。

天城 最近の二号が大きいんですよ。その前は、もっと小さいんですよ。でかいやつにするものだから、本棚に入らなくて、困ってしまうんですね。

小池 急に大きくなって、A4版になっているんですね。

天城 みんなA4版になっていますね。

村上 だけど、印刷は綺麗になっていますよ。

伊藤 あれには、みんな困っているんですね。

天城 困りますね。何もかもA4版になって、紙が無駄ですよ。

伊藤 本当に困りますよ。今までのファイルが全部駄目で、途中から

背が高くなって、立てられなくて、横になっていますからね。

小池 それから、大学史なんかも、今はみんなA4版ですね。

所澤 棚数を減らすことになるから、図書館の書架に入る本が、また減っているんですね。

伊藤 『東大百年史』を菊判で作ったよ(笑)。

天城 大学の自己評価、自己点検なんていうのを作っているでしょう。あれも、電話帳みたいなものを作っていますからね。シラバスもそうだし、誰もあんなものはないですね。

伊藤 「やっています」という、あれはアリバイ作りで……。

小池 うちは回ってくる量が物凄いので、時期を見て捨てちゃうんですけどね。

伊藤 文部省には、全部、来るんでしょう。それで、あんなのは置いておけないと言って、捨ててしまおうとかと言っていました……。しかし、あれはもらつてもしょうがないな、と(笑)。

所澤 昔の『大学一覽』とか、まあ、今でも作っている大学があります。が、あちらのほうがずっと役に立ちますよ。ところが、今は作っていない大学が多くて、例えば東大なんかは、最近は何年に、どういう人が勤めていたか、調べるのが結構大変なんですよ。

伊藤 ホームページを見てくれ、と。

所澤 だけど、過去に遡りませんからね。

天城 みんな、ああいう形態になっちゃって、個人の家では置き切れませんね。僕も、ずいぶん困っちゃって、大学に渡したのもありますよ。文部省の図書館にも、ずいぶん置いて来たんです。OEC Dとかユネスコの資料なんているのも、全部、文部省に置いて来ました。「ダブっていたら捨ててくれ」と、渡して来たんですよ。

伊藤 文部省で捨てられているかも知れない(笑)。お困りでしたら、政策研究院に寄贈してください。私、いま大学の図書館長をしておりますから、本でも資料でも何でも……。

天城 貴重なものが、ずいぶんあるんですよ。例えば、これは二、三日前に別のことで見ていたんですが、朝日新聞に八木淳さんという人がいて、『文部大臣列伝』なんていうのを書いてるんです。「人物で綴る戦後教育の軌跡」と言うんですよ。これは、永井道雄大臣(昭和四十九年十二月〜五十二年十二月)くらいまで書いてあるんですね。八木さんというのは、朝日の論説を最後に辞めた方ですが、ずっと教育関係をやっていたんです。新聞記者だから、かなり穿った見方をしてるんですね。

伊藤 大臣よりも、歴代次官で綴る文部省のほうが面白いと思いますね。

天城 この記事は、最初教育審議会のところで、天野貞祐なんかも全部出ていますし、安倍能成だとかもね。

伊藤 今日は、どうもありがとうございました。次回を楽しみにしております。

天城 次回は、少しまとめておかないと、駄目ですね。右に行ったり左に行ったり、アメリカに行ったり、アフリカに行ったりでは、ね(笑)。

伊藤 よろしく願います。

〈以上〉

天 城 勲
オーラルヒストリー
第8回

[2001 年 4 月 4 日 13:45～16:45]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

小池聖一(広島大学助教授)

村上浩昭(政策研究大学院大学リサーチ・アシスタント)

(於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター)

「国際」事始め——国際公教育会議に出席

伊藤 今回は質問要項を作らずに、先生のイニシアチブで国際的なお仕事についてお話しいただくということでした。途中で、質問をさせていただくかも知れませんが、よろしく願います。

天城 困りましたね。前回、お渡しした私の「履歴書」をご覧になっても分かるように、あれは主にユネスコとOECDの仕事が中心なんですね。しかし、私の場合、国際的な仕事は文部省退官後が多いんです。ですから、在官中のことは、ある意味では「前哨戦」になるので、この前、伊藤先生がおっしゃったように、私の国際関係の「事始め」といったような意味でお話ししようと思います。

調査局には国際文化という課があつて、ここが国際関係を担当していたんです。しかし、この時分は、いろいろなことがまさに「事始め」であり、非常に散発的なんですけれども、後の伏線がこのときにみんなありました。そう考えると、官房長のときにも、その仕事の一部が入っているんですね。それとつながってしまっているものですから、ちよつと、その辺からお話しいたします。

まず、国際機関としては、ユネスコとかOECDとか、あるいはユネスコの一つの研究機関としてIIEP（国際教育計画研究所）というのがあるんですね。こういうところと、私はみんな関係していたんです。それ以外に、留学生問題と日米関係——通称、CULCON（カルコン）といったものがあるんです。こういうものが、みんなこの

時分に「事始め」になって出てくるんです。

伊藤 調査局長におなりになる前から、いろいろあるんですね。

天城 そうです。私は官房長を二年やったわけですが、その時代からもう始まっていたというか、その後の問題の仕事が既に始まっているんです。

伊藤 「履歴書」を見ていると、ユネスコなんかはずいぶん早くて、昭和二十八年にユネスコの国内委員会の調査委員になっておられますね。

天城 そういうのもありますが、ユネスコの最初の仕事としては、第一回の、アジア地域のユネスコ加盟国の「文部大臣会議」というのがあるんです。これは五年に一度ずつ開催されていて、その第一回が昭和三十七年に開かれました。ところが、私は官房長時代に、あとで尾を引く問題に幾つかぶつかっているんで、最初にそのことを申し上げたいと思います。

私は昭和三十五年一月から官房長ですが、三十五年と三十六年にIBE（International Bureau of Education）——国際教育局のジュネーブでの総会に出席しているんです。

小池 昭和三十五年六月二十八日の「国際公教育会議」ですか。

天城 これには一部が載っているでしょう。IBEで「国際公教育会議」というのをやるんですが、それに出て、その翌年も出ていますから、二年続けて出ているんです。このIBEという機関は、その後、ユネスコの傘下に入りますが、それまでは独立の機関でした。実は「国際教育局」という名称で戦前からあって、日本もその時分から加盟しておりました。

それで、IBEはジュネーブにあつて、そこでパブリック・エデュ

ケーションのワールド・コンファレンスをやるんです。毎年テーマが決まっています、加盟国が全部出て来て、ディスカッションすると同時に、各国の一年間の教育報告を出すことになっているんです。ですから、各国で一年間何をやってきたかが全部出てくるので、そういう意味では貴重な資料が得られるところなんです。

それから、もう一つIBEには、正式の名称は忘れてしまいました。展示室があるんです。そこに各国のコーナーがあつて——全部の国がコーナーを持っているわけではないんですが、お金を出すと展示室が利用できるのです、日本も展示室を一つ持って、日本教育に関する展示をしていました。大体、印刷物が多くて、私が行ったときには大変チャチな展示しかなかったんです。その後、各国独自にお金を出してやるものですから、内容が充実したんです。

伊藤 三十六年も出られたんですか。

天城 二年続けて行きました。

伊藤 この「履歴書」には書いていませんね。

天城 抜けているんでしょうね。

伊藤 この会議には、日本政府代表として、天城先生がお一人で行かれたわけですか。

天城 県の教育長で「行きたい」という人を二人くらい、一緒に連れて行きました。

伊藤 それで、先生は政府代表なんですね。

天城 そうですね。それで、各国が年次報告を出して、それを基に順番に質問を受けて、それに答えるという形でやるんです。

伊藤 スピーチはしないんですか。

天城 ええ。あらかじめ年次報告を出しておいて、それに基づいて質

問を受けるというやり方なんです。この「国際公教育会議」については、後年、私は別の立場で出席したんですが、会議の持ち方は毎年いろいろ変えていましたね。テーマごとにパネルを作つて、パネルディスカッションをやるとか……。私も、「パネラーになってくれ」と言われて、やったこともありました。

伊藤 この会議は、用語は何ですか。

天城 英語とフランス語ですね。

年次報告の項目は決まっていますが、初めてのときに、私は奇妙な質問を受けて、何を訊かれているのかどうしても分からなかったんです。それで、「質問の意味がよく分からない」と言ったら、ファインクという所長から、「時間がないから、あとで質問した人と、よく話し合つてくれ」と言われましてね。その質問というのは、「報告書の巻末の統計では子供の数が増えているのに、学校の数が減っているのはおかしい」ということなんです。その意味が、初めはよく分からなかったんです。よくよく考えてみたら、それは僻地学校の一部が統合されているからであつて、子供の数は毎年増えていきますが、学校の数は減るわけです。そんなつまらないところまで訊くんですよ（笑）。それで、「これは、学校のコンソリデーションの結果だ」と話したんですかね。

そうかと思うと、アフリカのどこかの代表が、「日本の明治維新を非常に高く評価していたのに、日本は戦後、アメリカの占領下になってしまつて、すっかりアメリカナイズしたんじゃないか」と（笑）。それで、「明治維新以来の、日本の教育発展の姿というのは、今はないんじゃないか」とか、そんな質問もあるんです。ですから、細かい数字の質問があるかと思えば、いま言ったように非常におおらかなと言えば、

おおらかな質問だし、広いと言えば広い質問もあるんですね。

そういった会議に二度出席したわけですが、前に申し上げたように私は戦後、昭和二十五年に初めてアメリカへ行きまして、それ以来ずっと財務課長や会計課長などをやって、「外」の仕事がなかったの、「外」に出たのは、ちょうど十年ぶりなんです。それに、ヨーロッパに行ったのは、これが初めてなんです。それで、私にとってはヨーロッパとの関係の「事始め」でもあるし、十年ぶりでもあるということとで、この機会にヨーロッパを二、三カ国回りました。いろんな文献の上で知り合いになっていた人たちもいたものだから、そんな人たちのところを訪ねたりして、ドイツ、イギリスを中心に回ったんです。

伊藤 そのときには、学校もご覧になったわけですか。

天城 学校へは行く暇がありませんでした。回ったのは、主に研究所で、そういう人たちがみんな研究所にいたものだからね。

伊藤 「履歴書」を見ますと、一カ月くらいですか。

天城 いや、官房長をやっていますと、そんなに長くは行かれませんか。会議が十日くらいで、それが終わってから、せいぜい一週間くらいです。あの時分、管理職というのは、なかなか長い出張はできなくて、長くても二週間くらいですね。目的が終わると、すぐ帰って来るというのが原則なものですから、公用旅券で旅をするというのも、見方によると非常に困りますよ（笑）。その後も海外出張がありますが、みんな公用旅券ですから……。

伊藤 行き先が既定されているということですね。

天城 行き先を複数にしておくこともできるんですが、管理職の場合は、何の目的で、どこに行くのかを一々出さないといけないんです。

伊藤 当時は、ずいぶん時間がかかったんじゃないですか。

天城 大変でした。それで、最初に行ったときは南回りでしたね。

伊藤 あちこちで給油したりするわけですね。

天城 そうですね。ジュネーブまで一気に入れなくて、途中で給油し、ローマで乗り換えてジュネーブに行っただんです。「コメット」というイギリスの飛行機がありましたが、あれに乗りました。その時分は北極回りもなくて、どうしても南回りですよ。ですから、香港かシンガポールを通って、最初のヨーロッパの都市がローマで、ジュネーブまでの直行便がないから、また乗り換えなんです。

ローマで乗り換えのために降りて、次の飛行機に乗るために待合室で待っていたら、「何とかの金を払え」と言うんです。それで、よく聞いたら、「あなたはローマの空港を出て、ローマに一度滞在した。これは出国だから、出国税を払え」と言うんですね。だけど、私は待合室で待っていただけで、それも「こっちで待っている」と言うから、待合室に入ってきたわけでしょう（笑）。それなのに、「出国税を払え」と言うんですよ。「おかしいじゃないか。私は乗り換えだけで、こっちで待っていると言うから、待っていたんだ」と言い返したわけです。そしたら、もう乗り換えのための飛行機の出発時間が迫っていたので、一緒にいた教育長が、「時間がないから、幾らか知らないけれども、払って、さっさと行きましょう」と言うんですね。しかし、僕は「払うのはいいけれども、怪しからんよ」と文句を言って、その係員と喧嘩をしていたんです。

そしたら、スチュワーデスが走って来て、「もう飛行機が出るから、早く乗りなさい」と言うんですね。それで、「乗っちゃいけないと言われているから、行かれないんだ」と言ったら、「そんなこと言ったって、間に合わないからいらっしやい、いらっしやい」と言われて、スチュ

ワ―デスに引つ張られるようにして出て行っただけです（笑）。

小池 お金は払わなかったんですか？

天城 払わないですよ。払う必要もない。

小池 場合によっては、空港使用税というのがあるんですよ。

天城 何か知らないけど、そんなことがありましてね。こっちは分からないですよ。「出国税だ」とかと盛んに言うし、トランジット・パッセージャーに「こっちの待合室」と言われて、そこに行っただけからね（笑）。

小池 普通は取らないですけどね（笑）。

天城 だから、最初にヨーロッパに行つて、空港で喧嘩してしまったんです。あとで考えると、つまらない話ですが……。

伊藤 昭和三十五年ですと、ヨーロッパと日本とを比べると、ヨーロッパのほうが豊かだなという感じはしましたか。

天城 ジュネーブで会議をやつて、それからあとドイツに行ったり、イギリスに行ったりしましたが、僕が行ったところでは、特に日本が貧困だという感じは持ちませんでしたね。三十五年ですから、日本も戦後の成長期に入っていましたから、別に引け目も感じませんでしたね。

伊藤 十年間で、状況はだいぶ変わっていたわけですね（笑）。

インドネシアの賠償留学生

天城 次に、留学生関係の仕事があるんです。この留学生問題という

のは、その後ずっと大きな問題になっていますけどね。

伊藤 やはり官房長の時代ですか。

天城 いや、またそれが両方にかかってしまうんですよ。その前に、これについては、皆さんあまりご存知ないと思うんだけど、「南方特別留学生招致」というのが、戦時中あったんですね。これが形を変えて、戦後、国費留学生が始まっているんです。

伊藤 やはり関連があるわけですか。

天城 僕は、あると思います。南方特別留学生というのは、ある意味では、如何にも占領下の大東亜共栄圏構想ではあるんです。しかし、二年間で二百名ちよつとの留学生が来たんですが、各国とも非常に優秀な人間を出してくれて、帰ってから、みんなそれぞれ活躍しているんですね。大臣もいるし、大使もいるし、学長になったり教授になったりしています。これについては、特に良家の子弟を推薦する方針でやっただけでしょう。一部、海軍の軍政官のいた国は、海軍が担当したんですが、中心はやはり陸軍でした。その間に、ビルマとフィリピンが独立したものですから、大東亜共栄圏という思想が日本にはあるんだけれども、受け手のほうも、「欧米列強の支配から独立する機会になる。新しい国を創るために……」ということで、積極的だったんです。そういう関係でしたから、選考は向こうに任せて、こちらは推薦を受けて、なるだけ良家の子弟ということをやったものですから、優秀な人も出て来たんですね。

まず、向こうで予備教育を、短い人は半月くらい、長い人は一カ月くらい受けてから、船でみんな日本に来ていました。「国際学友会」という組織が、南方特別留学生を引き受けていたんです。そこには、非常に熱心な方がたくさんいまして、親身になって学生たちの面倒を見

ていたんですね。その配慮が非常に良くて、例えば暖かいところから来るので、なるたけ暖かいところで勉強してもらおうということで、配置も西日本が多かったんです。九州の宮崎高等農林だとか、せいぜい関西まで、ですね。特別な人は北にも行きましたが、その人たちを受け入れるために、みんな特別クラスを作ったんです。それは二年間で終わってしまったわけですが、みなさん大変熱心に勉強して、非常に優秀だったんですね。この南方特別留学生については、あまりまとまった記録がないんです。

伊藤 一冊、本がありますね。

天城 江上芳郎君が書いたものですね。彼はいろいろ調べて、関係者に聞き取りに歩いて作ったんです。江上君というのは、僕もよく知っている男ですが、主な記録としてはそれしかないんですね。

小池 広大に少しあるんですよ。

天城 江上君は広島大学にいたことがあるんですよ。

小池 それで、いま大学史をやっているんですが、南方留学生の資料というのが、少しあるんです。

天城 広島高等師範や広島文理大にはかなり留学生がいて、あそこで被爆した学生もいるんですよ。

小池 江上さんは、広島文理大のご出身ではなかったですが……。

天城 そうではないと思いますが……。広島大学にいたときには、留学生課長みたいな仕事をしていたんです。その後、宮崎で大学教員をしていますけどね。その江上君の書いたものが、私の知る限り、唯一まとまったものです。

それで、留学生を選考するときに、先方から推薦させているんです。例えばフィリピンなどは、現地の教育指導にあたった軍人に「幹候」

出の将校がたくさんいるんです。江上君の本にも書いてあって、一高、東大出の陸軍中尉とか書いてあるんですよ。そういう人たちが、みな選考や現地教育に当たったりしたんですが、タイだけは独立国でしょう。タイは、大東亜省がやっているんですよ。そのほかは、陸軍と海軍で選考して来ているんですね。

それで、引き受け手は「国際学友会」ですが、戦時下ですから、食料難や空襲で、日本人と同じような苦勞をしているわけです。専門も、向こうの希望に従ってやったものですから、岐阜の高等農林とか、宮崎高等農林とかに行った学生が多かったですね。岐阜高等農林に、南方特別留学生の記録が一括してあったそうです。これを江上君が、足で歩いて探し出したらしいんです。

それから、その最後が大変なんです。戦争に負けて陸海軍がなくなってしまうと、スポンサーがなくなっちゃうでしょう。それでも日本には、まだかなり留学生がいましたから、その人たちを「学友会」の人たちが非常によく面倒を見たんです。それで、一部は残って、日本の大学に進んだ人もいます。大部分は国に帰って、その後また外国に留学した人もいます。だけど、インドネシアだけは、すぐ独立戦争に入ってしまったものですから、帰ることができずに、そういう人たちは日本に残っていたわけです。戦争がだんだん酷くなったときに、特定の地域の学校に集結したんです。例えば、人文社会系は京都大学とか。

私がその後、東南アジアに行ったときに、この時分の人にずいぶん会いました。みんな、もう偉くなっています。その後、大使館員になって日本に来た人もいますよ。それで、陸海軍がなくなつて、放り出したのをサポートしたのは、大和撫子なんですね。これは別な話に

なりますが、日本女性とずいぶん結婚しているんです。この時分の日本女性には、第二次大戦後にアメリカの兵隊と結婚した「戦争花嫁」とは違うんですね。みんな、ちゃんと教育を受けた良家の子女が多くて、本当に助けたんです。だから一部の人は、「南方留学生を敗戦後支えたのは、日本の大和撫子だ」と言うんです。

マラヤから来ていたノンチクトーという人がいて、その後、僕はマラヤに行ったときに彼に会いましたが、クアラルンプールの南の辺りの郡長になっていました。マラヤ人の郡長は、彼が最初だと言っていました。それで、僕が日本から来たというので喜んでくれて、「自分のやっている仕事を見てくれ」と言われて、彼の郡まで行きました。「今でも内原の訓練所で受けた教育が頭にあって、人が一尺掘るなら、自分はいち尺掘る。地面を深く耕すということを、自分はここでやっているんですよ」と言っていました。ノンチクトーはその後、マラヤの国會議員になったりして、日本に何遍も来ています。

伊藤 ノンチクトーと言うんですか。

天城 ノンチクトー、いやノンチックと言ったかな……。ノンチックですね。

まあ、とにかく、そういうことがだんだん分かってきました。江上君の本には、それについてはあまり書いていませんでしたが、私はその後、そういうことを知りました。

要するに、大東亜共栄圏思想だけでも、南方の国々の人材養成に貢献しようということで始めたんです。戦後始めた国費留学生というのは、二十九年からでしょう。これも、東南アジアの国々の人材養成に貢献しようということで、国費留学生を始めたんですね。

伊藤 それは、賠償と関係がありますか？

天城 これは、日本政府の資金による留学生です。それと、もう一つ、いま言われた賠償留学生の問題があるんですよ。

伊藤 それは、また別なんですね。

天城 別なんですよ。賠償留学生というのは、インドネシアに限るんですね。戦後、日本は賠償金を出しましたが、各国とも、みんな物を買ってしまったんです。ところが、インドネシアだけは人材養成にそれを充てると言うので、日本に学生を百人ずつ四年間、合計四百人を送るといった話になったんです。それからもう一つ、技術研修生というのを毎年二百人ずつ、二年間送る、と。その費用に、日本からの賠償金を充てると言うんですね。これは賠償金の使い方としては、非常に意味があるんじゃないかと、我々も評価していたんです。

ただ、賠償金の支払いに関しては、日本の業界がずいぶん絡み合っていて、「あれを売る、これ売る」と群がって来たんですね。インドネシアについても、いろんな商社が入って来て、あれこれ売ろうとしていたんです。それで、留学生を日本に送るといふ話は出ているんだけれども、期限が迫って来て、一つも中身が決まらない。どの程度の学生が来るのか、話が具体的に進んでいないんです。そこで、大使館のほうで、賠償留学生を送るといふことになっていたものですから、「まごまごしていたら、あのお金は、ほかに取られちゃうぞ」という話が出て来たんです（笑）。一度はつきり調べなければ駄目だから、日本からミッションを送ろうということで、私がミッションの担当をさせられたんです。

伊藤 それは書いてありますか？

天城 これは書いてないでしょう。それで、外務省と「学友会」の人と私とで、四人でしたかね。ミッションを組んで、インドネシアに行

ったんです。

伊藤 それは、いつのことですか。

天城 インドネシアの賠償留学生は昭和三十五年から始まったんですから、三十五年の初めだと思えます。ごく最初の頃ですよ。

伊藤 官房長になったばかりの頃ですか。

天城 そうですね。

伊藤 こんなに詳しく「履歴書」にいろいろ書いてあるのに、インドネシアに出張したということが書いていないというのは……（笑）。

天城 結構、抜けているんですよ。

それで行きまして、向こうの教育省と話をして、「どうするんだ」と言ったら、「必ず送ります」と。一年に百人ずつで、四年間送ります、と。そこで僕が、「予備教育をしないと、受けられないから、予備教育を一年やったあとに四年、専攻は希望のあるところで受けましょう」という話をしたんです。それと同時に、インドネシアの高等学校や大学の状況が日本では全然分かっていないから、その状況を少し調べたい、と。あそこは島がたくさんありますが、大体、ジャワを中心に幾つかの大学を訪ねたり、特に高等学校に行ったりして、どういったレベルかを調べたんです。

伊藤 高等学校と言うと、ハイスクールですか。

天城 ハイスクールですね。ところが、学校に行っても、いろんなことがよく分からないんです。「カリキュラムは、どんなことをやっているんだ」と訊いても要領を得ないし、散々話していたら、一週間の時間割を持って来て、「これだ」と言うんです。それでは、しょうがないんでね（笑）。まあ、そんなことで、ずっと学校を訪ねました。

それから、文部大臣と文部次官にも会いまして、あの時分はスカル

ノ体制ですから、軍と共産党の組み合わせで、文部大臣は共産党なんです。彼はレーニン平和賞をもらった人でしたが、次官はジェネラル・プロフェッサー・アンド・ドクターという肩書で、初めは「何だ？」と思ったんです。そして、陸軍の軍医なんですね。同時に、ジャカルタの大学の医学部の教授ですから、プロフェッサーでしょう。そして、軍医少将ですからジェネラルで、お医者さんだからドクターになるわけです。そういう組み合わせをやつていて、「頭」が共産党で、その次に軍を置いているんですね。その次官は、半分は学者みたいな人ですからね。そんな組み合わせになっていました。なるほど、話には聞いていたけれども、インドネシアというのは凄いところだと思いましたね（笑）。

とにかく私はミッシヨンで行って、お膳立てをして、賠償留学生が始まったんです。

伊藤 インドネシアは、初めてですよ。

天城 賠償金で教育をやつたのは、インドネシアだけです。フィリピンが「理科の機材が欲しい」と言うので、教育機材を入れたことがあるんです。あとは船舶だとか道路だとか、そんなものばかりですね。あの時分、インドネシアも船舶をかなり日本から……。まあ、新聞にも出ましたが、ボロ船を出したとか、いろいろ言われましたね。みんな賠償金を狙って、日本側も競争していたんです。だから、せっかくの留学生派遣構想も崩れてしまわないかと思って、それで行ったわけです。

伊藤 それは一週間とか二週間とか行っていたわけですか。

天城 そうですね。当時はインフレが凄いとときで、よくみんな、あれで暮らしているなと思いましたよ。近代経済のレベルでいくと、暮ら

せないんですね。それ以前で暮らしているんです。役人とか、俸給をもらっている人は、米の支給とか油の支給とか、現物給付があるでしょう。あとはバナナがなっているし、魚は釣れるし、絶対に餓死しないんですよ。それが、実態ですね。だから、表向きだけを見ると、あんなのでは暮らせないだろう、と。トランクにいっぱい金を積み込んで歩かなきゃいけないのでは、ね。でも、そういう生き方は凄いなと思いました。だから、なまじ近代経済が徹底していないから、餓死なんか起きないんですよ（笑）。それに、政治は共産党と軍部の組み合わせでしょう。大変なときだと思いましたね。

伊藤 暑くありませんでしたか。

天城 暑いですよ。こっちは日本人だから、せっかちなのかも知れないけれども、午前に話し合いをして、午後また会うことを約束しても駄目なんですよ。みんな、午後には休んでいていないんです。それで最初の日か翌日か、午後になって、どこに電話をかけても、みんな駄目だから、これは酷いなと思って、ちよっとイライラしちゃったんです。そして、みんな水を浴びて、昼寝していると云うんです。それで、その翌日に、僕も水浴びをして昼寝したら、物凄く快適なんです。やっぱり、郷に入っては郷に従えですよ（笑）。その代わり、朝早くから仕事をしているんですね。それで午後には家に帰って、水浴びして、昼寝しちゃっているんです。

ジャカルタにオランダ時代の、昔のいいホテルが残っているんですが、その後の管理が良くないから、ホテルの食堂のナプキンにしてもシートにしても、みんな洗い晒しですね。部屋にも水が置いてあって、水をかぶれるようになっていいます。部屋には蚊帳が吊ってあるし、中庭は回廊になっていて、「なるほどな」と思いました。まあ、オラン

ダ時代の遺産みたいなところに泊まりました。貴重な経験もしました。

とにかく、インドネシアは学生派遣に強い関心を持っていましたから、ちゃんと応えなきゃいけないと思って……。まず、どういう学生が来るのか、一応調べたわけですが、程度がバラバラですね。バリ島のデンパサールの高等学校に行ったときは、「これで高等学校かな」と思うくらいで、小・中学校とあまり変わらないんですね。でも、その卒業生も来ると言うし、選考は向こうに任せざるを得ないわけです。それで、予備教育をしてから大学に入学させるのですが、レベルを知るために、一応、テストをしたわけです。でも、全然駄目な者もいるんですね。一年経って、大学に配分するときにやる試験なんです、インドネシア語で試験をしたこともあるんですよ。だけど、ある学生なんかは、どうにもこうにもならない。大学に進学しても意味がないと思って、大使館の賠償担当官に、「これでは大学に行っても何もならないから、専門学校に行って職業技術を受けたほうがいいよ」と言っただけです。そして、「勘弁してください」と。「その学生はスカルの第何夫人の子供で、そんなことをしたら、私のクビが飛んでしまう」と。「必要なら、私のほうから金を出して、家庭教師でも雇うから」と言いましたね（笑）。ネポティズムですから、いろいろなところから推薦されるし、地域配分があるものですから、かなりの格差があったんです。それを一年間で予備教育をやって、それで大学に配ったんですね。

伊藤 予備教育は、どこでやったんですか。

天城 「学友会」でコースを作って、引き受けたんです。

伊藤 「学友会」というのは、戦前からそういうノウハウを持ってい

るということですね。

天城 そうです。それで、ちよつと名前は忘れましたが、非常に熱心な方で、賠償留学生を最後まで守ってくれた人がいまして、インドネシアには、その人も一緒にきました。

そんなわけで、「学友会」を中心に引き受けましたが、その後みんな——脱落した者も若干いましたが——完成していききました。学部が終わって、その後、いろんなスカラシップを得て大学院に進んだ者もいます。その後、彼らの中の何人かに、インドネシアで会いました。ジャカルタ大学の物理の教授になっていた人もいたし、ボゴールの農学部教授になった人もいました。この人は東大の農学部を卒業しまして、その後、この博士号を取りました。専門は農業機械でした。彼らは、二人とも奥さんは日本人でした。この奥さんたちも、みんな立派でした。私は向こうで会いましたが、良家の子女で、ちゃんと教育のある人たちですね。

とにかく、国に帰って、あちこちで大学の教授とか大臣とか次官をやったりしていました。特に、インドネシアというのは、大学の教授になりますと、そのまま政府の高官を兼ねてしまうんです。人材が不足しているというのか、あるいは大学の教員の給与が低いから内職をやるのか、みんな二つか三つやっているんですよ。それで、いろんな人と知り合いになりましたが、偶然なのか、僕の知っている人は、みんな奥さんが日本人でしたね。

伊藤 これは、そのあとと続くわけではないんですね。

天城 インドネシアの留学生は、約束したお金——日本の賠償金ですが、これが五年で終わって、四百人にやったらお仕舞いということでした。それでも、学年進行しますから、十年続いて、それで終わりました。

た。

それで、日本ではこれを賠償留学生と言いますが、インドネシアから言えば、「インドネシア政府派遣留学生」なんですね。そのために、東京にインドネシア会館を造ったんですよ。あちこちの大学に行っていたけれども、東京の代々木上原に会館を造った。その後どうなったのかは分かりませんが、そのための担当の指導官みたいな人が大使館に来ていました。彼は、南方派遣留学生で日本に来て、京都大学を卒業したアマングさんという人ですが、その後も日本にいて、インドネシアに行つたときには、向こうで会いました。

伊藤 文部省では、どこが管轄したんですか。

天城 調査局ですよ（笑）。留学生のことですからね。

伊藤 それは、国際的な仕事ということですね……。

天城 調査局の国際文化課ですね。その後、留学生問題については、何年か忘れましたが、日本国際教育協会というのをつくりまして、これは財団法人ですが、文部省が全部お金を出して、駒場に寮を造ったんです。

伊藤 駒場の、あそこが寮ですか。

天城 ええ、井の頭線のそばにあるでしょう。国費留学生を全部、あそこで引き受けたんです。いま関西にも宿舍を持っていますし、祖師谷に夫婦寮、家族寮を持っていますし、大きな機関になっていますよ。今、お台場に国際大学村をつくっているでしょう。あれも国際教育協会が所管します。今年の夏頃に開館する予定です。協会は留学生の世話団体なので、単に宿舍だけではないんですよ。だから、その後、留学生はだんだん充実してきましたし、私費留学生もいま五、六万人近くいるでしょう。それで、各大学もいろいろ対応していますけどね。

私費留学生に対する奨学金も出していますし、医療費も全部あそこで出しています。いま国際教育協会には、文部省から留学生関係の補助金が、百億円くらい出ているんじゃないですか。私がやったのは、そんなことの「事始め」ですよ。しかし、その後、偶然な経緯で、いま私は協会の副会長をやっています。

小池 沖縄は、このときアメリカの占領下ですが、執政府から日本国内に学生を派遣しましたよね。それについては、調査局が管轄されたんですか。

天城 これも、特別な経緯があります。沖縄は行政的には日本の権限が及んでいないでしょう。しかし、日本人であることは間違いないし、日本の教育をやっていますからね。でも、沖縄には高等教育機関がないんですよ。戦前は、沖縄師範というのが最高学府だったんです。それで、高等教育に進学する人たちを日本に受け入れようということ、留学生扱いもおかしいから、沖縄派遣……、何という名前かは忘れましたが、別扱いにしたんです。

特に、積極的に取り組んだのは早稲田大学なんです。当時、早稲田の総長は大浜信泉さんで、大浜さんは沖縄出身なんです。八重山諸島の中に大浜村というのがあって、そこに大浜一族がいるんです。大浜さんは、本当に沖縄のことに、いろいろ配慮されました。まだ政権が日本に返ってくる前で、なかなか沖縄に日本人も行けなかったんですが、大浜さんだけが特別に出入りしていたんです。米軍機に乗って行っていたんですね。それで、早稲田に大浜さんが沖縄の学生を引き受けていたのです。

伊藤 それで、沖縄には早稲田の出身の人が多くんですね。

天城 大浜さんの縁ですよ。本当に、よく大浜さんは沖縄の学生の面

倒を見ていました。他の大学にも来ましたが、僕の知っている限りでは、中心は早稲田だったと思いますね。それで、とにかく早稲田では別枠で入れていたんですよ。

余談になりますが、沖縄が日本に復帰して——あれは四十六年ですが、佐藤栄作総理のとき、沖縄の教育制度を日本の制度に切り換えることになりました。それで当時、総務長官が鹿児島出身の代議士の山中貞則さんで、沖縄担当だったんですね。ですから、佐藤さんが「沖縄のことは山中に任せるよ」と言うので、山中さんのところで、みんなプロジェクトを組んでやりました。それで教育関係は、特に大浜さんがブレーンになって、切り換えをしたんです。

その後、琉大の移転問題がありまして、日本の大学に直し、場所を変えるについて、日本の意見を聞くということで、琉大に諮問委員会をつくったんです。その委員長に大浜さんがなって、それで東京からもう一人と言うので、僕がなったんです。あとは沖縄から二人出て来て、その四人でいろんな議論をして、琉大の移転をやったんです。その中に古波蔵さんという人がいまして、この人は沖縄の教育関係をずっとやっていて、沖縄師範出身で広島文理大の卒業生ですが、教育行政の責任者でした。これは偶然ですが、僕が二十五年にアメリカに行ったときに古波蔵さんも来ていて、アメリカで知り合いになったんです。それ以来のお付き合いで、琉大移転のときに、私は大浜さんと一緒に琉大に行って、向こうは古波蔵さんともう一人、銀行の総裁だったかな、その四人でやりました。山中さんは台湾の師範の卒業生で、鹿児島で代議士になられた方ですね。大浜さんは、いろいろな意味で、沖縄との橋渡しをした人です。これも、まさに「事始め」で、私は偶然ですが、付き合ったんですね。

南方特別留学生には、私は直接関係はありませんが、その延長みたいな形で国費留学生が始まりました。その後、いつ行ったときは忘れましたが、賠償金で日本に来た人で、繊維関係の会社の社長をしている人に会ったんです。彼は、信州の上田蚕糸で勉強し、後に京都工芸繊維大に移ったとか言っていました。日本で繊維を勉強して、インドネシアに帰ってから、繊維会社をつくったそうです。

これらの留学生たちが、帰ってから同窓会をつくっているんですよ。一番よくやっているのは、インドネシアじゃないですか。それでも、最近の留学生と、この古い人たちは年齢が合わないし、日本の体験が違うので、なかなか全体一緒にはできないと嘆いていました。その後、何遍行っても、この同窓会の幹部が必ず顔を出してくれました。

そんなことで、私もインドネシアとは縁が深くなりました。その後、日本学術振興会の理事長（昭和五十一年四月〜五十六年九月）のときにも、学術関係でインドネシアとはまた縁ができて、ずいぶん接触が深くなりました。私は、タイとインドネシアに一番縁が深かったかな。

CULCON、「文部大臣会議」

伊藤 まだ、今までのお話ではタイは出てこないですね。これから先のお話だと思いますが……。

天城 「事始め」で、そのほかにもいろんなことが始まってくるんです。三十六年、私が官房長のときですが、「池田・ケネディ会談」とい

うのがあるんです。池田首相とケネディ大統領との会談で、日米共同事業をやるということ、共同声明が出ているんです。貿易経済、科学技術、教育文化、この三つの領域の合同委員会をつくって、交流をやるという話になったんです。

それで、貿易経済というのは、その後、変わってしまうんですが、科学技術と教育文化は、いわゆるCULCONという名前で続いているんです。CULCONの第一回会議を、東京で開きました。メンバーは、みんな民間人でした。このときの日本代表は、確か森戸先生です。

伊藤 CULCONというのは、何の略ですか。

天城 Conference on Cultural and Educational Interchange で、CULCONって、アメリカ側がそう言い出したんですね。日本では「日米教育文化会議」と言っていて、通称CULCONになっています。

当時のアメリカ側のメンバーは、ほとんど日本研究の専門家でした。ライシャワーも入っていましたし、その後、みなさん亡くなりましたけれども、ハーバード、エール、プリンストン大学などで、日本歴史をやったり、日本文学をやっていた人たちが多くて、場合によると、日本語で話しができた人たちです。ほとんど東部のグループですが、西はスタンフォードに少しいましたね。ほとんどが学者で、最初のときは作家が一人いました。

それで、「日米教育文化」と言っても、文化が相互に違うんだから、むしろぶつけ合うほうがいいんじゃないか、と。異なる文化をぶつけ合って、ショックを起こすことで火花を散らして、それにより、それぞれの文化をエンリッチするという考え方でやりました。と。そういうことで、いろんな分野を取り上げました。その後、かなり続けて

やったのは、「アメリカにおける日本研究」と「日本におけるアメリカ研究」で、それとジャーナリズムですね。劇作家の内村直也さんなんかも入っていました。僕は大学だけでなく、中・高校における日本研究を担当しました。それから、ジャーナリズムについては、日本の新聞がアメリカをどう扱うかと、アメリカの新聞が日本をどう扱うかとかがテーマで、ジャーナリストの交流が必要だ、と。アメリカの地方には有力紙があるけれども、それらはあまり日本のことを知らないから、そういう地方紙のジャーナリストを、もっと日本に招こうとか……。

伊藤 予算的な裏付けは、どうしたんですか。

天城 日本側の分は、外務省で見たんです。アメリカは、国務省ですね。

伊藤 向こうの国務省の役人は来ていないんですか。

天城 最初はオブザーバーというか、介添役で出ているんですね。文部省も出ました。私も、ずっと出ています。それから、外務省は文化事業部から出ていました。アメリカでやるときには大使館の人が出ているし、日本でやる時もアメリカの大使館から文化参事官が出て来ましたね。

小池 三十六年六月の「国際連合局に併任」というのは、それに当たるわけですか。

天城 国際連合局？ よく知りませんね。

小池 森戸さんの資料の中に、外務省の任命の通知があって、あのとき、代表には澤田廉三さんとかが……。

天城 そうですか。澤田廉三さんは元大使で、東京外語大学の学長になった方です。あんな人が入っていたかな。

伊藤 この仕事のために、一応、外務事務官に併任になっているんですね。

天城 あっ、そうか（笑）。

伊藤 さっきから見ていて、国際連合局って何だろうと思っていたんですよ（笑）。

天城 とにかく、その後続くCULCONの第一回です。

小池 でも、これについては、当時の新聞などに出ている森戸さんの談話を読んでいると、「当時は日米安保の時期で、それを緩和するためをやったんだけど、初期の目的を達せなくて……」というような、厳しい評価なんですよね。

天城 「池田・ケネディ会談」というものは、どういうスタンスでやったのか……。経済貿易と科学技術と教育文化のうち、あとの二つは、あなたのおっしゃるようにカモフラージュでやったのかどうかは分かりません。けれども、これに当たった人たちは、何もそんなことは考えていませんからね。

伊藤 これは、ずっと続いたんですか。

天城 今でも続いていると思いますよ。

その後、CULCONに、ちゃんとした組織をつくらうということで、日本側のパネルとアメリカ側のパネルをつくりました。日本ではNHKの前田義徳さんが議長になって、私も文部省を退官していたので副議長になって、ずっとやっていました。アメリカ側は、ほとんどが日本研究者だったんですけれども、レーガン大統領のときに突然、学者でない人が出て来ました。しかも、日本には馴染みのない人です。レーガンと長年の親友だとかと言っていました。何かプレス関係でしたか、そのとき、私は一、二回付き合ったんです。このときは、あま

り詰めた議論は全体の会議では行われなくて、それぞれの分科会でやっています。

伊藤 CULCONでは、主にどういう事業をなさったわけですか。

天城 「日本におけるアメリカ研究」と「アメリカにおける日本研究」を、もつと進めようということです。特に我々が考えたのは、「アメリカにおける日本研究」ですね。これは、アメリカに日本研究のコアになる大学が幾つかあるんです。それに「田中フランド」という名前で、角栄さんが研究基金を出したんです。あれは、一九六〇年代の末ですが、それでアメリカで日本研究をもつと進めてくれということなんです。そのとき、どこの大学に金を出すかを、CULCONで議論をする前に、外務省が決めてしまったんです。それで、ハワイ大学とシアトルのワシントン大学が抜けていて、アメリカ側が「これはおかしい」と言うので、あとからこの二つを加えたんです。ハワイ大学も歴史的には大きな拠点ですし、シアトルのワシントン大学の日本研究も素晴らしいんです。それで、十の大学は日本研究の拠点であるとして、「田中フランド」が行ったんです。

我々はCULCONの場でも、アメリカでは大学ではなくて、もつと中学校や高等学校段階から、日本語なり日本研究をやってくれないかと、ずっと言っていたものです。それで、アウトリーチ・プロジェクトというのが始まったんです。大学を拠点にして、近隣の小・中・高等学校に、大学の知的能力を波及させるという、そんなプログラムをやってきました。

それで、一九七〇年のCULCONだったと思いますが、アメリカ側がアメリカの日本研究について、アメリカ側の研究資金の出方が鈍ってきたし、学生数も減ってきているので、一遍艇入れをしよう、と。

それで、「日本からアメリカに、日本研究についてのミッションを出して刺激してくれないか」という話がありました。それで、一九七六年（昭和五十一年）に、私がミッション・チーフになったんです。そのときのメンバーは、本間長世さん、芳賀徹さん、宗教学者の井門富二夫さん——いま日本宗教学会の会長をしています。彼もアメリカに非常に詳しい男です。それから、細谷千博さんで、こんなメンバーでアメリカの拠点大学を回ったんです。これは大変私も勉強になりましたし、アメリカ側にも刺激になったと思うんです。

そのときの報告書は、国際交流基金から小さなパンフレットになって出ていますが、大きなものを出そうと思ったら、「金がないから」と言われたんですよ（笑）。それで、積んで置くものじゃなくて、読める内容のものを作ってくれと言うので、みんなで手分けして書きました。良かったですよ。五人で回りました。ずいぶん、強行軍しましたよ。ワシントンから始まって、ずっと来て、シカゴで、「南と北の両方を見よう」ということで、南のほうを回る班と、北を回る班の二つに分かれた。私は南のほうに加わって、テキサスに行き、ロスからサンフランシスコに北上しました。片方は北を回って、またサンフランシスコで落ち合うという形でした。

伊藤 それで、最後はハワイに行かれたわけですか。

天城 ええ、最後にハワイに寄りました。

ハプニングで、私も本当に訳の分からない仕事に巻き込まれるんですね。まず、インドネシア賠償でしょう、それから、このCULCONです。最初に日本でやるときに、日本は大臣が荒木万寿夫（昭和三十三年七月～三十八年七月）さんでしょう。あの人は国際関係が嫌で、「俺はHow do you do? は嫌いだ」と言って、本当に嫌なんですよ。

荒木大臣は沖縄には行ったんだけど、「旅券にサインしてください」と言われたら、「日本の国なのに、どうして旅券がいるんだ」とか言ってる（笑）。だから、第一回のCULCONを東京でやったときも、荒木さんは、あまり何もおっしゃらなかったんじゃないかな。僕が、ほとんどやったんですよ。

伊藤 何で、これは先生が担当することになったんですか。

天城 だって、調査局長ですから。

伊藤 職掌上のことです。

天城 国際教育文化というのは、調査局が担当したんですからね。未だはつきりしないものは、みんな調査局がやったんです。それで、CULCONを担当したわけです。続いてすぐにユネスコで、アジア地域のユネスコ加盟国の「文部大臣会議」を日本でやろうということになったんです。

小池 昭和三十七年ですか。

天城 同じ年ですから、三十七年でしょう。これはCULCONの東京会議をやった、すぐあとです。

小池 昭和三十七年三月二十七日ですが、「アジア地域ユネスコ加盟国文部大臣会議・日本政府代表代理を命ずる」と……。

天城 これは、ユネスコの正式の名称では「文部大臣会議」なんですけども、「経済企画担当大臣も含めてくれ」ということで、ユネスコとECAFEの共催なんです。

小池 その前に先生は、「国際連合アジア極東経済委員会第十八回総会」の、日本政府代表代理にもなられていらっしやるわけですか。

天城 要するに、これは教育と経済との関係ですね。教育計画を考えようということで、我々が『日本の成長と教育』という白書を書いた

でしょう。教育と経済との関係が、あちこちで論じられていたんです。ユネスコもその考え方で、教育大臣を中心にするんだけど、経済企画担当大臣——Minister for Economic Planning も一緒に入ってくれ、主催もECAFEを入れる、と。こういうのを東京でやったんです。それで、日本も経済企画庁から——私は総合計画局長の大来さんと非常に親しかったものですから、大来さんに参加してくれないかと頼みましたら、喜んで参加してくれたんです。

それで、実は、その前に「カラチ・プラン」というのがあるんです。ユネスコ主催で、カラチでアジアの教育発展計画というのを作ったんです。それを、通称「カラチ・プラン」と言うんですが、これは二十一年間で七年制の義務教育を普及しようというプランなんです。

伊藤 七年制ですか。

天城 妙な話ですけど、七年制なんです。私は「カラチ・プラン」作成には直接関係はしていませんし、これに日本から誰か参加していたのかどうか、今でもよく分からないんです。もともと日本は、小・中九年が義務教育ですからね。その「カラチ・プラン」を土台にして、もう一遍それを精査しようというのが、東京でやった第一回ユネスコ加盟国の「文部大臣会議」なんです。

伊藤 どこでやったんですか。

天城 どこかのホテルでしたが、忘れました。

ちょうど、私たちも調査局で、職場における学歴調査をやったり、社会経済と教育との関係を調べていて、最後に『日本の成長と教育』という形になるんですが、そのような準備をしていたときですから、そういう立場で参加しました。大来さんも、積極的にやってくれましたよ。

それで、荒木さんが文部大臣だったので、困ったんですね。荒木さんが「文部大臣会議」で下手なことを言ったら困るし、大体、出てくれるかどうか分からないんです。「文部大臣会議」を東京でやるんですから、日本の大臣は出なきゃいけないでしょう。ですから、荒木さんには余計なことを言わせないで、とにかく顔だけ出してくれ、と。原稿は用意して、これだけ話してくれということで、開会式に来て挨拶してもらおう。それだけで、あとの会議は全部出なくていい、と。それと、閉会式にもまた出て来てもらって、挨拶だけしていただいたんです。

伊藤 「日本政府代表代理」というのは、どういうことですか。

天城 代表は文部大臣ですから。

伊藤 大臣の代わりということですか（笑）。

天城 代表は文部大臣ですから、荒木さんです。実質は僕がやっていたんですよ。

伊藤 「履歴書」を見ますと、そのちよつと前に「調査局調査課長事務代理を命ずる」とあるんですが、局長は課長の事務代理をやるんですか。

天城 たぶん課長が欠員だったんだと思いますね。

伊藤 先生は、しょっちゅういろんな課長の事務代理をやっていますね。

天城 局の課長の異動があると、空白の時期があるでしょう、そのときに代理をやるんですね。

伊藤 国際文化課長もやっていますし、調査課長もやっていますね。天城 役所の「履歴書」というのは、非常に形式的になっていますから、まあ、それはそんなことでしょね。

伊藤 ユネスコ加盟国「文部大臣会議」というのは結構、長い期間やっていたんですね。

天城 一回の会議は、大体一週間くらいで、長くて十日間ですね。

伊藤 ここでは、何が決まったんでしょうか。

天城 何かを決めるわけではないんです。「文部大臣会議」で、どうしようということではなくて、「こういうことが望ましい」ということしかやらないんです。「教育計画を総合的に樹立しましょう」とか、「義務教育を下から積み上げてやりましょう」とか、「いきなり高等教育をやるうとしても駄目だ」とか、「いきなり科学技術教育をやるうとしても、全部の教育水準を高めなければ駄目です」とか、そんなことを議論するわけです。日本としては、いろんな日本の過去の教育発展の実績を示すとかね。

伊藤 ユネスコのアジアの事務局があるんですか。

天城 バンコクにあります。

伊藤 そこが問題提起をするわけですか。

天城 いいえ。この「大臣会議」というのは、あとまでずっと続きますが、五年に一度開くことになっていたんです。それはユネスコ本部で決まっているんですが、事務はそれぞれの地域事務所が担当します。アジアの場合は、バンコク・オフィスですね。

伊藤 バンコク・オフィスには、日本からもどなたか行っているわけですか。

天城 交代で、誰かいつも行っていますね。この当時のバンコクの所長は、インド人のロイシンだったか、あるいはその前のラーマンだとすると、アフガニスタンか。大体、アジアの人が多かったですね。

伊藤 しかし、アジア地域と言っても、ずいぶん教育レベルでは格差

があるわけですよね。

天城 大変ですよ。ですから、「カラチ・プラン」では二十年後に七年制の義務教育をやるということでしたが、できない国がたくさんあります。その後、「カラチ・プラン」をどう実施していくか、その方法についての作業の会議をやったんです。その作業部会に、私も行きました。

伊藤 それは、この会議の前ですか。

天城 この会議のあとだったと思いますが、とにかくもつと具体的な計画を立てなきゃいけないということで、バンコクでやったんです。そして、国の発展段階を三つに分けて、「この国ならできるだろう」とか、「この国は、とても七年制には行かないから、五年制でいいだろう」とか、ネパールとかブータンとかラオスとかは極貧国ですから、とてもそこまでは行かない、と。国に応じた目標を、具体的に考えようということをやったんです。それで、バンコクのオフィスとECAREの連中と一緒に、経済関係資料や、その他の資料を集めたりして、一カ月くらい続けてやりました。

伊藤 バンコクで、ですか。

天城 バンコクです。私とインドとスリランカの人が集まって、バンコクの事務所、ECAREの連中とも作業ですよ。一種のシミュレーションですね。ECAREの連中が電子計算機を回してやっています。そして、「こうなります」と、結構早く持つて来るんですね(笑)。発展段階に応じて、グループごとに可能なプランを作ったのです。

伊藤 局長で、一カ月もそんなに……。

天城 一カ月じゃなかったかな。三週間かも知れませんね。

伊藤 タイは、如何でございましたか。

天城 バンコクに閉じ込められましたね。でも、結構バンコクには詳しくなりました。

伊藤 そういうのは、これに載っていませんね。

天城 載っていないでしょう。専門家会議というのは、たくさんあるんですよ。ユネスコも、OECDなんかも、たくさんあるんですけどね。

小池 一番面白いところが「履歴書」に載っていないんですね。

天城 それで、第一回の「アジア文部大臣会議」を東京でやりまして、これが、その後にアジアのどこかで行われました。

伊藤 この会議には、他の国は文部大臣が来たわけですか。

天城 大体、来ますよ。

伊藤 じゃあ、日本が……(笑)。

天城 日本が駄目なんです。あとでOECDなどを見ても分かりますが、なかなか行かないんです。それで、この「アジア地域教育大臣会議」というのは……。

伊藤 三十七年だから、次は四十二年ですか。

天城 この表(前掲の「日本ユネスコ国内委員会委員歴等について」)をご覧いただくと分かるんですが、「ユネスコ・アジア・太平洋地域教育協力諮問委員会」というのがあるんです。それが、第二回から第五回まで続いているでしょう。

小池 先生は、諮問委員を十二年されていますね。

天城 「文部大臣会議」を五年に一度やると決めたわけですが、五年では間が長過ぎるということで、中間に一度集まることになったんです。それで、諮問委員会をつくるということで、諮問委員というのがユネスコ事務総長から任命されたんです。私も、この諮問委員になっ

て、その会議がマニラ、バンコク、バンコク、ジョクジャカルタという形で、次の「大臣会議」の間に「諮問会議」をやったんです。この会議では、前の会議でやったことのフォローアップと、次の議題をどうするかという、そういったことを議論していました。

「大臣会議」は三十七年の「東京会議」が最初で、その後、三回目のシンガポールと五回目のバンコクも、日本の大臣が行かなかったの
で、私が行っているんです。それで、私が行かなかったときには確か、これは政務次官が行っているんです。一回、三回、五回と、これは奇数ですね（笑）。それから、これは「アジア・太平洋地域教育大臣・経済企画担当大臣会議」（註・第五回から「アジア・太平洋地域」となる）ですから、経済企画庁からも誰か出てもらいました。さっきお話ししたように、東京でやったときには、大来さんに総合計画局長ということで出てもらったんです。そういうふうに、これはつながっているんです。これだけ見ると、何のことだか分かりませんけどね。その一番最初が、三十七年の会議ですね。

フランス「事始め」

伊藤 三十七年のところに「日英文化協定に基づく在東京混合委員会日本側委員を委嘱する」というのがありますが、ご記憶ありますか。

天城 この時分から、文化協定があちこちにできるんです。そうすると、現地とこつちに混合委員会というのができるんですね。それで、文化協定に基づいて何をするかということについて、その混合委員会

に掛けることになっているんです。ですから、それに載っているのは「日英」かも知れませんが、私はあちこちの混合委員会に入っているんですよ。それで、日米は非常に交流が頻繁でしたから、文化協定はないんですね。そうでないところは、みんな文化協定を作って、混合委員会を置いたわけです。そういう委員会に出ましたが、大したことはないんですよ。外務省の文化担当局がみんなやっているんですが、やれることは限られているんですね。

伊藤 文化協定には、教育も入ってくるわけですか。

天城 そうですよ。

伊藤 留学生の交換とか、そういうことも入ってくるんですか。

天城 国によっては、留学生の交換が出てくることもあります。その後、国際交流基金ができると、文化と言っても、外務省もかなり具体的にはそつちに任せていました。さらに、その混合委員会に代わるものとして、国際交流基金の諮問委員会なんというのが、あちこちにできたんです。そのようなわけで、最初の頃に、あちこちの国に文化協定に基づく混合委員会ができたと言っても、それは「履歴」に載っているものと、載っていないものがあるんじゃないですか。

伊藤 そうかも知れません。

天城 いずれにしても、この「大臣会議」は、私のユネスコ関係のスタートになっています。

それからユネスコ関係で、もう一つ触れておいたほうがいいと思うのは、先ほど教育大臣と経済企画担当大臣の会議について話しましたね。私が調査局長（昭和三十七年一月〜四十年七月）になって、三十七年に『日本の成長と教育』という「教育白書」を作ったことは、前に申し上げました。これは英訳版も作ったんです。これはユネスコで

大変評価が高くて、これを使ってアジア地区の「教育計画会議」をやるとういうことになって、三十八年だと思いましたが、東京でやったんです。それは載っていますか？

伊藤 「履歴書」には載っていないと思いますね。

天城 三十八年に、ユネスコと共催でしたか、「アジア教育計画会議」というのを東京でやったんです。それは『日本の成長と教育』の英文版をテキストとして、総合的な教育計画について議論したんです。これは、一種の専門家会議なんです。

村上 「白書」が出て、すぐに会議が開かれたということになりますね。

天城 いいえ。「白書」が出たのは三十七年で、この会議は三十八年に「白書」の英文版が出てからですからね。まあ、この会議をやるというので、英文を作ったようなものです。

小池 そうすると、主催はやはり日本なのでしょいか。

天城 ユネスコと共催だったと思います。ああいうことを、どこもやっていないものだから、非常にユネスコは関心を持ったんですね。

それともう一つ、「事始め」で言えば、変なものがあるんです。それは、フランスとの関係が三十八年にありました。

伊藤 フランスですか。「履歴書」には書いていないですね。

天城 書いていないですよ。池田首相がフランスに行って、ドゴール大統領と会ったときに、「トランジスターの商人」なんて、新聞でも冷やかされたことがあったんですね。そのときに、「日本はフランスに、もっと関心を持ってくれ」とか、「日本の学校は英語ばかりやっているが、フランス語もやってくれ」とかと、ドゴールが言ったらいいんです。だけど、池田さんは帰って来て、そんなことは言わなかったんで

すよ。

ところが、しばらくして、フランスの文化担当のアタッシェが文部省に来て、「この間、うちの大統領が池田首相にこういう話をしているので、日本で、もっとフランス語の教育を進めてくれないか」と。それについては、「日本の高等学校や大学で、フランス語を教えている先生の中に、フランスに留学したことがある人がほとんどいない」と言うんです。「短期のフランス語のブラッシュアップ・コースを作るから、日本から派遣してくれ」と言うんですね。それで、「そういう話が池田さんにあつたんですか？」と、荒木さんに訊いたら、「俺は知らないよ、そんなことは余計なお世話だ」と。でも、向こうは非常に熱心に言うてくるわけですし、実際にフランス語学会の人たちに話を聞いてみると、「確かに、そうだ」と言うんです。向こうで滞在と研修費は持つけれども、派遣旅費は日本で持つてくれと言われましてね。それで、文部省には在外研究員の派遣費用というのがありますから、あれの短期の分を少しかつばらつて来て、これに使うと考えました。

それで、前田陽一さんたちのフランス語学会と一緒にあって、大学のフランス語の先生を集めて、研修会を開いたんです。その研修会を経て派遣しようということで、最初の年は予算がないものですから、二十名を派遣することにしたんです。実は、それについては、初めは「予算がないから、来年まで待つてくれ」と言われていたので、そのことをフランス大使館に報告しましたら、とても喜んでくれましたね。この二十名を含めて、フランス語の先生の研修会を軽井沢で二、三日やりました。フランスから、わざわざフランス語の先生を送ってくれましたが、何と、それが劇の役者なんです。「役者のセリフを聞かせよう」と

言う。それから、二十名をフランスに送ったんです。それが、ずっと続いているんですよ。

伊藤 今でも、ですか？

天城 当時、大学でフランス語を教えている先生たちが一巡して、次いで高等学校でフランス語をやっている学校があったので、その先生方を加えて、それである程度までやっただけです。

そしたら、ドイツがこれを聞き付けて、ドイツも同じようなことをやりたいと言って来たんです。それで、フランスと、その後ドイツに先生を送ったんです。

伊藤 それが三十七年くらいのときですか。

天城 これは三十八年です。予期していなかったものが、みんな飛び込んで来るんですよ。

伊藤 「履歴書」を見ますと、三十七年のところに、「外務事務官（アジア局賠償部に併任する）」とありますが、これがさっきの話ですか。天城 そうですね。それで、インドネシアは賠償留學生ですが、あとビルマも賠償問題が一つあったんです。だけど、これは留學生の問題にはならなかったんですが、ビルマについてもそんなことがあって、外務省と相談したことがあります。

それから、この時期にOECDに日本が加盟しているんです。OECDができたのは三十五年ですが、日本が正式に加盟したのは三十九年です。OECDでは教育問題もやっていて、この前、「スベルニルソン・レポート」の話をしたと思いますが、初めは外務省もOECDが教育問題を熱心にやっていることを知らなかったんです。それで、その後、OECDとの縁が深まるんです。その前に、さっきの話で、フランスに日本のフランス語の先生を送るようになりましたね。そうい

った関係で、僕にフランスを一度見に来ないかと、フランス政府から招聘されたんです。

伊藤 海外出張は必ず書いてあるはずですが、それは書いていないですね。

天城 それで、フランスに行く飛行機の中で科学技術庁の局長と一緒にあって、どこに行くのかという話になりました。「OECDのCSTP (Committee for Scientific and Technological Personnel) —— 科学者技術者委員会に行くんですよ」と言われて、「そこでは、かなり教育問題をやっているんじゃないですか」と話したら、「いやあ、急に行けと言われたので、書類はまだ見ていない」なんて言っているんです。それで、フランスに着いた翌日かな。僕がホテルにいたら、彼から電話がかかってきて、「CSTPの議題を見なければ、科学技術と、ほとんど関係ない」と言うんですよ。「scientific and technological personnel」ですから、人材養成、活用なんですね。だから、みんな大学教育の問題なんです。「これでは、自分は何だか分からないから、天城さん、パリに来ているんだから出てくれよ」と。だけど僕は、フランス政府の招聘で来ているんですから、「こっちはプログラムが決まっているんだし、フランス政府の招聘で来て、日本の代表でOECDの会議に出るわけにはいかないから」と断わったんです。日本は、そのくらいOECDの教育活動については見当違いだったんですね。それで、僕はフランスに招かれて、「フランスを自由に見てくれ」と言うので、いろいろなところを見せてもらったんです。こういうのが「履歴」のところに、どう載るのかは知りませんがね。

伊藤 海外出張は、ちゃんと命令が出ているわけですからね。

天城 抜けているんですね。まあ、そういう形でフランスとの関係が

始まってきている。

伊藤 この「履歴書」は、かなり詳しく書いてあるので、非常に信用していたんですが……（笑）。

天城 くだらないことが書いてあるんですよ。「外務事務官の併任」だとか、形式的なことばかり書いてある。

それで、このときは本当に勉強になりましたね。フランスには三週間近くいて、「一カ月いてもいい」と言われたんですが、さっき言ったように、局長は一カ月以上出張できないんです。それに、私はユネスコの研究所——IIEPのフェロー・コンサルタントになっていたんですが、そのフェロー・コンサルタントを集めての研修会を、スイスのレマン湖畔でやるから来ないかと招かれていたんです。それで、フランスの出張に続けて研修会に出ると、ちょうど一カ月になってしまふんです。だから、IIEPのレマン湖畔のシャトーで行われる研修会に行っただんですね。そこでは、当時の国際的な教育関係の専門家にたくさん会いました。イギリスやドイツの国の専門家で、その後、みんないろいろなことでも親しくなった人たちです。こんな機会を得たんですよ。

だから、たまたま「トランジスタラジオのセールスマン」から始まった話が、そういう形で、私にとってはフランスとの関係が始まるきっかけだったんです。それで、フランスでは大学とか高等学校を訪問しました。「どこへ行ってもいいけど、観光地には行かないでくれ」と言われて、「観光地って、どこなんだ？」と訊いたら、「例えばニースだ」と。こちらは、そんなところに行っただけでしょうがないですからね。そのときに、向こうで車一台と、英語の分かる男とを付けてくれまして、彼がドライバーになって連れて行ってくれましたから、

非常に勉強になりましたね。

伊藤 フランスは、やはり教育制度が相当違うわけでしょう。

天城 フランスは徹底的なエリート教育ですから。「バカロレア制度」で、高校が終わると、大学に行く者を選別しちゃいますからね。だから、ソルボンヌはどうなっているとか、いろんなことを勉強させてもらいました。

まあ、「履歴書」にどう載っているかは知りませんが……。

伊藤 今のお話にあったIIEPは、またあとで続くわけですね。

天城 続きますよ。ユネスコの理事を、ずっとやりましたからね。ここで大体、調査局時代まで行っただけかな。

伊藤 この中に出てくる「南方同胞援護会」というのは何ですか？

天城 それが沖縄留学生関係のことかも知れませんがね。「南方同胞援護会」では、大浜先生が活躍されていたようですからね。

伊藤 さっきの話とつながることですね。

天城 そうでしたね。

伊藤 そういうふうには聞かないと、これを見ているだけでは何のことかよく分からないんですよ。

天城 そうですね。沖縄では大浜さんが非常に教育界と関連が深かったし、それから屋良朝苗さんという初代の知事がいたでしょう。この人は、沖縄教育会の会長だったんですよ。

小池 広島文理大のご出身ですね。

天城 そうなんですよ。屋良さんは、立派な人でしたね。いつも沖縄に行く、屋良さんと会うんですが、あの人が本土復帰の先頭に立っていたんです。それで、沖縄で教育基本法を作るときに、第一条に「日本人として……」というのが書かれているのですが、屋良さんが頑張

って入れたんですね。屋良さんは、あまりに本土復帰のことを主張するものですから、米軍に睨まれてしまっていて、渡航禁止になってしまったんです。まあ、それよりも屋良さんは、沖縄政府が米軍の指示を受けてやっているものですから、アメリカの執政府に対して楯突いていたんですね。彼は、教員の間に非常に信望が厚かったものですから、沖縄教育会が本土復帰の先頭に立っていたんです。

それで、いよいよ沖縄復帰になって選挙になったときに、沖縄の教員組合と社会党が、屋良さんを取っちゃって、屋良さんは社会党で立候補したんです。あのとき、そう言っただけは悪いかも知れないけれども、自民党の読みが足りなくて、沖縄の執政府と同じ態度を取ってしまった、屋良さんを「敵陣」に追いやってしまったんですね。まだ復帰前でしたが、「いま沖縄の首席を公選したら、政党を問わず、屋良さんになる」と、多くの人が言っていました。そのくらい信望があったんですよ。選挙をしたら、屋良さんが知事になっちゃった。しかし、社会党だということで、妙なギクシャクが始まってしまったんです。しかし、屋良さんはそういうことを離れて、非常に信望のあった人で、立派な方だと思いました。

小池 ちょうどこの頃、三十五年くらいに、行政権の復帰の前に教育権の復帰という、教育権から日本の教育システムを導入して慣らしていくという動きがあったような気がするんですが……。

天城 教育権だって行政権ですよ。ただ、屋良さんたちが非常に熱心で、まだ沖縄がアメリカの執権下にあるときにも、講習会、研修会を行って、日本本土の教育の動きを勉強しようとしていましたから、我々もどんどん講師たちを送ったんです。それについては、沖縄も渴望していたんですね。私は、そんなときも行きました。

小池 森戸さんなんかも、行っているんですね。

天城 ええ。私は、沖縄との関係は、復帰後より復帰前のほうが深いんですよ。復帰は四十七年でしよう。私が調査局長時代は、まだ米国の占領下でしたからね。私も沖縄で一度、何がテーマだったかは忘れてしまいましたが、「日本の教育の最近の状況」というようなことで、一週間の間に、八カ所か九カ所で講演をしました。クタクタになったんですよ。あのときは石垣島にも行ったかな。いわゆる沖縄派遣留学生の父兄も来ていて、日本の大学の状況などを話しました。復帰前には、よく沖縄に行きました。

伊藤 「履歴」を見ていると、突然、「調査局留学生課長事務代理を命ずる」というのが出てきますが、調査局長になられたときは、留学生課というのはなかったんですか。途中でできるんですかね。

天城 留学生課は、あとですね。留学生がだんだん増えてきて、留学生課というのができたんですね。

伊藤 これは、先生がご在任中ですよ。

天城 何年か忘れちゃったね。

OECDのポリシー・レビュー

天城 大雑把にOECDに関して、その後の流れだけ申しますと、OECDではポリシー・レビューという形で、加盟国の政策をレビューするんです。それで、日本については、「教育政策レビュー」というのがあるんです。四十五年です。その成果は出版され、日本語訳もあり

ます。

その前に、四十一年に「サイエンス・ポリシー・レビュー」というのをやったんです。これは、ちょうど私が大学学術局長（昭和四十一年七月～四十二年六月）のときでした。その担当は科学技術庁だったんですね。科学技術庁の次官が日本の代表で、私は文部省の大学学術局長ということで、通産省の工業技術院長も加わって、この三者で出席しました。それに先立って、OECDから日本にイグザミナーが来て、調べてレポートを作り、それを基にして、参加者がいろいろな質問をするんですね。

今でも覚えていますが、この「サイエンス・ポリシー・レビュー」は、非常に有意義でした。残念ながら、その報告書は文部省ではほとんど誰も興味を示さなかったんです。イグザミナーは、「日本の大学は、あまりにもプロフェッサー・オリエンテッドのシステムだ」と言うんですね。講座にしても学科にしても、もう少しディシプリンを中心に考えると、問題によっては社会との関連を考えなきゃいけないのに、日本の大学はほとんどプロフェッサー・オリエンテッドで、先生の考えだけだ、と。「学問の自由」という原則があるにしても、日本には一つの問題がある、ということをつたってますね。

それからもう一つ、「サイエンス・ポリシー」という観点からいくと、国と民間と大学との三者が、どういう連携を取っているかということが重要で、これが上手く取れるようにするのが「サイエンス・ポリシー」だと言うんですね。どこの国にでもサイエンス・ポリシーはあるだろうけれども、この三者の間の連携と流れの中で、サイエンスのアイデアがどう動いているか、サイエンスのリサーチのための金はどう動いているか、さらにサイエンティストの流動性があるかの三つが重

要である、と。この三つのダイナミズムで「サイエンス・ポリシー」を見るのが、このレビューの目的だと言うのです。

これについては、私は大変勉強になりましたね。そういう見方で見ていくと、日本の大学はプロフェッサー・オリエンテッドで、産官学と、普通言われているけれども、日本ではサイエンスの金というのは民間からかなり出ている、政府からはあまり出していない。人材の流れを見ると、流動性がない。ポリシーを言うなら、少なくともこの三点は意識しなければならない。

伊藤 しかし、なかなかそういうのは上手くないですね。

天城 今でも上手くないですね。だから、今でもまだ議論しているんですからね。

伊藤 もう一つ、ここに「ブラジルとの文化協定による混合委員会」というのがありました（笑）。

小池 四十年にありますね。

天城 もう一つ、「エデュケーション・ポリシー・レビュー」というのが、四十五年ですね。

伊藤 それは大学学術局長のときに……。

天城 日本の「教育政策のレビュー」です。さっき言ったのは「サイエンス・ポリシー」ですけどね。そのレビューのために、四十四年に、日本の教育政策に関するOECDのイグザミナーが日本に来たんです。伊藤 「四十五年十一月、日本の教育政策レビュー」と、一番下に書いてありますね。

天城 四十四年に日本の「教育政策のレビュー」をしないと、OECDが言ってきたんですが、ちょうど「中教審」で「四六答申」の審議中で、その中で過去の日本の教育の実績をレビューしているときだっ

たので、「それができたら、まとまった日本側の報告書ができるから待ってくれ」と言ったんです。そして、四十四年の十一月にOECD派遣のイグザミナーが来日しました。

OECDが日本に送った調査団のメンバーは、なかなかの豪華メンバーです。エドガー・フォールというフランスの前首相が団長、アメリカからはライシャワー、北欧からはガルトング——この人は、平和問題研究所長です。イギリスからは日本研究者のドーア。それから、日本ではあまり知られていないんだけど、イスラエルのベン・デビッドという人です。この五人を送って来たんですよ。実は、初めは四人を指名してきたんですが、あまりにも知日派ばかりです。特にガルトングの奥さんも、ライシャワーの奥さんも、日本人ですからね。それで、僕がベン・デビッドを、こっちから推薦したんですが、「OK」がออกมาして、彼を加えて五人で日本の「教育政策レビュー」をやったんです。

さっき申したように、「カントリー・レポート」を準備しなければならぬんですが、「四六答申」の審議のために、いろんな過去のことを調べて整理していました。これは非常に、向こうも有効になったようでした。それで、「中教審」の「四六答申」が出たから、討議——コンフロンテーションと言うのですが、これをやろうということで、我々もパリに乗り込んだんです。

伊藤 レビューは、向こうでやるんですか。

天城 そうです。パリのOECDの本部でやるんです。そのときは、私と西田（亀久夫）君という審議官と、あと堀尾さんという京都大学の教授で、この方は「中教審」の委員でした。この三人で行きまして、その経緯はOECDの出版物になっています。朝日新聞が深代（惇郎）

さんの名前で、『日本の政策レビュー』というのを翻訳して出していますね。これは、大変貴重な出来事です。

伊藤 そのレビューの中で、一番問題になったことは何ですか。

天城 一言で言う、日本の初等・中等教育は、よく整備され進んでいるが、高等教育は全体が平板になっていて、特色やピークがはっきり分らない、と。それから、教育委員会の委員の公選を、なぜやめたのかと……。

このとき、面白いことがありました。彼らと、前夜一緒に日本食を共にして懇談したのですが、日本通ですから、日本の教育について話し合いました。最後に、「今夜十分話し合ったから、明日のコンフロンテーションは、もう要らないね」と、皆で大笑いしました。そんな、なかなか雰囲気でした。最後に、OECDがレポートを作るんです。これは、前の「サイエンス・レビュー」のときも、同じですよ。

これを、私たちも翻訳しようと思っていたら、「朝日」が先に版權を取ってしまった、まあ、どこでもいいんだけど、「朝日」が翻訳して出したんです。

伊藤 何というタイトルですか。

天城 『日本の教育政策』と言うんです。朝日新聞の出版物として出ていますよ。OECDの関係では、「サイエンス・レビュー」は、あまり目立たなかったけれども、教育政策のほうは、OECDも非常に成功したと喜んでいました。このとき、私は次官を辞めて間もなくでした。

それから、もう一つあって、これもあまり目立たないんですが、五十一年にOECDの「日本の社会科学政策レビュー」というのを、同じようにやりました。これについては、私はもう退官後でしたから、

直接は関係していません。

伊藤 その「レビュー」は多分、この政策研究院のスタートになっていると思います。吉村（融、学長）さんが、確かそれを受けて……。

天城 そうですね、確か吉村さんは関係したと思います。日本では、まだ政策科学は一般化していませんでしたね。

それで、このときに、社会科学の定義についての議論を日本でやったんです。ヨーロッパ側で言う社会科学と、日本で考えているものとは違うんですね。例えば、梅棹（忠夫）さんは、「社会科学というのは経済学だけでしょう」と言うんですよ。あとは「人文」だと言うんです。日本では「人文」という言葉がちゃんとあるので、それで全てカバーしている。経済学が数学を使ったりするので、「ああいうのが社会科学じゃないんですか」と言われたんですよ。OECD側から見ると、法律学が入っていないんですよ。あれば、社会科学ではないんですね。小池 人文科学ですね。

天城 そういう食い違いが、少しずつあるんですよ。僕は直接関係していないけれども、これは学問の分類で、自然科学も大変でしょうけれども、社会科学というのも、本当は大変なんですね。まだ、必ずしも確立していないんです。

これはちよつと余談になるんですが、「日本の大学の文学部というのは、何か」という議論もあるんですね。東大文学部の改組なんかは、まさにこの問題だったんです。「社研」があつて、文学部があつて、再編成するときに、「社会科学研究所は、一体、文学部にあるものと、どう違うんだ」ということも論議されました。経験科学に当たるものは社会科学だ、と。人文科学というのは、そういう経験科学じゃないという議論もあつたんです。大阪大学には教育学部がなかったので、文

学部から分離して教育学部をつくるのか、と。哲学・史学、文学・教育、心理・社会というのが、どこの文学部にもありますね。これについては、私は直接関与していませんでしたから……。

OECDは国際機関と言いながら、非常に学問的なことをやっていました。少なくとも、「サイエンス・ポリシー・レビュー」「教育政策ポリシー」、それから「社会科学レビュー」とやっていたんだけれども、それはほとんど知られていないんですね。

もう一つ、ちよつとだけ申し上げますと、これも大体同じ頃で、四十七年のことですが、ユネスコの「世界成人教育会議」の第三回目を東京でやったんです。これは、十年に一度ずつやるんですね。

伊藤 成人ですか。

天城 成人——アダルト・エデュケーションですね。ユネスコは、最初はエルシユノア、次はモントリオールと、十年置きにやることになっていたんですが、「二十年目は日本でやってくれないか」という話になって、三回目を東京でやりました。

私は日本の参加者の代表になったんですが、このときに、今で言えば生涯学習の前提になるような、いろんな話が出ました。イギリスの代表が「アンダラゴジー（andragogy）」という言葉を使ったのですが、僕は正直なところ、そのときアンダラゴジーとは何のことか分からなかったんですね。訊いてみたら、これが「成人教育」なんですね。ペダゴジー（pedagogy）が子供の教育で、アンダラゴジーというのは「成人教育」なんですね。だから、教育学をペダゴジーと言っているのは、子供を対象に考えているんです。それで、「成人教育」という言葉が出て来て、成人の特質とか、人生経験をもつと踏まえた教育学をやらなきゃいけないというのが、イギリスで始まっているんです。それを、

ここで初めて聞いて、びっくりしちゃいましたね。

日本では、学校教育以外の教育を「社会教育」と言うのですが、外国には「社会教育」という言葉も、概念もないんですね。「成人教育」か「継続教育」なんですね。日本だけが「社会教育」という言葉を使っているんですが、他の国の人の中には「ソシアル・エデュケーションって、いいね」と言う人もいます。歴史的に見ると、日本では、あれは「通俗教育」と言っていたんです。いつ「社会教育」になったのかは調べていません。前に文部省の社会教育局長をやった方で、大学から来た先生が、「社会教育なんて、恐ろしい名前を付けたもんだな」と言うんですね。「社会を教育するなんて、こんなこと誰ができるんだ」と。「いや、社会が教育するんですよ」なんて言ったことがあるんですが、これは日本独特なんです。だから、「成人教育」というのは、外国では一般的で、コンティニューイング・エデュケーション——「継続教育」ですからね。そのとき初めて、アンダラゴジー——「成人教育」という言葉を知りましたね。

国連大学の問題点

天城 それから、もう一つ付け加えますと、国連大学の問題がありました。これもお話しすると長い話になるんだけど、ウー・タント国連事務総長が「国連大学をつくらう」と言い出したときには、初めはみんなあまり相手にしていなかったんです。だけど、ウー・タントが極めて熱心なので、「それでは……」ということで、国連にパネルを

つくったんです。それで、世界から集まって、その可能性について討議することになりました。これにも、また日本から僕が参加したんです(笑)。そしたらユネスコも、こと教育に関してはユネスコの責任だということで、慌ててスタディ・チームをつくったんですが、ユネスコのほうには前田陽一さんが出たんです。ですから、国連とユネスコの両方で検討が始まったんですね。

国連のパネルは最初はジュネーブでやって、二回目はどこでやったか忘れましたが、三回くらいやったんですね。ニューヨークでも、一度やったかな。しかし、なかなかまとまらない。そのとき、英米とソ連が反対なんです。反対の理由は、もつともなんだけれども、「うちの国にある大学は、まさに国際大学だ」と。「世界中の留学生が来ているんだから、今更そんなものをつくっても意味がない」と言うんです。ソ連は、デベロッピング・カントリーの学生を積極的に集めていました。ルムンバ大学という名前の大学があつて、アフリカの留学生をたくさん連れて来て、インドクトリネーションしていたんですね。そういうところが、みんな反対なんです。

ウー・タントは、アンダーグラデュエイトの教育をやるうとしていたんです。というのは、特定国に留学すると、みんなその国に馴染んでしまつて、あとで頭脳流出して、帰国しないから駄目だ、と。だから、国連のような国際機関がつくったほうが、特定の国にコミットしなくて済むから、国に帰って活躍できる、と。これが、ウー・タントの主張なんです。それで、何遍やっても話がまとまらないので、しょうがないから、僕が、「アンダーグラデュエイトがそういうことなら、グラデュエイト・レベルの研究者の養成はどうなのか。これは、国際レベルでやったほうがいいんじゃないか」と言ったわけです。だから、

若年研究者のトレーニングということで、ユニバーシティをつくったかどうか、と。研究者だけ集めてやるんだったら、アカデミーでもいいし、インスティテュートでもいいだろう、と。しかし、「ユニバーシティ」というのは、教育するところだ」と言うんですね。それで、僕が、「大学院のヤング・リサーチチャーのトレーニングという意味で、ユニバーシティにできるんじゃないか」と。それで、「アングラデューエイトは、やらなくてもいいから」と言いましたら、「それなら考えてみようか」ということになって、やっと話がまとまってきたんです。

それと、どこかに一つ国連大学というものをつくって、そこに世界中から集めるのではなくて、各国にそういうインスティテュートをつくって、ネットワークでやったらどうか、と。それも、僕が提案したんです。そのネットワークの提案なら賛成だ、と。それで、「ヤング・リサーチチャーのトレーニングとリサーチをやるなら、賛成だ」ということで、やっとまとまりました。このために条約を作るかどうかということになったんですが、条約を作ると、また面倒臭いので、「国連総会の決議で行こう」ということになって、決議してやったんですね。

そのとき、日本は大学紛争や何かのあとで、日本の大学を、もう少し国際的に刺激したらいいだろうということになって、かなりの有識者が国連大学の日本誘致に賛成されたんです。例えば、松本重治さんや中山伊知郎さんなどが、「やろうじゃないか」と言ってくれたんです。それについては、どうせ金の問題になってくるから、外務省とも相談して、日本は金を出さなきゃ駄目だよ、と。金を出せば来るかも知れない、と。それで根回しをして、僕がパネルで、「日本は設置のための基金をつくるために、お金を出すから」と言って、それでやっと日本

招致になったんですね。

伊藤 今、東京にあるのは本部なんですね。

天城 本部です。あのそばにリサーチ・トレーニング・センター（RTC）というのがあるんです。これは、僕の考えたものになって行かないんですね。本部は東京に一つあって、リサーチ・トレーニング・センターというのは、あちこちにあるんです。

伊藤 各国に、ですか。

天城 各国ではないけれども、世界中のあちこちにあるんです。東京も、その一つなんです。あとスウェーデン、アフリカ、インド、香港、アジア……など、あちこちにあるんです。そういうのがトレーニング・センターで、あとは研究をやるう、と。

ところが、そこまではできたんだけど、基金に金を出さなくても、日本しか出さないんです。英米はそっぽ向いちゃって、ロシアも金がないから駄目でしょう。それで、貧乏なくせに、「自分のところでやる、やる」と言っって手を挙げてきても、それは特定の課題だけなんです。アフリカなんかは、天然資源とか何とか。それから、北欧は国際経済かな。それから、どこかが食料管理とか。そういうバラバラなテーマなんです。

伊藤 日本は、何なんですか。

天城 日本のRTCも曖昧で、よく分からないんですよ。グローバルゼーションとアーバナイゼーションとか、そういう言い方なんです。それで、トレーニング・センターとか国連大学とか言っても、ディグリーは出せないでしょう。世界的には、大学でなければ出せないですからね。それで僕が、「国連大学でフェローシップを出して、日本の大学とタイアップして、日本の大学の大学院で指導教官を付けて勉強さ

せる。東京大学なら東京大学のディグリーを出すようなシステムにしよう」と言っているんだけど、なかなか上手くいかないんです。駄目ですね。僕は、絶望しちゃったんです。

伊藤 何か、ちょっと中途半端な感じになりましたね。

天城 初代、二代と、学長が「国際機関だ」ということで、日本のアカデミック・コミュニティと連携していないんです。ヘスターというのが最初に来たんですが、これは学者ではなくて経営者で、日本の大学と全く接触しなかった。その次が、インドネシアのスジャトモコで、彼は戦時中、日本軍に抑留されていて、「抑留されたお蔭で、何もしないで勉強していた」なんて、あとで皮肉を言っていました……。だから、基本的に日本に対して、必ずしもいい感情を持っていない。だから、日本の大学の先生たちは、ほとんど国連大学にコミットしていないでしょう。何をしているかも知らないしね。

伊藤 そうですね。僕なんか全然分らないですよ。

小池 国際政治学会の一部なんです。

天城 だから、国連傘下の国際機関だということ、外務省は国際機関だと思っているんですね。我々は、大学だと思っているんです。それで、日本は金を出しているから、外務省がいろんなことを言うでしょう。そうすると、あの連中は、「アカデミック・フリーダムの干渉だ」と言うんです。文部省は、そんなことを考えているんじゃないんですよ。「日本のアカデミック・コミュニティと、どう連携するかを考えているんだ」と、幾ら言っても、「日本政府と、あまり接触するな」と言うんですね。

それで、これも悪口みたいになるけれども、あそこに理事会があるんですよ。それで各国から理事を出すんですが、外務省が国際機関の

理事だからということ、自分で選ぼうとするんです。初代が前田義徳さんというNHKの会長をやった人で、あの人はNHKの会長を辞めたあと、何かなる予定だったのが、成り損なったんですね。それで、田中角栄が誰か知らないけれども、前田さんに国連大学の理事をやらせたんです。ところが、この人はアカデミズムが何も分らない人なんです。それで、前田さんが終わってからは、外務省は「俺の株だ」と言って、大使ばかり、ずっと入れるんです。だから、日本のアカデミズムと、全然関連がない。そんなことで、僕の意図とはどんな離れて行ってしまったので、大変残念なんです。

伊藤 せっかく日本に誘致したのに、それは残念ですね。

天城 何よりも金がないものだから、貧すれば鈍するで、非常に困っています。いま「国連大学協力会」というのを、民間でサポートしようじゃないかということで、永井道雄（註・平成十二年三月逝去）さんを中心に始めたんですね。それで、私は「協力会」の副会長をやらされているんだけど、この頃行っても、国連大学が何をやっているか分からない。「ただ、金を出すだけでは意味がないじゃないか。どこの国も出さないんだから、日本も金を出しただけ責任を負おうじゃないか」と言うんだけれども、なかなかそうはいかないんですね。今は、民間の金もなかなか集まりませんしね。

伊藤 今の状態では、そうですね。

天城 でも、「協力会」には、基金はかなりあるんですよ。始まりが、もう十何年前でしたから、金は集まって、今でも七、八億の基金があるんです。しかも、国連大学の屋台骨が危ないというので、本部の経営資金も援助しているんです。それでも、金がないということで、仕事も充実しないし、人員も減らしているんです。あんな大きな建物が

空っぽになるといけないから、国際機関を幾つか入れたんですね。U NDP（国連開発計画）だとか国連広報センターだとか、みんな入っているんです。それで、やっと家賃を取ってやっているんです。

それに、日本のR T Cについても、「日本につくる以上は、アジアのためのR T Cをつくってくれ」と言われたんですね。それで、「遠慮しないでやろうじゃないか」と言うんだけれども、何か抽象的な議論ばかりしている。「今は産学協力の時代だから、もつと社会のニーズを見て、特に人材の育成を主張してやろうじゃないか」と言っただけでも、駄目なんですね。どうも集まってくるのが、学者だしね。

伊藤 学者と言っても、誰が関係しているのか……。

天城 誰がやっているか知らないでしょう。

小池 前は猪口孝さんとか……。

天城 猪口さんは、もういないですよ。

小池 もう辞められましたね。今は佐藤英夫さんじゃないですか。

天城 あまり日本人に馴染みがない人のようですね。残念ですね。極端に言えば、各国は金を出さないんだし、国連大学が潰れてもしようがないけれども、日本がつくった東京のR T Cだけは、日本の金で維持続けようじゃないかとまで、僕は言っているんですがね。

小池 外務省の「島」みたいな意識がありますね。任命をするときも、国際政治学会の中から、外務省の人が探すという感じなのではありませんか。

天城 外務省は、あくまでも国際機関だと思っているんだから……。

伊藤 それでは、次回はまた「履歴」に沿ってお話いただけますか。

天城 今度は管理局と大学局、それから初等中等局ですね。

伊藤 今度は質問要項を作りますので、よろしくお願いします。

天城 しかし、上手くまとまって話せないですね、バラバラでね（笑）。小池 あまりにもいろいろなことをやられていますからね。

天城 そうなんですね。いろんなことをやっていますし、また辞めてからがありますからね。

伊藤 辞めてからが、いろいろございますね。

天城 国際関係が多くなってくるし、妙な巡り合わせですね。しかも「履歴書」に載っていないことが多いんです。

伊藤 しかし、大変は大変なんですけれども、何でも「事始め」をやられるということは、とても幸せなことだと思いますよ。あとの人たちは、それをただ引き継いでいるわけですからね。

天城 賠償金で人間の教育をやるというインドネシアは、一番良かったと、僕は思いますね。

伊藤 しかし、そのインドネシアは、いま混乱の中ですからね。

天城 インドネシアは混乱しちゃってね。だって、あそこは民族的に複雑なんですから……。

伊藤 僕らは、「インドネシア人」というふうに、一緒にたに考えていますけれども、ずいぶんいろいろと複雑なようです。

天城 ええ。島の数だつて一万くらいあるんですよ。それには無人島もありますけどね。民族の数も、二百はあるだろうと言っんです。言語なんか、全然駄目なんです。ですから、「バハサインドネシア」というのは、人造語なんです。戦後、言語を統一して成功した国はインドネシアだけなんです。あれは、スマトラの小さな部落の言葉なんです。ジャワ語だと、ほかが反撥して駄目なんです。それで、スマトラの小さな部落の言葉なんですが、みんな、あそこは島ですから、船で回っていた商人が使っていた言葉なんです。港々では、そ

の言葉が通じていたらしいんですね。これなら抵抗がないだろうということ、それを探り上げたんですね。スカルノは、確かに賢明ですね。マレー語の一種で「バハサインドネシア」を作って、それで見事に成功したんです。あれは非常に単純で、ほとんど外国語を取り入れて、足りないところは作っているんですよ。

伊藤 文字は、どうしているんですか。

天城 文字は、みんなローマナイズしちゃったんです。

それで、あの国はイスラム国家だと言うけれども、信教の自由を認めていて、何宗でもいいんですね。まあ、九〇パーセントはイスラムですけどね。この前、私がインドネシアに行ったときに、「明日は、ナショナルホリデーだ」と言うんです。「何だ?」と思ったら、イースターなんですね。それで、「休みだ」と言うんですよ。それは、キリスト教でしょう。キリスト教徒は、わずかしいないんですが、国としては他の宗教と同じだということで、それでも認めていますからね。それでイスラム系の大学もありますし、ジャカルタの町のと真ん中にはイスラムの教会があるでしょう。そのそばに、教会のチャーチもあります。抵抗がないんですね。本当に、不思議ですよ。でも、実際に、みんなイスラム的ですけどね。

伊藤 どうもありがとうございました。

〈以上〉

天 城 勲
オーラルヒストリー
第9回

[2001 年 5 月 1 日 14:05～16:30]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

小池聖一(広島大学助教授)

所澤 潤(群馬大学助教授)

村上浩昭(政策研究大学院大学リサーチ・アシスタント)

(於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター)

予算の獲得と配分——管理局長時代

村上 今回は管理局長時代（昭和四十年七月～四十一年七月）と大学
学術局長時代（昭和四十一年七月～四十二年十月）のお話ですが、ま
ず、管理局長というのは、どういうお仕事でしょうか。

天城 管理局長なんて、あまりいい名前じゃないしね。

伊藤 何のことだか、さっぱり分かりませんね。

天城 僕が行ったときの管理局というのは、もうかなりスリム化した
というか、中身は簡単になってきていたんです。昭和二十四年に文部
省設置法ができたときの管理局というのは、前回お話しした調査局じ
やないけれども、いろいろなものが放り込まれていて、名前だけでは
何をやるのか分からなかった。それを逐次、整理してきたんですね。
それは、時代のいろいろな要請に応えなければならなかったことと、
いま一つは各省設置法ができた当時は、まだ占領下ですから、GHQ
の意向が入っていたんですね。そのために、妙な観念的な割り切り方
をしているんです。

ですから、設置法がだんだん変わっていく経緯を見ると、当時の
行政の動きが分かって、大変興味深いですよ。そんな意味もあって、
前回、調査局について、その移り変わりを含めて、いろいろなことを
お話ししたんですが……。

管理局については、僕が行ったのは昭和四十年で、このときの管理
局には振興課と福利課という二つの課があったんです。

伊藤 振興課も福利課も分かりにくいですね（笑）。

天城 でも、かなり整理されてきていたんですね。それから、管理局
には教育施設部というのがあって、その中に課が五つありました。ま
た、この教育施設部には施設部出張所というのがあって、これが全国
に七カ所ありました。

伊藤 旧帝大くらいの範囲で、ですか。

天城 必ずしも、そういう範囲ではないのです。四国などにも置かれ
ていました。二十四年にできたときには、施設部のほかに教育用品課
というのがありました。それから、学校給食課、教科書検定課、著作
権課、そして福利課があったんですよ。一見して、統一がないでしょ
う。

教育行政の中で、財産とか物の管理を、別の括りにしたのでしょう。
著作権課も知的所有権ということで、一種の財産権と見たんでしょう。
教育用品課というのは、教具・教材等で、物ですね。学校給食課は、
給食物資の配給問題。それから、教科書検定課ですが、これは検定を
通れば、印刷するために用紙を配給しなければならない。ですから全
部、物資統制に関係があったんですね。割当てをして、配給しないと
いけない。

伊藤 その紙を配る元は、どこかの省が管理していたんですか。

天城 物資調達本部とか、何かそういう特別な役所がありました。

伊藤 経済安定本部ではないんですか。

天城 ちよつと名前を忘れてしまいました。

伊藤 そこから文部省が割当てをもらうわけですね。

天城 そうです。詳しい仕組みは忘れましたが……。

伊藤 そこから一応、切符をもらうわけですか。

天城 申請して、割当てをもらうんですよ。

伊藤 学童用のノートなども、そうなんですか。

天城 用紙は、みんなそうですよ。

伊藤 それについても、やはり、そのところを通すわけですね。

天城 そうです。学用品には教材・教具など、いろんなものが入っているんですね。そういうことで、物資統制時代の配給制度があるために、こういった仕事が、みんな管理局に入っていたんですね。著作権も一種の財産権ですからね。……占領下だから、GHQの意向が入ったのではないのでしょうか。ちよつと馬鹿けていますよね。

それで、当初はいろいろな課が一緒に入っていました。が、さつき申し上げたように、施設部と振興課と福利課に整理されたんですね。振興課は私立学校法人の認可、助言、指導、助成を担当します。福利課というのは、文部省共済組合と公立学校の先生の共済組合、それに私立学校教職員共済組合に関する仕事です。

伊藤 許認可権は、その課で持っていたんですね。

天城 そうです、振興課が担当していたんです。しかし、高等学校以下の学校法人というのは、都道府県知事の認可なんです。ですから、振興課の仕事は大学、短大が対象ですね。その後、振興課の仕事は、高等教育局の私学部で扱っています。福利課は官房に移されました。

伊藤 さつき言われた部は何ですか。

天城 教育施設部ですね。今は文教施設部になっています。

伊藤 それは、さっきの延長ですか。

天城 それは初めからあって、要するに学校建築です。これは、予算を物凄く食うんですね。管理局というのは非常に予算を食う局で、予算の多い局だったんです。それに、教育施設部というのは、ほとんど

技術屋さんのやることで、僕は何もすることがありませんでした。それから、福利課と振興課も、ほとんどやるのがなかったですね。だから、管理局に行つたときには、予算を取ることを一所懸命やるだけで、あとは何もなかったですね。

伊藤 あまり面白いことはないですね。

天城 僕にとっては、全く面白くないです。

伊藤 しかし、当時は各学校の校舎を何とかしなければならぬとか……。

天城 建物が大変なんです。から、全て予算なんです。ですから、予算のときになると、管理局というのは予算取りで大変です。小中高等学校などの公立学校の予算も、ここで取って補助金として流していましたからね。

義務教育では（建築費の）二分の一を国が負担しなければならぬし、国立大学は自分でやらなきゃいけないし、とにかく数が多い。前回、財務課のお話をしましたが、人件費と並んで、戦後の予算の中で大変苦労したのが、この六・三制の建物ですよ。いま数字は覚えていませんが、戦災のダメージが大きかったことと、そこへもってきて義務教育の年限延長になったので、新制中学校の基になるものがないんですね。それで、旧制の中学校と女学校の一部が新制中学になるか、あるいは高等学校になるか……。

伊藤 ほとんど高等学校になりましたね。

天城 ほとんど高等学校になってしまつて、中学が全然ないんですね。ですから、中学をつくることが大変だったんです。

伊藤 全国となれば、数が生半可ではないですからね。

天城 ほとんど新設ですから、大変なんです。さらに用量が多いんで

すから。

伊藤 でも、この頃にはもう大体……。

天城 ええ。昭和四十年ですから、かなり楽になってきましたが、戦後は教員の給与と並んで、建物は最大の問題でした。ここは、予算の固まりみたいな局だったんです。

伊藤 そうすると、陳情も非常に多いわけですか。

天城 陳情も多いし、応援団も多い。代議士さんは地元の学校の陳情を受けて来ますから、予算のときには彼らが最大のプレッシャー・グループだったんですね。この連中は、大蔵省にも押し掛けて行っただですよ。それから、また配分のときに、「俺のところに寄越せ」で、大変なんですね。

伊藤 予算のときには、「袋」で取るわけですか。

天城 総量が問題ですが、「袋」ではありません。下からの積み上げです。

伊藤 そこまで積み上がってしまったっていると、あと、それを動かすという可能性はあまりなくなるわけですか。

天城 いや、予算折衝はいろいろな基準についてやるので、何町の何学校というわけではないのです。必ずしも、そんなに細かく予算で決まっているわけではありません。でも、基準に基づいて積み上げておいて、最後に「袈裟がけ」にされるんですよ（笑）。それで困ってしまうんですね。配分が大変なんですよ。

伊藤 しかし、もうすでに積み上がっているものを配分するわけじゃないんですか。

天城 いや、大蔵省とは、そこまではやりませんよ。

伊藤 でも、そこでまた代議士が横槍を入れる可能性があるわけですか。

か。

天城 六・三制の施設予算の中には、新築の場合、修理の場合、それから模様替え、改造、学校統合など、幾つかのカテゴリーがあるんです。地方の事情もまちまちですから、このカテゴリーの全体のバランスが必要になってくるわけです。そういう枠は、あるんですよ。

それで、大蔵省も大変なものだから、基準を作るんですが、その基準というのが県単位なんです。そうすると、県の学校を集めて、一人当たり何坪と計算したって、それは個々の学校には合わないですよ。今度は県が、それでやらなきゃいけないんです。当初は、生徒一人110・七坪が最低基準でした。それも、県で全ての学校の数を合わせて110・七坪ですから、具体的な学校配分が大変です。

施設部の中では助成課が、地方公共団体に六・三制の予算を配分するんです。それから契約課、公営課というのは、ちよつと何のことだか分からないと思いますけどね。ここは、建築基準法との関係で、学校建築の基準を作ったり、例えば細かいことだけれども、階段はどのくらいの傾斜にするとか……。学校の建物というのは大体、何間何間と決まっていたでしょう。それが、子供の数が増えて足りるか足りないかとか、そういう細かいことがたくさんあるんですよ。

伊藤 そうすると、やっぱり技官の世界なんですか。

天城 技官ですよ。それで、施設部長も技官です。助成課長は予算を取って、地方に流すほうですから、事務官でしたが……。

それで、国立大学になると、丸々、自分で造らなければならないわけです。初めは、ただ箱を造っていたのが、中の設備がだんだん複雑になってくる。例えば、研究所などになると、建物も高級化して、建築費の単価の半分くらいは、機械・設備費なんです。「ドンガラ」じゃ

なくて、中の設備ですよ。それで、技官の中には建築屋じゃなくて、機械の専門の人もいました。

それから、大学の統合問題では、昔の専門学校の地元の利害関係が絡んで、どこに統合校舎を造るのか、なかなか簡単に決められませんでした。それに、昔の専門学校ですから、土地も校舎も小さいでしょう。幾つかの学部が一緒になれば、土地を広げなければいけない。結局、新しい大学を造るのと同じような苦勞です。新しい土地の造成が必要になって、土木の専門家もいる。施設部の技官と言っても、建築屋、機械屋、土木屋が入ってくる。だから、僕なんか分からないです。

所澤　しばらくすると、国立大学は土地の等価交換で、別なところに移転するとか、そういう話が出てくると思うんですが、先生がこの仕事に就かれた頃は、もうそういう計画が出ていたんですか。

天城　ありますよ。前にもちよっとお話ししたと思いますが、名古屋大学は私が会計課長のときに、今の千種地区に統合するということで、その新しい土地を買う仕事があったんです。これは、お話しのとおり、等価交換方式ではなかったのですが……。例えば、都心部の校地は高いが、郊外は安い。もっと広い土地と、同じ価格で交換する方式でした。

伊藤　その中でも、やはり生徒が増えてくるといった問題がありますよね。

天城　そうなんです。まだこの時分は、子供がどんどん増えてくるでしょう。高等学校も増えているし、大学も成長過程ですからね。当初は六・三制という新制度に対応する施設でしたが、今度は量を増やさなければならぬ。東京などの大都市の人口増に対して、周辺地区の埼玉や神奈川、千葉といった地域が、学校を新設しなければいけな

いんです。

そうすると、土地の購入から始めなければならない。しかし、それまでは校地Ⅱ土地については補助をしないことにしていたんです。値段がバラバラで、共通単価が出ないしね。ところが、住宅団地ができると、学校を造らなければならない。市町村では、もう土地を買う余裕がない。それで、財政投融資で買うような方策を作って、土地を買いました。

伊藤　そう言えば、よく学校に書いてありますよね。

天城　要するに、義務教育の教員の問題も建物の問題も、元はみんな絶対条件が子供の数なんです。この時分は、子供の数がずっと増えていきますから、その増えてきていることが全ての積算の基礎になってしまふんですね。だから、膨大な数字になる。当初の一人当たり〇・七坪ですが、ちよっと上げようとしたら、何倍にも膨れ上がってしまった。だから、ここは予算の固まりみたいな仕事なんです。

それから、(質問項目に)文教施設の国土的配置について云々とか、国土開発に関わる審議会とかいうのが出ていますが、こういうものに関しては、私は覚えていませんよ。

村上　例えば、国土総合開発審議会とか、東北開発審議会とかに関係しておられますが、どんな内容だったんでしょうか。

天城　国土計画というのは、そう言っては悪いですが、実は大雑把なんです。国土審議会というのは、中央と、ブロック別にあるでしょう。あれは、建設省が自分でやっているだけなんです。それで、道路とか、場合によっては港湾とか、そういうもので、とても学校の配置なんというところまではいかなかったんです。

ずっとあとになって、田中角栄さんが、「大学は、もっと風光明媚な

山の中へ行け」なんて言ったでしょう。それで、「絵はがき大学だ」なんて皮肉られたただけだね。

伊藤 分散法という話でしょう。

憲法八十九条と私学助成問題

伊藤 さっきのお話ですと、私学の問題ということで、これは何か大きな問題があったんですか。

天城 ええ、ありました。後に大きくなってくる問題の芽生えが、ここにあるんです。管理局の振興課で学校法人を管理していたので、ここが私学の問題を処理していたんです。それで、僕が行くちよつと前に、「臨時私立学校振興方策調査会」というものができていました。この調査会は、私学の財政補助をどうするかという問題を議論していたんです。これは、ずっとあとまで尾を引くんですが、憲法八十九条に、公の支配に属さないものには公金を使つてはいかんという規定があるんですね。これを巡って、私学に国が補助できるかできないかということが、最初から問題だったんです。それで、法制局などの意見もあって、公の支配に属していない限り補助できない、と。そういう中で、何度も議論があるんですが……。

伊藤 私学に対する国の何らかの形で補助というのは、戦前はあったんですか。

天城 戦前の私学は、かなり国の支配に属していましたよ。国の監督権も強かったんです。例えば私立大学では、一学部について、その当

時の金で五十万円だったかな、国に供託しなければ学部をつくれないうんです。三学部あると、百五十万円を国に供託するんですから、私学は金があればできないんです。その代わり、どういう計算をしたのか分かりませんが、供託金の利息分みたいな金額を毎年、私学に補助していたんです。そういう制度で私学の基盤はつくられていたんですが、戦後はこの制度は廃止されました。

戦後は「私学の自由」ということで、金がないのに私学ができるようになったんです。この時分から、私学の財政状況が問題になってきました。日本の私学の最大の問題は、基金なしに設置する道をつくってしまったことですね。それで、寄付金と授業料に全部頼っているでしょう。その授業料の値上げが、限界に来ていたんですね。寄付金も、なかなか集まらない。教員の人件費は、まだ成長過程ですから増えていく。それで、私学から、「何とか国から補助してくれ」という要望が非常に強かったものですから、こういう調査会をつくって議論したわけです。

私は管理局には一年しかいませんでしたが、この調査会は二年やって答申を出しているんですよ。その間、私学側と、そうではない委員の間で凄い喧嘩をやっていました。あんな罵詈謗をやってた審議会というの、初めてですね。かなり激しかったです。結論は、やっぱり出ないんですよ。経常費と言っても、人件費をどうするかというのが一番の問題でしょう。経常費の内の大部分は人件費ですから、人件費については、とても結論が出ないんです。それで、「なお検討する」ということで、先送りされてしまったんです。曖昧な先送りの答申で、解散してしまっただけです。

それが実は、後にずっと尾を引くんです。特に調査会をやって侃侃

誤謬の議論をしたものですから……。曲がりなりにも答申が出て、人件費の補助が可能かどうかについては、「なお検討する」ということになっていったものですから、問題は残ってしまったんですね。

伊藤 反対する側というのは、どういう人たちなんですか。

天城 それは、憲法八十九条をどう解釈するかということですね。八十九条に違反するから、そんなことはできない、と言う。もう初めから、そうですよ。それで、文部省としても、そこを何とかするには法律を直さない限りしょうがないんですね。勝手に憲法を直すわけにはいかないし、立法問題は簡単にはいかないですね（笑）。だから、そういう宿題を残して、終わってしまったんです。

伊藤 法律を作るといえるのは、要するに公の支配に属するようにするということですか。

天城 私学については戦後、私立学校法ができたでしょう。学校教育法では、法令の違反などがあつたときには、いろんな条件があります。監督官庁は変更命令を出せるという規定があるんですね。しかし、私学法ではそれを適用しないと、切ってしまったんです。だから、補助金云々の前に、とにかく監督官庁の権限が一切及ばないようにしちゃったんですね。ですから、初めから法制局の意見としては、私学法でそういうことまで規制しているんだから、私学補助は憲法八十九条の規定に違反するというわけです。

伊藤 私学の側は、公の支配に属するのが嫌なんでしょう。

天城 Support without control ですよ。それが後に尾を引くんですが、管理局では私は一年しかやっていないので、これくらいのことにしか関わっていないんです。

しかし、その先のことを申し上げておきます。経常費助成の問題で

す。昭和四十年以降、毎年、予算折衝の際、私学側が人件費を含めて、経常費助成の増額を要求していました。昭和四十五年に僕が次官だったときに、政府は憲法の規定があつて、なかなか出せないと言うので、議員立法でやろうということになったんです。結局、四十五年度の予算については——これは私もやったんですが——私学の人件費を含む経常費助成の予算が、大蔵省の原案で認められたのです。日本私学振興財団法というのを、議員立法で作ったんです。そして、それを扱う機関として、今の私学振興財団が四十五年にできたんです。

伊藤 そのときも、やはり Support without control ですか。

天城 それで、憲法八十九条との関係があるものだから、私学法に新しい規定を入れたんです。私学には、別に定める法律に従つて経常費の補助ができるということにして、日本私学振興財団法を成立させる。これは全部、議員立法です。政治的に進んで行つたんです。そのときに、私学法に新しい条文を入れて、これこれこういうときには補助することができると。できるけれども、それは今まではつきりした根拠がないんですからね。別の法律の定めるところにより補助することができると書いてあるんです。

その別の法律の定めるところということで、日本私学振興財団法には二つの規定が入っているんです。学校法人の会計基準を、はっきり作る。それで、財務関係の書類の作り方も決めて、その結果は文部省に届出するという義務を課したんです。それから、その帳簿については、国が検査することができると。それと同時に、私学は学科の増設なども届出で済んでいたんですね。そこで、そういう届出のあった計画とか、その他、法令に違反するようなときには変更を命じ、あるいは中止を勧告できるという規定を入れたんですね。つまり、公の

支配に服するという形に直したんです。それで、法制局も納得して、議員立法でやったわけです。

ところが、そのあとも、ずいぶんいろいろややこしい経緯があつて、最後の採決のときに、自民党の議員の一部が猛烈に反対しました。僕は今でも覚えていますが、ある議員は全く私学団体の使役でしたね。後ろに控えている者が「うん」と言つてくれないものだから、彼は「イエス」と言えないんですね。それで、議員立法の中心になつていた人が、「困っちゃったな。あの連中が反対して通らなかつたら、この法案は成り立たないし、（私学法の）五十九条の二つの規定は、公の支配に属するということの担保だから除くわけにはいかないし……」ということ、困つてしまつたわけです。

八木（徹雄）さんという愛媛県出身の文教族の方が、「困っちゃった、困っちゃった」と言うから、「八木さん、ここまで来たんだから、とにかくこれを通しましょうよ。この五十九条の実施は政令で定めるところにして、あとでまた相談することにしたらどうですか」と。この規定を削つたら、また憲法問題に戻つてしまう。そこで、「政令の定める日まで、これを実施しない」という規定を入れたんですよ。したら一応、その場は収まつたんですね。それで、やっと通つたんです。ほとぼりが冷めてから、あとで政令を出したんですけどね。

伊藤 政令ですか。

天城 はい。最後は、もう面子問題になつちゃつて……。そんな経緯が続きましたが、とにかく私学の助成問題というのは片付いているわけですよ。ですから、昭和四十五年に私学振興財団法と私学振興財団をつくり、憲法問題をクリアして、それで予算も幾らか取つて、その中に経常費も含めた。それが、一番大きな突破口だったんですね。

伊藤 結局、お金は私学振興財団を通じて配分しているわけですか。

天城 はい。文部省は直接やらないと言つて……。

伊藤 私学の応援団は、議員の中にかなり多いわけですか。

天城 当時は多いんですよ。今は、それほどではないですが……。それで予算のときには、プレッシャー・グループというよりも強談判で乗り込んで来て、僕等の机を叩いて怒るんですから、どうにもならないんですよ。しかも、Support without control ですからね。

伊藤 早稲田大学が多いんじゃないですか。

天城 いや、早稲田、慶応の連中は、がむしゃらにやりませんね（笑）。

伊藤 ほかに、やらせるわけですね。

天城 ええ。何人か知っていますが……。日大の古田重二良さんが隠然たる力を持っていました。日本大学会頭ですが、学長でもないし、理事長でもないんですね。まあ、理事長のような人なんでしょうけど。この人は事務職員から上がつて行った人で、とにかくやり手の学校経営者なんです。自分で、いろいろなことを考えてやる。私学で大きくなった学校は、「古田流」が多いんです。彼独自の学校経営なんですよ。一般に私学が補助金問題で騒いでいるときに、古田氏は「補助金なんて要らない」と言うんです。要するに、「国が余計なことを言わずに、自由においてくれたら、こんな面白い仕事はない」と言う。あとで大学紛争が激しくなつたときに、日大も大変だったんですがね。

小池 日大闘争がありましたね。

天城 彼も、あのときに失脚したんですが、その子分のような代議士がかなりいたんです。

そういうことで、これは戦後の文部省の仕事の中では、大きな出来事ですが、私学振興財団法と私学振興財団をつくることによって、長

年の憲法八十九条の「公の支配」について、一応の区切りをつけて解決したわけです。その後、私学の予算というのは、大きくなっています。

小池 この間の選挙の公約でも、橋本（龍太郎）さんが、「憲法改正のときには、八十九条も改正しなければならない」と言っていました。ですから、先生のなさったことは「解釈改憲」ということではないでしょうが、そういう形に近いものだという意識をお持ちだったんでしょうか。

天城 あの八十九条というのは、特別な理由で入ったんですね。宗教が最大の目標で、ほかに教育、慈善、博愛が対象になっているでしょう。戦時中に、民間団体に臨時軍事費をポンポン出して、それで軍国主義を煽らせたでしょう。宗教では、国家神道の問題がありましたね。それで、あんな規定が入って、少なくとも教育は身動きが取れなくなりました。

それからもう一つ、管理局の福利課に関するものでは、共済組合の問題で、国会によく喚び出されたんですよ。それは、公立学校共済組合の岐阜支部でやった仕事で、どうのこうのと言うんですね。共済組合には本部があって理事長がいるわけですが、その理事長でさえ岐阜の出身のことは、よく分らないんです。何か選挙に絡んだ問題なんですね。岐阜から出て来た社会党の代議士というのが日教組で、国会で岐阜県のことばかり言っているんですよ。共済組合の理事長が分からないことですから、こつちが分かるわけがありません。にも拘わらず、国会でくどくどとやられたことがあります。何を訊かれたって、分からないものは分からないですから……。そんなことで、あまりいい思い出はないんですよ（笑）。

伊藤 局長ですと、政府委員でしょっちゅう議会に喚び出されるということになりますか。

天城 そうですね。また、共済組合に大変関心が強く、よく知っている社会党の別の議員さんがいまして、いろいろと細かいことを訊くわけです。しかし、「保険計数」なんて、僕は分からないでしょう。それで、訳が分からない話を何度も持ち出されて、（質問が）終わったときに、その議員さんが「局長には無理だね」なんて言うので、「保険計数なんて、全く僕は分かりませんよ」と言って笑ったことがあるんです。そんなことで、（管理局長るときは）何だか政策にあまり関係のないことが多かったですね。

村上 先生は大学にベビーブーム世代の人たちが入ってくる、その少し前に管理局長をおやりになっていたわけですね。大学というのは、やはり私学が中心なわけですから、私立大学を拡張していくことが、一つの方策になっていたのではないかと思うんです。管理局長には私学振興のお仕事がありますので、その関連で何かお話はありますか。

天城 いや、それは私学というよりも、むしろ高等教育行政の話なんですね。

それで、前回、調査局時代の話で、僕は大事なことをお話ししなかったんです。実は、「中教審」の「三十八年の答申」と「四十六年の答申」とがあるんですね。これは「中教審」の議論の中で教育改革、特に大学改革が重要な部分で、それが後には中曽根内閣の「臨教審」に、みんなつながっているんです。ですから、これはどの時代というよりも、まとめてお話ししたほうがいいと思うんです。そして、その間に大学紛争があるでしょう。それに、学生運動もその一連の動きの中

ですから、そうした流れの中で話さないと、よく分からないと思うんです。ですから、調査局の企画課が担当していた「中教審」の問題にも、敢えて触れなかったんですね。

これとは別に、あのときは、「期待される人間像」なんていう大変変わった答申が出たんですね。

小池 高坂正顕さんですね。森戸辰男の文書の中にも、たくさん資料があります。

天城 あれはまた、天野貞祐さんの道徳論の話が関係するんです。あの話には、「京都哲学の四天王」と言われたグループの話があるんです。京都学派と言われた方々で、西谷啓治、高山岩男、鈴木成高、高坂正顕と、立派な哲学者が四人いるんです。大東亜共栄圏の構想にコミットしたとか言われて、戦後、みんなパージを食らうんですね。しかし、この人たちは天野先生の門下生で、京都学派と言われる非常に優秀な人たちですから、例えば高坂さんは復活してきて、東京学芸大学の学長をされたり……。その四人の中で、天野さんが一番評価していたのは、西谷啓治さんでしたね。

それはともかく、「期待される人間像」は高坂正顕さんが書いたんですが、あれは普通の答申と違うんですよ。個人が書き下ろしたんです。

伊藤 では、そのお話はまとめてお話しただけということですね。

天城 機会があれば、そのほうがいいんじゃないかと思います。

学術会議の影響力を排除する

村上 管理局長になる前のことで、お伺いしたいんですが……。かなり長く局長を務めた人がいらっしやる一方で、昭和四十年頃から、どんどん……どんどん替わっていらっしやいますよね。先生も一年くらいで、異動されている。

天城 管理局長からあとは、みんな一年ですね。嫌になっちゃった。調査局長は三年半（昭和三十七年一月～四十年七月）やりました。「少しゆっくりやらせてくれ」と言うんですが、どんどん替えられてしまっているんですよ。

伊藤 人事行政の仕方が変わったんですね。

天城 いや、そうでもないと思いますね。

伊藤 人繰りの問題ですか。

天城 これは、よく分からないですね。「何か政策の変更だったのか」と、質問事項に書いてありますね。

村上 例えば、内藤誉三郎さんは初中局長を五年やっていたり、小林行雄さんは管理局長を四年とか……。この方は大学学術局長を四年六カ月とか、かなり長いんですね。それから、斎藤正さんの社会教育局長も四年半です。

伊藤 一年というのは、幾らなんでも短いですね。

天城 だから、僕だけです、一年でチヨコチヨコと……。調査局長は三年半だからいいんですが、管理局も大学局も初中局も、ほとんど

一年でしょう。なぜ、こんなに飛ばされているのか分からない。僕は大学学術局長をやって、その次は初中局でしょう。僕は、「大学からドロップアウトして、幼稚園からやり直しをさせられているんだ」と、冗談を言っていましたがお蔭で幼稚園から大学まで全部やりました。

伊藤 やはり次官になるためのお勉強ですかね（笑）。

天城 なぜだか分かりませんが……。

村上 昭和三十年代は、そうだったような気がしますし、四十年以降は他の方も結構短いですね。先生のあと、同じようなキャリアを持っていたらやるのは宮地茂さんですが、彼も大体、短く短くですね。佐藤政権になったからとか、何かそういうことはありませんか。

天城 全然関係ないですね。これはおそらく、文部省のキャリア組の年次構成のバランスが取れていなかったんですね。

伊藤 局長になるくらいの人が多かったんですね。

天城 多かったのか、あるいは、あるときがボコッと空いてしまったので、しばらくやらせるとか。内藤さんは、ちよっと別なんですけど、小林行雄さんのグループで福田繁さんとか、あの時分の人は、みんな内務省から来ているんです。戦後、文部省に採用になった人たちと、上手く噛み合っていない点がありました。そんなことがあるんじゃないかと思えますね。小林行雄さんが、内務省から来た最後だったんじゃないかな。あの人は地方の学務課長をしていたんですね。その前には、そういう人がたくさんいたんですよ、稲田清助さんとかね。

だから、大達（茂雄）さんが文部大臣（昭和二十八年五月〜二十九年十二月）になったときに、大達さんが連れて来た人が二人とも内務官僚でしたね。それで、日教組が「文部官僚」と言ったら、大達さんが「文部官僚などというものはないよ」と言っていました。昔の内務

省は、あちこちの省の人材を供給していましたからね。特に戦後できた省は、ほとんど内務省から分離して行ったものですから、みんな内務官僚ですよ。

伊藤 それで、大学学術局長も、わずか一年ということ……（笑）。

村上 大学学術局長というのは、どういうお仕事だったんですか。

天城 どんな仕事って、大学と学術なんですよ（笑）。大学行政のほうはまだいいんですが、学術行政のほうは戦後、複雑な状況を経ているんです。

伊藤 日本学術会議も学術のほうですか。

天城 ええ、学術会議の問題も大きいんですよ。

伊藤 これは、文部省の所管ではないですね。

天城 僕は学術会議の成立の経緯は直接には知りませんが、とにかく最後に学術会議と衝突しちゃったものだから、大学学術局の一年間というのは、本当に大変だったんです。学術行政については、学術体制刷新委員会というのが昭和二十二年にできているんです。これは、各分野の研究者が民主的に選んだと言っていますが、百八人の委員で、こういう会議ができたんです。この委員会に対して、政府が、「戦後の新しい学術体制について立案してくれ」と、委嘱したと言っています。それで、学術体制刷新委員会がそれを引き受けて、議論の末、翌年、政府に報告書を出しているんです。そこに学術行政の骨子が出ているんですが……。どこが主体で、こういうことが行われたのか。やはり占領下の特殊事情でしょうね。

その中で中心的なことは、学術会議というものを法律でつくつてくれ、と。それは刷新委員会自身がそうなんですが、学術会議も民主的に選んだ会員で構成する、と。それで、「二百十人の委員で構成される」

とされていて、学術会議は「学者の国会だ」と言うんですね。それで選挙ですから、立候補して、学者が選ぶんです。学術会議の選挙人というのは、学者でなくちゃいけないんです。それで、「お前は選挙する資格がある」「被選挙人の資格もある」と言うわけですから、誰でもなれるんですね。しかも、それを二百十人、分野別に決める。それで、「学者の国会だ」と。

それと同時に、第二番目に「政府で学術会議の意見を連絡調整する責任官庁をつくれ」というのが出ているんです。その責任官庁として、総理府の外局に科学技術庁ができるんです。それから、総理府の附属機関として、科学技術会議というのができるんです。科学技術会議は、総理大臣を議長とした政府の責任機関官庁なんです。それで、本来は学術会議と、政府の各省の科学技術政策との連絡調整を図る機関ということで、科学技術庁ができたんですね。

ところが、このとき、また別の問題が起きました。大学で行っている学術研究との関係です。結局、このときから、人文科学と大学の研究は除くということになっているんです。この二つは、科学技術庁は所管していません。でも、文部省は大学を所管しているんだし、大学は教育研究というのが仕事なんだから、大学の研究については、文部省以外に新しい機関は要らないと言ったんです。しかし、各省にいろんな研究機関や研究所があったり、また科学技術を新しく振興しなきゃいけない。「戦争で負けたのは、科学技術が後れていたからだ」なんて言っている時代ですからね。いずれにしても、そういう形で学術会議ができれば、科学技術庁ができたんですね。

それから、学術新体制のときに、昔の帝国学士院も学術会議の傘下に入るということになったんです。入るんだけど、学者の榮譽機

関にして、碩学を顕彰する機関にすればいいんだ、と。それで、学術会議の傘下に入れたんですね。

それからもう一つ、これは後に私が非常に縁が深くなるんですが、日本学術振興会というのが文部省所管であつたんです。ここは御内帑金でできたくらい、非常に重視された学術振興機関だったんです。これは、まだ財団法人だったものですから、民間の学術奨励団体としてそのまま残すが、これも学術会議の傘下に入れる、と。それで、学術会議で全部抑えてしまうという、そういう案を出したんです。

それで、まず学士院が大変不満でした。学者の榮譽機関というのはいいけれども、選挙で出て来た委員の傘下に入っては、本来の趣旨に反するし、何も学術会議とは関係ない、と。それで、学士院の委員は互選で選ぶ。大学者がたくさんいたものですから、「独立する」と言つて、その後、別に法律を作つて、日本学士院として独立したんですね。

それから、日本学術振興会も、そうなんです。学術会議の傘下に入つても、責任者がいないんですからね。二百人の会議で、「学者の国会」であると言っても、具体的な責任者が誰だか分からない。だから、予算だつて、誰が取るのか分からないんです。それで、学術会議の事務局があつても、それは学術会議の世話をするだけですからね。ですから、学術会議という機関の性格は、終始分からなかったんです。私が局長のときに、「学振」を学術会議から引き剥がして独立させようと考えたんです。「学振」を特殊法人にして、法律を作ろうとしたんです。それで、学術会議と衝突したんですね。とにかく、すつたもんだして法律を作つて、国会に提出して、法律は成立しました。

それと、もう一つ。何でもかんでも学術会議だ、学術会議だと言っているんですが、学術会議は発案者もはっきりしないし、政策を実施

するための手段、組織がない。ただの会議ですからね。学術政策で何が重要かというプライオリティーを決められないんですね。むしろ一番大事な問題では、議論がぶつかって、なかなか決まらないんです。

かえって、みんなが無関心なものはスルスルと通ってしまっただけの度合いが分らないんですよ。それを文部省に持ってきて来ては、「これを制度化しろ、予算を取れ」と言うんです。そんなものは全体の学術政策から見ても、あまりにも部分的じゃないかということで、その後

伊藤 学術会議は、文部省と議論していただきます。

天城 何もないんです。

伊藤 制度的には何もないんですね。

天城 このときはね。

伊藤 しかし、予算は……。

天城 予算も関係ないんですよ。

伊藤 何かしようと思ったときの予算はどうなるんですか。

天城 学術会議は総理の直轄機関ですから、予算も別です。

伊藤 内閣に、というのは、具体的にはどういうことなんでしょうか。

天城 内閣の附属機関なんですから、言いたいことは内閣総理大臣に言ったらいいじゃないかということになるでしょう。しかし、内閣総理大臣も手足がない。それで、内閣に科学技術会議というのをつくって、学術会議の言うことだけではなくて、もっと広く日本の科学技術政策を考えよう、と。

科学技術会議と言うのは、何人かの委員で構成し、中には常勤の委員も入っているんです。そして、総理大臣が議長なんです。文部大臣と科学技術庁の長官と、あと通産省と、どこかの大臣がメンバーなん

です。今度、中央省庁の改編で科学技術総合会議となって、直属のスタッフが付いたんです。これまではスタッフがいなくて、科学技術庁が事務方の仕事をやっていたんですね。そのために、科学技術庁の意向が強いわけです。人文科学は除くとか、大学の研究は除くとかとなっているものだから、大学の研究に物が言えないということで、科学技術庁は歯痒いんですね。今度は一緒になりましたけどね(笑)。

そもそも出来方から言っても、どっちが良い悪いではないんですが、科学技術庁というのはプロジェクト中心で、トップダウン形式なんです。文部省は大学の先生たちの発意が基ですから、ボトムアップなんです。科学研究費を申請して、審査の結果、研究費がもらえる方式です。かつて、科学技術庁長官になった方が、「文部省には、あんなに科学研究費があるが、あれを科学技術庁に持って来たら、もっとよく使うよ」と。そう言うんです。そういう性格の違いというか、目的の違いがあるのです。今度の中央省庁の改編で合併しましたが、これからどうなるのか……。

伊藤 中和されるんでしょうかね(笑)。

天城 具体的なプロジェクト研究もあれば、研究者の自由な発想に基づく研究もありますからね。

伊藤 お互いに、いいところを取ればいいですけどね。

天城 今度は、科学技術総合会議ができました。あそこの議員も正式に任命されて、数が増えましたね。

伊藤 今度は、人文科学も入ったんですね。

天城 人文も入りましたし、社会科学も入っています。それで、その担当大臣も決まっているんですね。

伊藤 担当大臣が別に？

天城 担当大臣がいるんですよ。

伊藤 文部科学大臣ではなくて？

天城 それは、内閣にあるんですからね。そこで、科学技術基本計画を作るんです。具体的にどうするのかは、僕は知りませんが……。

伊藤 そうしますと、大学学術局というのは、なかなかやりにくいですね。

天城 その後、大学学術局は解体されて、高等教育局と学術国際局になっていました。今度は科学技術庁と一緒にあって、学術・科学技術について、三局ができたんです。科研費については、大学のイニシアチブを尊重するという制度が残っているんです。

伊藤 その科研費というのは、元々のものですね。

天城 組織の面では、学術会議ができて、それから学士院が独立して、日本学術振興会も特殊法人として独立した。

伊藤 特殊法人にするときは、先生が局長のときなんですね。

天城 ええ。この三つをやったのは、みんな私が局長のときです。学術会議の傘下に、みんな押し込められていたんです。それを引っ剥がしたんですね。それと、文部省に学術審議会をつくりました。

科研費か講座研究費か

伊藤 学術会議というのは、私どもから見ると、左翼が支配していて、共産党の外郭団体のような感じですよ。

天城 僕も、有力な人を何人か知っていますよ。

それから、もう一つ。文部省自身の学術行政のやり方が整っていませんでした。文部省に学術奨励審議会というのがあったんです。

伊藤 文部省の審議会ですね。

天城 ええ。これは、戦後の文部省設置法ができたときからあるんです。ところが、なぜ、こういうものをつくったのかは分からないんですが、分科会が最初は八つかな……。とにかく、分科会がテーマごとにあるんです。しかし、審議会全体の実体なんていうのは、ないんです。分科会を合わせたのが審議会というだけで、何が、どれだかは忘れてしまいました。実態はみんな分科会なんです。それで、学術全般に係る施策を総合的に審議したり、議論したりするという機能に欠けていたので、「これは、だらしがない」と思ったんです。私は会計課長をやったり、官房長をやりながら各局の仕事をみていて、当時の大学学術局で一番後れていたのが、この学術行政なんです。学術会議がいろんなことをやるので、掻き回されちゃうしね。

文部省の制度を見ると、学術奨励審議会というのは結局、「八岐大蛇」みたいで、名前だけなんです。それで、これは文部省自身の問題ですから、これを改革しよう、と。一つは学術会議との関係をきちりすること、二つは学術行政を総合的に扱う組織を、ちゃんとすること、この二つをやろうと思ったんです。これをやらなければ、国の学術行政は成り立たないと思って、これにチャレンジしたんです。ところが、学術会議から学術振興会を引っ剥がして特殊法人にするというのは文教政策で、特殊法人の法律を作らなければならぬものですから、文教委員会に掛かったんです。しかし、学術審議会は省庁内部の、組織の問題ですから、これは内閣委員会なんです。だから、同時に二つの委員会の仕事を抱えてしまったんですね。しかも、学術

会議が非常に政治的なものですから、社会党の委員が何人か学術会議の肩を持っていて、文教委員会で盛んに学術振興会の設置についてイチャモンを付けるんです。ですから、根回しをずいぶんやりました。結論としては通ったんですが、一方で学術奨励審議会を廃止して、新しく文部省に学術審議会をつくったわけです。これは、さっき言ったように、総合的に学術行政を検討するためのものです。こっちは内閣委員会に掛かっているものだから、学術会議の連中はあまり注意していなかったですね(笑)。学術審議会は、文部省内部の組織問題ですからね。

いずれにしても、学術会議との関係を綺麗にすることができました。学術会議自体が問題を持っていました。一部の左翼の連中が牛耳っていて、プロ化していましたね。学術会議の改組問題もあったんです。委員の選び方も問題でした。今は、一部の政治好きの連中がいなくなったので、以前とはだいぶ違うのではないですか。学術会議の事務局というのも、会議の運営のための経費しか持っていません。最初は、「日本の学者の国会だ」と言いましたが……。国際的にはICSU(国際学術連合会議)だとか、いろんな国際的な学術関係の団体があって、ある意味では日本学士院が日本の代表かも知れませんが、学士院は栄誉機関だから、そういう力を持っていません。

それから、「学振」に関連して、二つの問題がありました。一つは「学振」と学術会議の関連・関係で、二つは「学振」会長の人事です。一つは、「学術振興会が独立しても、学術振興会の仕事について、学術会議が物を申すような、監督できるような条文を入れる」と言うんです。「あなた方は『学者の国会だ』と言っているのに、文部省所管になった特殊法人に対等で意見を言うのはおかしい。意見を言うなら、文部

大臣に言うのが筋ではないですか」と言って、議論したんです。「学振」を傘下に入れていたときと同じように、監督しようとしたんです。二つは、「学術振興会の会長と理事長の人選については、文部大臣は学術会議の議長に相談しろ」と。

それで、「学振」が独立するときに、茅(誠司)さんを最初の会長にしたんです。理事長は吉識雅夫さんという工学の先生でした。その発令をする前に、僕は学術会議の議長の朝永(振一郎)さんと会って、「約束に従ってご連絡しますが、茅さんになってもらおうと思っています」と言ったら、猛反対なんです。皆さんも、ご存知でしょう。物理関係の中は、非常にデリケートだったんです。

伊藤 もう大丈夫でしょう。

天城 朝永さんは立派な学者ですが、最後は左翼に担がれてしまったんですね。それで、「茅さんは、怪しからん」と。それで、「事前に相談しろと言ったのに……」と言うので、「まだ、発令前です」と言ったら、「決めて来たんだらう」と言うんですよ。

当時、日本の物理学会が、米国のアジア財団から援助を受けたことで、「あれはアメリカの軍の金だ」と、非難の声が上がっていたんですね。そんなことで、茅さんに対して、「アメリカの手先になっている」とか何とかと批判していたのです。だけど、「学振」の会長は文部大臣に任命権があるわけだし、「だから事前に、ご相談しているんですよ」と。そのとき、学術会議に僕が行って相談するのもおかしいし、朝永さんに「文部省に来てくれ」と言うのも悪いし、私は前から朝永さんはよく知っているのので、「先生、ちょっと、どこかで会いして話しましょう」と連絡して、神田の学士会館で会ったんです。そしたら、朝永さんが文句を言うんですよ。学術会議との関係は、それが象徴的で

すね。

伊藤 相談はしたけれども、お決めたわけですね。

天城 もちろん、そうですね。同意がないと、いけないわけではないですからね。学術会議とは、そういう関係で終わりました。

もう一つは、学術行政を総合的に審議するために、昭和四十二年に学術審議会をつくったんですね。専門部会がどうしても必要なもので、その前の学術奨励審議会とは逆に、学術審議会という本体を定めて、その下に特別委員会を設けることにしたのです。

伊藤 審議会のほうを本（もと）にしたわけですね。

天城 例えば、科学研究費特別委員会とか、素粒子の研究所をつくるときには素粒子研究委員会とか、それを下に置いたんですね。それで、全体をまとめる学術審議会というものを、文部省設置法で規定したんですね。以前は、いろんな分科会の寄せ集めが審議会だったのを、引っこ繰り返したんですね。それで、「中教審」と同じように、学術関係の、文部大臣の最高の諮問機関としての位置付けをしたんですね。

それから、科研費というのは、これは戦前から重要な学術研究助成のための金だったんですね。しかし、今日のような科研費という形ではなくて、「学振」は学術振興のために御内帑金でできた機関で、ここを通じて研究費が出ていたんですね。それが学術会議の傘下に入ってしまったんです。文部省の直接責任がなくなってしまう、金もなくなってしまうんです。それで、もう一度、科研費をちゃんとやり直そうということで、文部省で科学研究費というのを作ったんですね。そして、新しい学術審議会の科研費分科会を充実しようということをやってきたんです。

ところが、理事長の吉識先生なんかは、「昔の『学振』のように、科

研費は文部省から『学振』に移してくださいよ」と、盛んに言ってきたんです。だけど、まだ特殊法人になったばかりでスタッフもないし、科研費というのは大学の研究に影響が及ぶものとして、当時の文部省全体としても、「まだ、これを手放すのは早い。もう少し充実してきてから……」ということでした。

それで、科研費の予算をいかにして増やすかというのは、文部省の学術行政の中では、最大の課題だったんですね。僕が会計課長のときもそうでしたし、本心に科研費を伸ばそう伸ばそうとして努力していたんですね。ところが、大学の予算との関係では、講座研究費があるんですね。講座当りの研究費と科研費と、共に金額が大きいので、予算折衝では最後に大蔵省と対立してしまうんです。大蔵省が、「科研費を増やすのか、講座当りの研究費を増やすのか」と迫るわけです。大蔵省から見れば、両方とも大きいですからね。結局は大学に行く研究費だから、「そんなに科研費にこだわるなら、講座研究費を削る」とか、「講座研究費が大事なら、科研費は増やせない」とか、そういう議論になってしまうんです。それで、非常に苦労したんですね。とにかく、我々も科研費を伸ばす努力をずっとしてきたし、講座研究費を伸ばすことにも努力をしたんです（笑）。

それから、科研費の審査方法については、選考委員にどういう人を選ぶかということが問題になりました。それについて、学術会議は、「科研費の選考委員の中に、学術会議推薦の委員を入れろ」と言うんです。従前は、科研費の審査員は、ほとんど学術会議の言いなりになっていたようです。それで、文部省で選ぶから、と。学術会議の推薦は考慮に入れるからということにして、公正な委員構成にしようと思いました。今では両方で相談してやっているんですが、選挙ではなくて、

「学研連」(〇〇学研究連絡委員会)の代表で推薦された委員ですからね。今はそんな大きなトラブルはありませんが、科研費というのは非常に大きな問題なんです。

伊藤 歴史学会なんかは、確かにまだ……。

小池 いや、まだ今でも多いですよ。三分の一、……もつといますからね。

伊藤 もつといますね。

天城 何ですか。

小池 歴史部会ですね。日本歴史協議会ですか。

天城 「学研連」は、関係の学者がつくっているのでしょうか。

小池 「学研連」は、左派が中心ですから……。

天城 確かに、歴史なんかはそのようですね。

伊藤 だから、僕なんか歴史で科研費をもらったことはないですよ。

小池 僕も、歴史では、あまりもらえないですね。政治学のほうからもらいます。

天城 伊藤さんの専門は歴史でしょう。

伊藤 歴史です。しかし、もらえないですね。

小池 先生は絶対にもらえないですね(笑)。

天城 実態をいろいろ見ていくと、たくさん問題があるんです。これを何とか正常な姿に戻したいと思って、その元になる「学振」と学術審議会の二つを、僕はこの一年間の間に改革したんです。

伊藤 これは大きな改革ですね。

天城 ええ。これについては自分でも、このときにやっておいて良かったと思いますね。あとで、僕は巡り巡って「学振」の理事長になっちゃったんですけどね(笑)。とにかく科学研究費は、その後「学振」

に移りました。「学振」の科研費は、もう一千億円ですからね。「未来開拓」だとか、COE (center of excellence) だとか、ああいう金がない。

伊藤 これがCOEですからね(笑)。

天城 それは、みんな受け皿をつくっておいたからですし、国際関係も「学振」の名前でやっていますからね。それで「学振」をつくるときに、学術振興会は研究所を持たない。人文科学も社会科学も自然科学も、全部平等に扱う。全国の大学と研究所を平等に扱い、自分の子供に当たるような研究所は持ちません、と。一つでも研究所を持つと、どうしても依怙最良してしまいますからね。それで、人文・社会・自然(科学)の差別はありません、と。それが大体、理解していただけたものですからね。

伊藤 「学振」には、我々は本当にいろいろな形で恩恵を被っておりますよ。

変貌する大学と学生運動

所澤 先生は、昭和三十七年に「国立大学における施設費及び研究費」という論文を書かれていますよね。この論文は『大学制度の再検討』という本に載っているということですが、昭和三十七年当時に管理費、設備費の増額を含む、いろいろな問題について先生が指摘されているということ、『東大百年史』(通史三の一九五―六頁)に引用されている載っていたんです。それは、先生が大学学術局長になる以前の論文で

すが……。

天城 それはもうずっと前で、会計課長のときでしょう。

所澤 ええ。昭和三十七年ですが、先生はそちらのほうで問題をずっと考えていらつしやったということでしょうか。

天城 その論文集というのは、蠟山政道さんの名前で出したものでしょう。

所澤 編者の名前は載っていないかったんですが、『大学制度の再検討』という書名でした。

天城 ええ。蠟山さんが中心になってやるということで、研究会を開いて、みんなで議論しました。私は、そういうところをやってくれないかと言われて、それで書いたんですね。

伊藤 それは私的な研究会ですか。

天城 もちろん、そうですよ。でも、おそらく、あれだけ視野の広い立場から大学問題を取り上げたのは、日本で初めてじゃないですか。それまでの大学論というのは、ほとんど教育学者で、哲学か歴史だけだったでしょう。でも、大学論を、ああいう広い立場で見たのは、さすがに蠟山先生ですね。あの先生は政治学者ですが、非常に視野が広がったんですね。あれは、エポックメイキングだったと思いますよ。東大の『百年史』に引用されているんですか。

所澤 ええ。引用というより、教官研究費等の裏付けとして挙がっています。

天城 あれは、いろんな人が書いています。実務をやった人が、ずいぶん書いていますよ。確か、名古屋大学の事務局長の須川さんも書いてあるんじゃないかな。あの人は、大学の経理に非常に詳しい人でしてね。

伊藤 これは蠟山先生のイニシアチブですか。

天城 そうですよ。これは、また別の機会があったらお話ししたいんですが、民主教育協会（IDE）という会がありましたね。これは、蠟山さんがつくった研究会なんですよ。

小池 IDEの話も、本当にお聞きしたいですね。

天城 僕は、いまIDEの会長なんですよ。初代が蠟山さんで、二代目が中山伊知郎さん、それで僕が三代目なんです。

小池 広島大学の大学改革のときには、IDEと言うと、金科玉条のように……（笑）。その会長に、ここでお会いするとは……。

天城 だから、僕が大学問題をずっとやってこられたのは、IDEのお蔭です。

それはさておき、大学学術局長時代は一年ちよつとで、まだ（話すべきことが）まとまっていらないんです。言わば、経過中の問題がたくさんあるんです。「能検テスト」の問題は、またあとでいたしますが、最後に学生運動の問題があるんですね。学生運動をどのように見ていたか、どういう施策をやっていたかということなんでしょうが、学生運動というのは長期に亘っているし、実は流れがたくさんあるんです。これも本当は、ある程度まとめてお話ししたほうがいいかなと思っています。というのは、大学問題を議論するときには、学生が一つの主体ですから、その問題を抜きにしては議論ができません。

伊藤 今は、学生運動というのはなくなつたようなものですかね。

天城 ええ。学生運動もいろいろな流れがありまして、特に各大学で学園紛争が起きたときには、ね。それで、今でも「革マル」の流れが動いているでしょう。

伊藤 時々やっていますね。もう五十歳くらいになって……。

小池 広大は中核派なんですよ。

天城 当時、三派ができましたが、あれは結局、民青との関係ですよ。それに、大学の先生の中にも民青系がいたりしたものですからね。あれは学生運動と考えていいのかどうか。安保と絡み合ったり……。それで、学生運動を大学の問題として見ていくと、学生が主体になって行動すること自体は、別に悪いことではないんですね。だけど、いわゆる政治闘争みたいものが入って来ちゃったのは、一つにはやはり授業料の値上げ問題ですね。最初は、慶応と早稲田ですよ。慶応、早稲田、中央、みんなそうでしょう。それから、学寮や学生会館の問題ですね。その管理を巡って、学生が「自分たちの自由にさせろ」と言うんです。

そういったことがきっかけで、そのうちに、いろんな大学の問題を巻き込んだり、あるいは社会の問題を巻き込んでしまうんですね。東大の紛争にしても、「医学部の学生の処分を撤回しろ」と言う。あれが、全学部に広がってしまったんですね。だから、理屈になれば何でもいんですよ。それで、総理訪米阻止・安保反対……。安保も半分巻き込まれて、何が純粹の学生運動かということが、途中で分からなくなってしまうんです。

それで、民青が一番巧妙ですからね。あの間も、ほかの派は各派に分かれて内ゲバしながら分裂しちゃってね。それで、大学からはみ出て、社会に出て行ったでしょう。民青だけです、のうのうとして学内を支配しているのは……。それから、もう一つは創価学会ですね。

ある大学の話ですが、三派を追い出したら、あとどこが支配するか、と。民青が実権を握ると思ったら、そうじゃない。「今度、大学を支配するのは創価学会ですよ」と言われた。当時、そういう大学もあった

んです。だから学生運動というのは、実態も複雑ですし、見方によって違うんですね。

それで、私が大学学術局長のときのこと一言申し上げておきますが、国立大学の学生部長会議というのを毎年、文部省でやるんですよ。学長会議もありますが、学生部長会議というのが、また別にあるんです。これは大学学術局長が中心になってやるんですが、学生運動がいろいろ起きてきているし、結局は代々の大学学術局長が「しつかりやつてくれ」ということで、学生部長に発破を掛けていたんです。だから、学生部長というのは、学生から見ると、「あれは文部省の手先だ」なんて言われるようになってちやうんです。どうしても、取り締まりをしているように見えちゃう。そういう状況で、学生部長は大変お気の毒なんですね。

その学生部長会議で、私は学生問題よりも、大学自体の変貌についてお話ししました。——今日、政治的な動きは別としても、大学自体が非常に変貌している。従来のようなアカデミック・コミュニケーションがだんだん変貌している。それは学問の進歩とか、学生の大衆化とかに関連して変化しつつあるのだから、大学の実態をよく見て、大学全体として組織の運営に気を配らないといけないと思う。学生部だけが、学生対策をやっている時代ではないです。学部、学科は素より、大学全体が学生の教育と指導に真剣に取り組むことが一番の根本で、学生部長に学生取り締まりのような責任を負わせても、どうにもなりませんと言ったんです。

そしたら、学生部長はびっくりしちゃった。また新しい局長から発破を掛けられると思ったら、そうじゃないので、学生部長の皆さんから私は歓迎されたんですよ。——このことは学長会議でも申し上げた

し、学生部長さんも責任者だからやっていただきたいんだけど、大学全体が気を配らないと、今の学生問題の基本は解決しません、と。学生を、どう大学として管理するかという前に、どう教育するかということを考えないといけない。大学という一つの学園の中では、責任はやはり大学にあるんだ、と。それを、学生部長だけに任せっ放しでは駄目じゃないか、という話をしたんです。

それが実は、あとで私がIDEに参加するようになった一つの理由なんですよ(笑)。学生問題については、蠟山先生にも非常によく理解していただいたものだから……。

伊藤 大学社会というのは非常に厄介で、学生の運動を支持する先生がたくさんおられますので、教授会などは全く野天でやっているようなもので、一時間も経たないうちに、全部、学生の側に内容が分かってしまう(笑)。

天城 本場にそうですよ。どこに敵がいるのか分からないんですから。教授会や評議会で、こういうことを決めたと言ったら、すぐに学生側に伝わっているんですね。学生を校内に入れないために、門を閉めて守衛が頑張っていたら、先生が中から来て、その守衛を引き離して学生を入れようとする。そういうグループもありましたし、本当にあのときは、どっちが敵か味方か分からないということがたくさんありました。

だから、大学全体として考えなきゃいかん、と。それで、過激化した学生は結局、行き場所がなくなつて、大学から出て巷に散乱して、暴徒になってしまったんですね。浅間山荘事件(昭和四十七年二月)なんかも、そうでしょう。

伊藤 新宿の騒乱事件(昭和四十三年十月)のときも、彼らは街頭に

出ましたからね。

天城 赤軍派なんかもね、あんな連中まで出て来てしまった。

伊藤 でも、その拠点は大学にあったわけですからね。

天城 大学というのは、彼らにとつて居心地のいいところだと言うんですよ。自分の大学で活動している連中が、どの学生か分からないです。一番穏便で、何事も無い学校に、いろんな学生が集まって来ちゃう。東大の安田講堂事件(昭和四十四年一月)のときも、東大の学生よりも他の大学の学生のほうが多いんですからね。

伊藤 そうなんです。東大の学生は、みんな逃げちゃったんですから(笑)。

天城 上智大学なんか、かわいそうでしたよ。上智もずいぶん狙われたんですが、あそこもねぐらになってしまった。国会に出撃するの、どこに行くのも便利だ、と。だから、上智はほとんど他の学生によって占拠された。

そんな具合で、大学がきちつとしない限り、やりようがないんですね。それで、できないものを、「大学の自治だ」とか、「警察官を入れるな」とか言っているものだから……。

伊藤 大体、執行体制というのが大学にないわけですからね。

天城 だから、アメリカの大学自治じゃないけれども、本当に学生を取り締まるなら、ユニバーシティ・ポリスを持たなきゃ駄目ですよ。それは警察官ではありませんが、力を以て物理的に学生を排除するという、そういうポリスがアメリカにはちゃんといるんですから。

伊藤 当時も、相当議論になりましたけどね。

天城 大学の先生は人がいいから、学生に取り込まれちゃってね。東大の文学部長の林(健太郎)さんは、一週間くらい閉じ込められたで

しよう。

伊藤 あの時きも内通している者がいるわけですから、どうしようもないんですね。

天城 あのとときは、いろんなエピソードがありますが、本当に大学の先生というのは人がいいというのか、世間知らずというのか……。

駒場が荒らされたときに、駒場の学生部長が、「大学には何も備えない」と言うんですね。「どうしていいか分からない」と言うんですね。大きな声で呼び掛けるにも、マイクロフォンがない。学内を動き回るにも、自転車がないと言っていましたよ（笑）。学生があっちへ動き、こっちへ動きしても、それを追い掛ける自転車もないし、呼び掛けようと思っても、マイクがない。大学は何も準備がないと言っていました、そんな調子ですからね。

伊藤 まあ、あったって、彼らに奪われるのが関の山ですよ（笑）。

それで、これについては、またまとめてお話しただくということですね。

天城 「中教審」では大学関係がずいぶんありますし、学生運動や大学紛争については、最後に臨時措置法という法律を作らうでしょう。その流れも、まとめてお話しさせていただきたいと思っています。

自己増殖する研究所

所澤 当時、大学の附置研究所がいろいろとつくられていますね。そのリストを『東大百年史』（通史三の三七―二頁）で見たんです。昭

和四十二年につくられている大学の附置研究所は、京都大学の霊長類研究所、新潟大学の脳研究所、東大の医科学研究所、京都大学の結核胸部疾患研究所、金沢大学のがん研究所、長崎大学の熱帯医学研究所で、生物系や医学系の附置研究所が、先生が関わっていらつしやるときに一気にできているんです。これは、何か特別な背景があつたんでしょうか。

天城 それは、四十二年ですか。

所澤 ええ。

天城 大学の研究というのは、戦後、いろいろと進められているんだけれども、その頃、一つの研究所をつくれるくらいに整ってきたんですね。それから医学の関係では、その時分、結核が減少してきて――結核研究所はあちこちにあつたんですが――ほとんど、このときに改組、転換しているんです。

それから、あとは何でしたか。

所澤 長崎大学の熱帯医学研究所と、新潟大学の脳研究所。それから京都大学の霊長類研究所。京都大学の霊長類研究所は、ちよつと特殊なものですから、面白いかも知れませんが……。

天城 京都大学の霊長類研究所は、研究者の長い努力がありました。

これは非常に面白い話ですが、舞台はアフリカですよ。京大の研究者がたくさんアフリカに行きましたし、霊長類研究所から、だんだん発展していった、今はアフリカ研究所もできているでしょう。それから、長崎大学の熱帯医学研究所も独特なんです、初めは個々の先生が関心を持って研究していたんですね。それが、日本の学術の国際展開が広まってきて、今で言えばJICAの仕事みたいなもので、海外に歩いていたんです。ですから、大学の国際的な活動、交流問題と関連

して出て来ているんですね。

伊藤 研究所と学部との関係というの、なかなか複雑なものがあるでしょう。だから、必ずしも大学の学部が研究所の設立に賛成しているとは限らないですね。

天城 学部から見ると、研究所というのは、いささか鬼っ子なんです。あるいは、学部からはみ出した人たちがつくったところもあるんですよ。それから、むしろ学会全体の動きがそういう方向になっていって、「研究所をつくりたいんだけど、どこかで世話してくれないか」ということで、ある大学に研究所をつくったとか、いろんな流れがあるんですよ。

ちよつと余談ですが、研究所と大学の関係で一番問題なのは、「研究所の先生は、一体何だ？」ということなんです。大学ですから、みんな教授なんですよ。そうすると、授業を持つのか持たないのか。別の言い方をする、先生というのは後継者を養成したいんです。それで、最初に起きた問題は、研究所の先生が大学院の学生を受け持つか持たないかということでした。結局、大学院の学生を持てるようになったのです。

ところが、研究所がどんどん自己増殖して、大学で持ち切れなくなっちゃうんですよ。そうすると、大学から離れて、共同利用の研究所になつていく。東大なんていうのは、一番多いときには十二学部十四研究所ですよ。その十四研究所からも、みんな大学の評議委員会に出るんですよ。しかし、実態は東京大学と関係ないでしょう。しかも、それぞれに運営委員会なんかがあつて、他の大学の研究者がその運営に当たっているんですからね。ただ東大とくっ付いているだけで、予算のときは東大を通してというだけなんです。それで、いろんな問題

が起きて、共同利用研究所というのが出て来たんです。これは、大学と同じ扱いです。やがてそれが発展して、つまり共同利用研究所が集まって大学院を持つというような形もできてしまったんですね。岡崎が最初ですね。あれは研究所が集まって、大学院をつくった。

小池 岡崎国立共同研究機構ですね。

天城 長倉（三郎）さんが所長をやつて、それで学長になつちやつたでしょう。そういう学術関係の流れというのは、非常に面白いですよ。

さらに、国際的な問題も絡んできます。筑波の高エネルギー加速器研究機構なんか、あんなにでっかいものをつくつて、一体どうするんだ、と。いま核融合が国際的に大きな問題になっているでしょう。それから、宇宙関係は東大にもあるし、科学技術庁にもあるわけです。また、海洋も、科学技術庁に海洋研究所があるんですよ。東大にも海洋研究所があるでしょう。そういうことで、一緒になつてみたら、両方に宇宙もあるし、海洋もあるんですよ。これらは、おそらく統合して再編成でしょう。

エネルギー問題では、一番大きいのは原子力と核融合でしょうね。それから、筑波の高エネルギー研究所は、今は放射線の利用に関する研究のほうが多くなつたんですね。いずれにしても、僕は学術行政というものに非常に興味があるんですよ。

所澤 附置研究所に関して、予算の概算要求をするときには、大学から大学学術局に上がってくるわけですが、そのときに審査をする母体はどこにあったんですか。大学の先生たちが直接、局長レベルのところを動かしていくものだったんでしょうか。

天城 いや、一応は大学の予算はまとめて、大学から申請しますから、こちらは大学の事務局長に訊くんです。少し複雑になってくると、専

門の先生たちが、それぞれ別に説明に来ます。それで、我々が訊いたものを、また大蔵省に説明するわけでしよう。これも、また申し訳ないんだけど、大蔵省に先生たちに行ってもらうことがあるんです。原子核物理と原子力とが、こんがらがっちゃったことがあります。小池 基礎研究と応用研究の違いみたいな形ですか。

天城 基礎と応用なんて言っても、駄目なんです。根本的に研究方法が違うということを、大蔵省に分からせないといけない。それで、大阪大学に菊地（正士）先生という物理学者がいて、その先生に「大蔵省に説明してやってくれませんか」と言っただけです。そしたら、「何でもないですよ。我々がやっている原子核研究所というのは、物質の素は何かということの研究しているんですよ。一方、原子力研究所というのは、やかんをかけて、お湯を沸かすでしょう、あれと同じですよ。あつちがエネルギー問題ですからね。ところが、原子核研究所というのは、物質の素を決める研究をするんだから、全然違うんですよ」と。「一緒にやったらいいだろう」という話だったものですから、菊地先生の説明でお仕舞になったんですね。まあ、そんなこともずいぶんありました。

それから、コンピュータというのが、初めは分からないんです。なぜ、コンピュータで計算ができるのか。これはやっぱり、デジタルの元の原理を、ちゃんと理解しなきゃいけないんですね。それで、これもある先生に、「どうしてコンピュータで計算して、一足す一が二となるのか、あちこちで説明しなきゃいけないんです」と言っただけです。その先生は、「いいですよ、算盤みたいなものを作りましょうか」と。電気ですから、プラスとマイナスだけなんです。一足す一なんです。数字は1と0しかないんです。何をやってたって、電子計算機というの

は足し算しかできないんですから、一番馬鹿な機械だと言うんですよ。人間なら疲れて、飽きてできないことを、何遍でも繰り返してくれる。そして、幾らでも速くやれる。それだけです。と。そういうことを、その先生は非常に簡明に、ちゃんと説明してくれるんですよ。

伊藤 今日「能検」の問題が残りましたので、別のときにお話ししていただけです。

天城 「能検」については、「能検」だけ話しても駄目ですよ。入試問題の、ほんの一部分ですからね。

小池 これは、「中教審」のお話の中に埋め込む形にしますか。

天城 大学改革の問題のときに、一緒にお話ししましょう。

伊藤 また、「そもそも……」から始まると大変ですからね。次回は初中局長と次官時代について、これはザッと触ってください。

天城 経歴に沿ってね。それで、そのあとで残ったものですね。

伊藤 取り敢えず、「中教審」ですね。それで、「中教審」は「そもそも……」から話していただいたほうがいいと思うんです。

天城 「中教審」と、それから大学局長で一年だから、全部話せないんだけど、大学問題がずっとあるんですよ、さっきのIDEにしろ……。

小池 IDEにつながっているというのは、なかなか面白いですね。

天城 IDEで、僕はずいぶん大学の先生と、いろいろお知り合いになったし、いわゆる教育学者でない方々と大学問題をいろいろやってきたでしょう。蠟山先生も中山さんも、教育学者ではないですからね。あと、自然科学の中からも、ずいぶん熱心な人がたくさん出て来ました。

伊藤 まあ、教育学者が教育の専門というわけではありませんからね。

天城 前回も、ちょっとお話ししましたが、教育学は「ベダゴジー」と言うでしょう。「ベダゴジー」というのは、ジャリ（子供）の教育ですから、大人のことは分らないんですね。それで、世界成人教育会議に出たときに、初めて「アンダラゴジー」なんていう言葉を聞いて、びっくりしましたからね。

伊藤 私もこの前、初めて聞きました（笑）。

天城 だから、いま生涯学習なんて言っていますが、みんな実体が分からないんですね。「社会教育」という言葉と概念があるのは、日本だけでしょう。外国では Adult education と言ったり、Continuing education でしょう。

伊藤 各市町村でいろいろなことをやっていますが、カルチャー・センターみたいな感じですよ。

所澤 教育学部で、生涯教育を専攻する学生をつくるというふうな話があるわけですが、卒業してどんな仕事をするのかということになると、仕事は事実上ないんじゃないかと。教育委員会に勤めても、実際に生涯教育の実態はないわけですよ。掛け声ばかりで、実体が付いて行かないんです。

天城 だから、あれは一種の包括的な概念ですよ。

所澤 大学で生涯教育センターをつくって、実際に何をやっているかというところ、講習会を開くとか、公開講座を開くとか、そういうことになっちゃうんですね。担当の先生は、その調整役をやるというだけで、ほかは何もない、と。

伊藤 しかし、いま電車に乗っていると、いろんな大学の公開講座の広告がいっぱい出ているね。

所澤 私学で本格的にやっているところは、経営戦略と収入源を求め

るということで、なかなか面白いかも知れないんですが、今の国立大学の性格では、ああいうふうに展開できないんじゃないかと感じますね。

天城 図書館、博物館、美術館では、本当のキュレーターが足りないんですよ。学芸員と言っていますが……。

伊藤 学芸員の資格を持っている人は、たくさんいるんですよ。

小池 僕も、そうです（笑）。何の役にも立っていませんけどね。

伊藤 だから、大学で図書館司書と学芸員の資格と、それから教職と……。

小池 それからアーキビストですね。

伊藤 アーキビストは、非常に少ないんだよね。

小池 資格がないですからね。

伊藤 それで、「あなたは、本当にそういうものになりたいのか？」と訊くと、「いや、親が何か大学に行ったら、資格を取れ」と。今は教職なんて取っても、教員になる可能性は全然ないですよ。でも、とにかく資格を持っているということが、親の払った授業料に対する対価だということですからね。だから、今、みんないろいろ資格を取っていますよ。

天城 だから、日本のライブラリーというのは、そういう意味では機能を十分に果たしていないんですね。

所澤 図書館司書の資格が易し過ぎるんですね。凄く簡単なんですよ。

天城 あれは、講習会で済んじゃうんですね。

所澤 あんなに易しくしちゃうと、結局、取っても取らなくても同じですからね。それで、大学の場合は図書館に配属された事務職員が数年勤めていると、講習会を受けて、みんな司書になっちゃうんですね。

小池 ただ、図書館情報大学みたいな大学もできましたので、変わってくるとは思うんですが……。

伊藤 とにかく図書館は、今のところ巨大な書庫ですからね。書庫以上のものではない。だから、僕は国会図書館長に、もっと情報発信の基地にならなきゃ駄目だと言っくんですよ。

天城 今のままだったら、インフォメーション・テクノロジーをやっていたら、どこでも利用できますからね。

所澤 台湾から来た留学生が言っていたんですが、卒業して帰ると、そのあと日本の大学の図書館は研究資料を求めても、全く提供してくれない、と。アメリカの大学は、自分の卒業した大学の図書館がほとんどん提供してくれる、と。その違いがどこから出てくるかというのが問題で、日本の大学の図書館は、それを仕事だと思っていないんですね。

伊藤 サービスだと思っていないから。

小池 だから、広島大学でも、いま情報機関の中に図書館を位置付けようとしているんです。ところが、図書館のほうで抵抗するんですよ。仕事が増えちゃうから。

伊藤 それは、そうですね。仕事が増えるし、人は少ないし、登録業務だつて多いし……。

小池 それを、どのように一体化させていくか……。

伊藤 大学の中での図書館の位置付けが、そもそも問題なんですよ。

小池 上は高いんですよ、指定職ですから。

伊藤 それは、そうですね。

天城 大学の幹部と言うと、学生部長と図書館長が入っているんですよ。

伊藤 そう言うてはあれですが、学生部長は昔と違って、楽な仕事になりましたね。

天城 でも、図書館長は大学では幹部でしょう。

伊藤 幹部ですよ。幹部ですけど、お金がないんですね（笑）。

小池 名誉職ですよ。

天城 京都大学なんて、代々、総長は学生部長をやった人ですね。

小池 広大では、もう教授職としての学生部長というのはないんですよ。

所澤 今は事務局に一元化されていますね。

天城 学生部長というのは、以前は事務局から外れてあったんですね。

伊藤 元々違うんですからね。

所澤 舎監から始まっているんですね。

天城 だから、学生部長はみんな教官ですから、戦前は学生主事と言ったんですね。

伊藤 主事というのは、いい言葉ですね。

小池 先生の場合は、資格問題はどうかだったんですか。

天城 大学では資格を作っても、みんな教授よりも低く見られちゃって駄目なんですね。

小池 東海大学の場合には資格取得センターというのがあって、ここに教員とか司書とか、全部の資格取得を一元化してあるんです。そのほうが各学部から取りやすい。しかし、試験が非常に厳しいものですから、取得するのも難しいわけです。それで、広大なんかも、そういうふうに教員養成も全部、資格取得センターにしてしまえば、一元化できるし、対外的にも、いろんな資格だけを取りたいという人も集まるんじゃないか、と。そういう案を作ったのですが……。

伊藤 まず、教育学部が反対だな。

小池 それで、国立大学では設置できないということだ……。

天城 でも、広島大学はいろんなものをつくったじゃないですか。

小池 でも、ほとんど研究センターなんですわね。

天城 大学教育センターみたいなもの？

小池 資格取得センターみたいな、対外サービスのセンターがないんですわね。それをつくって一元化してしまえば、今あるような蛸足ではなくて、もつと一元化されて、教員も圧縮していいんじゃないかという案を、大学計画委員会の先生に頼まれて作って出したんですが、一発でハネられましたわね。

天城 大学は、教官と事務官だけでは駄目なんだな。「両生類」と言うわけではないけれども、その中間が抜けてしまうんですわね。

小池 そうなんですわね。だから、MP——マネージング・プロフェッサー制度を入れないと、僕なんかもそうなんですけど、もう大学の先生というのは、行政をやらされると辛いんですよ。

天城 雑用、と思ってるのでしょうか。

小池 雑用なんですよ。それで、研究教育があつて、その上で行政をやらされると……。

所澤 いま地方の国立大学では、助手の数がほとんどゼロに近づいていますので、旧帝大の場合は助手にやらせている仕事は全部、教授、助教授に来るんですわね。

小池 教授が働かないから、助教授にワーキングを作らせて、ワーキングの答申を出せなんて……。

天城 名前は、みんなインフレなんですわね。

伊藤 名前がインフレで……（笑）。

小池 減らしてしまえば、本当に気が楽なんですけどわね。

天城 それで、助手のほかに教務職員なんていうのをつくって、あれも曖昧になっちゃったしわね。

所澤 いま教務補佐員と言うんですわね。

伊藤 我々はお世話になってますよ。

小池 先生は使うほうだからいいけど、僕は似たようなものだから辛いんですよ（笑）。

天城 政策研究院はどうなんですか。職員構成は上手くいっていますか。

伊藤 図書館の職員が足りないんで、かなり外注に……。

天城 図書館長をやっておられるんですか。

伊藤 はい。

天城 それで、そう思うんですわね。

伊藤 でも、どんな退官になっていきますので……。

天城 公立の図書館の話を聞くと、気の利いたアルバイトを使ったほうが、ずっといいと言いますよ。

伊藤 いやあ、本当にそうですよ。

天城 慣れてくると、とてもいい、と言っていました。

伊藤 募集すると、たくさん人が集まりますしわね。

小池 出納とかも、本当に外注にしたほうがいいですね。

伊藤 では、終わりにしましょう。どうもありがとうございました。

〈以上〉

天 城 勲
オーラルヒストリー
第10回

[2001 年 6 月 5 日 14:05～16:30]

〔インタビュアー〕

伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

小池聖一(広島大学助教授)

所澤 潤(群馬大学助教授)

村上浩昭(政策研究大学院大学リサーチ・アシスタント)

(於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター)

学習指導要領の全面改訂

伊藤 それでは、始めさせていただきます。

天城 質問要項を拝見しましたが、どこからこんな問題を見つけてきたのかと思うようなものも出ていますね（笑）。

伊藤 これは一つのきっかけですから、あまりこだわらないで、先生がお話しになりやすいところからお話しします。

天城 学習指導要領の改訂についての質問が一番先にあるんですが、これは私の初中局から大学局にかけてのことを言っているんでしょうね。これも長い歴史があつて、その前の段階をお話ししないと、お分かりいただけないと思います。例えば、六・三制という学校制度の枠組みがありますが、その中身については全て学習指導要領に規定されているんです。その改訂の仕事が、たまたまこの時期にあつたということです。若干その流れをお話ししないと、このときの改訂の意味も分からないと思うので、まずそこをお話しします。

六・三・三という学校制度は一応、法律で決まっていますが、そのカリキュラム——教育課程の基準というのには、「文部大臣の定める学習指導要領の基準による」ということが法律で決まっています。

伊藤 それは、最初から法律で決まっているわけではないですよ。

天城 学校教育法で決まっているんですよ。

伊藤 学校教育法に入れる前、というのがあるんじゃないですか。

天城 新しい学校制度——六・三制を定めた学校教育法の中で、「教育

課程の基準は、文部大臣の定める学習指導要領の基準による」となっているんです。従つて、学習指導要領の基準が六・三制の中身を決めることになるし、時代の変化に従つて、時々これを変えなければならなくなるのです。これが、戦後の新教育の一つの流れなんですね。

それで、学校教育法で六・三制ができたのが昭和二十二年ですから、戦後早々の、しかも占領下で、大変慌しく発足したのです。そういった状況の中で、新しい学習指導要領の目玉は社会科であり、同時に修身、国史、地理の廃止なんですね。それで、最初の指導要領というのは、確か「試案」と書いてあるんです。それは、まだ早々だという意味と、片方で教育委員会法ができるという前提と、将来、地方分権にしたら、学習指導要領は地方で決めるという考えがあつたのです。つまり、「文部大臣の定める」という言葉が一応入っているんだけど、それも変わるかも知れない。それから、文部省としても、司令部に言われているから（笑）、最終版ではないという意味もあつて、いずれ直そうという気持ちがあつたので、「試案」という形で出したわけです。

これは、大学設置基準もそうなんです。占領下でやったことは直さなければならぬという前提があるものですから、最初はある「試案」なんです。

伊藤 「試案」でも、法に規定された拘束力を持つものですよ。

天城 「試案」で出したもの以外にないわけですから、これに則つてやつてもらつたわけですよ。

それで、最大の問題は社会科をどうするかということで、それには道徳教育の問題があつたのです。修身を廃止し、地理と歴史はやらない。全部、社会科にしたんです。近隣社会——自分の周りからだんだん広がっていくという社会科の考え方、これには最初から批判があつた

んです。ここでは社会科が中心ですが、さらに自由研究というのがあったりして、いろんなことが自由にできるようになっていたんです。だから、あの当時、「六・三制、野球ばかりが強くなり」なんて言われたでしょう。

とにかく、アメリカ式の経験学習を中心とした社会科ですから、社会科の授業は「ごっこ遊び」だと言われたり、かなり批判があったので、早くから、改訂しなければならぬという気運があったんです。そこで、道德教育の問題を真つ先にやって、昭和二十六年には文部省が「道德教育振興方策」というものを出しています。つまり、「道德教育を、もっとちゃんとやろうじゃないか」という意見を出して、手引き書なども発表しています。地理・歴史については、同じ社会科の中でも、教育としての位置付けをはっきりさせようとしているんです。

結局、独立後の昭和三十三年に学習指導要領の全面改訂を行うわけです。そのときに幾つかの柱があつて、その一つは、カリキュラムが構造的ではなかったので、今度は各教科と道德・特別活動・学校行事という四つの領域にして、年間の授業時数の最低を示したわけです。それから、学習指導要領は、さっき言ったように「試案」だったんですが、今度は文部省が正式に告示することにしたんです。それで、「野球ばかりが強くなり」とか「ごっこ遊び」とかと言われていたことに対して、全体を経験的なカリキュラムから系統的な学習に作り直そうというのが、このときの狙いだったんです。

伊藤 最初の指導要領のときには、ずいぶん数学などの達成度を下げましたよね。私は、昭和二十二年の頃は中学生でしたが、中学一年生から二年生になっても同じことをやって、三年生になっても、また同じ勉強をやっていた時期がございました。

天城 私も細かいことは覚えていませんが、確かにあの時分は基準を下げてしまったんですね。それまで小学校義務教育六年でやっていたものを、九年間でやればいいという、それくらいの中身になってしまったんです。

それで、この改訂では「教科」のほかに、「道德」と「特活」と「学校行事」を加えた四つの領域を、はっきり分けて構造化したんです。二十二年のときは全体が構造的ではなくて、みんなゴチャゴチャに入っていたんです。例えば、国語、社会、算数、理科、音楽、図画工作、家庭、体育、自由研究と並んでいて、それが本当の教科学習になるのか、どれが特別活動になるのか分からなかったんです。

伊藤 「特活」というのは、何なんですか。

天城 教科外ということで、道德は教科ではないから別として、特別教育活動という形にしました。それから、学校行事は運動会とか遠足とかで、これはみんなカリキュラムの中に入っているものですね。要するに、教科の知的な学習のほかに、関連する活動を特別活動と言ったんです。

これは、最初の学習指導要領が昭和二十二年にできて、それから十年経った三十三年の改訂の時のことです。もう一つ、昭和三十三年から十年経って、昭和四十三年にまた全面改訂をしたんです。ちょうどこのとき、私は初中局長（昭和四十二年十月～四十四年一月）でした。

伊藤 これも全面改訂なんですか。

天城 全面改訂です。二十二年に新教育制度が始まって、十年経って、いろいろなことが変化した。特に、敗戦から日本が立ち直って、高度成長期に入り、戦後は既に終わったという時代でしょう。さらに十年

経って、科学技術がだんだん尊重されてくるとか、経済発展は科学技術を基本にするとか、そして何よりも高等学校の進学率がどんどん増えてきて、環境変化が非常に大きかったんです。

それと同時に、先ほど伊藤さんが言われたように、カリキュラムの程度が低いということで、各教科について「これもあれも、やれ」という要望が非常に強かったわけです。実は、この十年間、いろいろな部分改正があるんです。カリキュラムの、ある部分が大変膨らんでしまったり、あるいは細かくなり過ぎてしまって、全体のバランスが取れていないんです。それで、このときに教育課程を精選しなければならぬのではないかと、と。そして、全体が構造的になつていなければいけないとか、「あれもこれも教えろ」と言うのではなく、基礎・基本を重視すべきことが強く言われまして、これが改正のポイントになつていたんです。

それについては、今でも同じことが言われていますが、もっと構造的に、学問的に、系統的に、カリキュラムを作ると同時に、判断力や創造力、意志、感性に関わるものも重視しなければならないということが反省として出て来ていました。それまで最低の年間授業日数を示してあったものを、今度はそれを年間の授業日数の標準にしよう、と。

それで全体を構造化していくと、前は四領域でしたが、今度は各「教科」のほかに、「道徳」と「特活」という三つの領域にしたんです。学校行事は特別活動の中に入れました。そういうふうに全体を構造化すること、教育課程については、いろいろ研究しなければならぬので、そのための特例を設けて実験する必要がある、と。それで、特例を認める道を開いたのです。さらに、カリキュラム研究のために、研究指定校制度をやることにしました。

それと同時に、教育条件の整備を考えなければならないということで、学級編成や教員定数、学校で使う教材の基準をどうするかなど、学習指導要領の基準の改訂と併せて、教育条件の整備も一緒にやっていったわけです。占領下で六・三制という制度はできたけれども、制度の本身や実施のための諸条件はまだ整っていないだったので、逐次やってきたんですが、ここで全面的に見直しをやったわけです。

それから、カリキュラムの実施状況がどうなっているかを知らなければなりませんから、学力テスト、いわゆる「学テ」というのが、全面的ではありませんが、小・中学校は三十三年の改訂の前——三十一年に始まりました。確か、三十六年に中学校の悉皆調査を行ったんです。それについては、国の統制だとか、教員の評価につながる、とかということ、日教組が猛反対を始めて、いつの間にか「学テ闘争」などというものになつてしまったわけです。

伊藤 これは、どこが、どれくらいの学力を持っているか一目瞭然で分かつてしまうわけですが、その結果は公表されたんですか。

天城 文部省は、順位付けになるようなことは避けようということで、「学テ」の結果を、そういう意味では発表しませんでした。教育課程の改善の資料を得るという形でやっていたわけです。しかし、これが分かってしまうんですね。隣の県との関係から、各県で競争するんですよ。それで、「うちの県は今年一番になった」とか、「うちの県は依然としてビリに近い」とかね。

伊藤 そういったことは、県内でも、また分かるわけですよね。

天城 その気で調べれば分かるんですね。それで、学力調査の結果をどういうふうに評価するかということを、いろいろ検討したんです。

そして、同じような条件の学校でも、かなり差があるんです。そ

これは、明らかに教員の指導の差が現れているわけです。僻地の小さな学校がとて成績が良くて、「問題が漏れたんじゃないか」なんて言ったこともあるくらいです。でも、別途によく調べたら、素晴らしい先生の集まりなんですよ。しかし、そういうものは表に出しませんでした。結局、教員の評価に連なるのです。それは、日教組も分かっているものだから、反対したんです。

伊藤 確かに、教員の評価になるでしょうね。ただ、そういった学習指導要領の改訂というのは、いろいろな社会状況の変化に対応したもののなんでしょうね。その社会条件の変化の中には、やはり受験競争の激化という問題があつて、これが結局は学習指導要領を、かなり崩していく結果になるんじゃないでしょうか。

天城 ええ。ただ、受験競争の問題というのは、日本では明治以来ずっと続いています。試験、価値、入試等については、いろんな調査や試みがたくさんあります。例えば、同じ大都市でも商業地域と工場地域とか、同じような規模の学校で成績の違がないかとか、それは何が要因なのかとか……。そうやっていきますと、最後には説明できない部分が、必ず残るんですよ。地域社会の一種の文化度みたいなものを反映しまして、学校の差が残ります。

また、昔の中学の入試に問題がありました。学力検査でいくのか、あるいは小学校の内申でいくのか、筆記試験ではなくて、口頭試問だけでいいんじゃないかとか、面接だけでいいんじゃないかとか、そんな意見や試みもずっと続いているんです。僕が小学校を卒業して中学に入るときには、その前の年に筆記試験をやめて、口頭試問だけになっていたんですが、僕のと時から「口問筆答」というものに変わっているんです（笑）。先生が質問は口でするんだけど、答えは書くこと

いうことですね。

伊藤 それは同じことじゃないですか（笑）。

天城 口頭試問だけでは、採点がとても難しいんですね。昭和の初めの僕のと時から、そういう状況なんですよ（笑）。また、内申書を重視すると、父兄の陳情で小学校の校長が内申書を歪曲していたとか……。内申書収賄事件なんていうものがあつたんです。そんなことの繰り返しなんです。学習指導要領に基づく教育も、どうやって評価するかということとは、やはり難しいんですね。特に大学入試になると、もつと複雑で、「進適」（進学適正検査）から共通一次試験、それからセンター試験へと、いろいろ変わっているでしょう。でも、流れは同じなんです。

それで、これは小・中ですが、これから三年遅れて高等学校が始まるわけでしょう。二十二年に新しい小・中学校が始まって、二十六年から高等学校へと、学習指導要領の改訂が続きます。高等学校は義務制ではありませんが、進学率がだんだん高まってきて、生徒の能力・適性・関心が多様化してくるので、高等学校の学習指導要領には、そういう拡大してきた高校生にどう対応するかという、多様化の問題が基本としてあつたんです。それで、四十年に後期中等教育の拡充という問題を、「中教審」で審議していたんですね。そこで高等学校の多様化が議論されてきて、学習指導要領も多様化して、適性・関心に対応することによって進んでいくわけです。たまたま、私は四十三年の学習指導要領の全面改訂のときに初中局長でいたわけですが、そのときの議論は、そういうことだったんです。

村上 その四十三年の改訂のときに、教育課程の研究をするために、特例で学校を指定する手続きのようなものが作られる予定だったのに、

それができなかったということがあります。それは、どういうことでしょうか。

天城 教育課程の特例というのは、指導要領の基準があるけれども、必ずしもその基準に基づかないけれども、自分のところで、こういうことをやりたいという希望があればやってもいいということです。確か、あれは届出か何かの制度になっていて、教育委員会が認めればいいことになっていたんです。ですから、あなたが言うのは、それがなかったということでしょうか。

それからもう一つは、新しく作った指導要領が、実際にどんなふうに応用されているかを研究しなければならないんです。これは机上の研究だけではなくて、学校での実践的な研究が必要です。特定の学校で、特にそのフォローアップをやったわけです。それは、次の改訂のときの資料になるわけです。それは、理科だけの研究指定校もあるし、国語の研究指定校もあるということです。

伊藤 それは文部省がやるんですか。

天城 文部省で指定したんです。それから、都道府県でも研究指定校というのはいふんやっていました。

所澤 あのとさ確か、中学校の新しい数学ということで、「集合論」が入って来たと思うんです。僕は東京学芸大学附属世田谷中学校に昭和四十二年に入学したんですが、そのとき一年間、数学の授業は代数学関係の内容が「集合」だったんです。それは、たぶん文部省の研究指定か何かになっていたと思うんですね。それで、特に数学で「集合論」が入るといふのは非常に新しいことだったんですが、それは文部省の中の、どのくらいの高さのところで議論されていたことなんですか。

天城 確かに、「集合論」が議論になったことは覚えていますが、そういう問題は、みんな教科調査官の仕事ですね。それに、専門家のグループがいますから、最終的にはカリキュラム改正のための委員会で議論をするんですね。

「進適」と「能研」

伊藤 教育課程審議会というのは、どういうふうな構成によってつくられるものなんですか。

天城 小学校の教育課程を改正するときには、小学校の先生と教育系大学の小学校課程の先生、大体そういう方ですね。

伊藤 現場の方と学者ということですか。

天城 そうですね。学習指導要領は、全体の指導要領を改訂すると同時に各教科ごとにやりますから、この作業は大変なんですよ。

伊藤 各教科は分科会みたいな形になるわけですか。

天城 そうですね。理科なんか、例えば卵を使うときには受精卵でなくちやいけないとかね。そんなことを言っても、こっちは分からないですよ（笑）。

それから、高等学校の教科内容が難しいんです。数学だって、どの段階で何を教えるか。そういったことは、過去の実績から判断するわけです。これは小学校の何学年くらいでは無理だとか、高学年に回したほうがいいとかあるわけです。分数の割り算がどうだこうだと、今でも議論しているでしょう。この時分からカリキュラムの精選化や基

礎・基本の重視といった問題が出て来たわけで、今でも同じことを言っていますよ。

所澤 僕は、ちょうどこの時期に中学生から高校生くらいになるんですが、改訂されることに難しくなっているという印象があるんです。それで、高等学校の学習指導要領がこのあとに改訂されるんですが、僕の一つ下の学年から物理Ⅰと物理Ⅱとか、化学Ⅰと化学Ⅱとかというふうになって、それまで大学で教えていた内容が、どつと高校に入ってきた。たぶん、その時期が一番難しく、その後は易しくなる一方という感じを持っているんですが……。

天城 「易しくしろ」と言う人と、「それでは駄目だから、もう少しきちっとやれ」と言う人と、始終、議論が繰り返されていますね。あなたは、一番大変なときだったんですね。

所澤 浪人したら、また一つ難しくなるんじゃないかと、そういう時代です（笑）。

小池 僕は共通一次の元年ですが、その前にちょうど数Ⅰ、数Ⅱと、中学校から変わって、高校のカリキュラムが難しくなったんです。

天城 確か四十三年頃が、一番そういうことがうるさく議論されたときですね。ところが、やってみたところ、消化不良だ、と。学習指導要領のスタンダードをこなしている子供が、小学校で八割、中学校で六割、高校へ行くと三割くらいになってしまつて、八・六・三だなんて言っていました。そうすると、そんなに難しいのはいけない、もつと大部分が習得できるように下げろと言うので、また下げるわけです。そしたら今度は、そんなものでは差がつかないとか、そういう議論の繰り返しですね。

それで最後に、高等学校では習熟度別学習というのが出て来たでし

よう。できる子と、できない子を分けてやったほうがいいだろう、と。できる子たちは、つまらないから退屈してしまうし、あるいは伸びる子供の頭を叩いているという議論があるんです。しかし、分けるのは差別だといった議論が出てくるでしょう。今、習熟度別学習なんていうのは、もうほとんど抵抗がないですよ。チームティーチングも、かなり普及しているのでは？

伊藤 しかし、この間に、だんだん塾が教育の中で大きなウェートを占めてくるようになってきますね。

天城 塾の問題は、入試と不可分なんです。日本の受験産業は凄いですよ。受験産業のエキスパートに言わせると、大学入試をどんなに変えても、自分たちはフォローする自信があると言うんですからね。

また、韓国も進学意欲・競争意欲が強くて、塾と家庭教師問題が大きな問題になり、全部法律で禁止したんです。でも、家庭教師なんているのは個別の問題ですから、禁止しても駄目なんです。

それで、入試問題は最後には幼稚園まで来てしまつて、それだけ熱心だと言えば熱心なんでしょうけれども、社会自体が、そういう意味での競争社会なんです。ある意味では「縦割り」で、流動性のない社会であるにも拘わらず、物凄く競争力が強い社会になっているものだから、学習指導要領の問題も結局、最後に評価をどうするかということでしょう。具体的には、進学の問題になってくると、入試の問題になってくるし、その集大成が大学入試問題になってくるんですね。前に「能研」の問題が出ましたが、これについては「能研」の問題だけ議論してもしょうがないから、「あとで話しますよ」と言ったんですね。ですから、「能研」については、大学入試問題と関連して、ちょっと、いまお話ししておきます。

戦後、進学適性検査——「進適」というのがあったんですが、皆さん方は関係ないかな。

伊藤 私は受けました(笑)。

天城 こちら(小池、所澤、村上)は、関係ないんでしょうね(笑)。

小池 ないですね(笑)。

天城 「進適」というのが戦後始まったんですが、これは占領下でアメリカが進めたものです。進学適性検査というのは、学力だけではなくて、様々な能力を測るということで、昭和二十三年から進学希望者全員を対象に始まったんですね。

伊藤 あれで、大学で「足切り」をやりましたからね。

天城 そうですね。あれはいろんな使われ方をしたんですが、これをやってみたら、新しい問題が出て来た。その一つは、予備校が模擬テストを始めたんです。それから、「進適」の準備教育みたいなものが始まってしまった。それに、高等学校から見ると、大学が学力試験をやりますから、「進適」は二重負担だと言います。「進適」は準備をしなくていいと言っても、やっぱりそうはいかないんですね。それで、高校の校長会が、「二重負担だから廃止してくれ」という決議までしてしまっただけです。それから、大学は、「あれは低くて、あまり当てにならない」と。東大なんかは、低過ぎて「進適」は何も意味をなさないと。

伊藤 それでも東大は、あれで「足切り」をやったんですよ。

天城 でも、二・何倍でしょう。

伊藤 そうです。

天城 大学は大学自治で、自分が行う学力検査を重視する。第三者の試験は、あまり尊重しないんですね。「国大協」も、同じ態度だったん

です。

伊藤 「進適」は、文部省がやったんですか。

天城 文部省がやったんです。これは「司令部にやれ」と言われたものですからね。

村上 二十三年から始まって、何年くらい行われたんですか。

伊藤 僕は二十六年に受験していますが、予備教育なんてありませんでしたよ。

天城 「進適」は正確に言うと、二十九年で終わっていますね。いま言ったような理由で、どちらからも歓迎されないんですから、定着しないんですよ。

ところが、「進適」というのは、そんなに意味をなさないのかどうかということ、国立教育研究所で客観的な追跡調査をずっとやりました。そして、入学後の成績の伸びを比べると、入学試験の成績よりも「進適」のほうが相関度が高いとか、高校の在学中の成績との相関度も高いとか、そういう結果が出ています。アチーブメントではなくて、アビリティのテストというのは難しいんだけど、かなりいいんです。熱心な研究者がフォローアップして、そういう結果も出ているということです。

しかし、いずれにしても「進適」は、特に国立大学には評判が良くないし、高校側からは二重負担だとか、それに日本の受験産業が潜り込んでしまったものだから、二十九年でお仕舞ですね。

ところが、入試問題で「中教審」が関わってくるのは、「中教審」で、「学習到達度と進学能力を特定する、共通的な、客観的なテストを検討するために、機関をつくって研究しろ」という意見が出て、そのことを研究して提案するような機関ということで、能力開発研究所がで

きたんです。

伊藤 それは文部省の中ですか。

天城 これは、文部省と大学と高等学校の三者で発起人を出しまして、財団法人でつくったんです。そのときには、三十九年から三年を目途に、ということが可能かを研究し、四十一年から大学の合否判定に利用することを目標にするという、そういう触れ込みで「能研」ができたんです。それで、心理学者やテストの専門家が入って、トライアルでやったんです。

伊藤 そうすると、「進適」が二十九年になくなってから、しばらくの間は大学入試一本で来たわけですか。

天城 そうですね。それで、「能研」が廃止された理由も幾つかあるんですが、これもいろんなものが関連しています。実は、この前後に大学管理法の問題があるんです。「大学の管理がはつきりしていないから、大学管理法を作る」という話が、戦後ずっとあったんです。しかし、いろんな案が出ては潰れて通らないんですよ。それは、国立大学が中心なものですから、「国大協」が反対なんですね。それで文部省が何かやろうとすると、「大学自治を侵害する」という反対論が強く、「能研」についても、「第三者が余計なことをする」という議論があったんです。「入試は学力検査で、大学が自主的に決めるんだから、余計なことをするな」と。「進適」も、それで反対ですからね。それで、「また余計なことをやるな」と言って、大学側が歓迎しなかったわけです。

それからもう一つは、これは変な話なんですが、能力開発研究所という名称です。あの時分、経済企画庁の経済企画審議会でマンパワー・ポリシー——人間能力開発という考えが出ていたんです。それで、「能研」というのは結局、能力開発のための機関じゃないか、経済政策の

一貫ではないかと疑われたんです。能力開発研究所としては、こういうテストが可能か、三年間くらい研究してみようということだったんですが、内藤蒼三郎さんという次官（昭和三十七年一月～三十九年七月）の勇み足で、「これは、来年から大学入試に使うんだ」なんて言い出したんです。それで、内藤次官に、「そんなつもりでできたんじゃないでしょう」と言うんだけど、彼はどこかでポリリと、そんなことを言ってしまったんですね。まあ、そんなことで「能研」は初めから評判が悪かったんです。

しかし、「能研」では三年くらい真面目にトライアルをやりました。このグループは、いろんな調査をやっているんですよ。昭和三十九年かな、国立大学の十幾つの学部の、千何百人の入試者を対象にして比較調査をしたり、それなりの成果は出ているんです。しかし、そういう雰囲気だったし、そもそも財団法人で、受験生の受験料で運営していくつもりでいたものだから、受験生が集まらなければ成り立たなくなってきたわけです。それで、一年、二年、三年と先細りです。

伊藤 しかし、全国共通のスタンダードみたいなものが欲しいという、そういう要望も一方ではあるんじゃないですか。

天城 それは、「能研」が潰れてからなんです。「能研」までは、テストの研究をやるうということだったんですね。ところが、大学で共通で使うか使わないか、まあ「能研テスト」も研究の結果が良ければ共通で使おうとしたんだけど、それが本当の話になってくるのは、もう少しあとで、それがいわゆる入試センターになってくるんです。

「能研」は、そういう思想を持っているんだけど、これはあくまでも財団法人で、受験生の受験料でやっていこうという考え方でしょ。国立の大学入試センターができて、このとき初めて「全国共通」

という問題が出たんですね。

小池 「能研」の初代の研究所長は、森戸（辰男）さんですよ。

天城 そうでしたか、ちよつと覚えていませんね。

小池 資料が残っているんです。ほとんど、その資料も薄いものなんです。例えば「中教審」の委員をずっとされていたということがあって、森戸さんを据えたということがあるんですか。

天城 これは、文部省の調査局で担当していたんですね。だから、私の時代の仕事として出てくるんだけど、森戸さんについては、ちよつと覚えていません。

伊藤 その研究所で熱心にやられていた方というのは、どなたか覚えていらつしやいますか。

天城 専門家で熱心にやられた方は、何人かいますよ。東北大学から来た樋口さんは心理学者で、彼も中心の人間だったし、既に職業能力テストで実績のある人でした。

しかし、僕は「能研」がどういう形になるのか、最初は本当に分からなかったんです。だけど、「進適」のフォローアップの調査も「国研」でやったものがあつたし、確かに学力試験だけでの一発勝負では良くないだろうという意見もあつたし、そんなこんなで、研究するのはいいだろうと思つたんです。しかし、内藤次官が「これをすぐ大学入試で使う」なんて言い出すし、「国大協」は反対するし、いろんなところが乗つてこないんですね。それで、やってみても受験生は集まらないし、これは駄目だと思いました。落ち着いてやるのでなければ、慌しく直線的に、目的的にやろうとすると、痛くない腹を探られたりして……。ですから、僕自身は関心を失つてしまいましたね。

しかも、この問題について、本来どこがやるのか。大学局がやるの

か、初中局がやるのか、と。ところが、大学局長も逃げてしまったし、初中局長も逃げてしまつて、調査だということで、「調査局でやれ」と言うんです。調査と言われると、僕も調査するのは悪くないからやろうとしたんだけど、とにかく三年間くらいやってみて、上手いきそうだったら使おう、と。そこで、どう使うかはまだ決まっていなかったのに、調査研究よりも能研テストだけが先に出てしまつたし、経済的なマンパワー・ポリシーの能力開発と一緒にされたりしてしまつたわけです。

この「能研」についても、「進適」と同じようなフォローアップがあるんです。これは、文部省が発表していたかどうか知りませんが、記録はちゃんとあるはず。大学入試の学力検査、高等学校時代の学業成績、能研テスト、その三つがどういう相関関係にあるかを、ずっとフォローしているんです。

結局はやめてしまいましたけれども、ここで出た「能研」の教訓というのは、学力調査も必要だし、高校の成績の評価も必要だし、第三者評価も必要だということで、一本ではなかなか能力は測定できないということ。要するに、多角的な選抜が一番いいんじゃないかというのが、「進適」と「能研」という二回の経験から見た一つの方向性なんですね。それは大きな遺産だつたと思います。これが大学入試センターになつていくんです。

伊藤 やっぱりセンター試験までつながるわけですか。

天城 そういう意味では、流れとしてはつながっていると思います。

「能研」は、形の上では短期間で潰れてしまいましたが、やってきたことはつながっているんです。

小池 当時の新聞の書き方を見ても、評判は悪いですよ。能力開発

研究所なんて、こんなものつくっても、どうしようもないとか……。

天城 さっき申し上げたように、周りのほうから評判が悪くなつてしまった。

小池 森戸さんのスクラップ・ブックを見ても、褒めてある記事がほとんどないですね。

天城 当時の評判は悪いんです。だから、続くわけがないんですよ。僕に言わせれば、調査局長として押し付けられちゃった感じなんですね。

伊藤 しかし、あとに続いたからいいですよ。

天城 全然見当違いなことをしたわけでもないし、無駄なことをしたわけでもない。センター試験までつながっているんですよ。

入試問題については、大学入試改善会議というのが文部省にできて、三つの方法——学力検査、高等学校の成績、共通の第三者試験——の関連をどうするかという議論が、ずっと続いているんです。それで、入試改善会議のいろんな議論の中から、共通試験としてセンター試験が出てくるんです。

伊藤 話としては切れていないわけですね。

天城 切れていません。

村上 そのことに関しては、調査局がずっと調査を続けていくんですか。

天城 入試改善会議で……。

伊藤 入試改善会議は調査局に付いているんですか。

天城 入試問題は、「中教審」でもいろいろ取り上げているのです。高校多様化の問題は「三十八年答申」です。三十八年には大学教育の改善についての答申がありますが、この答申でも入試問題に触れている

んです。さらに、「四六答申」でも触れています。しかし、具体的には実現されずに、次の審議会の課題として上がってくるんです。

所澤 もう一つ、東京都が学校群制度を都立高校に導入して、公立高校の入学試験の制度が大きく変わってしまうわけですが、それで文部省の行政に影響が出たんでしょうか。

天城 高等学校の入試は中等教育ですから、都道府県の責任で行われます。文部省は関係ないわけではありませんが、各都道府県で、やり方が違うんですね。東京都の場合は、例えば東大に日比谷高校卒が雪崩込んでくる。そのほかに戸山高校とか西高とか。それに関連して、越境入学が起こる。いろんなことがあって、学校群制度にして均そうとしたわけです。あのとき、僕は教育長の小尾庸雄さんに、『日比谷を叩く』というふうに取り上げられたら、大変なことになりますよ』と言ったんです。都立高校だけを考えればいいわけではない、と。東大を意識し過ぎると、結局は私学に集中して、灘校だとか何だとかで、新しい御三家みたいなものができちゃったでしょう。

小池 鹿児島ラサール、開成、麻布、武蔵（高校）ですかね。

伊藤 あと国立大学の附属高ですね。

天城 そうなっちゃうんですね。だから、初めの考えがどうであろうとも、結局、そういう本質は抑え切れないんですよ。

所澤 東京の場合、学校群のほかにもう一つ、試験科目を九科目から三科目にして、しかも内申書を非常に高く評価するという、そういうやり方を取ったんですね。それが全国的にかなり影響を及ぼしたように思いますか……。

天城 内申書重視というのは、さっきから申しているように、昔からずっとあって、僕らのときなんかは内申書重視で、あとは面接だけだ

ったんですよ。それも、うまくいかなかったんですからね。そこで結局、一度の実力試験のほうがいいんじゃないかという議論が、いつもあるんです。

でも、そういう高校の問題は確かにありましたね。入試問題というのは、高校の問題でもあるし、大学の問題でもあるし、ある意味では日本の教育文化の一つの腫れ物なのかも知れませんが……。

文化庁の設立

伊藤 学習指導要領から始まって「能研」までのお話はそんなところで、その次の京都府の教育長の承認問題については、何かご記憶はございますか。

天城 微かにありますが、細かいことは全部忘れました。

伊藤 こういう場合は、どなたが対応なさるんですか。

天城 これは、私が対応しました。だけど、これはそんな大した事件ではないですよ。一体、そんなこと、どこに書いてあったんですか。

村上 これは年表か何かにあつて、そのあと国会の議事録をちよつと見て、先生は御苦労なさっているんだな、と。それで、何か嫌なことでも覚えていらつしやらないかな、と（笑）。

天城 これについては、細かいことはみんな忘れてしまいましたね、京都は当時、革新府政なんですね。

伊藤 蛭川虎三ですね。

天城 教育界も左翼系になっていました。たまたま教育長の交替のと

きに——あの時分は、確か県の教育長は国の承認制度になっていたのかな。大体、ほとんどみんなパスなんです。京都府は蛭川府政で、国がやることに反対していたものだから、教育長が交替すると言うなら、「教育長に一遍出て来てもらつて、よく事情を話してもらえ」ということになったんです。これを最初に言い出したのは、大臣（灘尾弘吉）だったと思います。それで、「教育長に来てくれ」と言ったら、来ないんですよ。代わりに教育委員長が来て、いろいろ言うので、「とにかく教育長を一度寄越してください」と。そしたら、「私が委員長だから、私が来れば同じでしょう」と言うので、「教育長というのは、教育長としてのプロパーの責任があるんだし、職務もあるんだ」と。それに対して、向こうは「教育長は私の手下です」と言うんですね。「単なる手下じゃないんですよ、あれは免許証も必要ですし、ちゃんとした専門職なんです」と。そんな話をしましたが、それから先、どうなったかは忘れしました。そういう議論をしたことは覚えていますが、新聞でも何か騒いだんじゃないですか。だけど、その後は大したことはなかったですよ。

伊藤 最終的には、承認したんですか。

天城 覚えていません。

伊藤 これは、国会に出たわけですよ。

天城 新聞が書くからですよ。委員長が出て来たとか、委員長が帰つて談話を発表するとか、いろいろ書くものだから、それで国会で議論されたんです。こっちは何でもありません。ただ教育長に、いろんな意見を聞きたいから来てくれ、と。どうしても来ないので、「来なければ事情が分からないから、承認していません」と、そういうような話をしていたんだと思います。ですから、全体に対しては影響ありません。

ん。

それから、文化庁についての質問ですが、これは前回、ちょっと申し上げましたね。私が調査局にいたときのことで、例えば芸術、著作権、国際文化というような形でだんだん整理されて、四十一年に文部省に文化局ができました。それとは別に、文化財保護委員会というのがあったんです。その文化財保護委員会の事務局と文化局を併せて、文化行政の一元化を図ろうということで、四十三年に文化庁ができました。これは確か、当時の政府（第二次佐藤内閣）で、省庁の簡素化で一局廃止の議論があったんです。それで、この際、文化財保護委員会の事務局と文化局の仕事を併せて、思い切って文化庁をつくってしまおうということになったんです。

伊藤 文化財保護委員会というのは、委員会ですよ。

天城 行政委員会ですから、事務局が付いているんですね。

伊藤 そうすると、そこからあとは行政委員会ではないわけですね。

天城 ええ、諮問委員会です。日本の文化財は、神社仏閣とか昔の大名などによって保護されてきたものが多くて、関係者が集まって話をするほうがいいのではないかとということで、文化財保護委員会という形にしたと聞いています。殿様みたいな人や、神社仏閣の代表みたいな人が来て、議論していたんですね。外国も、王侯貴族のパトロンによって保存されていましたね。

しかし、現在は文部科学大臣の諮問機関である文化審議会になりました。博物館は東京、京都、奈良に、美術館も近代美術館、西洋美術館、国際美術館とあるでしょう。最後に国立劇場までできましたが、みんな文化庁の所管なんです。非常に大きくて、今後はみんな独立行政法人になるんですね。

伊藤 あれが大変なんですね。

天城 大変なんですよ。とにかく、そういうのを所管していますし、当時の文化局も国語とか宗務とか、ある意味では日本の文化の基本に関わるものと、芸術と著作権なんです。

伊藤 これも文化庁に行ったわけですか。

天城 ええ。著作権は、仕事の範囲が広がって、文化庁長官官房に著作権課というのがあって、審議官が付いているんですね。これは、国際的にも大変な仕事です。

伊藤 特許の問題や著作権というのは、知的所有権の問題で、非常に厄介な問題になってきていますね。

天城 それで、今はITの問題も加わってきた。

伊藤 先生にとつては、非常に良かったという感じですね。

天城 僕は、さっき言った調査局で国語とか宗務とかを担当したでしょう。著作権も課長をやったし、予算の上でもずいぶん苦労したんですね。文化関係はなかなか予算が取れなくて、今でも予算が非常に足りないんです。

伊藤 文化庁という形になることによって、何かメリットが生じるわけですか。

天城 あちこちにバラバラにあった文化行政を統一したという意味では、非常に良かったんですね。それと、文部省の中で文化行政が一つの大きな柱だということは、内外に宣言できたんじゃないですか。

伊藤 でも、文化庁というのは、文部省の中でも、またちよつと毛色が違うという感じもあるんじゃないですか。

天城 そうですね。初代の長官が、今日出海（昭和四十三年六月〜四十七年七月）さんでしょう。それから、途中で行政官がなったりもし

ていますが、三浦朱門（昭和六十年四月～六十一年九月）さんがなったり……。でも、ああいう人たちがなるのもいいんじゃないでしょうか。文化人というか、芸術家や作家などで引き受けてくれる人は、なかなかいないんですね。今ちゃんや三浦朱門さんなどは、なるべくしななった人ですね。

当時、初代の文化庁長官に誰になるかで、みんなで議論していたんです。僕は、今ちゃんになるんじゃないかなと思っていました。今ちゃんは若いときに一度、芸術課長（昭和二十年十二月～二十一年十二月）をやっているんですよ。

伊藤 役人の経験があるんですか。

天城 そのことは、みんなあまり知らないんですよ。社会教育局に芸術課というのがあって、今ちゃんが芸術課長をやっていたときに、僕は初めて会ったんです。それで、芸術祭を始めたのも、そのときなんですよ。私は当時、教育委員会の問題などをゴチャゴチャやっていたんですが、社会教育局長から——この人は昔の一高の先生でしたが——「ちよつと来いよ」と言われて行ってみたら、「今ちゃんが今度、芸術課長になるんだけど、いろいろなことを考えているから、ちよつと相談に乗ってやれ」と言うんです。

今ちゃんに何をするのか訊きましたら、「戦争に負けた上に景気が悪いので、これは賑やかにしなきゃいけない。お祭りが一番いい。それで芸術祭をやるんだけど、手伝ってくれ」と。しかし、「僕は、お祭りのことも芸術のことも分らないし、今やっている仕事が忙しくて、とても駄目だ」と断ったんです。そういう変わった出会いを持っていたんですが、小説家の中ではなかなか幅の広い人だなと思っていました。でも、文部省の人たちは、そんな出会いを僕が持っている

ことを、みんな知らないですよ。

だから僕は、初代の文化庁長官には、今ちゃんになるのが一番いいんじゃないかなと思っていました。それに、彼は佐藤栄作さんと親しいし、「吉田ワンマン」とも大変親しいんです。その関係で、佐藤内閣だから、今ちゃんになるんじゃないかな、と。そしたら、やっぱり佐藤栄作さんが頼んだんですね。今ちゃんが最後に、「佐藤に頼まれたから、佐藤のいる間は辞めちゃ悪いからやるよ」と言っていましたからね。あのときは、著作権法の改正なんかの大問題があったんですが、今ちゃんは適当にこなしていましたよ（笑）。そういう人なんです。

伊藤 お役人の経歴があるとは知りませんでした。

天城 いや、あの人は凄いですよ。「吉田ワンマン」とも親しいし、佐藤栄作とも「木戸御免」ですからね。僕があるとき、佐藤総理がご機嫌が悪くて困っていたら、今ちゃんが「じゃあ、俺と一緒にこよう」と言って、一緒に行ってもらったことがありますよ（笑）。

小池 結果は、どうだったんですか。

天城 そのときは、今ちゃんでも駄目だったんですよ。その理由がどうしても分からなくて、今ちゃんに「なぜ総理は『うん』と言わないんだらうな？」と訊いても、「分からないな。あれは何か特別な理由があるんだな」ということでした。

余談になりますが、さっきの社会教育局長は佐藤得二先生という人で、一高の生徒主事だったんです。あの時分は、局長がみんな役人というわけではないんです。大臣にも学者が来ているし、社会教育局長は佐藤先生だし、その前には朝日新聞の関口泰さんがなさっていたでしょう。それから、科学教育局というのがあったんですが、これも大学の学長でしたし、学校教育局は田中耕太郎さんで、全部学者で占め

られたんです。

伊藤 そういう人事は、どこで決定するわけですか。どこの省庁でも大体、人事は事務次官が行うわけですが……。

天城 そのときは、事務次官も学者ですからね。

村上 でも、前田多門さんが大臣（昭和二十年八月～二十一年一月）のときは大村（清一）さんが次官……。

天城 前田さんのときは、ちよつと別です。

村上 あのとときに田中耕太郎さんが大臣になったり、山崎匡輔さんなどが次官になって采配されたこともあったわけですよ。

天城 ありますよ。最初の教育刷新委員会は山崎さんの頃ですね。皆さん、学校の先生ですよ。「講壇派」と新聞記者が言っていたけれど、みんなそうなんです。その中で佐藤さんという人が社会教育局長になったんですね。この人は、一高の生徒主事から督学官になって来ていたんです。それが社会教育局長になって、その下に今ちゃんがいたんです。

伊藤 先生が事務次官になられた頃（昭和四十四年一月～四十六年六月）は、人事は事務次官がやるわけですよ。

天城 そうですね。

伊藤 大学の先生を、かなり入れていたんですか。

天城 もういませんね。

伊藤 ある時期から、大学と文部省とは切れてくるわけですか。

天城 まあ、だんだん大学の自治が強くなってきてね。

伊藤 大学のほうが嫌がるわけですね。

天城 戦後は、文部省の局長から国立大学の学長に二、三人出ていますよ。山形大学だとか愛媛大学だとか、みんな局長をやった人が学長

に出ているんです。

伊藤 それは大学自治ですか。

天城 ええ。だんだん離れて行ってしまったんですね。

村上 有光次郎さんが次官（昭和二十二年二月～二十三年十月）になられたところで、学者出身の局長の方というのは、ダークと減っていると思うんですが、そこら辺から差が付いてしまったというふうには思われませんか。

天城 まあ、誰がどうやったかは別として、戦後、役人のパーシがあつたでしょう、それで抜けるんですね。そんなものですから、そのあとには役人でない人を持つて来たほうがいいだろうということで、そうなったんでしょう。まず、大臣・次官が、そうですね。

伊藤 言ってみれば、文部省で採用したキャリアが、だんだんに上がってくるということですね。

天城 それもあるかも知れませんね。そのうちに内務省人事もなくなつてきて、内務省との縁が切れるしね。有光さんが文部省採用の次官としては、最初かな。有光さんや伊藤（日出登、昭和二十四年三月～二十五年五月）さん、その辺からですね。あと、また内務省出身の次官がいますよ。稲田（清助、昭和三十一年十一月～三十五年一月）さんとか、緒方（信一、昭和三十五年一月～三十七年一月）さんとか、小林（行雄、昭和三十九年七月～四十年七月）さんとか、みんな内務省出身ですよ。だから、大達茂雄大臣（昭和二十八年五月～二十九年十二月）が「文部官僚なんて者はいない」と言つたのは、それなんですよ。

村上 そういう学者の局長さんたちと、文部省にいた内務系の官僚の人たちとの関係というのは、どうだったんでしょうか。

天城 特別なことはないですよ。

村上 みんな同じような感じですか。

天城 ええ。課長にも、学者がいましたからね。

伊藤 戦前からの伝統ですか。

天城 文部省には、昔の高等専門学校の教官との交流がありました。専門学校の教官を経験した課長がいました。また、専門学校の校長に出て行くとかね。

伊藤 そういう意味では、高等教育機関と文部省というのは、かなり密着していたと言っているわけですね。

天城 そうですよ。

村上 それでも帝大は違っていて、専門学校、高等学校も……。

天城 高等学校の先生も、若干はいましたね。さっき言った佐藤得二さんという方は、むしろ例外のほうで、一高の生徒主事から文部省の督学官になりました。

村上 それは戦争が終わってからあとの、大きな特色ですか。

天城 そうですね。

村上 安倍能成（文部大臣、昭和二十一年一月～同五月）さんが引つ張っていらつしやったと考えていいんでしょうか。

天城 安倍能成とか天野貞祐（文部大臣、昭和二十五年五月～二十七年八月）とかいう人は、誰が選んできたのか僕もよく分からないんだけれども、要するに「吉田ワンマン」が非常に学者好みなんですね。例えば、高橋誠一郎（第一次吉田内閣・文部大臣、昭和二十二年一月～同五月）さんとかね。だから、そういうところから、ああいう人たちが出て来て、目立つようになってきたんじゃないかな。

事務次官の職責について

伊藤 ところで、先生も事務次官になられたわけですが、事務次官というのは何なんだろうかなと思ったんです。つまり、事務方のトップは事務次官ですから、大臣との関係とか政務次官との関係とか、それから政党もいろいろ文部省に言ってくるときは、事務次官のところに来るわけですよ。そういう位置付けみたいなものを、骨格だけでもお話いただければと思うのですが……。

天城 これは、制度的に、どこでどう規定されているかはよく分かりませんね。原則として、大臣、政務次官は国会議員ですからね。まあ、そうでない人もいますが、原則としては国会議員でしょう。しかも、国務大臣ですから、基本的なスタンスが違うんですね。ところが、各省というのは行政機関なんですね。それで、原則として、その各行政機関の長が大臣で、その大臣は閣議のメンバーなんです。そうしますと、行政権はどこにあるのかと言えば、それは内閣にあるんですよ。

それで三権分立——立法・司法・行政ということになっていて、立法は国会で、司法は裁判所、最高裁で、最後の行政権はどこにあるのか。それは憲法上の問題なんですね。ところが、憲法で見ると行政権は内閣に属するのですが、英文では行政権はエグゼクティブ・ファンクションとなっています。このエグゼクティブ・ファンクションと行政権とは同じものなのか、違うものなのか。これは、執政権という言葉でもあります。大臣は内閣のメンバーとして、国の行政権を行使し

ているんですね。それで、その長は総理大臣でしょう。総理は、行政の最高責任者ですね。エグゼクティブ・フランクシヨンというのは政治学上の問題で、執政権というのは行政権より高次元の概念ではないでしょうか。ただ、憲法では行政権は内閣にある、と。

伊藤 総理大臣にもないんですね。総理大臣は閣議の決定に従って……ということですからね。

天城 そうなんですね。だから、憲法の日本語では行政権という言葉になっていますが、英文では執行権という言葉になっている。その執行権というのは、英語で見るとエグゼクティブ・フランクシヨンで、それは内閣にあると書いてあるわけです。内閣のメンバーは各大臣ですから、大臣はあくまでも行政機関の長としての責任を内閣で果たしていることになるんです。行政権と執政権の関係は、個人的には大変大きな問題であると意識しているんです。

そうすると、国家行政組織法上、各省庁の責任者は大臣なんだけれども、それでは次官というのは、どこにあるのか(笑)。国家行政組織法では、次官なんていう言葉は出ていないでしょう。大臣の次だからバイスミニスターになっているんだけれども、大臣は内閣の一員であって、バイスミニスターは内閣とは何も関係ないんですね。どうも、そこところが曖昧ですね。

伊藤 いま田中真紀子外務大臣が事務次官とガタガタやっていて、外務大臣が総理と違う意見を、勝手にいろいろ言っていますよね。

天城 違うかどうか分かりませんね。

伊藤 いやいや、たぶん違うと思いますけど……(笑)。

天城 「違っている」と、小泉総理も言わないからね。

伊藤 そりゃあ、そうですね。

天城 今は庇っていますからね。でも、いよいよ合わなければ、クビになるでしょうね。

伊藤 まあ、いずれそうなるんじゃないかと思っていますけどね(笑)。

小池 任命権がありますからね。

天城 だから、どんなクビにするでしょう。

伊藤 でも、その外務大臣と事務次官が、クビを切るとか切らないとか言って、ガタガタやっているじゃないですか。

天城 だけど、事務次官以下の任命権は、やっぱり大臣にあるんですよ。だから、部下なんですね。だけど、普段の仕事というのは全部、事務次官で処理していますからね。そのために、局長会議というのがあるんですよ。これは慣行でしょうが、局長を中心にして局長会議というのを、毎週二回ずつやるんです。

伊藤 省議と言うんじゃないんですか。

天城 局長会議と言ったり、あるいは省議と言ったりするんですよ。それを毎週二回、やるんです。

伊藤 それには、大臣は出ないわけですか。

天城 大臣は出ません。それは、次官が招集してやるんですよ。それで、法案を出すにしても、いろいろな条約問題とかは、みんなそこで議論して、それを大臣に報告するわけです。だけど、首根っこは大臣が握っているんです。

伊藤 それはだけど、次官のところで調整して持ってきたものに、大臣が「ノー」と言うのは、今度は逆に大臣の立場から言えば、なかなか難しいわけですよ。

天城 大変ですね。でも、大きな問題は何も省議で一遍に決めるわけではありませんからね。大臣にも考える余地は与えておくわけです。

伊藤　それで、次官は次官会議に出るわけですが、そのときにはもう既に大臣の了解を取っていないと、次官会議で決定ができないんですよ。

天城　そうですね。次官会議というのは、閣議の前の日に必ずやるんですよ。これも、いま問題になっているようですが、閣議の案件は全部、次官会議でクリアするということになっているんですね。それじゃあ、閣議って何だ、ということになるんですが……。

小池　まあ、承認機関ですね。

天城　そうなるわけだね。細かいことは閣議で議論できませんから、できるだけ次官会議でクリアしておくと、そういうことになるんですけどね。ところが、次官会議でやると、事務的になってしまう。各省の「縦割り」が、そこで衝突してしまうじゃないか、と。だから、閣議に上がってくるときには、もう直しようがないんだということでしょう。大変難しいけれども、そういう組み合わせになっちゃっているからね。総理大臣がイニシアチブを取る、取ると言っているけど、どうやって取るのか、大変難しいんですね。

例えば、今の財政経済諮問会議で予算方針を決めると言っても、あそこでは細かいことは決められないですよ。大綱を決めて、そして今度はどこに行くかと言うと、結局、予算ですから財務省ですね。そうすると、同じことじゃないかという議論も起きるんです。今だって、大臣中心に閣議で議論して方針を決めれば、一つの内閣の方針ですからね。だけど、閣議でやろうとすると、事務次官会議を通じてきているので、いわゆる改革なんか、なかなかできないというわけでしょう。それで小泉さんは、経済財政諮問会議で、あんなものつくっちゃったんだけど、今になってみると、各大臣の意見が入っていないなんて、

文句を言っている大臣もいるでしょう。党のほうは党の意向が入っていないと言うし、みんなのところを通ってきたら、従来と同じなんですよ（笑）。大変難しいです。

ただ、次官というのは、やっぱり普段仕事をしていると、例えば私の場合にも文教行政、文部行政のあらゆる問題が関わってくるという感じを持っていましたね。非常にずっしりと肩に重い、という感じはしました。ですから、二年から三年で替わると言うけれども、こんなものを長くやっていたら、もうのびちゃいますね。

伊藤　激務だと言うことですね。この当時で言えば、自由民主党が圧倒的に力を持っているわけですから、政務調査会の文教部会というのは、相当に文部省に対して影響力があるということでしょうか。

天城　それは、各省とも同じですよ。それこそ「族議員」などと言われていくくらいですから、文教族というものもあるわけです。具体的に何かと言うと、「政調」に部会があるんですね。

小池　文教部会ですね。

伊藤　各省割りに、ですね。

天城　ええ、各省割りになっているんですね。それで、例えば予算も、その部会を通らなければ、実際上できないし、法律を出すときには部会を通して、与党の総務会を通らないと、出せないんですね。だから、いろんな案を作っても、総務会が「ノー」と言ったら、出せないんですよ。僕らのときには、大学紛争処理のために、大学の臨時措置法案を作ったのです。あれを出すときなんか、総務会をなかなか通らない。それで、あのときは幹事長の田中角栄さんのところに何遍も行きました。そういうルールになっているんですね。でも、これは法律で決まっているんじゃないですよ、慣行ですね。

伊藤 そうすると、いろんなことの根回しなんていうのは、やっぱり次官の役割になってしまいませんか。

天城 いやあ、次官もしなければならぬけれども、担当の仕事によつては、局長が飛び回っていますよ。

伊藤 課長、局長から、とにかくどんどんやって、最終的にはやっぱり大きな問題になってくると、事務次官が走り回らなければならないわけですか。

天城 そうですね。

伊藤 事柄は文部省に関わるもの全てですから、守備範囲がそれまでと比べたら、遙かに大きいわけですね。

天城 だから、油断も隙もならないんですね。本当は、次官に直接の責任はないんでしょうけれども、地方で教育関係の問題が起きると、議員さんは地方出身ですから、自分の地元の問題ということで、国会に持ち上げることがあるんです。そんなこと知らない、ということも、ずいぶんあるんですよ。中身が分からないんですね。

伊藤 まあ、どうせ質問するということは、（利益）誘導したいわけでしょうからね。

天城 だから、情報の集め方が大変ですよ。

伊藤 省内の各部局がそれぞれ情報を持っていて、それを事務次官まで上げてくるという形になるわけですね。

天城 そうですね。だから、局長に謀叛されると、大変ですよ。情報を中断されてしまったら困りますね。

伊藤 しかし、情報を遮断するということは、もう完全に反乱じゃないですか。

天城 そうですよ。

伊藤 クビを切る以外にない、と。

天城 そうなったら大変ですからね。また、情報の伝達を円滑にやってくれる人と、非常に不味い人間がいますからね。

伊藤 それは、下手という意味ですね。

天城 下手というよりは、判断が甘いんですね。でも、そうなったら次官もお仕舞ですよ。それだけに、そうならないように普段から配慮している。局長に全ての情報を求めずに、いきなり課長に訊くことだつてありますからね。

伊藤 それは当該局長にとっては、ちょっと面白くない面もあるんじゃないですか。

天城 いや、そんなことはないですよ。訊き方さえ気を付けていれば……。

伊藤 お役人とか政治家の場合には、「俺は聞いてないよ」ということを、しばしば言われますよね（笑）。

天城 田中真紀子さんなんか、「返事が来ないんですもん！」なんて……。

伊藤 もっとも、あれは嘘だということが、あとで分かったわけですけどね（笑）。

天城 それは、情報の流通の問題ですね。

伊藤 自民党の文教部会との連絡なんていうのは、どんな具合にやるわけですか。

天城 それは、基本的には官房長の仕事ですね。官房長は国会の仕事が非常に多いんですよ。国会の開会中は、「廊下とんび」は官房長の仕事ですね。

伊藤 そうすると、そこからの確に情報を取っておかないといけない

わけですね。

天城 次官は、政府委員ではありませんからね。国会との連絡は、本来は政務次官の仕事になっていくんです。事務次官は、留守部隊の責任者です。国会が始まると、大臣も各局長もいなくなっちゃいますから、次官だけがいることになるので、妙な陳情もそこに全部上がってくるんです。例えば、外部から電話がかかって来たりなんかしてね。ですから、国会があるときは次官は留守部隊で、官房長は朝から晩まで「廊下とんび」をしているんですよ。

それで、予算委員会とか本会議などでは、質問は事前通告制度になっていきますから、何を訊くのか、細かいことは別として、主旨はこっち側に来るんです。それを官房長が集めて歩いて、答弁の資料を作らなければいけないわけです。そして、それを大臣にちゃんとレクチャーしなければなりませんから、全部夜中の仕事になってしまうんですね。

伊藤 それは、留守部隊の仕事なんですか。

天城 答弁書を作るのは留守部隊ですよ。だから、各局でみんなやるんです。国会が始まると、(役所に)夜中まで灯りが点いているのは、みんなそれですよ。

伊藤 だんだん国会の会期が長くなって、四六時中国会が開かれているような状態になってきているじゃないですか。

天城 そうなんです。そうやろうとしていて、「国会は一年間開いてもいいよ」と言っているんです。夏休みを除いて、三百日くらいは開くことになるかも知れませんがね。

伊藤 中身が薄くなりますけれどもね。

それで、先生の頃の文教族のボスと言いますが、中心はどなただった

たんですか。

天城 その時々で替わりますよ。

伊藤 次官(昭和四十四年一月〜四十六年六月)の頃はどうか。

天城 文教部会長という人がいるでしょう、部会長というのは大体、国会議員でいくと中堅ですね。それで、政務次官は一番若手になるんじゃないですか。

小池 四期くらいですかね。

天城 ええ。当選二、三回でしょうね。それで部会長は大体、政務次官をやった人がなりますから、国会議員の中では大体、中堅ですね。それに、大臣を辞めた人が部会に戻る場合もありますから、先輩はいますが、中堅が部会長ですよ。だから、一番張り切っているわけですね。

伊藤 先生の次官時代で、一番印象的な部会長は誰ですか。

天城 誰だったかな(笑)。大勢いたから分からないな。いろんな人がいろんなこと言うから。部会長は誰だったんだろうな……。そんな大ボスではないですよ。

小池 大ボスと言うと、灘尾さんとか？

天城 そうでしょうね。ベテランがたくさんいましたからね。灘尾さんなんかは、文部大臣を六回やっていますからね。

小池 やっぱり大臣経験者がボスになるわけですか。

天城 いや、そうじゃない人もいますよ。中には大臣にならなくても、当選回数が高い人もいますからね。

伊藤 でも、やっぱり何らかの形で文部行政に関わった人ですよ。

天城 政務次官を、みんなやっていますね。政務次官というのは見習いで、若手に経験させようということをやらせるんですからね。だか

ら、政務次官に直接、次官が接触するということはあまりないんですよ。政務次官は政調会と文教部会には必ず出て、連絡を取るんですけど、必ずしも専門家じゃないし。今は副大臣がいるし、政務官がいるし、どうしているのか……。大変だろうと思いますね。

小池 省議とは別に、事務方と副大臣との間で会議を開くとか言っていますね。

天城 今は副大臣会議というのがあって、いま国会議員が何十人と、行政府に入っているでしょう。

小池 先生が事務次官の頃には、文教族議員と言われている人たちは結構、当選回数も高い人がいて、例えば坂田道太さんも含めて何回も大臣をやられていて、文教政策に関しては非常に詳しい人が多かったと思うんです。そうすると、文部省が企画立案したものに關しても意見を言うというような感じで、文部省と党との關係というのも、党が徐々に有利になっていくような……。まあ、有利になると言うか、力關係が微妙だった時期があったのではないかと思うんですが……。

天城 族議員というのは各省にあるわけですが、族議員を長くやっている人は非常に詳しいですよ。ただ、そう言っただけは悪いけれども、族議員は利害關係が絡みがちですね。

伊藤 それは、地方の問題とか私立大学の問題とか、やっぱりそういう問題を背景にしている人もいろいろいるわけでしょう。

天城 いますが、でも文教なんかは、利権が絡むことは少ないですから。公共事業をたくさん抱えていて、道路とか橋とか港湾とか……。建設省にしても農林省にしても、大変でしょう。

伊藤 でも、学校建築とか学校給食とか、そういったものがありますよね。

天城 そんなものは、他省とは比べものにならないですね。

伊藤 大したものではないわけですか。

天城 利権の關係が、全然違いますね。

小池 一回造ってしまえば、終わりという感じですか。

天城 まあ、そう言っただけなんですが、僕は利権關係とは縁が遠くて、それだけ力が弱かったのかも知れないけれども、苦勞はしませんでしたね。

伊藤 利権に絡むというのは、辛い立場に立たされるといことが、しょっちゅう起こるわけでしょうね。

天城 それに近いことは若干ありましたが、とても公共事業族みたいなことはありませんでしたね。

でも、変な話なんですけど、学校建築なんて本当は公共事業に入ってもいいんですよね。

伊藤 あれは違うんですか。

天城 入っていないんです。既得権でいっぱい、入れないんですからね。

伊藤 まさに公共事業だと思われませんがね。

天城 ええ、完全に公共事業なんです。それで、公共事業は増額すると言うから、学校建築も一緒に取り上げてくれと言っても、やってくれないんですよ。大体、大蔵省も手が出せないんですからね。建設・運輸などががちり固めてしまっているから、その比率を崩すことはできないんです。それに、みんな族議員が付いているから、大蔵省だって、容易に手を出せないんですよ。

伊藤 建設省の各局で……。

天城 ええ。農林省でも農業改良局が非常に強いとか、建設省でも河

川局が強いとかね。地方建設局にもみんな影響しているし、業者がそれにみんな結び付いているからでしょうね。

筑波大学と新構想大学

伊藤 しかし、筑波学園都市の建設なんていうのは、関わるんじゃないですか。

天城 筑波の学園都市を造ったのは建設省です。あれは河野一郎さんという建設大臣（昭和三十七年七月～三十九年七月）がやったことで、学園都市を造るのは建設省の仕事です。大学とか研究所とか、生産とあまり関係ないものを東京から分散しようということで、それには、以前からいろんな理由がありました。ラッシュアワーは、学生の通学が邪魔になるとかね。それで、大都市では大学の増設を認めないとか、学部学科の増員を認めないとか、首都圏整備法に基づく政策が採られていたんです。

伊藤 あれは、文部省の側からではないんですか。

天城 そうじゃないですよ。大都市政策です。それと同じように、大学・研究所などを近県に分散するという、国家プロジェクトが始まりました。あのときは河野一郎大臣が飛行機から見て、「ここに決めた」と言っただけです。あそこは関東でも、一番の未開発地が残っていたところなんです。

それから、文部省でも、校舎が狭くてしょうがないとか、老朽で造り直そうという大学を、「それなら、筑波に行ったらどうか」と勧めた

わけです。それに応じたのが東京教育大学で、東京外語大学は駄目だったんですね。結局、教育大学だけが行くことになったんですが、これには内部に反対が出て来て、中が二つに割れてしまったんです。

伊藤 大変な騒ぎでしたね。

天城 それでストを起こして、ゴチャゴチャとあったんです。それは、当時の学長以下幹部が、「筑波に教育大も移転して、新構想の大学をつくりたい」と。それは四十六年の「中教審」の答申で、従来の大学ではない、新しい構想の大学——新構想大学という案が出ていたんです。在来線に対して、新幹線方式なんて言われたことがあったでしょう。「あれでやりたい」と言い出したんですね。それに対して、教育大学に移転反対のグループがいて、新構想なんかに乗ったのでは危ない、と。そして、中が二つに割れて、抗争が起きてしまったんです。それでストが起きて、学生のストも一緒に巻き込まれて、入試ができるかどうか揉めていたんですね。結局は、筑波に移転する組が中心になって移転を決めて、行ったわけですが、移転に反対した連中は筑波には行かずに、みんな他大学に移ってしまったんです。

それで、質問要項に家永裁判の話が載っていましたが、このことは私はあまりよく知りませんし、関与していませんでした。家永氏なんかは反対派なんです。

ちよつとこの話とは離れますが、教育大学というのは、文理大と高等師範が一緒になってできたので、仲が悪いんですね。文理大中心になっちゃったわけですが、家永氏などは高等師範の教授だったんです。中でも、ちよつと不平分子だったんですね。ですから、何かあると、教科書裁判じゃありませんが、憲法違反だとか何とか、と。僕は彼を全然知らないんだけど、一度、筑波移転問題で陳情に来ましたよ、

反対グループとして……。そのときに「筑波に移転したら、学者の中国訪問を認めますか？」と言うんです。何も関係ないでしょう。この人は何を言っているのか分からなかったですね。非常にエキセントリックな感じがしました。そういう質問を、その場でするんですから、返事のしようがないですよ。筑波移転と、そんなことは何も関係ありませんよ」とだけ言いました。この人のことは、そのくらいしか知りませんよ。何か知らないけれども、「憲法違反だ」とか、「俺は損害を受けたから、賠償をしろ」とかと言って……。

小池 そのあと、家永さんは中央大学の教授でしたが、変な人でしたね。

天城 僕は一度会っただけですね。

それで、教育大学は筑波に移ることになって、新構想で行こうということで、そのために学校教育法の一部改正を行い、学部・学科に代わる組織を認めることにしましたが、これに基づいて筑波大学が設置されたんです。ところが、最初に移った人たちは、みんな新構想を理解して行ったわけですが、あとから採用された方たちは、そういう経緯を知らないものだから、みんな昔の学部・学科・講座という椅子のほうがり居心地が良くて、だんだんそういう傾向になってきてしまうんです。

伊藤 今は人が居着かないというか、どんどん人が替わりますね。

小池 筑波大学は辞める人が多いですね。

伊藤 教授になったと思ったら、数年経つと、「別なところに移りました」という挨拶状が来ますからね。

天城 どうも居心地が良くないらしいですね。やっぱり講座という椅子がないとね。

小池 昇進が遅いということがありますよね。

天城 安定しないんでしょうかね。その後、いろんな新しい形が出て来ています。

伊藤 筑波方式に従っていくところは、あまりないんじゃないですか。

小池 でも、今度の独立行政法人化の前に、部局化・重点化が始まりましたよね。それで、あどきに学府とかをつくりましたが、それと似たような形態ですね。

天城 筑波のあと、新しい方式をやったのは、北大の法学部ですね。あそこは研究組織と教育組織を分離したんですよ。

小池 九州大学も、新しい構想は似ていますよ。

天城 新構想大学は長岡・豊橋の技術科学大学があります。

小池 講座制を持っていると、新規対応ができないものですから、先日、広島大学では学長が、はつきりと「講座制を潰す」と言いましたからね。

所澤 法令も変わって、講座を置かなくてもいいようになりましたからね。

伊藤 大講座なんて、大体、それに近いものでしょう。

小池 僕のところは講座だし、講座制も弊害が大きくて、人事が全然動かない、と。

天城 講座というのは、今はそうでもないけど、昔は教授というのは一国一城の主でしょう。それで、あの時分は予算の付け方も違うんですよ。例えば、新しい講座を作ろうとしたら、講座の予定者は必ずその前に留学させたんです。それで、ヨーロッパに二年か三年行って、帰って来たら、その先生が講座の主任になるんです。そしたら、もう一国一城の主ですよ。講座には、必ず研究費が付くでしょう。それに、

部下を雇う人件費や旅費も入っているんです。今のような物件費だけではなくて、人件費や旅費も含めた講座費ですよ。子分もたくさん使えるし、旅費もあるし、研究費は付いているし、それで人事権は講座中心ですから、何も法律上の問題ではないんですよ。だから、講座の主任教授というのは、それは物凄く偉かったんです。

今でも、まだその傾向が一番残っているのが医学部ですよ。特に医学部の臨床講座の教授というのは、病院の何々内科なんて名前が付いていて、大きいものでは医局の連中が百人くらいいるんですよ。小さいところでも、何十人かいるでしょう。

伊藤 無給の助手なども含めてですね。

天城 今は制度としてはなくなっていて、研修医という制度になりましたね。でも、みんなアルバイトでやっているんです。そこで研修をしないと、誰も一人前の医者として扱いませんからね。医学部を出たからって、いきなり外科の手術なんて、誰も頼まないでしょう（笑）。

話は飛びますが、医学部でいま問題になっているのは、学部を卒業したあと、学位をいつ取るかということ、で、「課程博士」なんて意味がなくなっちゃったんですね。だから、研修医と大学院生と、どう違うのかということになってしまっている。ですから、学位のことで大学院の一番の問題は、医学部と歯学部ですね。

所澤 十年くらい前のことですが、東大で文系の博士号授与の問題が出たときに、理系は大体、「課程博士」のほうが易しくて、「論文博士」のほうが難しい、と。みんなそういう構造だろうと思って、学内で調整をしたときに、医学部だけは「課程博士」のほうが難しく、「論文博士」のほうが易しいということが判明したんだそうです。それで、文系の「課程博士」を易しくして、医学部の「論文博士」を難しくす

るということで、折り合いがついたそうです。まあ、理系の他の「課程博士」は、そんなに難しくなかったのかも知れませんが、とにかく一番問題だったのは、医学部の「論文博士」を難しくすることだったようです。

伊藤 予定の時間を過ぎてしまいました。今回は「中教審」の問題を中心に話をいただくか、それとも学園紛争の問題を先にしますか。

天城 大学紛争も部分的にはお話ししたけど、まとめていないでしょう。それで残っているのは、学生運動と大学紛争の流れと、あと「中教審」が残っているんですね。三つとも関連しているんです。

伊藤 次回は、どちらがいいでしょう。

小池 「中教審」は長いんですね。

天城 特に大学問題で話し始めると、「中教審」から「臨教審」というのがあって、それから「大学審」と流れていくわけです。これは話がずつつながっているんですよ。それに、「四六答申」のときに臨時措置法が出たでしょう。大学紛争に、ここが絡んでくるんですね。臨時措置法については、大学の管理運営が主題で、大学の危機管理システムですから、みんなこれにつながっているんです。だから、「中教審」を話していると、一部はどうしても大学紛争に入りますね。

所澤 一つよろしいでしょうか。次官の仕事の中で、省内の人事のことがあるんじゃないかと思うんですが、それについてお話を伺うのはいつ頃がいいでしょう。

伊藤 それは、次回の初めに伺いましょう。

小池 次官の大きな仕事ですからね。

天城 そうですね。

村上 「中教審」のお話に関して、次の回でお話しいただける内容と

いうのは、どんな感じなんでしょうか。あるいは、「中教審」に関して何回くらいという見通しはありますか（笑）。

天城 「中教審」が始まって以来、いろんなことがあるから、そんなのは大変ですよ。

伊藤 それでは「中教審史」になってしまいますから、やはりどこか焦点を決めて、「四六答申」だったら「四六」ということでお願いします。先生は「三八答申」も関係があるんですか。

天城 「三八」と「四六」でしょうね。ただ、そんなに大きな影響はありませんが、「中教審」には国際関係が二、三あるんですよ。

伊藤 そういうことについては、「これは、あとで関わってくるよ」と、そうおっしゃっていただければ、いいんじゃないでしょうか。

天城 やっぱり、大学問題が中心になるんじゃないかな。

小池 「中教審」の問題は大学問題だけじゃないし、やはり「四六答申」というのは、物凄く大きな答申ですからね。

天城 あれは小中学校まで全部入っていますから、「四六答申」を話すとは大変なんだな。

伊藤 「三八答申」から始まって「四六答申」のところまで、とにかく行けるところまで行きましょう。

小池 それを二回、三回とやって、それから大学紛争に行ったほうがいいですね。大学紛争で最初にまとめてしまうと、「四六答申」の本当の全体象が見えなくなってしまうからね。

伊藤 では、今回はそういう形をお願いします。今回は、先生がお話しになりにくい人事問題についても、お伺いしなければなりません。こちらでも文教族の名前などを調べておきましょう。

天城 この間、こういう本が出て来たんですよ。大学紛争のあとで、日本は公に大学紛争を総括していないんですね。しかし、アメリカの大学紛争に関しては、アメリカン・カウンシル・オブ・エデュケーションというところが、特別委員会を設けて、総括した特別報告書『大学紛争』があるんですよ。それで、これはどういう経緯だったのかは忘れましたが、私が翻訳してIDEで出したんです。これは、ちょうど、僕が次官の頃です。

伊藤 日本は、総括はしていませんからね。

天城 やっていませんね。総括がないんですよ。

伊藤 アメリカの場合とは、背景がだいぶ違いますからね。

天城 まあ、事情が違いますからね。でも、非常に参考になりましたね。日本の場合、個人やジャーナリストが書いた本は出ていますが、特別な委員会を設けての総括はしていませんからね。向こうは調査のやり方がちゃんとしていますよ。これは部数がありましたので、差し上げますよ。

伊藤 ありがとうございます。それから、IDEについても、お話を伺わなければいけませんね（笑）。まだまだ課題がたくさんありそうですね。

今日は、どうもありがとうございました。

〈以上〉

平成 14 年度 文部科学省科学研究費補助金〔特別推進研究(COE)〕

研究成果報告書〔課題番号 12CE2002〕

発行：2002 年 10 月 30 日《無断転載禁》

政策研究大学院大学（政策研究院）

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

〒162 - 8677 東京都新宿区若松町 2 - 2

Tel : 03(3341)0458 Fax : 03(3341)0446